

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第505集

平成18年度発掘調査報告書

山　　館　　遺　　跡	八　木　沢　駒　込　Ⅰ　遺　跡
武道Ⅳ　遺　跡　第　2　次　調　査	宮古道路関連　可能性あり⑧
大　　曲　　遺　　跡	隱　里　Ⅲ　遺　跡
中村　遺　跡　第　2　次　調　査	木　戸　井　内　Ⅳ　遺　跡
高　　日　　向　　遺　　跡	隱　里　Ⅶ　遺　跡
雲　　南　　遺　　跡	ほか調査概報
坂下　遺　跡　第　9　次　調　査	

2007

(財)岩手県文化振興事業団
埋蔵文化財センター

平成18年度発掘調査報告書



写真1 宮古市裴帯遺跡 縄文時代中期竪穴住居跡



写真2 盛岡市飯岡才川遺跡第12次調査(補) 調査区全景(真上)



序

本県には、旧石器時代をはじめとする1万箇所を超す遺跡や貴重な埋蔵文化財が残されています。それらは、地域の風土と歴史が生み出した遺産であり、本県の歴史や文化、伝統を正しく理解するのに欠くことのできない資料です。同時に、それらは県民のみならず国民的財産であり、将来にわたって大切に保存し、活用を図らなければなりません。

一方、豊かな県土づくりには公共事業や社会資本整備が必要ですが、それらの開発にあたっては、環境との調和はもちろんのこと、地中に埋もれ、その土地とともにある埋蔵文化財保護との調和も求められるところです。

当事業団埋蔵文化財センターは、設立以来、岩手県教育委員会の指導と調整のもとに、開発事業によってやむを得ず消滅する遺跡の緊急発掘調査を行い、その調査の記録を保存する措置をとってまいりました。

本報告書は、平成18年度に当センターが発掘調査をした遺跡の調査成果をまとめ、調査報告書及び調査概報として発刊するものです。全県下で41遺跡48件、253,081m²が調査され、旧石器時代から近世までの遺構、遺物が検出されております。宮古市新里地区に所在する縄文遺跡では、縄文時代中期の堅穴住居跡などが多数発見され、資料の少ない北上山地の縄文集落の様子が明らかとなりました。盛岡市の盛南開発に伴う調査では、飯岡才川遺跡での古墳をはじめ、矢盛遺跡では堀をめぐらせた居館跡など、古代から中世にかけての多くの遺構・遺物が出土しております。また、平泉町坂下遺跡では、奥州藤原氏の時代の遺構が多数見つかり、特に池状遺構や当時の道路跡と考えられる敷石遺構の発見は注目されます。このように今年も各地の調査で地域の歴史に新たな一ページを書き加えることができました。本書が広く活用され、埋蔵文化財についての関心や理解につながると同時に、その保護や活用、学術研究、教育活動などに役立てられれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査及び報告書の作成にあたり、ご理解とご協力をいたしました委託者をはじめ、地元の教育委員会及び関係各位に対し、深く感謝の意を表します。

平成19年3月

財団法人 岩手県文化振興事業団
理事長 武田牧雄

目 次

序

平成18年度の発掘調査結果について

I 発掘調査報告

(1) 山館遺跡（二戸市）	5	(5) 高日向遺跡（奥州市）	91
(2) 武道Ⅳ遺跡第2次調査（盛岡市）	25	(6) 雲南遺跡（奥州市）	99
(3) 大曲遺跡（花巻市）	45	(7) 坂下遺跡第9次調査（平泉町）	117
(4) 中村遺跡第2次調査（花巻市）	71		

II 試掘・確認調査報告

(8) 八木沢駒込Ⅰ遺跡（宮古市）	127	(11) 木戸井内Ⅳ遺跡（宮古市）	136
(9) 可能性あり⑧（宮古市）	129	(12) 隠里Ⅳ遺跡（宮古市）	139
(10) 隠里Ⅲ遺跡（宮古市）	133		

III 発掘調査概報

1 国関係

(13) 川目A遺跡第5次調査（盛岡市）	145	(21) 大平野Ⅱ遺跡（奥州市）	153
(14) 飯岡才川遺跡第13次調査（盛岡市）	146	(22) 山の神遺跡（奥州市）	154
(15) 矢盛遺跡第9次調査（盛岡市）	147	(23) 宮沢原下遺跡第2次調査（奥州市）	155
(16) 細谷地遺跡第12次調査（盛岡市）	148	(24) 岩洞堤遺跡（奥州市）	156
(17) 八木沢野来遺跡（宮古市）	149	(25) 濑原I遺跡第5次調査（平泉町）	157
(18) 粟の神遺跡（宮古市）	150	(26) 濑原II遺跡第9次調査（平泉町）	158
(19) 下大谷地I遺跡（宮古市）	151	(27) 坂下遺跡第10次調査（平泉町）	159
(20) 粟の神II遺跡（宮古市）	152		

2 独立行政法人関係

(28) 細谷地遺跡第13次調査（盛岡市）	163	(29) 矢盛遺跡第10次調査（盛岡市）	164
-----------------------	-----	----------------------	-----

3 岩手県・市関係

(30) 板子屋敷3遺跡（軽米町）	167	(39) 台太郎遺跡第58次調査（盛岡市）	176
(31) 吉田館遺跡（二戸市）	168	(40) 向中野館遺跡第9次調査（盛岡市）	177
(32) 桂平I遺跡（二戸市）	169	(41) 矢盛遺跡第11次調査（盛岡市）	178
(33) 川口I遺跡第2次調査（二戸市）	170	(42) 裝帶遺跡（宮古市）	179
(34) 戸仲遺跡第1次調査（盛岡市）	171	(43) 駒板遺跡（花巻市）	180
(35) 宇曾沢遺跡第2次調査（盛岡市）	172	(44) 稔貫田遺跡（花巻市）	181
(36) 細谷地遺跡第14次調査（盛岡市）	173	(45) 山口遺跡（花巻市）	182
(37) 細谷地遺跡第15次調査（盛岡市）	174	(46) 境遺跡（北上市）	183
(38) 飯岡才川遺跡第12次調査（補） （盛岡市）	175	(47) 野田I遺跡（北上市）	184
		(48) 道上遺跡第2次調査（奥州市）	185

平成18年度の発掘調査結果について

平成18年度の発掘調査事業は43件36遺跡215,002m²で開始したが、年度途中での追加を含めて最終的には48件41遺跡253,081m²の調査に着手した。本調査以外には、宮古道路建設事業関連遺跡などの試掘・確認調査も実施している。

後期旧石器時代の遺物が奥州市岩洞堤遺跡（24）から発見されたが、今年度は包含層の範囲を確認するにとどめ、本格的な調査は19年度に持ち越すことになった。

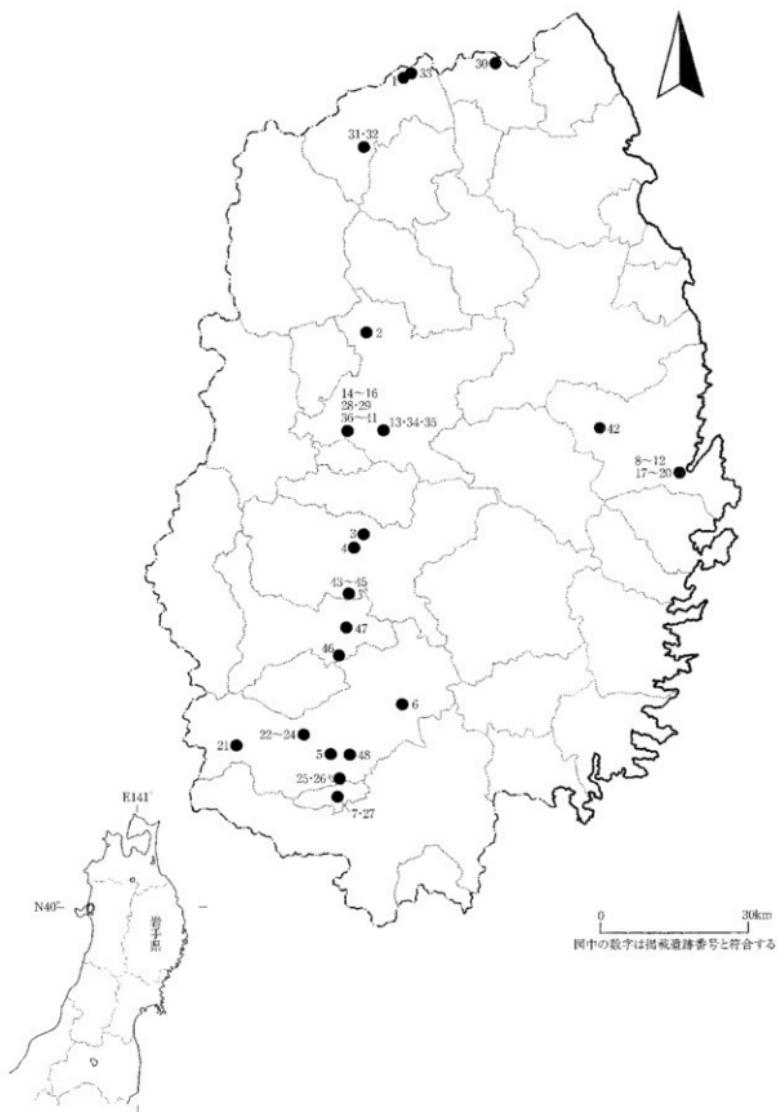
例年同様、縄文時代の遺跡は多いものの、堅穴住居跡を伴う集落遺跡は数少ない。宮古市摸帝遺跡（42）は中期後葉を主体とする遺跡で、後葉の堅穴住居跡40棟やフ拉斯コ状上坑を含む土坑91基のはか、同時期と推測される掘立柱建物跡3棟などが検出された。堅穴住居跡は複式炉+系統の炉を持つ群と単式の石圓炉を伴う群とに二分される。浅い埋没谷を中心に調査した軽米町板子屋敷3遺跡（30）では後期中葉～後葉の堅穴住居跡14棟と土坑13基ほかが見つかった。17年度から引き続いての調査で、微地形を選択し、僅かずつ位置を変えながら同時期の堅穴住居跡22棟が構築されていることが明らかになった。盛岡市川目A遺跡（13）からは晩期の配石造構12基が検出され、過去に行われた4次の調査で見つかった後期と晩期の配石造構群が分布する区域の南限が明確になった。調査は来年度も継続される。川目A遺跡から東方6kmに位置する盛岡市戸仲遺跡（34）は歩道新設工事に伴う狭い幅の調査であったが、後期後葉～晩期中葉の多量の土器が包含層から出土したほか、石圓炉形などの後期後葉～晩期前葉の配石造構10基が見つかった。川目A遺跡と戸仲遺跡は共に北上川支流の篠川に近い河岸段丘低位面に立地する遺跡である。

弥生時代の遺構は見つかっていない。また、遺物も土器片が散見される程度である。次の占墳時代の遺構・遺物とも明確なものはない。

奈良・平安時代の遺跡では、盛岡南新都市土地区画整理事業や国道46号盛岡西バイパス建設事業に伴って盛岡市細谷地遺跡（16・28・36・37）・台太郎遺跡（39）・飯岡才川遺跡（14・38）・向中野館遺跡（40）の4遺跡の調査が8次にわたって行われた。互いに接する位置にある遺跡である。細谷地遺跡は4次の調査を行い、奈良・平安時代の堅穴住居跡46棟を検出した。同道跡は今回の調査区に隣接する17年度の調査でも同時代の堅穴住居跡56棟を調査しており、大規模集落の中心域を調査したことが考えられる。平泉町瀬原Ⅱ遺跡（26）は平泉市街地の北を流れる衣川と北上川の合流点から北西約600mに位置する遺跡で、「前九年の役」の柵の一つである瀬原柵に接する遺構や遺物の発見も想定したが、見つからなかった。ただ、10世紀前半代と後半代の二期にわたる集落遺跡で、10世紀前半代の略完形の灰釉陶器の壺が堅穴住居跡から出土したことが注目される。平泉町坂下遺跡（27）は、衣川の南、中尊寺が所在する閑山の東麓に立地する。12世紀後半代の遺跡と推測される敷石造構やそれに隣接する位置に検出された池状遺構、小規模な四面庇の掘立柱建物跡ほかが検出された。特に、敷石造構は過去の発掘調査で発見されている中尊寺金色堂下方の石敷道路と密接に関連する可能性がある。そのほか、16棟の堅穴住居跡を調査した二戸市桂平Ⅰ遺跡（32）は、10世紀に入ると安比川流域において集落数が一気に増加する事実を裏付ける一例になる。

中世の城館調査としては、16世紀に二戸市浄法寺に拠点を構えた浄法寺氏関連の館の一つと推測される吉田館遺跡（31）や遺跡と土橋を伴う堀跡によって方形に区画された居館が検出された盛岡市矢盛遺跡（29・41）がある。矢盛遺跡は旧河道が入り組んだ微高地に立地する遺跡で、15～16世紀の陶磁器が少量出土している。

(首席文化財専門員 三浦謙一)



平成18年度調査遺跡位置図

I 発掘調査報告書

凡例

本書で記載されているコンテナの大きさについては下記のとおりである。

大コンテナ：42×32×30cm

中コンテナ：42×32×20cm

小コンテナ：42×32×10cm

(1) やまとご

山館遺跡

所 在 地 二戸市野々上字大館14他 遺跡コード・路号 LE89-0255・YD-06
委 託 者 農林水産省東北農政局馬淵川沿岸 調査対象面積 452m²
農業水利事業所 調査終了面積 452m²
事 業 名 国営馬淵川沿岸農業水利事業 調査担当者 深 浩二郎・北村忠昭・高橋聰子
発掘調査期間 平成18年6月1日～7月14日

1 調査に至る経過

山館遺跡は、「国営馬淵川沿岸農業水利事業所 野々上支線用水路（その2）工事」の施工に伴い、その事業区域内に埋蔵文化財が存在することから発掘調査を実施することとなったものである。

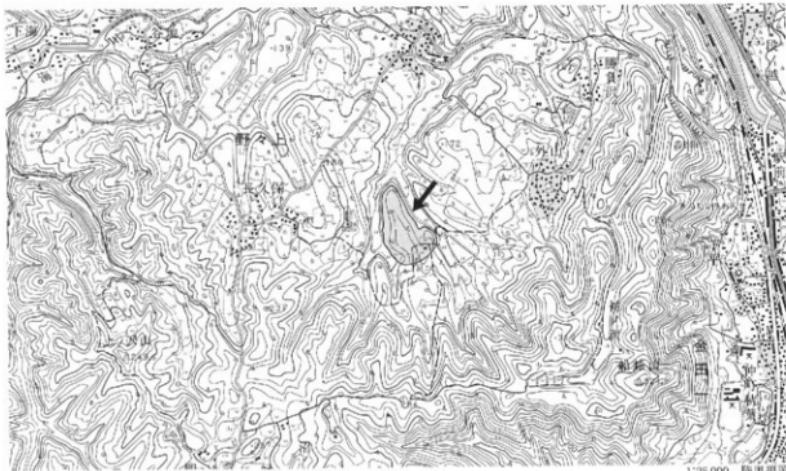
野々上支線用水路は、一級河川馬淵川から米沢揚水機場のポンプアップにより取水し、左岸幹線用水路から米沢吐出水槽、野々上ファームボンドを経由し分岐した用水路で、二戸市野々上地内約60haの畑にかんがいするためのパイプラインである。

当事業の施工に係わる埋蔵文化財の取り扱いについては、平成17年10月4日付17馬淵第267号「馬淵川沿岸農業水利事業実施計画における埋蔵文化財の試掘調査について（依頼）」により岩手県教育委員会に対して試掘調査の依頼を行った。

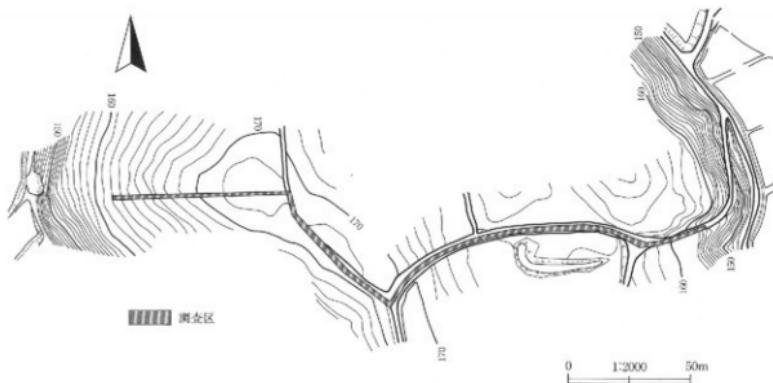
依頼を受けた岩手県教育委員会は平成17年11月1日～2日に試掘調査を実施し、工事に着手するには山館遺跡の発掘調査が必要となる旨を平成17年12月1日付教生第1274号「埋蔵文化財の試掘調査について（回答）」により、当事業所へ回答してきた。

その結果を踏まえて当事業所は岩手県教育委員会と協議し、調整を受けて平成18年4月7日付けで財団法人岩手県文化振興事業団との間で委託契約を締結し、発掘調査を実施することになった。

（農林水産省東北農政局馬淵川沿岸農業水利事業所）



第1図 遺跡の位置



第2図 調査区と周辺の地形

2 遺跡の位置と立地

山館遺跡は岩手県北部の二戸市野々上に所在し、いわて銀河鉄道金田一温泉駅から西に約2.0kmに位置し、馬淵川支流によって開析された丘陵地に立地している。遺跡の標高は162~172mで調査前の状況は山林および林道である。

3 基本土層

調査区は山林中腹～頂上にかけての斜面で、斜面東側中腹の埋没した沢（地表から2mの深さまで確認）付近以外はおおむね以下の層序で堆積しているのが確認された。

第I層 10YR2/2 黒褐色 シルト 現表土。

第II層 10YR2/1 黒色 シルト 径5~20mmの十和田b火山灰粒 (To-b) 1~2%含む。

第III層 10YR3/3 暗褐色 シルト 径1~3mmの十和田中振火山灰粒 (To-Cu) 1~2%含む。

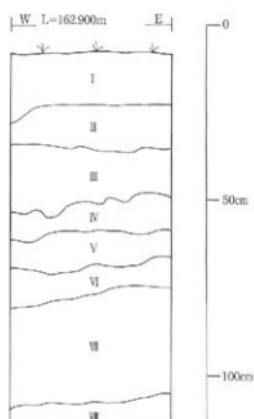
第IV層 10YR6/8 明黄褐色 十和田中振火山灰 (To-Cu) 堆積層。

第V層 10YR2/1 黒色 シルト 径5~10mmの南部浮石粒 (To-Nb) 1~2%含む。

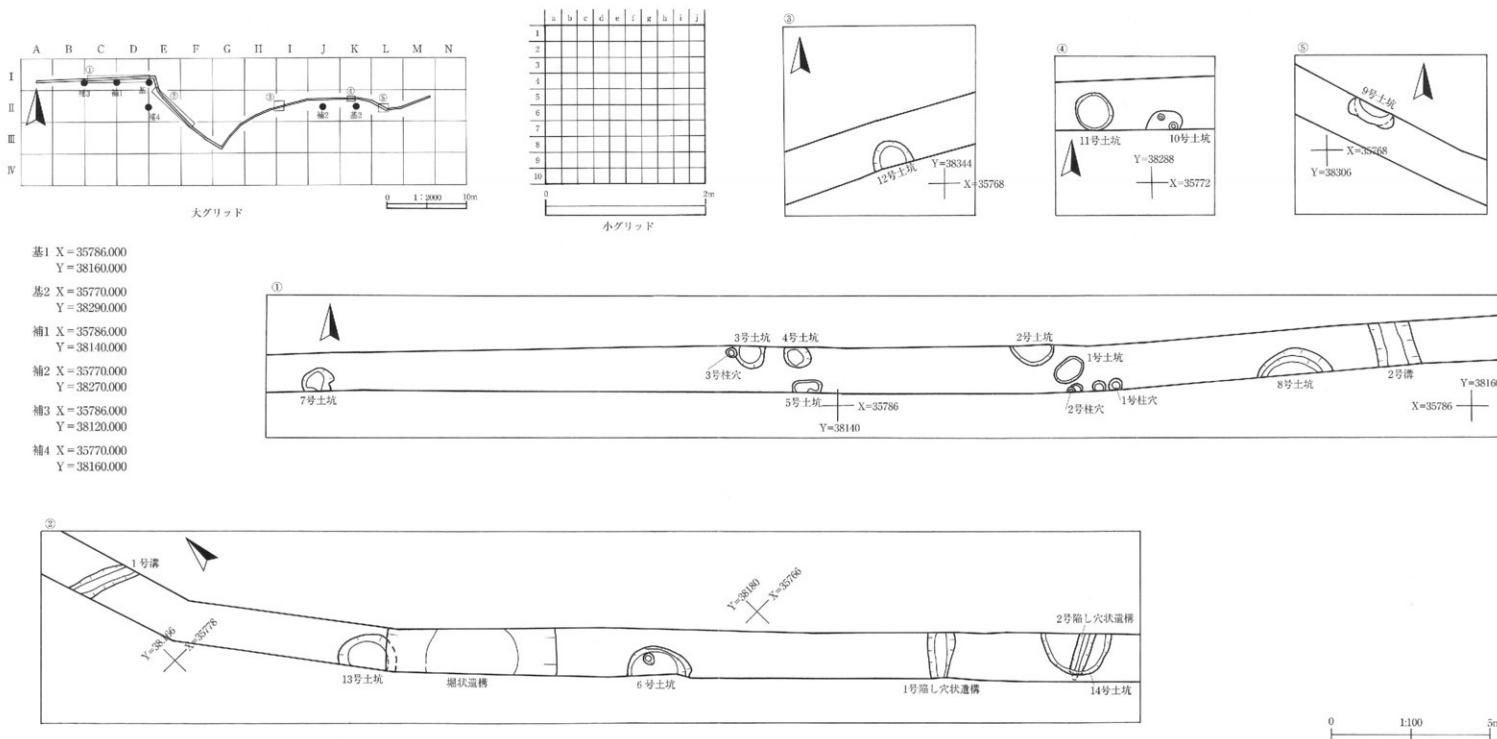
第VI層 10YR2/2 黒褐色 シルト 径5~10mmの南部浮石粒 (To-Nb) 20~25%含む。

第VII層 7.5YR5/8 明褐色 南部浮石粒 (To-Nb) 堆積層。

第VIII層 10YR3/2 黒褐色 粘土質土 八戸火山灰 (To-H) 堆積層。



第3図 基本土層



第4図 グリッド配置図・遺構配図

4 調査の概要

調査区の地形は西側の崖状になった斜面部および平坦部と、埋没した沢がある東側斜面部とに大きく分かれる。検出された遺構は西側の平坦部からは古代の溝2条、堀状遺構1条、土坑1基、縄文時代の土坑10基、時期不明の柱穴状土坑3個、東側の斜面部からは縄文時代の土坑4基が検出された。出土した遺物は土器・石器すべて縄文時代のものである。

(1) 遺構

＜溝跡＞ 西側の平坦部から2条検出された。いずれも調査区に直交し、主軸方向は1号溝が約N-23°-E、2号溝が約N-11°-W、規模は1号溝が幅48~64cm、深さ18cm、2号溝が幅272~278cm、深さ72cmでいずれも埋土上位に十和田aテフラの堆積が確認された。埋土からは遺物は出土していない。

＜堀状遺構＞ 西側平坦部のII E 4 gグリッド付近で検出された。調査区に直交し、主軸方向は約N-45°-Eで規模は幅418~422cm、深さ122cmで調査区外へと延びる。埋土上位に十和田aテフラの堆積が確認され、埋土から縄文土器片が出土している。

＜陥し穴状遺構＞ 西側平坦部から2基検出された。1号陥し穴状遺構は表上下の第Ⅳ層、2号陥し穴状遺構は14号土坑と重複し、これに切られた状態で検出された。いずれも形状は溝状を呈し、遺構の一部が調査区外へと延びるため長軸幅は不明である。短軸幅は1号陥し穴状遺構が84cm、2号陥し穴状遺構が40cmで、遺物は出土していない。時期は14号土坑との重複関係から縄文時代後期以前と考えられるが、詳細は不明である。

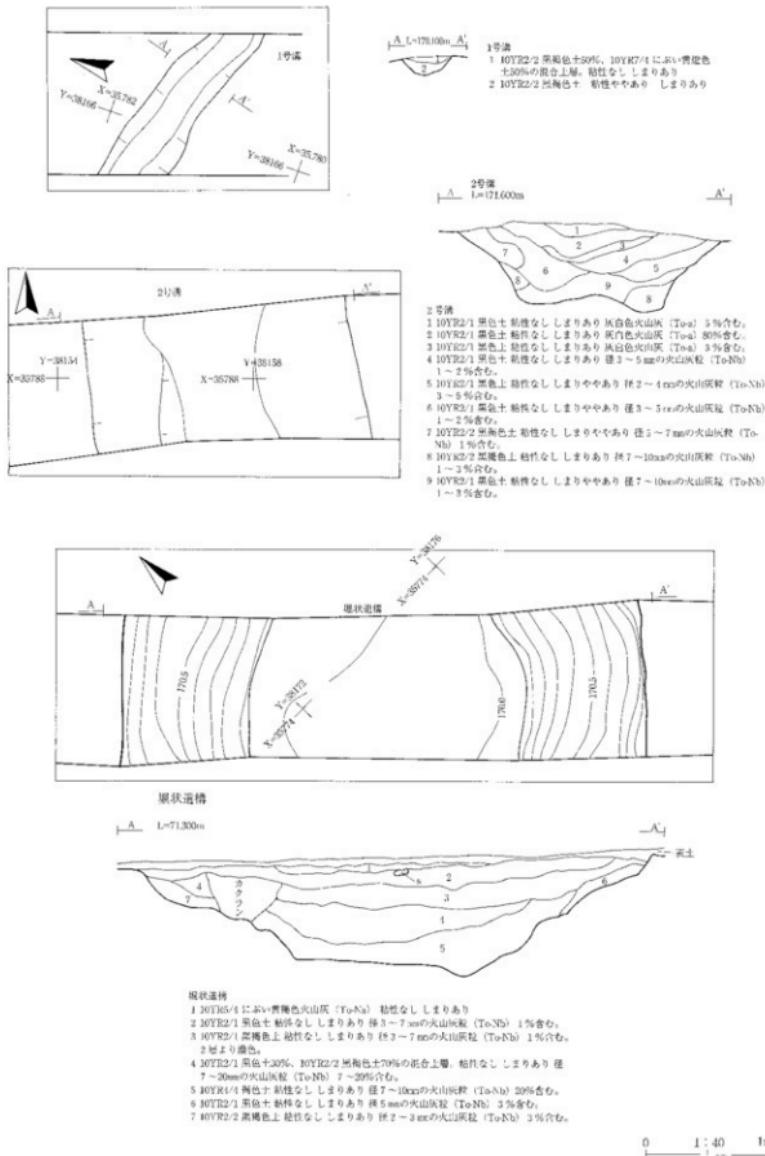
＜土坑＞ 検出した土坑は、1号土坑以外は遺構の一部が調査区外へと延びるため遺構であるかどうかの判別が困難なものもあるが、可能性があるものとして14基登録した。形状は円形・楕円形で規模は最大で径160cmである。時期は遺構の検出面や出土遺物などから縄文時代に属するものが大半で、10号・11号土坑が縄文時代晚期、1号～7号・9号・12号～14号土坑がそれ以前のものと考えられるが、8号土坑は埋土中に十和田aテフラが堆積していることから古代と考えられる。また、9号土坑は中揮火山灰堆積層より下層の第V層～第VI層で検出されたが、風倒木痕の可能性もある。

遺構内からの出土遺物は6号土坑の埋土下位から石皿(24)、12号土坑・14号土坑の埋土上位から土器片(2・12)が出土している。

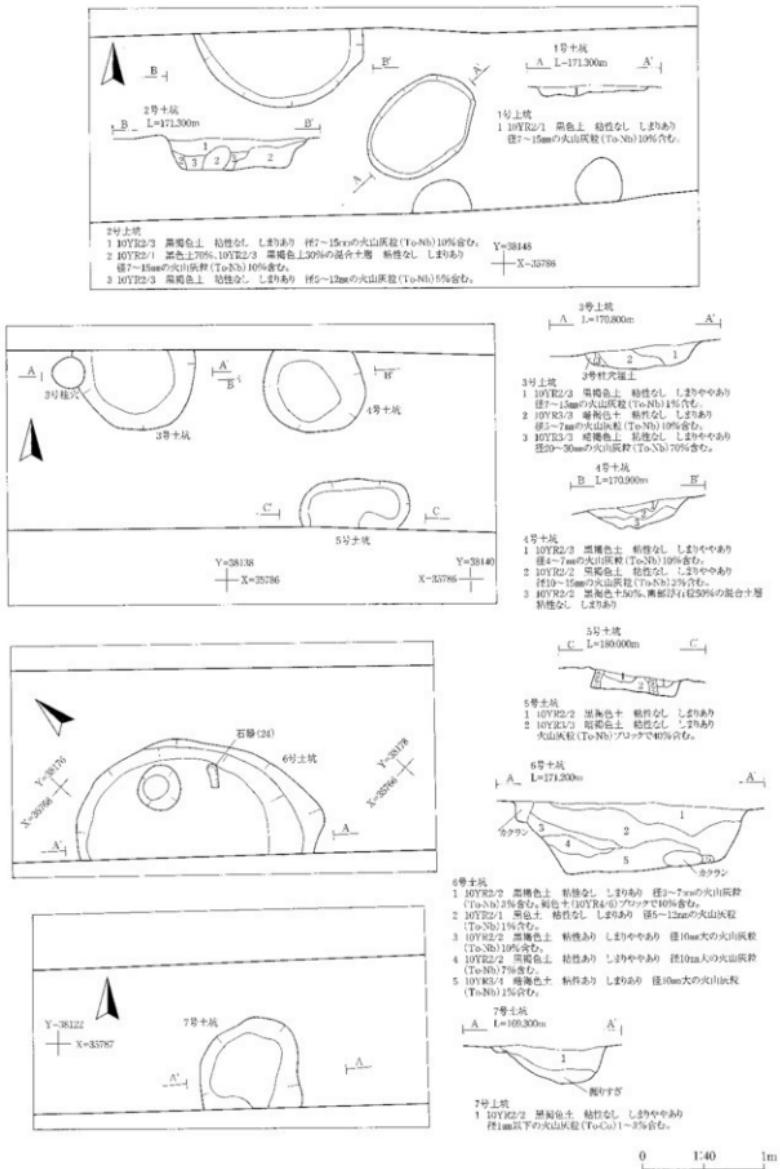
土坑観察表

遺構名	位置	形状	規模(cm)	深さ(cm)	出土遺物	備考
1号土坑	I D 7 d	楕円形	100×68	10		底面に凹凸あり
2号土坑	I D 7 d	円形?		27		
3号土坑	I C 7 i	?		18		
4号土坑	I C 7 j	?		20		
5号土坑	I C 7 j	楕円形?	90×?	14		東側の一部に本痕による擾乱あり
6号土坑	II E 7 c	円形?		38	24	底面に柱穴1基あり
7号土坑	II C 7 c	不整な円形		20		
8号土坑	I D 7 h	円形		103		遺構の一部が調査区外へ延びる。埋土に十和田降下火山灰(T o-a)含む。
9号土坑	II L 6 d	円形?		40		風倒木痕の可能性あり
10号土坑	II K 3 e	楕円形?		6		底面に柱穴2個あり
11号土坑	II K 3 d	円形	120×112	20		
12号土坑	II I 3 d	円形?		90	2	後期前葉
13号土坑	II E 4 f	円形?		66		
14号土坑	II F 1 c	円形?		60	12	後期

(1) 山館遺跡

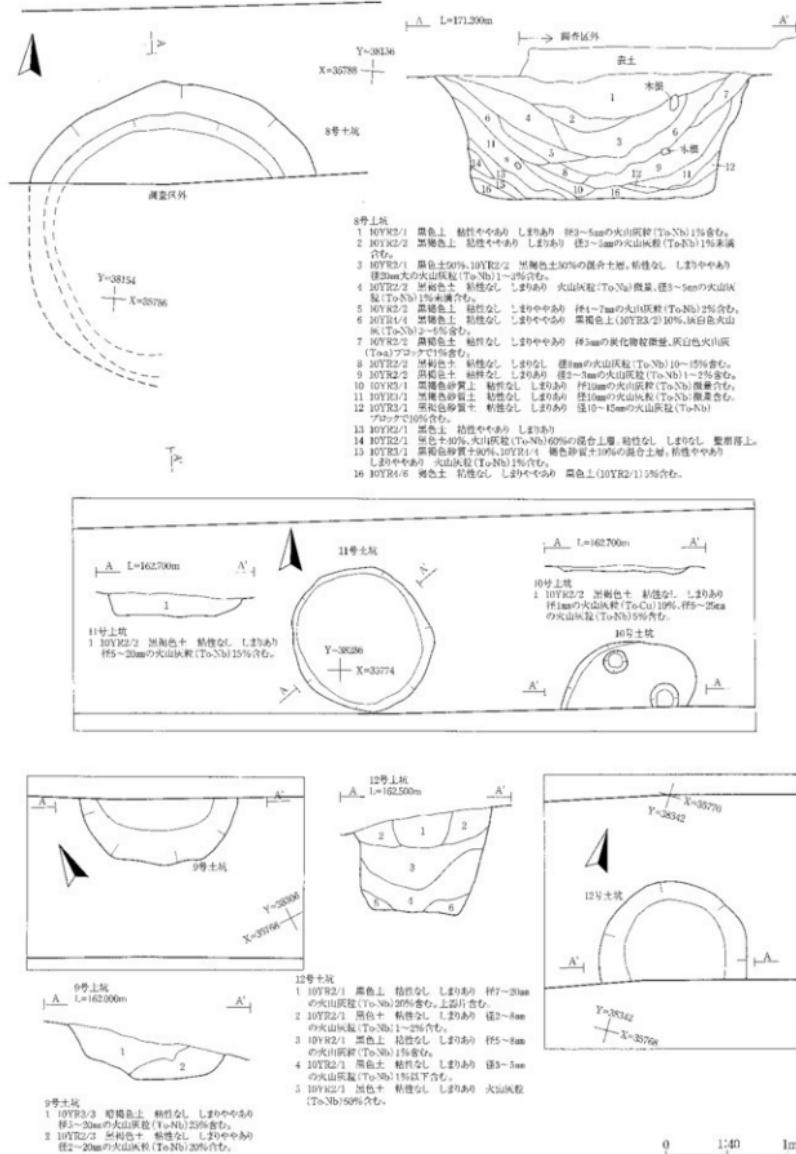


第5図 検出遺構 (1) 1号・2号溝、地状遺構

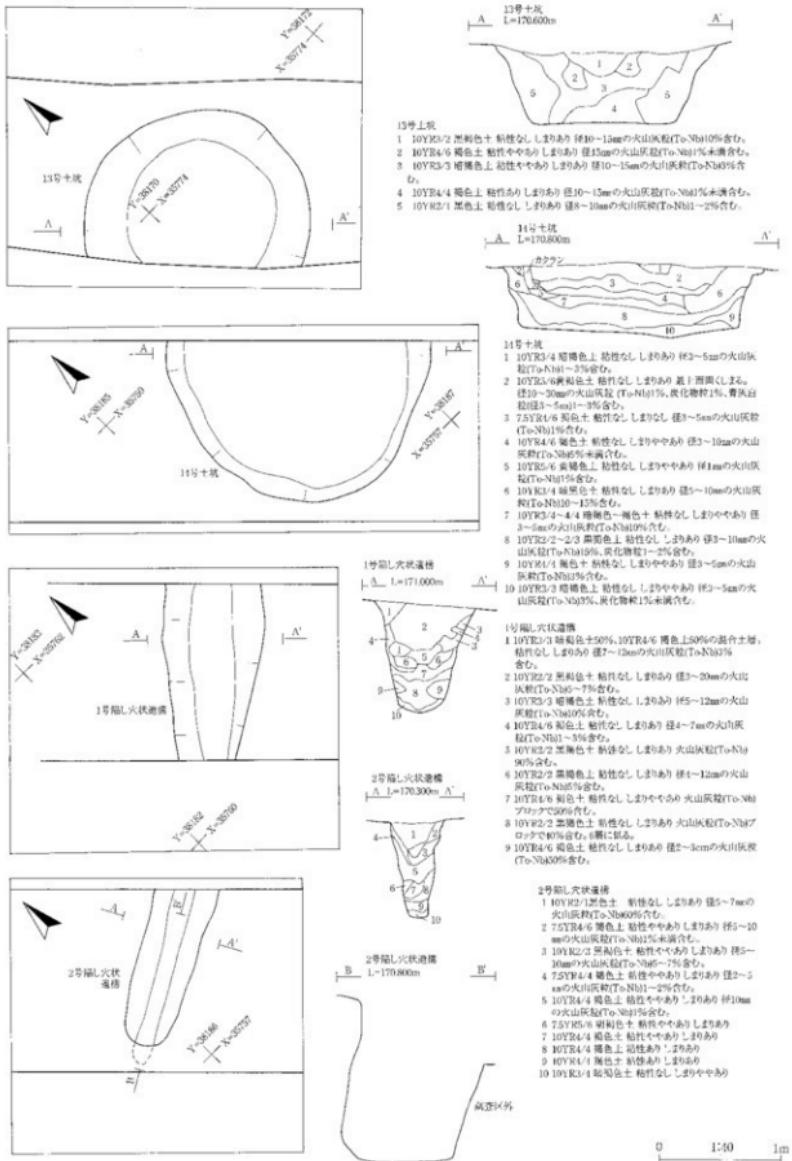


第6図 検出遺構(2) 1号～7号土坑

(1) 山崩遺跡



第7図 検出遺構(3) 8号~12号土坑



第8図 検出遺構 (4) 13号・14号土坑、1号・2号陥し穴状遺構

<柱穴状土坑>

西側斜面部の表土下・第V層～第VI層で3個検出した。1号柱穴・2号柱穴は県教育委員会による事前の試掘調査時に遺構上面がかなり削平されており、残存状況は悪い。3号柱穴は3号土坑と重複関係にあり、これを切る。

いずれの遺構からも遺物は出土していないため詳細時期は不明である。

柱穴状土坑観察表

遺構No	様 (cm)	深さ (cm)	備 考
1	42×38	4	
2	48×?	9	遺構の一部は調査区外へ延びる。
3	26×26	12	3号土坑と重複し、これより新しい。

(2) 遺物

<縄文土器> 総量で中コンテナ1箱分出土した。全体に接合状況が悪く、文様構成等が不明なものが大半であるが、接合可能な破片や、文様の特徴から時期は縄文時代後期～晩期が主体と思われる。遺構外からの取り上げが主であるが、出土傾向としては西側平坦部の基1付近からは後期、東側斜面の埋没沢東側からは晩期をそれぞれ主体とする遺物がまとまって出土する。このうち遺構内から出土したものと文様や器形などに特徴のあるものを16点記載した。1は深鉢の口縁部破片であるが、時期は不明。2～5は縦方向に燃糸文が施された深鉢の口縁部～胴部の破片で2は12号土坑内、他はいずれも西側調査区から出土した。時期は後期前葉にある。6は数条の沈線文を横・斜方向に施し区画したもので、後期前葉にある。7・8は鉢の破片で後期中葉、9は同一個体の深鉢の口縁部と底部で口唇部は平縁で胴部には縦方向にR L縄文、底部には網代痕が施されている。10～12は後期中葉～後葉の深鉢の破片で10は壠状遺構埋土、12は14号土坑の検出面から出土した。13は後期後～末葉の鉢形土器の口縁部破片、14は無文の壺で口縁部が欠損している、15～17は鉢形土器の口縁部破片で晩期中葉に属すると考えられる。

<石器> 7点を記載した。石鏃1点、磨石3点、敲石1点、石皿類2点でいずれも縄文時代のものである。砾石器に使用された石材は安山岩・花崗岩・砂岩・閃緑岩などでいずれも遺跡周辺から持ち込まれるものである。このうち遺構内から出土したのは24のみで、他は遺構外からの出土である。18は有茎の石鏃で2号溝の東壁面から出土した。19～21は磨石で、形状は19は扁平、20・21は台形状を呈する。20・21は縄文時代後期～晩期の土器片を包含する第III層から出土したが、19はそれより古い第VI層から出土している。23・24は石皿で24は6号土坑の理土下位より出土した。大半が欠損しているが、残存部分では縁が肥厚しているの確認できる。また、同一個体と思われる破片が埋土中位から出土している。

5.まとめ

今回の調査で、山館遺跡が縄文時代と古代の複合遺跡であることが確認された。今回の調査で住居は見つかっていないが、縄文時代後期～晩期の遺物の出土状況や遺構の検出状況から周辺に集落が存在していた可能性が考えられる。また、陥し穴状遺構が検出されていることから縄文時代後期以前には狩猟場として利用されたことも確認された。

なお、山館遺跡に関する報告はこれをもって全てとする。

<引用・参考文献>

(財) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

2006 「平成17年度発掘調査報告書」 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第490集

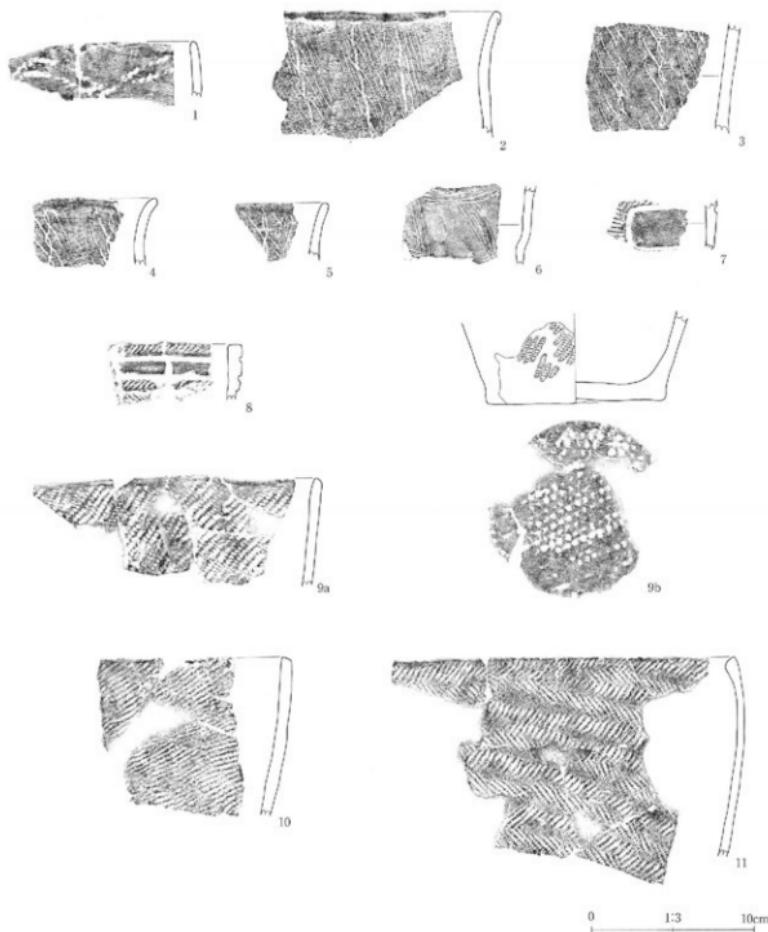
(財) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

2000 「長倉I 遺跡発掘調査報告書」 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第336集

報告書抄録

ふりがな	へいせいじゅうはちねんどはくつちょうさほうこくしょ						
書名	平成18年度発掘調査報告書						
副書名	山館遺跡						
卷次							
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書						
シリーズ番号	第505集						
編著者名	滝 浩二郎・北村忠昭・高橋聰子						
編集機関	(財) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター						
所在地	〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡11地割185番地 TEL (019) 638-9001						
発行年月日	2007年3月26日						
ふりがな 所取遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	北緯 遺跡番号	東経 ° ° °	調査期間	調査面積	調査原因
山館遺跡	岩手県二戸市 野々上大館14 ほか	03213	LE89-0255	40度 19分 17秒	141度 16分 55秒	2006.06.1 ～ 2006.07.14	国営馬淵川沿 岸農業水利事 業に伴う緊急 発掘調査
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
山館遺跡	散布地 狩獵場	縄文時代	陥し穴状遺構 土坑	2基 13基	縄文土器 石器	中1箱 7点	・縄文土器は殆どが後期 ・晚期で破片のため接合不可。
		古代	溝跡 壙状遺構 土坑	2条 1条 1基			
		不明	柱穴状土坑	3個			
要約	縄文時代～古代の遺構を確認した。縄文時代は土坑・陥し穴状遺構などの遺構や土器・石器などの遺物が見つかり、生活の場や狩猟場として利用していたことが確認された。古代では溝跡・壙状遺構などが確認されたが、遺物は出土しておらず、集落の中心から離れた場所であったと考えられる。						

※緯度・経度は世界測地系における数値である。

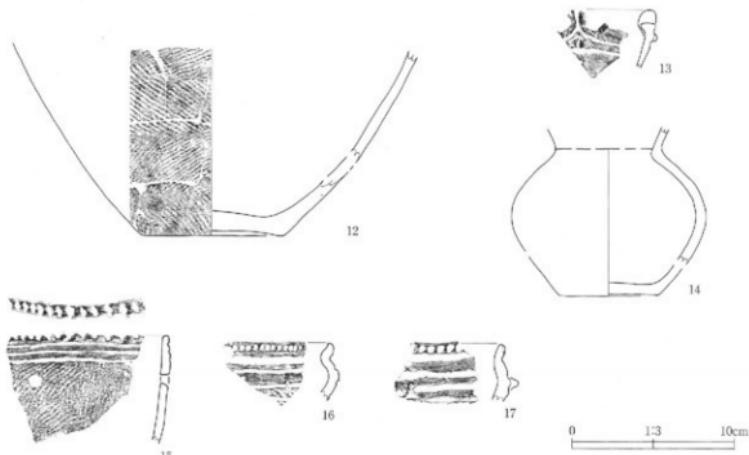


0 1:3 10cm

土器標記表

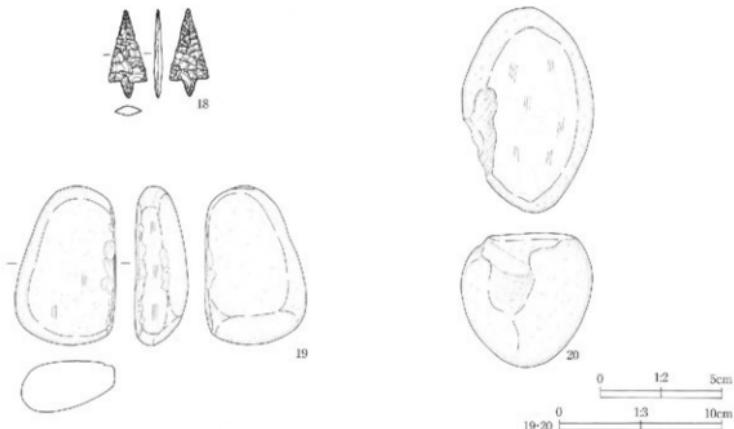
NO	出土場所	層位	断面	部位	文様	時期	参考
1	B E 4 f	Ⅱ層	断面	口縁部	縞文〔R L R ?〕	後期前葉	
2	12号七坡	埋土上位	断面	口縁部	縞文文〔R〕	後期前葉	
3	T G (1Dgf)	土器	断面	口縁部	縞文文〔R〕	後期前葉	中前（基督教）の試掘跡から出土
4	土器	断面	断面	口縁部	縞文文〔R〕	後期前葉	
5	T D 6.1	Ⅱ層	断面	口縁部	縞文文〔R〕	後期前葉	
6	1 D 7.1	Ⅱ層	断面	沈鉢部	沈鉢文	後期前葉？	
7	1 C 7.1	Ⅱ層	断面	口縫部	沈鉢文・縞文〔R〕	後期前葉	
8	1 C 7.4	Ⅱ層	断面	縫鉢	口縫部:沈鉢文、縞文し立縫 縫鉢部:縞文〔R〕直腹	後期前葉？	
9	1 E 7.1	深井	断面	縫鉢	縞文〔R〕直腹、底面に網代模	後期	
10	瓶状遺物	横川面	断面	口縫部	縞文〔R〕直縫	後期？	
11	B C 3 f	Ⅱ層	断面	口縫部	未状網文〔L R - R L〕	後期中～後葉	

第9図 出土遺物(1) 土器



土器残片表

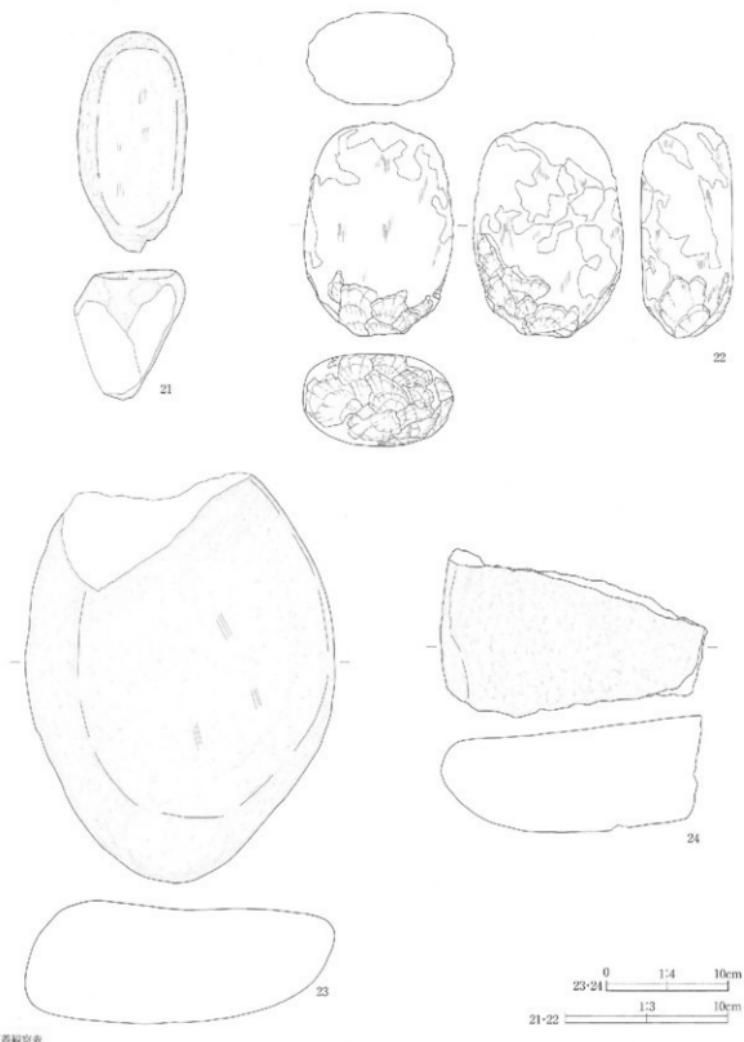
NO	所土地点	層位	器種	破段	文様	時期	備考
12	ⅡF2 c		縦縫	側部・底部	羽状網文 (L.R - R.L)	後期山～後樂	
13	ⅡJ3 b	Ⅲ層	縦縫	口縫部	交配、沈文、縫、純文 L.R - R.L	後期後～末紀	
14			縦縫	側部	無	後期	
15	ⅡJ3 b	Ⅲ層	縦縫	口縫部	羽状、沈文、網文 L.R 傷	後期中期	
16	ⅡJ3 i	Ⅲ層	縦縫	口縫部	刺突文、沈文、網文 L.R 傷	後期中期	新部に孔 I あり
17	ⅡJ3 b	Ⅲ層	縦縫	口縫部	刺突文、沈文	後期中期	



石器類別表

NO	器種	出土地點	層位	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	石質	產地
18	石頭	ⅠD7 j	Ⅱ～Ⅲ層	3.6	1.6	0.4	1.31	頁岩	新生代新第三紀
19	磨石	ⅡE1 d	見附	9.7	6.2	3.3	264.06	安山岩	新生代新第三紀～第四紀
20	磨石	ⅡJ3 i	Ⅲ層	(13.0)	9.5		1122.66	閃綠岩	中生代白堊紀

第10図 出土遺物 (2) 土器、石器



第11圖 出土遺物 (3) 石器

* 單位cm

石器觀察表

NO.	器種	出土地點	層位	長度 (mm)	寬 (mm)	厚 (mm)	重量 (g)	石質	量具	
									23-24	21-22
21	磨石	1D7 J	Ⅲ層	12.0	6.1	8.2	1102.96	安山岩	新生代第三紀—第四紀	莫羽山脈
22	磨石	1D7 J	Ⅲ層	13.1	6.2	5.6	970.0	花崗岩	中生代白堊紀	北上山脈
23	石核	莫羽山	Ⅲ層	(33.5)	25.4	16.1	*12	砂岩	中生代	北上山脈
24	石核	6號土坑	壁上下部	(33.0)	(21.0)	(9.8)	*3.45	安山岩	新生代第三紀—第四紀	莫羽山脈



遺跡遺景（南から）



調査区全景

写真図版 1 山館遺跡航空写真



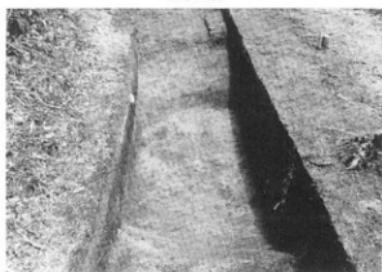
調査区西側（近景）



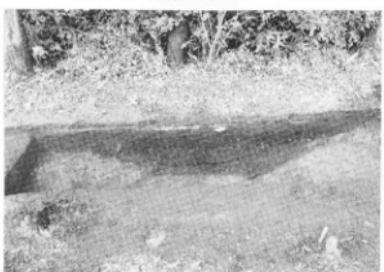
基本土層



土器出土状況



堤状遺構（北から）

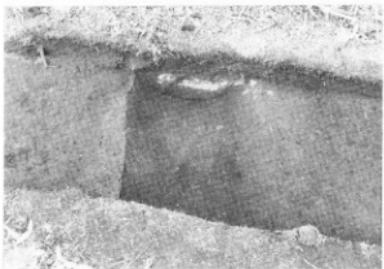


堤状遺構埋土断面

写真図版2 山館遺跡調査区・検出遺構（1）



1号溝（東から）



2号溝（西から）



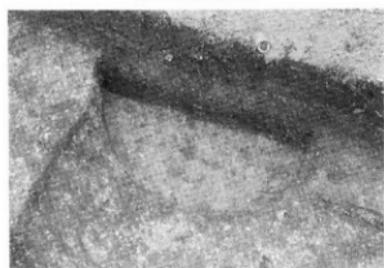
1号陥し穴（西から）



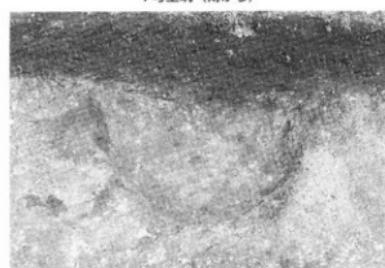
2号陥し穴（西から）



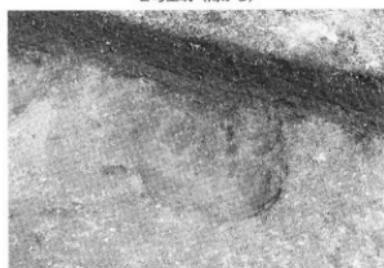
1号土坑（南から）



2号土坑（南から）



3号土坑（南から）



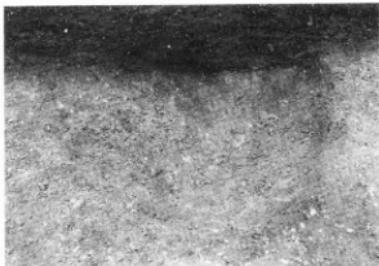
4号土坑（南から）

写真図版3 山館遺跡検出遺構（2）

(1) 山館遺跡



6号土坑（南から）



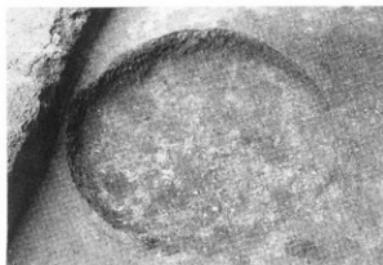
7号土坑（北西から）



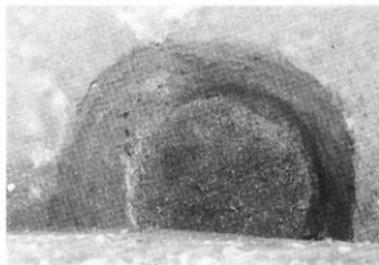
8号土坑（東から）



10号土坑（北から）



11号土坑（東から）



12号土坑（西から）

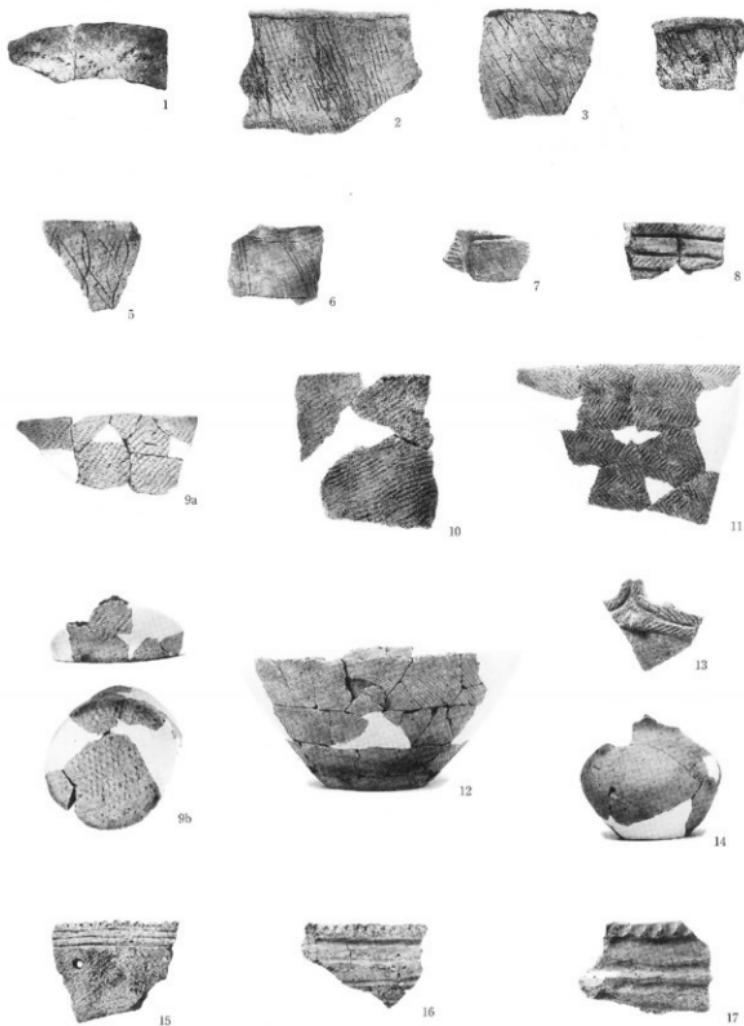


13号土坑（北から）



14号土坑（北から）

写真図版4 山館遺跡検出遺構（3）



写真図版5 山館遺跡出土遺物（1）土器



18



19



20



21



22



23



24

(2) 武道IV遺跡 第2次調査

所 在 地	盛岡市玉山区芋田字武道53-68ほか	遺跡コード・路号	KE57-0197・TBDD-06-02
委 託 者	国土交通省東北地方整備局岩手河川国道事務所	調査対象面積	1,890m ²
事 業 名	一般国道4号渋民バイパス建設事業	調査終了面積	1,890m ²
発掘調査期間	平成18年5月1日～5月31日	調査 担 当 者	丸山浩治・平野 祐

1 調査に至る経過

「武道IV遺跡」は、渋民バイパス改築工事の施工に伴って、その事業区域内に存することから発掘調査を実施することになったものである。

一般国道4号は、東京都中央区日本橋を起点として、青森県青森市に至る総延長約858kmのわが国最長の国道で、東北地方の大動脈を担っている主要幹線道路である。

国道4号渋民バイパスは、盛岡市玉山区越戸と同区芋田の間約3.1kmの区間で計画されている。現国道は、ほぼ区の中心を南北に縱断し、全幅員8～12mと狭く両側に歩道がない状態であり、近年の自動車交通の増大と車両の大型化に伴い、年々増大する交通需要に対応し、通過交通の分離による交通の円滑化、交通安全の確保および沿道環境の改善を図ることを目的に昭和61年度に事業着手、平成8年から工事着手、平成16年度に一部供用し事業を進めている。

「武道IV遺跡」については、過年度において岩手県教育委員会および盛岡市教育委員会が分布調査を実施し確認されたものである。試掘調査を平成17年度に実施している。

その結果に基づいて岩手県教育委員会と国土交通省東北地方整備局岩手河川国道事務所と協議を行い、発掘調査を財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターの受託事業とすることとした。

これにより、平成18年4月3日付けで岩手河川国道事務所長と岩手県文化振興事業団理事長との間で受託契約を締結し、「武道IV遺跡」の発掘調査に着手した。

(国土交通省東北地方整備局岩手河川国道事務所)



第1図 遺跡の位置

2 遺跡の位置と立地（第1・2図）

武道IV遺跡は、いわて銀河鉄道好摩駅の南方約1.8km、現国道4号東側の盛岡市玉山区芋田字武道に所在している。西側に南流する北上川により形成された狭小な砂礫段丘、東側に姫神山を主峰とする小起伏山地がそれぞれ南北に延びており、遺跡はこの砂礫段丘東端、山地西端縁辺部に位置する。微地形的には、北側が山地側、南側が砂礫段丘側となり、南へ下る緩斜面となっている。また、調査区外東西両側の山地縁辺が舌状に張り出しているため、調査区中央部が南北に凹む。この傾向は旧地形ほど顕著で、同部は土層の堆積状況が良好である。標高は207~211mで、現況は畑地である。

本遺跡は玉山村教育委員会により第1次調査が行われております、土坑が1基検出されている（報告書未刊）。今回の調査は第2次調査となり、位置は遺跡範囲の南端部にあたる。なお、遺構名について、現場段階では仮名称を用い、室内整理時に最終的な名称に変更を行った。この内容は第1表のとおりである。

第1表 遺構名変更一覧

種別	旧名	新名
堅穴住居跡	1号	RA001
土坑	1号	RD002
	2号	RD006
	3号	RD007
	4号	RD008
	5号	RD009
	6号	RD010
	7号	RD011
	8号	RD012
	9号	RD003
	10号	RD004
	11号	RD013
陥し穴状遺構	1号	RD005
焼上遺構	1号	RF001
柱穴状土坑	PPI-23	変更なし



第2図 武道IV遺跡第2次調査区と周辺の地形

3 基本土層（第3図）

本調査区の基本土層は以下のとおりである。

- I 層 10YR2/3 黒褐色 シルト 粘性中・しまり弱 表上。一部（東側）にII～VII層が混ざった現代の盛土あり。
- II 層 10YR3/2 黒褐色 シルト 粘性中・しまり中 5YR4/8赤褐色バミス（～3mm。いわゆるオレンジバミス。以下、Munsell表示省略。他も同様。）3%混入。
- III 層 10YR2/1 黒色 シルト 粘性中・しまり中 赤褐色バミス（～3mm）7%混入。部分的にTo-aテフラ含む。平安時代の遺構検出面。
- IV 層 10YR3/3 暗褐色 シルト 粘性中・しまり中 10YR2/2黒褐色シルトが實に40%、赤褐色バミス（～3mm）3%、10YR6/6明黄褐色バミス（～1cm）1%混入。
- V 層 10YR1.7/1 黒色 シルト 粘性中・しまり中 赤褐色バミス（～3mm）2%、明黄褐色バミス（～1cm）3%混入。
- VI 層 10YR4/3 にぶい黄褐色 シルト 粘性中・しまり強 明黄褐色バミス（～1cm）3%混入。
- VII 層 10YR5/6 黄褐色 粘土質シルト 粘性中・しまり強 明黄褐色バミス（～1.5cm）5%混入。遺構最終検出面。
- VIII 層 10YR4/3 にぶい黄褐色 粘土質シルト 粘性中・しまり強 明黄褐色バミス（～1.5cm）7%、7.5GY6/1緑灰色スコリア（～5mm）3%、N3/0暗灰色スコリア（～5mm）1%混入。
- IX 層 10YR5/4 にぶい黄褐色 粘土質シルト 粘性中・しまり強 明黄褐色バミス（～2cm）20%、緑灰色スコリア（～5mm）5%、暗灰色スコリア（～5mm）1%混入。
- X 層 10YR5/4 にぶい黄褐色 粘土質シルト 粘性中・しまり強 7.5YR4/3褐色バミス（～1.5cm）3%混入。

調査区中央部は上記のような堆積が確認され、現地表面からVII層・遺構最終検出面までの深さは約2mを測る。東西両側（特に東側）は標高が上がるため、東端ではII～IV層が削平により欠落している。また、南側は全体的に谷地となっており、さらに深度が増す。遺構検出面はIII～VII層である。

4 調査の概要

（1）遺構（第3～8図）

検出された遺構は、縄文時代の土坑3基（R D002～004）、陥し穴状遺構1基（R D005）、平安時代の堅穴住居跡1棟（R A001）、土坑8基（R D006～013）、焼土遺構1基（R F001）、柱穴状土坑6個（P P 2・14・18・20～22）、時期不明の柱穴状土坑17個（P P 1・3～13・15～17・19・23）である。

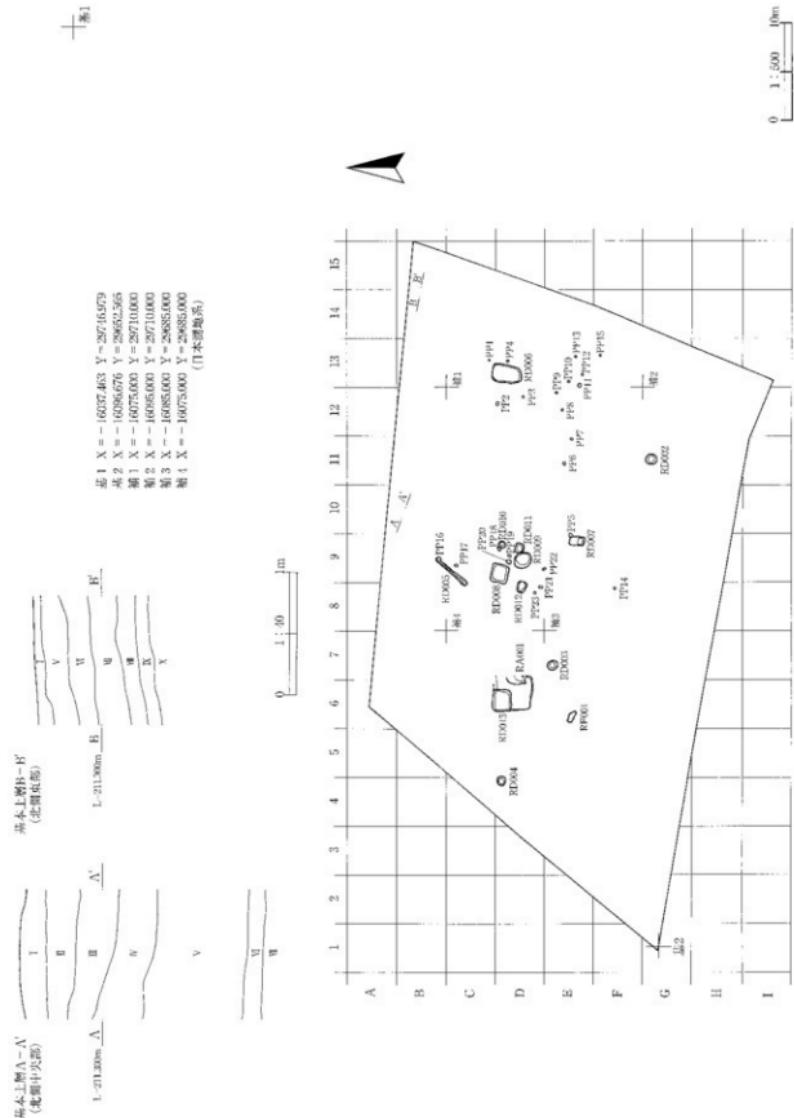
縄文時代

＜土坑＞検出面はVII層上面である。開口部規模および最深部の深さは、R D001～003がそれぞれ113×102cm・63cm、110×103cm・59cm、94×87cm・99cmで、平面形はいずれも円形である。断面はピーカー状・楕状を呈する。R D003は底面中央に径約10cm・深さ8cmの副穴を有する。埋土はいずれも自然堆積である。検出面および形態から縄文時代の構築と推定される。

＜陥し穴状遺構＞検出面はVI層上面である。開口部規模は403×51cmで、平面形は溝形を呈する。長軸方向は北東～南西を向き等高線と斜行する。深さは最深部で77cmを測る。埋土は自然堆積である。検出面および形態から縄文時代の構築と推定される。

平安時代

＜堅穴住居跡＞検出面はIII～IV層である。規模は開口部で南北方向が4.00m、東西方向が3.38mで、



第3図 武道IV遺跡第2次調査遺構配置図・基本土壘

平面形は隅丸方形を呈する。床面までの深さは残存状態の良い北壁で50cmを測る。東壁は誤掘削のためほとんど残存しない。埋土は自然堆積である。カマドは東壁に構築されているが、人為的に破却されている。柱穴は検出されていない。床面からロクロ土師器が出土しており、加えて埋土中にTo-aテフラがブロック状に混入していることから平安時代の遺構（To-a降下前後の廃棄）と推定される。

＜土坑＞検出面はⅢ～VI層で、本来はⅢ～IV層面で構築されたものと推定される。開口部平面形および規模は、方形基調2基（R D008：190×171cm・R D013：224×192cm）、長方形基調2基（R D006：297×183cm・R D007：153×87cm）、円形基調4基（R D009～012：以降それぞれ185×170cm・69×67cm・102×81cm・113×86cm）で、深さは残存状態の良いR D013で1mを測る。埋土は自然堆積と考えられるものがほとんどなく、いずれも人為堆積の可能性が高い。円形基調のR D009～012の埋土中には焼土ブロックが確認される。また、ほぼすべてが土師器やTo-aテフラをブロック状に含んでいることから平安時代の遺構と推定される。R D013は竪穴住居跡の掘り込みを利用し構築されたもので、住居跡より新しい。

＜焼土遺構＞To-aテフラブロックが混入するⅢ層中で検出された。位置は竪穴住居跡の南側にある。規模・平面形は131×71cmの不整形で、焼成部の厚さは最厚で11cmを測る。検出面から平安時代の遺構と推定される。

＜柱穴状土坑＞埋土中からTo-aテフラが確認されたことにより平安時代の遺構と認定した。加えて、P P14・18では同じく埋土中から土師器も出土している。検出面はVI～VII層である。位置にまとまりはなく、散在する。開口部規模は25～54cmまであり、平均的には30～35cm程度である。検出面からの深さは16～55cmと一様でない（第3表）。

時期不明

＜柱穴状土坑＞検出面はVI～VII層である。位置の集中域などではなく、散在する。開口部規模は18～54cm、検出面からの深さは9～53cmまでといずれも多様である（第3表）。構築時期については特定の材料がなく、不明といわざるを得ない。

（2）出土遺物（第9・10図、第2表）

出土総量は3,850gで、内訳は、縄文土器138.97g、土師器2,601.04g、須恵器7.12g、石器1点、1,099.87g、銭貨1枚・2.59gである。

1は遺構外IV層から出土した縄文土器口縁部片で、晩期中葉の大洞C1式と思われる。

2～19は土師器、須恵器である。2～5はR A001床面およびカマドから出土したもので、坏、甕ともにすべてロクロ成形である。2は内面ヘラミガキの後黒色処理、3は砂底である。6・7は同遺構埋土から出土したもので、7はロクロ成形・内面ヘラミガキ後黒色処理の坏で、体部外面に正位で「上」？という墨書きが記されている。8～17は上坑からの出土で、坏、甕ともすべてロクロ成形である。14の甕はロクロ成形後の指頭圧痕およびヘラナデが顕著に見られる。13は須恵器甕片で、今回の調査で出土した須恵器はこの1点のみである。18はP P14から出土したロクロ成形の土師器坏片で、いわゆる赤焼き土器である。19は表採された土師器高台付坏の高台部である。

20・21は土製品である。20は遺構外III層から出土した粘土塊で、雑な棒状を呈する。一部に布目が確認される。21は羽口先端部で、比熱により外面が発泡、内面が赤色に変色している。

22はR D009の1層から出土した台石で、比熱により表面が赤色に変色している。

このほか、胎土に纖維を含む縄文時代早期末～前期初頭頃のものと思われる土器片が遺構外から2点出土しているが、いずれも小破片のため図示していない。また、I層から寛永通寶が1枚出土している。

第2表 地点別遺物出土重量

縄文土器

出土地点・層位等	種別	重量(g)	出土地点・層位等	種別	重量(g)
F - 5 VI層直上	縄文	26.87	B - 8 日削	縄文	4.33
B - 9 IV層	縄文	11.29	C - 5 直	縄文	4.98
C - 6 IV層直上	縄文	7.81	R A001 床面 P 8	縄文	18.73
B - 9 V層	縄文	7.01	表採	縄文	57.90
					縄文土器合計重量 138.97

土師器

出土地点・層位等	種別	重量(g)	出土地点・層位等	種別	重量(g)
R A001 カマド P 1	土師器	93.87	R D012 西廻廊 2層	土師器	126.32
R A001 カマド P 2	土師器	8.84	R D013 砂面 P 1	土師器	92.45
R A001 休面 P 3	土師器	32.71	R D013 砂面直上(5cm以内)	土師器	81.50
R A001 休面 P 4	土師器	51.93	R D013 西廻廊 底上10cm	土師器	3.62
R A001 休面 P 5	土師器	12.08	R D013 南西廻廊 底上30cm	土師器	29.82
R A001 休面 P 6	土師器	14.16	R D013 12層	土師器	3.69
R A001 休面 P 7	土師器	41.08	R D013 9層	土師器	8.42
R A001 休面 中央	土師器	2.13	R D013 8層	土師器	165.99
R A001 カマド 2層	土師器	34.37	R D013 廉上位	土師器	100.37
R A001 北ペルト 5層	土師器	18.57	R P 14 1層	土師器	4.59
R A001 東ペルト 5層	土師器	25.99	R P 18 4層	土師器	3.90
R A001 東ペルト 1層	土師器	7.05	D - 5 V層	土師器	16.49
R A001 Q N.E. 7層	土師器	62.84	G - 8 IV層	土師器	6.29
R A001 Q S.W. 7層	土師器	13.53	B - 8 III層	土師器	247.58
R A001 Q N.W. 7層	土師器	58.93	B - 11 III層	土師器	3.93
R A001 Q S.E. 6層	土師器	9.84	C - 5 III層	土師器	41.77
R A001 Q S.E. 5層	土師器	5.88	D - 7 III層	土師器	10.43
R A001 Q S.W. 1層	土師器	5.16	D - 8 III層	土師器	8.86
R A001 Q N.E. 1層	土師器	23.29	D - 10 III層	土師器	12.41
R D006 Q S.E. 3層	土師器	7.45	E - 5 III層	土師器	5.99
R D007 潟半 1層	土師器	66.82	E - 8 III層	土師器	6.09
R D008 S E 4層(最下層)	土師器	27.53	F - 8 III層	土師器	15.75
R D008 N E 1層	土師器	10.09	G - 8 III層	土師器	6.57
R D008 1層	土師器	5.34	G - 10 III層	土師器	10.52
R D009 Q S.E. 墓土中位(高さ15cm)	土師器	11.30	G - 11 III層	土師器	2.88
R D009 Q N.E. 1層下位	土師器	2.24	D - 4 II層	土師器	9.55
R D009 Q S.W. 1層	土師器	74.24	C - 13 I層	土師器	13.94
R D009 東ペルト 墓土	土師器	5.67	F - 7 層位不明	土師器	13.69
R D010 1層	土師器	277.95	表採	土師器	302.43
R D010 墓土	土師器	80.77	出土地点不明	土師器	113.19
R D011 1層	土師器	40.36		土師器合計重量	2601.91

須恵器

出土地点・層位等	種別	重量(g)	出土地点・層位等	種別	重量(g)
R D011 1層	須恵器	7.12	5号土坑 Q S.W. 1層	縄石器合計	1099.87
	須恵器合計重量	7.12		石器合計点数・重量	1点 1099.87

鉄貨

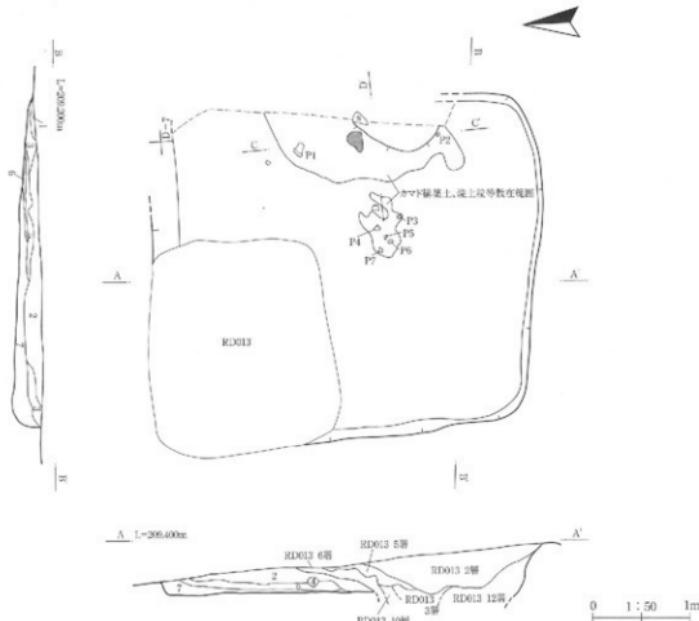
出土地点・層位等	種別	重量(g)			
1層	賣水通寶	259			
	鉄貨合計点数・重量	1点 259		総合計重量	3849.59

5まとめ

今回の調査範囲は、平安時代に居住域として利用されていたことが明らかとなった。平安期の遺物は、本遺跡の北東約1kmに所在する芋HII遺跡の第3期に類似している。加えて、遺構内にTo-aテフラが堆積することおよびその状態から同テフラ降下前後の近接した時期に廃棄されたもの、つまり10世紀初頭前後という年代が与えられそうである。また、縄文時代のある時期には狩り場であったことが推定され、土坑群の存在から周辺に集落が営まれていた可能性が高い。

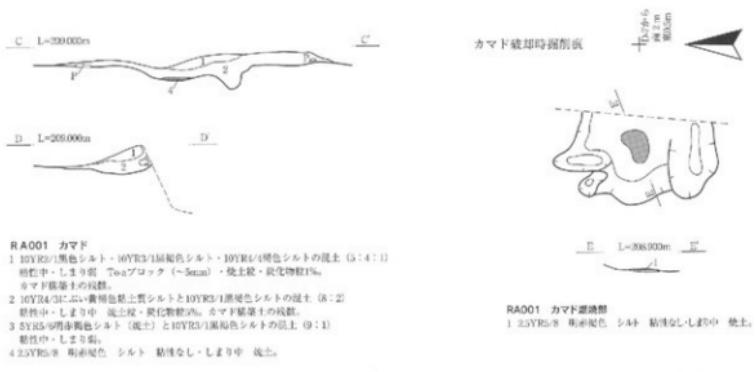
なお、武道IV遺跡第2次調査に関する報告は、これをもって全てとす。

RA001



RA001

- 1 10YR2/1 黒褐色シートと30YR3/1 黒褐色シートの混土(7.3) 残性中・しまり中 10YR4/26 黄褐色シート・ブロック(～2cm)3%、赤褐色パミス・明黄褐色パミス3%。人為堆積。
 2 10YR2/1 黒褐色シートと30YR3/8 明黄褐色シートの混土(7.2) 残性中・しまり中 明黄褐色パミス7%、赤褐色パミス3%。人為堆積。
 3 10YR3/1 黑褐色シートと30YR3/8 明黄褐色シートの混土(6.4) 残性中・しまり中 明黄褐色パミス10%、赤褐色パミス3%。人為堆積。
 4 10YR2/1 黒色 シート 残性中・しまり中。
 5 10YR2/1 黒色 シート 残性中・しまり中 To aブロック(～2cm)7%，赤褐色パミス5%，羽黄色パミス1%。
 6 10YR3/1 黑褐色シートと10YR7/9 明黄褐色シートの混土(8.2) 残性中・しまり強 墓床？。人為堆積。
 7 10YR2/1 黑褐色シート 残性中・しまりやや弱 赤褐色パミス3%、To aブロック(～5mm)2%。



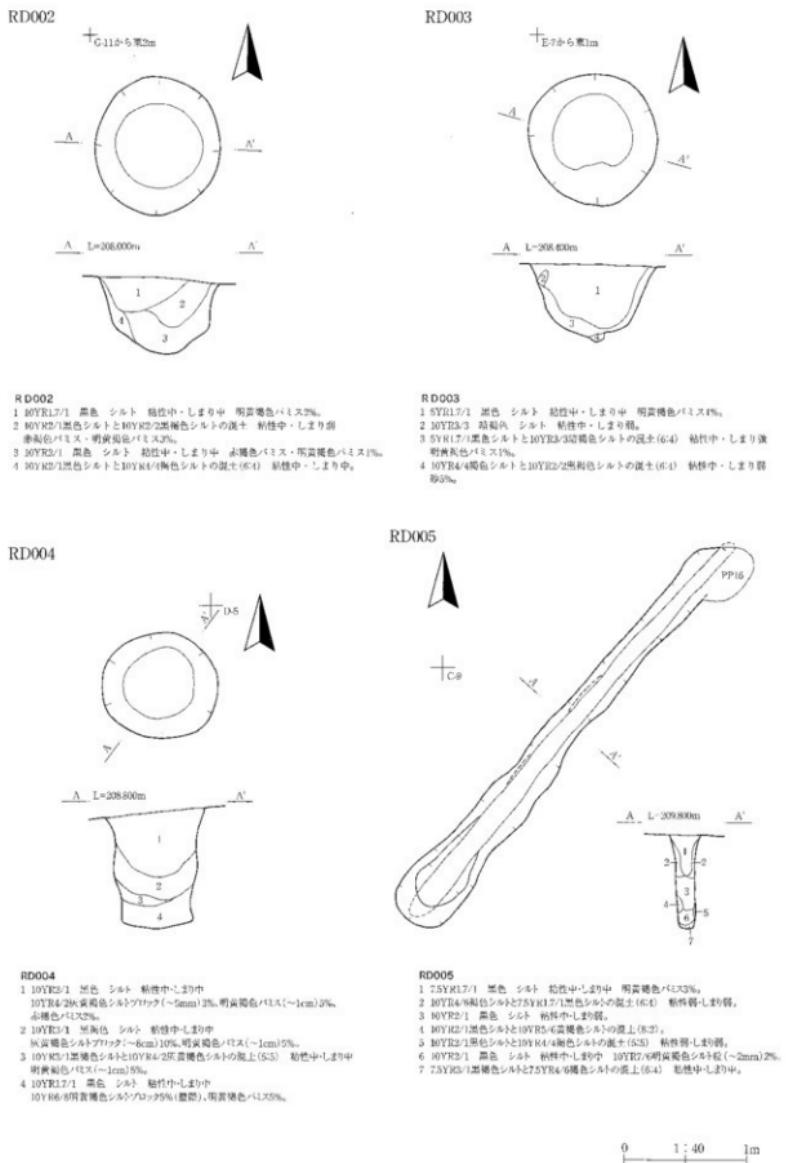
RA001 カマド

- 1 10YR2/1 黑褐色シート・30YR3/1 黑褐色シート・10YR4/26 黄褐色シートの混土 (5:4:1)
 残性中・しまり弱 Teaブロック(～5mm)・地上部・炭化物3%。
 カマド壁基土の残部。

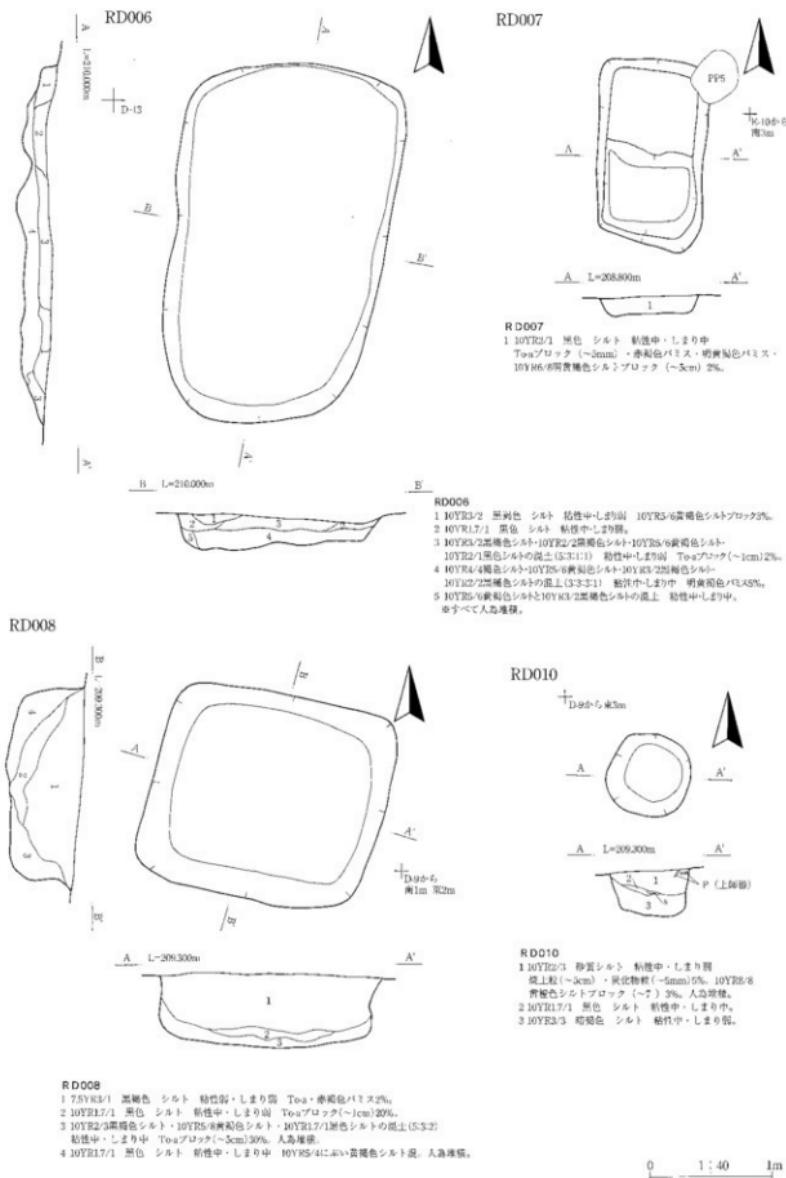
- 2 10YR4/3C ない 黄褐色基土質シートと10YR2/1 黄褐色シートの混土 (8:2)
 残性中・しまり中・土壌土・炭化物5%。カマド壁基土の残部。
 3 25YR5/8 明黄褐色シート(流土) と10YR3/1 黑褐色シートの混土 (9:1)
 残性中・しまり弱。
 4 25YR5/8 明黄褐色 シート 粘性なし・しまり中 土壌土。

第4図 武道Ⅳ遺跡第2次調査検出遺構（1）

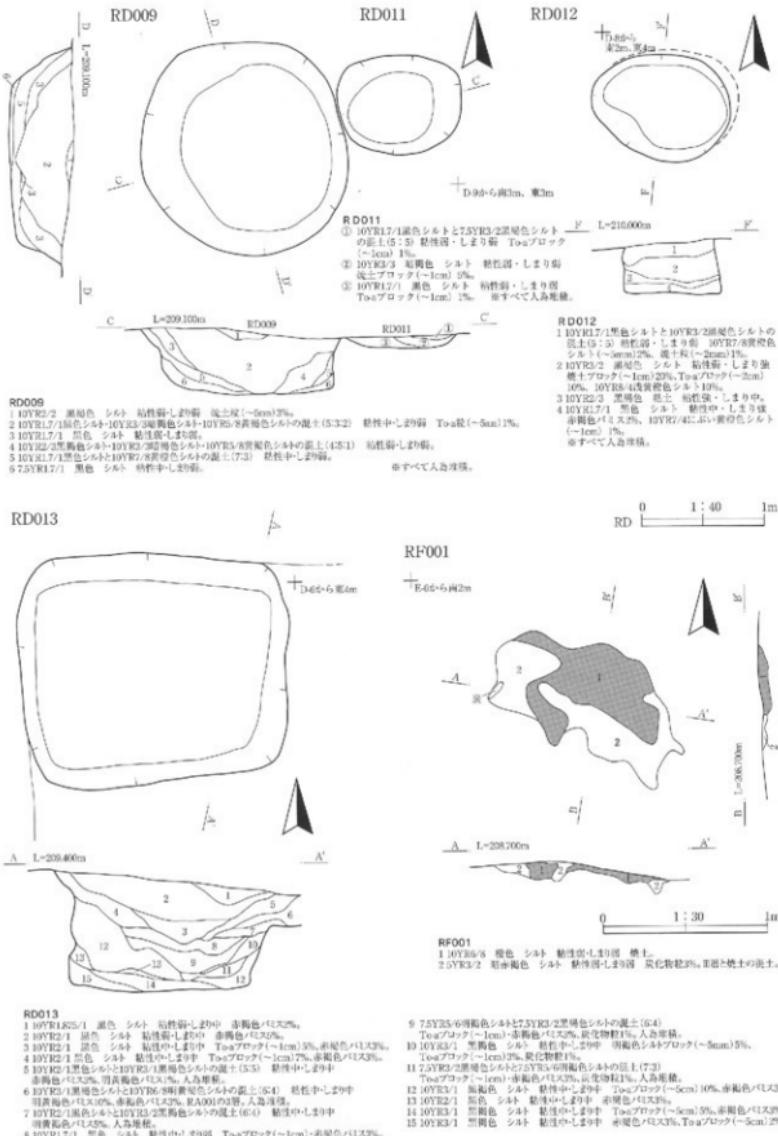
(2) 武道IV遺跡第2次調査



第5図 武道IV遺跡第2次調査検出構造(2)



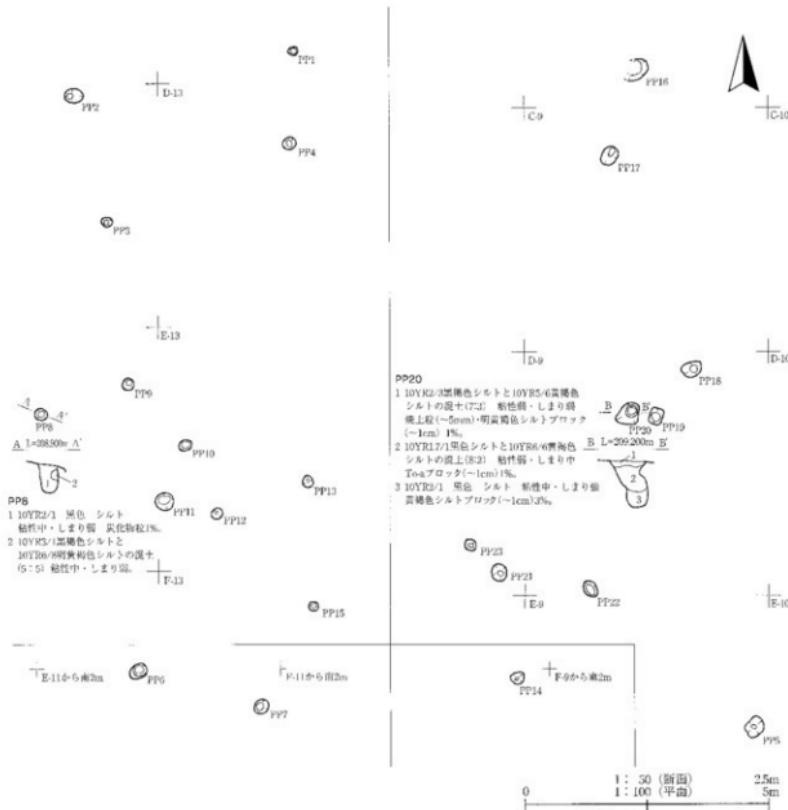
第6図 武道Ⅳ遺跡第2次調査検出遺構（3）



第7図 武道IV遺跡第2次調査検出遺構(4)

第3表 柱穴状土坑観察表

No.	グリッド	真高 (cm)	経緯 (az)	溝 S (cm)	底面標高 (m)	測定者
PP1	C-13	20	18	—	15	10YR2/1 黒色 シルト 硬性中・しまり無。
PP2	D-12	38	29	—	16	10YR2/1 黑色 シルト 硬性中・しまり有。
PP3	D-12	24	19	14	—	10YR2/1 黑色 シルト 10YR6/6明黄褐色シルトの底土 (7:3) 硬性中・しまり中。
PP4	D-13	28	25	—	20	10YR2/1 黑色 シルト 10YR6/6明黄褐色シルト (7:3) 硬性中・しまり有。
PP5	E-9	45	36	—	—	10YR2/1 黑色 シルト 10YR2/1 黑色 シルトと10YR6/6明黄褐色シルトの底土 (7:3) 硬性中・しまり有。明黄褐色バニス3%。
PP6	E-11	39	30	38	208,356	10YR2/1 黑色 シルト 10YR6/6明黄褐色シルトの底土 (7:3) 硬性中・しまり有。明黄褐色バニス3%。
PP7	E-11	34	29	22	208,430	10YR2/1 黑色 シルト 硬性中・しまり弱。
PP8	E-12	25	25	35	205,557	③ 6 個観察。
PP9	E-12	25	25	—	208,764	10YR2/1 黑色 シルトと10YR6/6明黄褐色シルトの底土 (7:3) 硬性中・しまり無。
PP10	E-13	27	22	15	206,172	10YR2/1 黑色 シルトと10YR6/6明黄褐色シルトの底土 (7:3) 硬性中・しまり弱。明黄褐色バニス5%。
PP11	E-13	37	33	27	208,612	10YR2/1 黑色 シルトと10YR6/6明黄褐色シルトの底土 (7:3) 硬性中・しまり中。明黄褐色バニス5%。
PP12	E-13	24	22	23	208,600	10YR2/1 黑色 シルト 硬性中・しまり弱。
PP13	E-13	25	25	17	208,603	10YR2/1 黑色 シルト 硬性中・しまり強。明黄褐色バニス5%。
PP14	E-14	27	25	14	208,603	10YR2/1 黑色 シルト 硬性中・しまり中。2cmブロック (-1cm) 中位に少數。
PP15	F-13	21	20	15	208,518	10YR2/1 黑色 シルト 硬性中・しまり弱。
PP16	B-9	54	16	209,647	SYR2/1 黑褐色 シルト 10YR6/4明黄褐色シルトブロック (-5cm) 1%。	
PP17	C-9	40	33	22	208,148	25YR7/4 黑色 シルト 硬性中・しまり弱。明黄褐色シルトブロック (-3cm) 明黄褐色バニス1%。
PP18	D-9	44	29	22	208,977	10YR2/1 黑色 シルト 硬性中・しまり弱。明黄褐色シルトブロック (-3cm) 明黄褐色バニス1%。
PP19	D-9	35	28	53	208,529	10YR2/1 黑色 シルト 硬性中・しまり弱。
PP20	D-9	54	45	55	208,592	新井観察。
PP21	D-8	36	33	26	208,524	10YR2/1 黑色 シルト 硬性中・しまり弱。Top-aブロック (-2cm) 2%。
PP22	D-9	37	29	24	208,623	10YR2/1 黑色 シルト 硬性中・しまり弱。水褐色バニス5%。Top-aブロック (-5cm) 下位に1%。
PP23	D-8	26	24	9	208,696	10YR2/1 黑色 シルト 硬性中・しまり弱。水褐色バニス2%。明黄褐色シルトブロック (-1cm) 1%。



第8図 武道IV遺跡第2次調査検出遺構 (5)



縄文土器

No.	出土場所・部位	断面	断面	文様の特徴	重量(g)	備考
1	土壌中・B・9号土	断面	断面	口部: 斜縞　口: 平行弦縞、崩消絶文(しり)	11.29	
土師器						
2	R A001 土壌中・Q S E 5 树・Q N E 地土	土師器 环	底	口～体 ロクロ ヘラミガキ 黒色光沢	— — — — 15.92	
3	E 7号・Q N E 地土・北ベル 上丘層、東ベルト5号	土師器 环	体～底	ロクロ→ナデ ロクロ	— — (11.0)	185.83 背面: 砂底
4	R A001 カマド P 1・カマド 2号、F - 7 地化不明	土師器 环	口～体	ロクロ	(20.5) — —	107.80
5	R A001 カマド P 2・カマド 3号、東ベルト5号、R D013 瓦面P 1・瓦面直上(5cm以内)、12号	土師器 环	口～体	口: ナデ 体: ヘラケズリ	(16.0) — —	159.40 内面底部にスコケ付着
6	R A001 Q N E 7号・Q NW 7 树・Q N E 地土	土師器 环	体～底	ヘラケズリ ナデ	— — — — 70.44	
7	R A001 Q N E 7号、R D013 地土直上	土師器 环	底	ロクロ ヘラミガキ 黑色光沢	— — — — 33.26	裏面「上」? 正面: 目板斜切、一部再調整
8	R D008 S E 4号	土師器 环	底	ヘラケズリ 剥落	— — — — 46 27.53	背面: 刮削「十」、一部ナデ
9	R D008 NE 1号・1树	土師器 环	口～体	ロクロ 黑色光沢	— — — — 12.46	

第9図 武道IV遺跡第2次調査出土遺物（1）



No.	出土地点・部位	種別	番号	部位	調整		底面	底面 直径 (cm)	底面 底径 (cm)	底面 底径 (g)	備考
					外側	内面					
10	R D010 1期・埋土	土師器 环	口～体 ロクロ	ロクロ	(14.2)	—	—	49.90	—	—	—
11	R D010 1期・埋土	土師器 瓢	口～体 ロクロ 底: ヘラケズリ	ロクロ	(16.8)	—	—	94.48	—	—	—
12	R D011 1期	土師器 环	口～体 ロクロ	ロクロ	(16.4)	—	—	20.79	—	—	—
13	R D011 1期	土師器 瓢	カギメ～ヘラケズリ	ロクロ	(18.3)	—	—	7.12	—	—	—
14	R D012 西壁脚2層	土師器 瓢	口～体 ナゲ	ハケメ	(18.3)	—	—	56.50	—	—	—
15	R D013 8層	土師器 不	口～底 ロクロ	ヘラミガキ 極端燒	(16.7)	5.6	7.4	165.90	底面 底面 底面	底面 底面 底面	—
16	R D013 埋土上位	土師器 环	底 ロクロ	ヘラミガキ	—	—	(6.4)	34.53	底面 底面 底面	底面 底面 底面	—
17	R D013 埋土上位	土師器 瓢	底 ロクロ	ロクロ	—	—	—	17.30	底面 底面 底面	底面 底面 底面	—
18	P F14 1層	土師器 不	口 ロクロ	ロクロ	—	—	—	27.53	底面 底面 底面	底面 底面 底面	—
19	表盤	土師器 高台付环	底 ロクロ	ロクロ	—	—	(9.6)	42.87	—	—	—

土師器・漆器類

No.	出土地点・部位	器種	残存状態	特徴、美鑑等	カッコ内は推定値				備考
					大きさ (cm)	幅 (cm)	厚さ (mm)	重さ (g)	
20	B-8 目録	粘土塊	両製欠 大半欠	様状一部に布目	(2.32)	1.61	1.51	21.77	—
21	G-8 目録	鉢	1	此熱し外面部発泡・内面赤色化	(4.70)	(3.82)	(1.65)	3.41	—

石器

No.	出土地点・部位	器種	残存状態	石質	カッコ内は推定値				備考
					大きさ (cm)	幅 (cm)	厚さ (mm)	重さ (g)	
22	R D009 Q SW1部	石斧	1/4欠	花崗閃綠岩	21.92	(12.95)	2.95	1099.87	比熱・赤色化

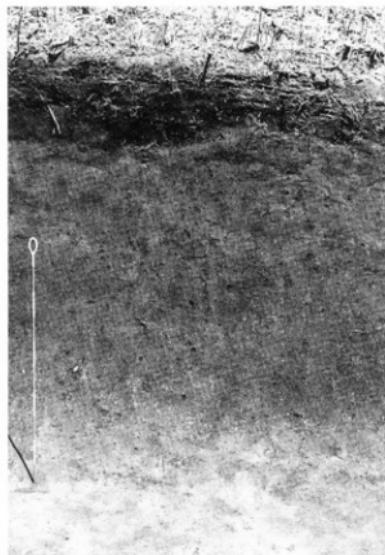
第10図 武道IV遺跡第2次調査出土遺物（2）



東半（北東から）

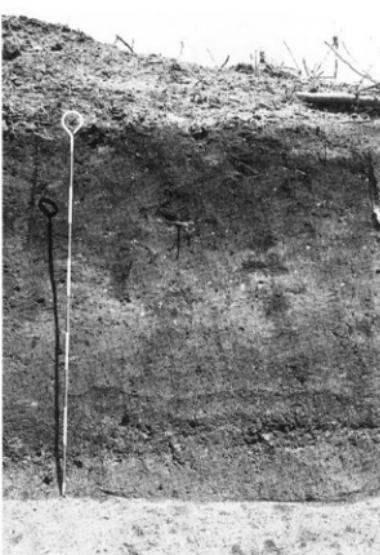


西半（北東から）



A-A'（南から）

基本土層



B-B'（南から）

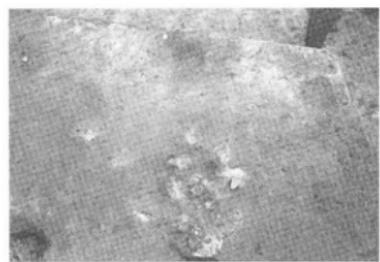
写真図版1 武道IV遺跡第2次調査区全景・基本土層



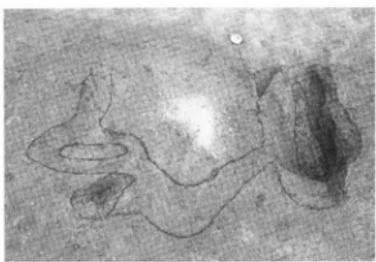
RA001 平面 (西から)



断面A-A' (東から)

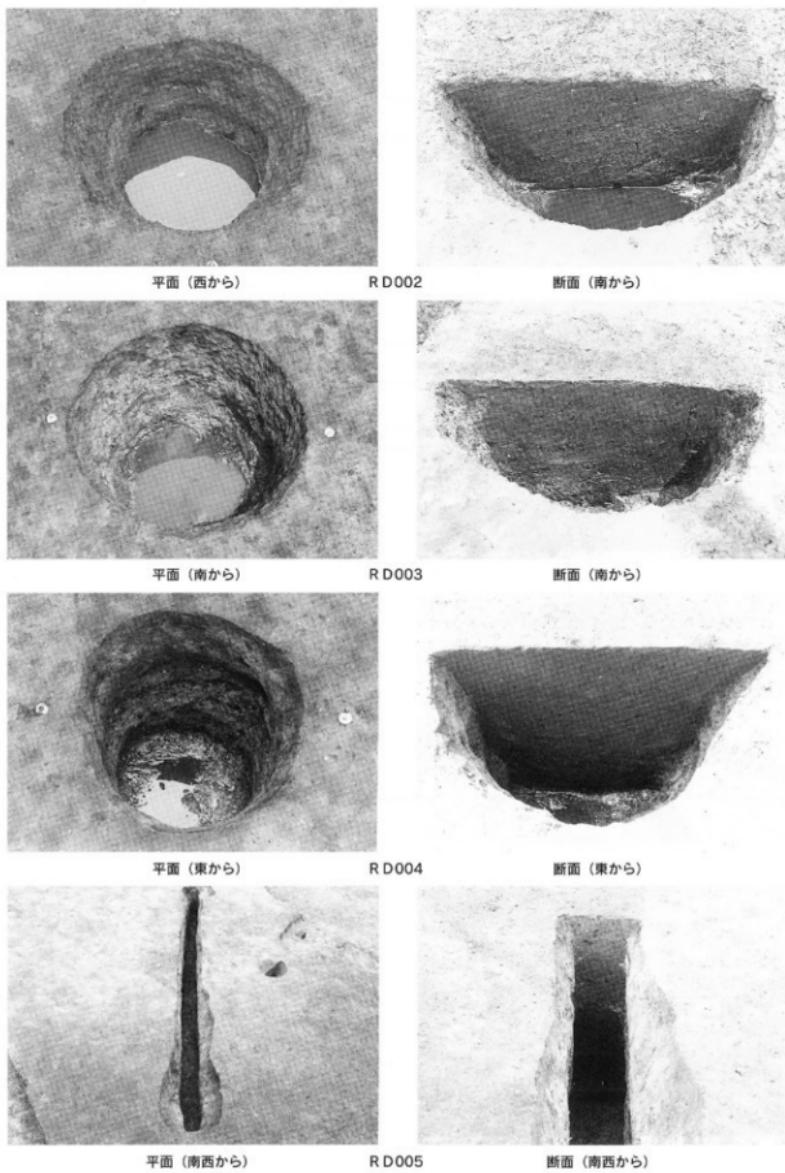


カマド検出状況 (西から)

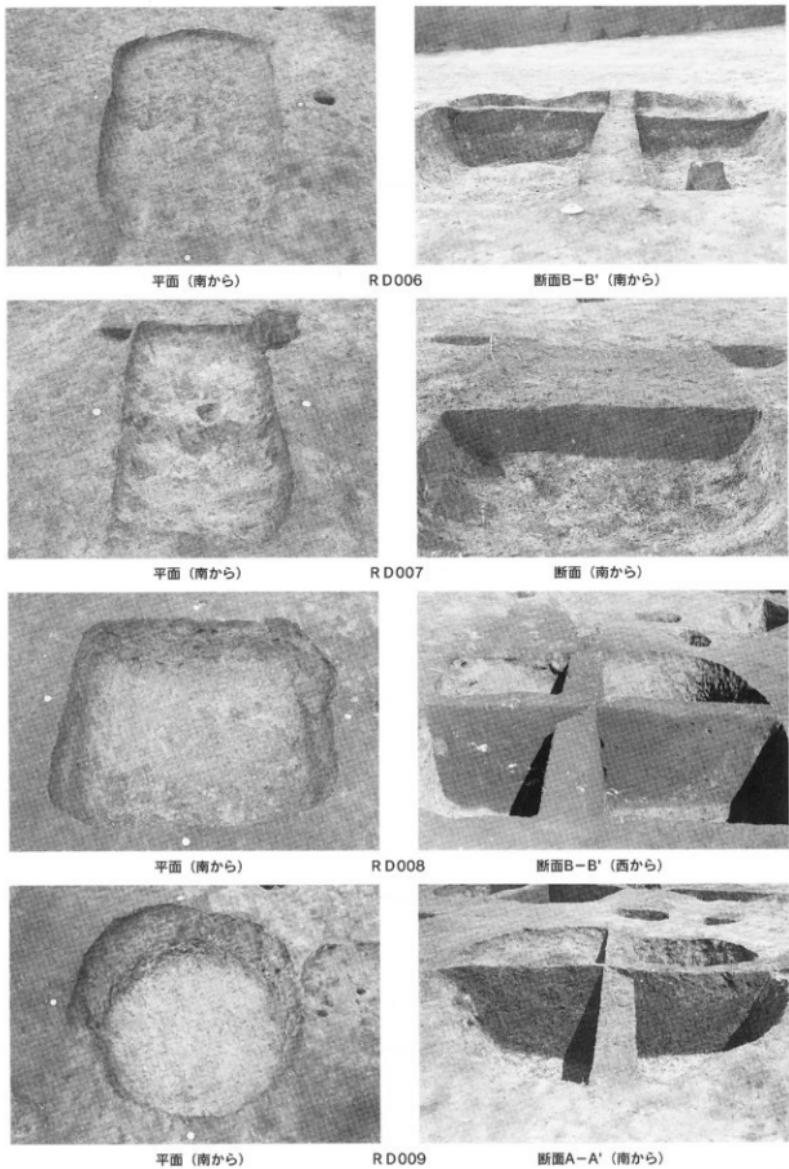


カマド廃棄時塗削痕 (西から)

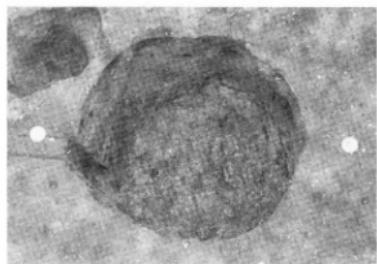
写真図版2 武道IV遺跡第2次調査検出遺構 (1)



写真図版3 武道IV遺跡第2次調査検出遺構 (2)



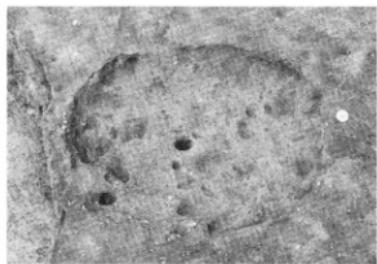
写真図版4 武道IV遺跡第2次調査検出遺構（3）



平面（南から）



断面（南から）



平面（南から）

R D010

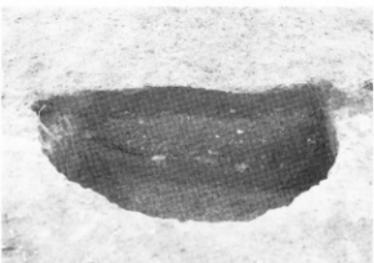


断面（南から）

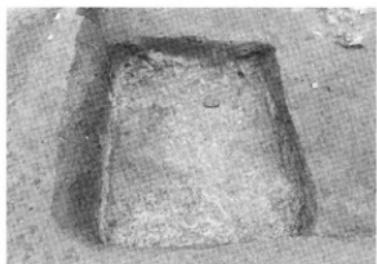


平面（南から）

R D011

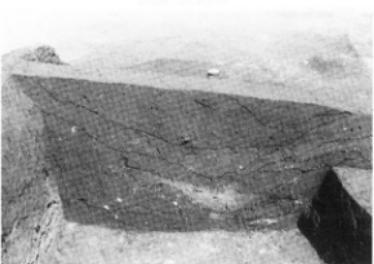


断面（東から）



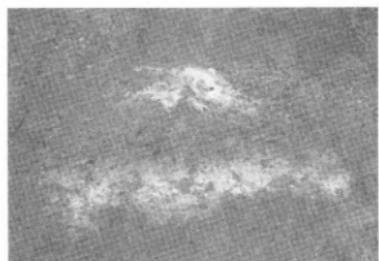
平面（西から）

R D012



断面（西から）

写真図版5 武道IV遺跡第2次調査検出遺構（4）



平面（南から）



R F 001

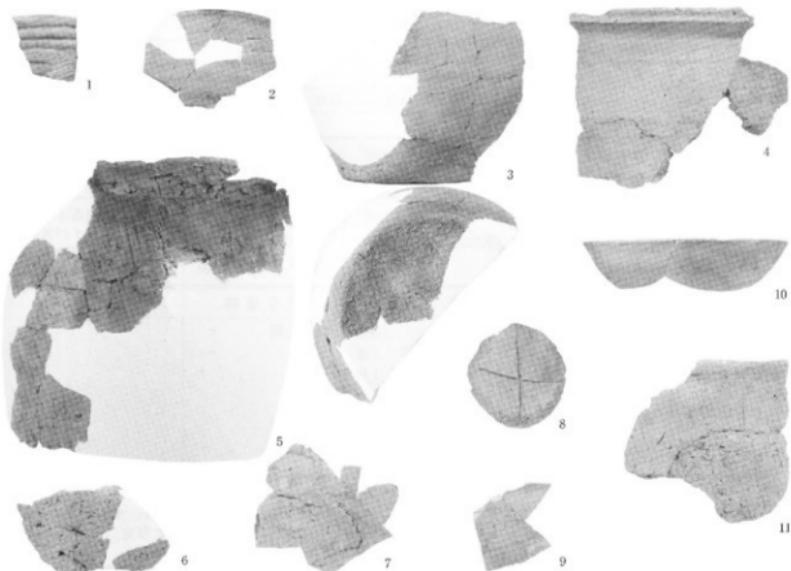
断面（東から）



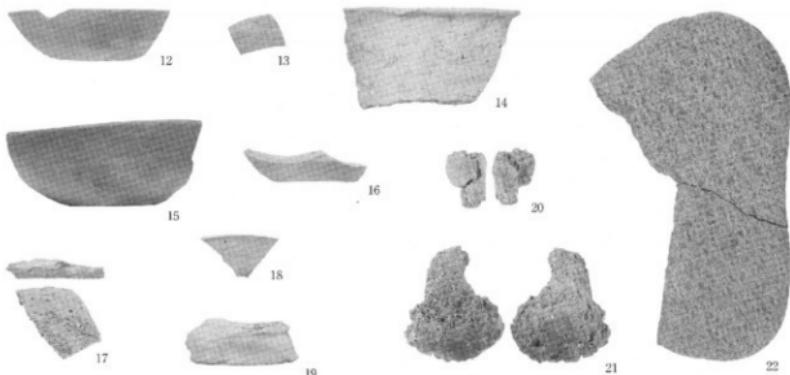
柱穴状土坑群 平面（東から）



作業風景（東から）



写真図版6 武道IV遺跡第2次調査検出遺構（5）、出土遺物（1）



写真図版7 武道IV遺跡第2次調査出土遺物(2)

報告書抄録

ふりがな	へいせいじゅうはちねんどはっくつちょうさほうこくしょ							
書名	平成18年度発掘調査報告書							
副書名	武道IV遺跡第2次調査							
卷次								
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第505集							
編著者名	平野祐・丸山浩治							
編集機関	(財) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター							
所在地	〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡11地割185番地 TEL(019) 638-9001							
発行年月日	2007年3月26日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因	
武道IV遺跡 第2次調査	岩手県盛岡市 玉山区芋田字 武道53-68ほか	03201 KE57-0197	39度 51分 27秒	141度 10分 36秒	2006.05.01 ～ 2006.05.31	1,890m ²	国道4号沿民間 バイパス建設 事業にともなう 緊急発掘調査	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
武道IV遺跡 第2次調査	狩獵場	縄文時代 平安時代 時期不明	土坑 陥し穴状遺構 堅穴住居跡 土坑 焼土遺構 柱穴状土坑 柱穴状土坑	3基 1基 1棟 8基 1基 6個 17個	縄文土器 土師器 須恵器 粘土塊 羽口 台石			
要約	縄文時代と平安時代の複合遺跡。縄文期の遺構は土坑と陥し穴状遺構で、一時期は狩り場としての利用がなされていたものと思われる。平安期の遺構は堅穴住居跡、土坑、焼土遺構、柱穴状土坑で、いずれにもTo-aテフラが絡む。10世紀初頭前後の遺構と推定される。土坑埋土は人為的な埋め戻しが多く、焼土粒・ブロックの混入も顕著に見られる。							

※緯度・経度は世界測地系における数値である。

(3) 大曲遺跡

所 在 地	花巻市石鳥谷町戸塚9-48-1ほか	遺跡コード・略号	LE97-2166・OM-06
委 託 者	県南広域振興局花巻総合支局農林部農村整備室	調査対象面積	250m ²
事 業 名	経営体育成基盤整備事業戸塚地区	調査終了面積	250m ²
発掘調査期間	平成18年4月7日～4月28日	調査担当者	戸根貴之・須原 拓

1 調査に至る経過

大曲遺跡は、経営体育成基盤整備事業戸塚地区の実施に伴い、その事業区域内に存することから発掘調査を実施することになったものである。

本事業地は、岩手県の中央部、花巻市石鳥谷町にあり、JR東北本線石鳥谷駅の南東4.0kmに位置し、稗貫川の右岸に開けた57.3haの水田地帯である。地区内の水田は昭和51年に10a区画に整備されているが、地区内水路は用排水兼用で排水不良が大部分を占め、乾田化が困難な状況である。また場内の耕作道路は狭小で大型機械による通行に支障をきたしている。

よって、農業情勢の変化に対応すべく担い手の育成の基盤整備を計画し、農用地の流動化を促進させ、将来の経営体を育成、高生産性稻作と高収益野菜等の複合経営を確立し、農業経営の安定化を図るものである。

当事業の施工にかかる埋蔵文化財の取り扱いについて、花巻地方振興局農林部農村整備室（以下、当農村整備室と表記）は、平成16年10月28日付花地農（整）第162-9号「埋蔵文化財の試掘調査について（依頼）」により、岩手県教育委員会（以下、県教委と表記）に対し試掘調査の依頼を行った。

依頼を受けた県教委は、平成16年12月27日に試掘調査を実施し、埋蔵文化財の存在を確認した。このため、工事着手には発掘調査が必要という回答を、平成17年1月4日付教生第1388号「埋蔵文化財の試掘調査について（回答）」により、県教委から当農村整備室は受けた。

調査対象面積が狭小で造構密度も低いと予想されたことから、発掘調査は県教委で実施することとなり、当農村整備室は、平成17年2月28日付花地農（整）第162-7号「埋蔵文化財の発掘調査について（依頼）」で県教委に発掘調査を依頼した。

依頼を受けた県教委は平成17年3月14日調査に着手した（～同3月16日）^(注1)。しかし、想定した密度を超える造構が検出されたため一旦調査を中断、平成17年3月30日付教生第1915号「埋蔵文化財の発掘調査（回答）」でその旨の回答を、県教委から当農村整備室は受けた。

上記の結果を踏まえて当農村整備室は県教委と協議し、調整を受けて平成18年4月1日付けで財團法人岩手県文化振興事業団との間で委託契約を締結し、発掘調査を実施することとなった。

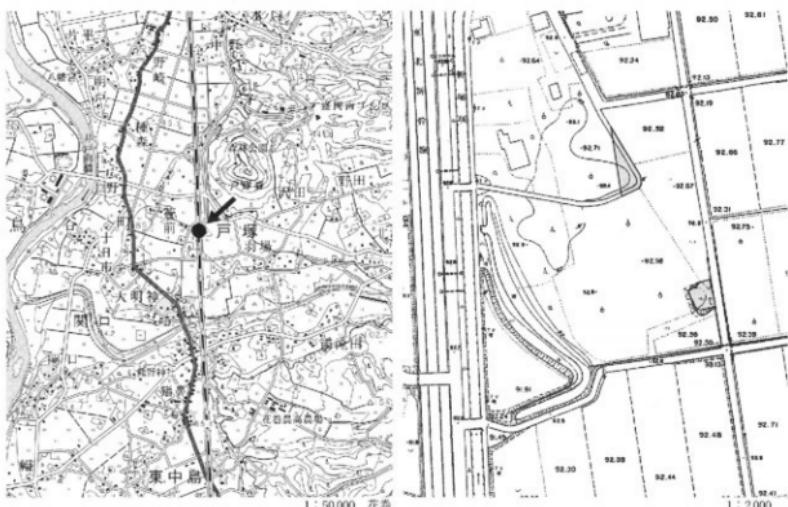
（県南広域振興局花巻総合支局農林部農村整備室）

2 遺跡の位置と立地（第1図、写真図版1）

大曲遺跡は、岩手県花巻市の北部、JR東北本線石鳥谷駅の南東約4kmのところに位置し、戸塚森の南西麓、北上川左岸及び稗貫川右岸に形成された低位河岸段丘上に立地する。北緯39度27分47秒、東経141度10分34秒付近に相当し、標高は92.5m前後を測る。東約1.7kmのところで北上川が南流し、南約1kmのところで稗貫川が西流する。調査開始前は水田及び荒蕪地として利用されていた。

3 基本層序（第2図、写真図版2）

大曲遺跡における基本層序は以下のとおりである。なお、調査地点が2箇所に分かれていることから、北側をA区、南側をB区と呼称する。



第1図 遺跡の位置・調査区の位置

基盤（地山）となるのは、褐色～黄褐色の粘土〔VI層：層厚40cm前後〕及び褐色礫層（層厚40cm以上。陥し穴状遺構精査時にVI層下で確認。）であり、上部は漸移層〔V層：層厚10cm前後〕へ連続する。V層の上位、旧表土〔II a層：層厚15～20cm〕までの堆積状況は、A区とB区では様相が異なる。

A区では、南側の基本土層②で黒色シルト〔IV層：層厚0～10cm〕がV層上面に堆積する様子が観察できるが、北側の基本土層①ではIV層は確認できず、V層の上で旧表土形成前の盛土〔II b層：層厚0～5cm〕を部分的に状在してII a層が堆積する様子が観察できる。これは、IV層の一部がすでに削平されていることを示唆している。

一方B区では、黒褐色粘質シルト〔III層：層厚0～10cm〕がV層上面に堆積し、III層の上にII a層が堆積する。但し、III層は僅かしか残っておらず、III層もすでに削平を受けている様子が窺える（基本土層③参照）。

II a層の上には、ところどころ現耕作土を覆う前の盛土〔I c層：層厚0～10cm〕を狭在するものの、現耕作土〔I a層：層厚20～30cm〕または盛土〔I b層：層厚35cm前後〕で覆われている。

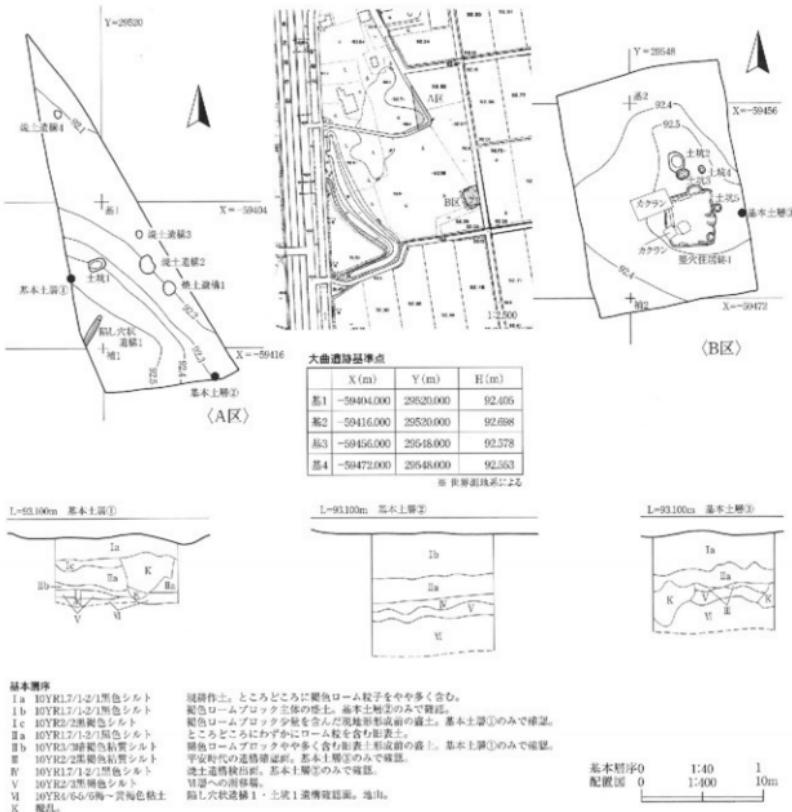
このように、かつてのは場整備等で調査区周辺は造成を受けていることが基本層序から見ても明らかだが、それでも表面採集時や試掘時に土器片等の遺物が採集されている。このことは、造成を受けながらも本来の遺跡範囲は周辺に広がっていたことを示唆している。

4 調査の概要

(1) 検出遺構（第2図）

調査対象となったのは、戸塚地区における経営体育成基盤整備事業に伴い切土となる範囲で、面積は250m²である。

A区は試掘により土層の堆積状況を確認後、重機で表土を除去し、遺構の検出・精査を行った。B



第2図 遺構配置図及び基本層序

区は、県教委によりすでに表土が除去され、砂及びブルーシートで保護されながらも遺構検出面が現れた状態になっていた。このため、砂及びブルーシートを重機及び人力で除去後、県教委作成の遺構配置図を参照しながら再検出を行い、順次遺構検査に着手した。

検出されたのは、竪穴住居跡1棟、土坑5基、陥し穴状遺構1基、焼土遺構4基である。遺構配置図は第2図に示した。座標は、平面直角座標第X系（世界測地系）を用い、図上に示すX、Yの座標値は北西隅に当たる部分を示している。基準点測量は（株）ハイマーテックに委託した。

なお、野外調査における実測は、原則として光波トランシットを用いた入手による実測で行っているが、竪穴住居跡の遺物・焼土・炭化材出土状況、カマドの遺物出土状況、掘り方状況についてはデジタル写真測量を導入し、図化を行っている。この業務は（株）セビアスに委託した。

以下、遺構種別ごとに記載する。

<堅穴住居跡>（第3・4図、写真図版2～4）

B区のX=-59464m、Y=29552m付近に位置する。V～VI層上面において、周囲より暗く、炭化物や焼土の分布が認められる、北西側が不整な方形の範囲が検出された。平成17年3月に実施された県教委の発掘調査段階で、多量の遺物が出土する焼失住居跡ということがすでに確認されており、範囲確定後精査に着手した。

規模・形状については、平面形は東壁約4.35m、南壁約3.5m、西壁約3.8m、北壁約4.1mのやや北西側が不整な方形であると思われるが、北西角、南西は搅乱等で壊されている。また、北東側は削平を受けており、貼床及び壁溝のみの残存である。主軸はN-10°-Wで、東壁の南寄りにカマドがある。搅乱を受けているため、推定の域は出ないが、床面積18m²前後の住居跡と考えられる。

埋土は、層としては19層に分けたが、上から①焼土・炭化物を含む黒～黒褐色シルト、②焼土を中心とした赤褐色土、③黒褐色シルトの3つに大別される。大別した層で見る限り、レンズ状堆積を呈していることから、自然堆積と考えられる。残存している埋土の深さは最大18cmであり、残存状況は良くない。土の混入状況にもよるが、住居跡の半分近くを焼土が覆っている様子が認められる。遺物及び炭化材の出土状況は焼土の上部と下部で分けられる。一部焼土の上部で出土している遺物もあるが、ほとんどの遺物は焼土下部での出土である。広範囲に焼土及び炭化物が見つかっていることから、県教委が指摘した焼失住居であることを再確認した。

壁は外傾しながら立ち上がる。柱穴は確認されなかったが、床面からの残存深10～20cmの壁溝が所々途切れながらもほぼ周回している。西側以外の3方向の壁溝は壁面に接しているが、西側の壁溝だけは60cm近く壁面から離れた位置にある。また、南東隅に平面形が略円形を呈する長軸65cm×短軸59cm、深さ32cmの床下土坑がある。設置場所から、貯蔵穴として使われたと考えられる。床面には、3～10cm程度の貼床が施されている。貼床をはがしたところ、土坑状の穴が2つ住居内にあったが、埋土が貼床と同一であり、床を貼る前に掘削されていたものと考えられる。北壁やや東側には115×50cm程度の半楕円状の張り出し部がある。当初は土坑が重複しているかと思われたが、断面を観察する限り重複の様子は認められない。また、張り出し部床面と住居跡床面間の高低差はほとんどなく、かつ、当該地点付近では遺物の分布も非常にまばらである。堅穴住居跡そのものの残存状況が不良なので可能性の域は出ないものの、出入口施設であった可能性がある。

カマドは、東壁の南寄りに、中軸線が壁とほぼ直交するように付設される。袖・燃焼部は確認できるが、煙道は削平を受けたとみられ確認できなかった。従って、煙道構築方法、煙出しの位置等については不明である。

燃焼部には、直径70cm前後、最大深18cm前後の円形を呈する皿状の掘り方があり、周囲に礫を掘えたときに掘られたかと思われる小さい穴がいくつか認められた。焚口部分には被熱により長軸77cm×短軸40cmの楕円形に径30cm程度の円形がついた雪だるま状の広がりで、厚さ7cm前後の赤色変化した焼土が確認された。焼土は燃焼部に広く分布し、焚口と支脚の間でよく焼けている。燃焼部には大きめの礫（北上山地産の砂岩）が1つ倒れた状態で埋まっており、上師器窓（第6図1）が外面を表にして礫を包み込むように埋っていた。この礫は支脚として使われていた可能性がある。礫の周りに掘り方は検出されなかった。

袖は、左右袖の、カマドの焚口付近と側壁の部分に大小の礫（主に奥羽山脈産の安山岩を使用）を据えて骨組みにしている。カマド袖の長さが右袖と左袖の間で22cmほどずれており、左袖が長くなっている。左袖は骨組みの縁に暗褐色～黒褐色シルトを貼り付けて構築している。右袖については貼り付けの様子は観察できなかった。構築土が流出した可能性もある。礫は焚口から燃焼部にかけては

被熱により赤色変化していた。また、側壁付近には、左袖を中心に上部器片がやや多く出土している。土器を礫と同様カマドの芯材として使っていた可能性がある。残存する袖幅は焚口付近で約60cm、燃焼部奥で約108cmであり、高さ約20cmである。

煙道は燃焼部からの比高で18cm程度の立ち上がりは認められるものの、その先は削平を受けている。昭和49年の調査で検出された堅穴住居跡の北カマドが今回検出されたカマドと類似した構造をもつとすれば、掘り込み式の可能性はあるものの、本遺構における煙道構築方法については不明といわざるを得ない。

遺構の重複はないものの、土坑5が接する。

遺物は大コンテナで2箱分の土師器・須恵器・土製品・鉄製品が出土している。本遺跡で出土している遺物のはほとんどはこの堅穴住居跡からのものである。本報告では40点を掲載した。

炭化材は住居の西及び北側で多く見つかっている。棒状の炭化材は南北方向に伸びた状態で確認されたものが多い。また、カヤ状に広がっている炭化材もいくらか見つかっている。このうち一部の試料について、AMS法による放射性炭素年代測定及び樹種同定を行った。放射性炭素年代測定は(株)加速器分析研究所に、樹種同定は古代の森研究会にそれぞれ委託した。その結果、放射性炭素年代測定については、9世紀後半から10世紀第3四半期頃の分析結果を得た。炭化材の樹種は、クリ(第3図下d、以降カッコ内は同義)、コナラ属コナラ節(e)、サクラ属(f)、トネリコ属(g)、タケツキ科(h)、カエデ属(i)、アケビ属(j)、ブナ(k)などに同定された。

本遺跡で特記すべき事項として、クリとコナラ節が出土した炭化材の6割以上を占めること、炭化状態で径15mm、元の径は20mmを超える太い蔓状のアケビ属の炭化材の存在が挙げられる。

樹種同定を行った吉川純子氏は上記のことから、本遺跡では主に住居構築材としてクリ・コナラ節などの樹木を、アケビ属の樹木を構築材組み上げの際に使用したのではないかと推測している^(注2)。

なお、年代測定および樹種同定の分析結果については第3図に示した。

所属時期は、出土遺物の特徴や放射性炭素年代測定の結果等を勘案すると、9世紀後半から10世紀初頭頃になるものと考えられる。

<土坑>(第5図、写真図版4・5)

A区で1基(土坑1)、B区で4基(土坑2~5)の計5基を検出した。位置や規模、形状等につ

第1表 土坑一覧

遺構名	位置 (X, Y) (m)	遺構 検出面	平面 形状	開口部深 ×幅【上段】 ・深さ【下段】 (cm)	埋 上	埋土堆積状況	遺構関係	出土遺物	所属時期	写真 図版
土坑1	(-59408, 29520)付近	V層上面	楕円	138×96 30	黒褐色シルト主体。	自然堆積	なし	なし	不明(縄文時代 以降)	4
土坑2	(-59460, 29551)付近	V層上面	楕円	138×117 24~30	黒褐色及び暗褐色 シルト主体。	自然堆積	相互に重複	上部 土師器	9世紀後半~ 10世紀前半	5
土坑3	(-59460, 29551)付近	V層上面	楕円	106×78 24	上部は黒褐色シルト、下部にはぶい黄 褐色シルトで構成。	自然堆積 (3が新、2 が旧)		上部 土師器、 縄文土器	9世紀後半~ 10世紀前半	5
土坑4	(-59462, 29554)付近	V層上面	不規則	66×55 18	黒褐色シルト主体。	自然堆積	なし	なし	不明(平安時代 カリ)	5
土坑5	(-59465, 29555)付近	V層上面	円形	60×60 22	炭化物・埴土を含む黒褐色シルト主体。	自然堆積	なし。ただし 堅穴住居跡に 接する。	土師器	9世紀後半~ 10世紀前半	5

いては第1表で示すこととし、特記事項については以下で補足する。

土坑2・土坑3は、V層上面で、平面形状が雪だるま状を呈する、焼上や炭化物を多く含んだ黒褐色土の広がりとして検出した。県教委調査時に円形の焼土状遺構とされたものであり、小コンテナ約0.5箱分の土師器壺・壺、須恵器片の出土が報告されている（県教委 2006）。県教委が調査時に設定したトレンチを生かして断面を観察したところ、重複関係が認められ、1つの焼土状遺構ではなく、2つの土坑であることが判明した。埋土の堆積状況から土坑3が新しく、土坑2が古いと判断される。

遺物は、土坑2から土師器が、土坑3から土師器及び縄文土器がそれぞれ4号袋1袋程度出土している。土坑2の遺物として3点、土坑3の遺物として2点を掲載した。なお、縄文土器は土坑3が埋没する際に流れ込んだものと考えられる。

土坑5は、遺構の重複はないが、堅穴住居跡1に近接する。県教委調査時には堅穴住居跡の煙出しと考えられた（県教委 2006）が、煙出しに伴う煙道や焼土の痕跡が確認できないうえ、堅穴住居跡で見つかっているカマドの軸線ともずれていることから、土坑とした。

遺物としては、土師器片が4号袋1袋程度及び焼けた礫が出土している。土坑5の遺物として図示できるものはないが、近接する堅穴住居跡の上器（第6図1）と接合するものがある。焼けた礫及び接合する上器が出土していることから、貯蔵穴等、堅穴住居跡に何らかの関係がある土坑とみられる。
＜陥し穴状遺構＞（第5図、写真図版6）

A区のX=-59416m、Y=29520m付近に位置する。VI層において、溝状の黒色土の広がりとして検出された。開口部の長軸270cm以上×短軸45cm、検出面からの深さ81cmを測り、平面形状は溝状、断面形状は中央が彫れたV字形を呈する。なお、南西側は調査区外へ延びていることから、本来の大きさはこれより大きいものと考えられる。主軸方向はN-28°-Eである。埋土は黒色シルトを主体とし、地山の影響を受けた礫を含む褐色砂質粘土を狭在する。3層付近は地山が崩落したことにより、膨らんだものと見られる。また、北東側の長軸の壁面は抉られており、フ拉斯コ状になっている。レンズ状堆積を呈することから自然堆積と判断される。遺構の重複ではなく、出土遺物もない。所属時期は、現在までの研究成果等から、縄文時代と考えられる。

＜焼上遺構＞（第5図、写真図版6・7）

焼上遺構はA区の南東から北西に向かって4基確認されている。いずれもV層上面において褐色シルトを含む明赤褐色の広がりとして検出した。いずれの遺構も重複ではなく、出土遺物もない。検出面から考えると縄文時代以降の遺構であることは確かだが、所属時期や性格については不明といわざるを得ない。遺構の所在する位置、規模（大きさ・深さ）、形状については、第2表のとおりである。

第2表 焼土遺構一覧

遺構名	位置(X, Y) (m)	形 状	長軸×短軸 (cm)	深さ (cm)	焼成状況	備 考	写真 図版
燒土遺構1	(-59412, 29524)付近	不整円形	102×102	12	良好		6
燒上遺構2	(-59408, 29524)付近	不整梢円形	138×117	10	良好	縄を少量含む。	6
燒土遺構3	(-59408, 29524)付近	不整梢丸方形	55×45	5	良好		6
燒土遺構4	(-59397, 29517)付近	不整方形	65×63	7	良好		7

（2）出土遺物（第6～8図、写真図版8～11）

遺物は、大コンテナで約2箱分出土した。内訳は土師器の壺・壺・甌、須恵器壺破片、縄文土器、鉄製品（刀子・鉄錐）、土製品、石器類（石核・石刃など）である。本報告では、写真のみの1点（38：写真図版10）を含む52点を掲載した。1～40の40点が堅穴住居跡、41～43が土坑2、44・45が

上坑3、46~52が遺構外からの出土である。

<土師器壺> (第6図1~14・第7図15~20・第8図41、42、46~48、写真図版8・9・11)

1~14、41、42、47、48は非ロクロで成形されたものである。うち、12~14、48は小形のものである。調整については、内面は横ナデ及びヘラナデ、外面は横ナデ、ヘラケズリによるものが多いが、外面にヘラナデやハケメを施しているもの(7、8、12、48)も認められる。8には指圧痕が残っている。底部が残っているものは3点(10、11、13)しかないが、いずれもヘラケズリ調整である。

15~20、46はロクロ成形によるものである。19は、外面調整はロクロナデのみだが、内面はヘラナデ調整である。20は内面はヘラナデのみだが、外面はロクロナデの後、体部中半でヘラナデ、下半でヘラケズリの調整が施される。底部はヘラケズリ調整である。

<土師器壺> (第7図21~32・第8図33、34、43、44、写真図版9~11)

ロクロ成形を基本とする。22、34には貼り付け高台がある。うち、22には剥離痕があり、高台は残っていない。調整は、①内外面にヘラミガキを施すもの(21、22)、②内面にヘラミガキを施すもの(23~25)、③内外面ともロクロナデのもの(26~34、43、44)の3つに大別される。底部は回転糸切りのものが大部分であるが、1点のみ回転糸切り後ヘラケズリによるものもある(24)。ヘラミガキが施されるものについては墨色処理を施されるものが多い。31は体部外面に墨書きが施されている。大半が欠けており、文字内容は不明である。

<土師器壺> (第8図35、36、写真図版10)

いずれもロクロ成形である。36の底部は回転糸切りにより切り離されたものである。

<須恵器壺> (第8図37、写真図版10)

住居西側の焼土上面で出土した。外面にタタキ痕、内面に当て具痕が認められる小破片である。

<繩文土器> (第8図45、写真図版11)

深鉢と考えられるものである。LR単節の縄文が施される。施文方法や胎土の特徴から同一個体の可能性がある。

<粘土塊> (写真図版10~38)

住居の南側、住居内に入っている搅乱の近くで出土した。

<鉄製品> (第8図39、40、写真図版10)

39は刀子の刃部、40は鉄鎌の茎部と考えられる。出土当初は1点ものと考えられたが、X線撮影を行ったところ、2点のものが1つにくっついていたことが判明した。なお、鉄製品については、岩手県立博物館へ保存処理を委託した。

<石器類> (第8図49~52、写真図版11)

49はA区の試掘中に出土した石核である。石材の産地・材質は奥羽山脈産の頁岩である。縄文時代のものと考えられる。

50~52はいずれも竪穴住居跡からの出土であるが、製作技法等から旧石器と見られるものである。竪穴住居跡の所属時期と著しく時期が違い、旧石器としての層位の関係が認められないことなどから、流れ込みによって入ったものと考えられる。このため、本報告では遺構外出土遺物として扱うこととする。50、51は石刃である。50は上下両端が、51は下端が欠損している。52は剥片である。50~52の石材の産地・材質はいずれも奥羽山脈産の頁岩である。後期旧石器時代の後半~終末に属するものと思われる。今回の調査で旧石器に伴う遺構等は確認されなかったが、周辺に旧石器時代遺跡の存在が示唆される。

5 まとめ

大曲遺跡では昭和49年に東北新幹線建設に伴う発掘調査が行われている。この時は今回調査で検出された堅穴住居跡とほぼ同時期の焼失住居1棟がA区の約60m西、現在の新堀堰の部分から確認されている（県教委 1979）。今回検出された堅穴住居跡は、先の調査で見つかった堅穴住居跡のII期のカマドと構造の特徴が類似し、削平されているため構造等は不明であるが、煙道も類似していた可能性がある。大曲遺跡は複数の堅穴住居跡からなる集落遺跡であったといえよう。

また、検出された溝状の陥し穴状構造は、今までの研究成果からは縄文時代に使われたと考えられている。1基の検出であったが、陥し穴状構造は複数で発見されることが一般的である。さらに、先の調査及び今回の調査では、遺構外からではあるが少量の縄文土器が出土しており、居住域が周辺に存在した可能性が考えられる。

以上のように、大曲遺跡は少なくとも縄文時代には狩り場として、また平安時代には集落として利用された複合遺跡であることが明らかとなった。

なお、大曲遺跡に係る報告は、これをもって全てとする。

(注1) 県教委で実施した発掘調査の調査区は、本報告におけるB区に当たる。

(注2) 樹種同定の結果については、紙幅の関係で本報告では掲載しなかったが、「大曲遺跡より出土した炭化材の樹種」として報告されている。

<引用・参照文献>

岩手県教育委員会（本文中では編者を県教委と表記。以下同じ。）

1979 「東北新幹線関係埋蔵文化財調査報告書Ⅱ」岩手県文化財調査報告書第34集

岩手県教育委員会 2006 「岩手県内遺跡発掘調査報告書（平成16年度）」岩手県文化財調査報告書第120集

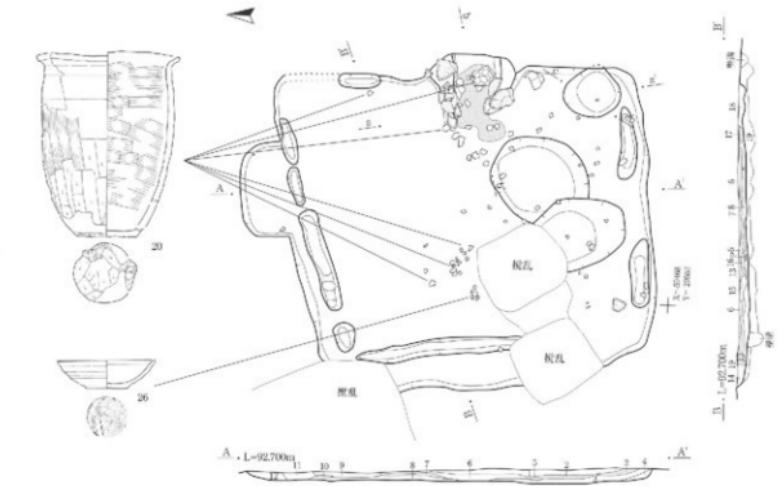
（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

1994 「大渡II遺跡発掘調査報告書」岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第215集

岩手県立博物館 1982 「岩手の土器 境内出土資料の集成」

加藤吉平・鶴丸俊明 1994 「[図録]石器入門事典（先土器）」 柏書房

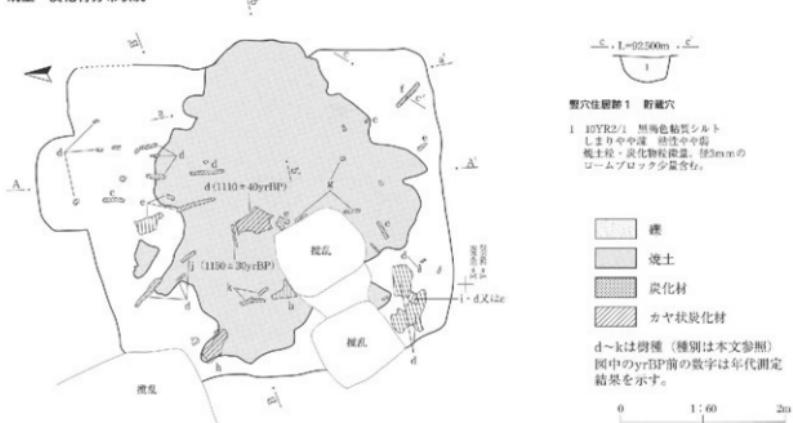
桐生直彦 2005 「竪をもつ堅穴建物跡の研究」 六一書房



堅穴住居跡 1 墓土

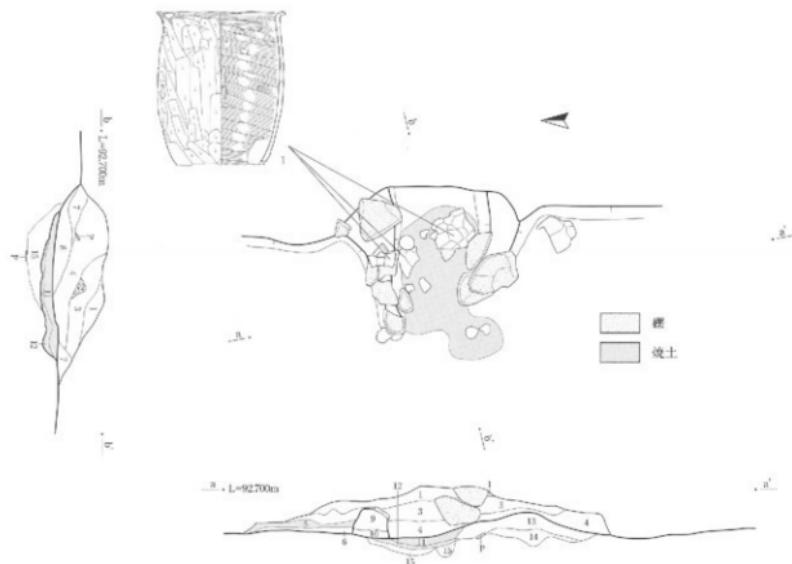
- | | | | |
|------------------------|-------------------------------------|-------------------------------|---------------------------------------|
| 1 10YR2/1-2/2 黒一黒褐色シルト | しまりやや密 粘性やや強 壤土少、炭化物微細量。生土粒子ごく微量含む。 | 10 5YR4/8 赤褐色焼土 | しまりやや密 細粒混、黒褐色～棕褐色のシルト層。炭化物微細量含む。 |
| 2 5YR4/8 赤褐色燒土 | しまりやや密 粘性やや強 | 11 10YR17.1/2/1 黒色シルト | しまりやや密 粘性やや強 各々ごく微量含む。 |
| 3 10YR17.1/2/1 黒色シルト | しまりやや密 粘性やや強、屋上部のところごろに炭化物塊がみられる。 | 12 11層と同じだが、11層と比べて油山粒子を多く含む。 | しまりやや密 粘性やや弱 |
| 4 10YR2/2 黒褐色シルト | しまりやや密 粘性強、細山ブロックごく微量含む。 | 13 5YR4/8 赤褐色焼土 | しまりやや密 粘性やや強 |
| 5 10YR2/2 黒褐色シルト | しまりやや密 粘性強、生土粒、炭化物混在を含む。 | 14 10YR17.1/2/1 黑色シルト | しまりやや密 粘性強 |
| 6 10YR2/2 黒褐色シルト | しまりやや密 粘性強、生土粒、炭化物混在を含む。 | 15 10YR3/3 黑褐色シルト | 焼き土、炭化物含む。12層より色調は暗い。 |
| 7 5YR4/8 赤褐色燒土 | しまりやや密 粘性やや強、油山色～培養色のシルト層含む。 | 16 10YR2/2 黑褐色シルト | しまりやや密 粘性やや弱 |
| 8 10YR17.1/2/1 黑色シルト | しまりやや密 粘性強、屋上部のところごろに炭化物塊がみられる。 | 17 5YR4/8 赤褐色燒土 | しまりやや密 粘性強 |
| 9 10YR17.1/2/1 黑色シルト | しまりやや密 粘性強、生土粒ごく微量、炭化物微細量含む。 | 18 10YR17.1/2/1 黑色シルト | しまりやや密 粘性強 |
| | | 19 10YR2/1-2/2 黒一黒褐色シルト | しまりやや密 粘性強、ごく微量、油山ブロック少量、炭化物微細量含む。是屋。 |

焼土・炭化材分布状況



第3図 大曲遺跡 堅穴住居跡（1）

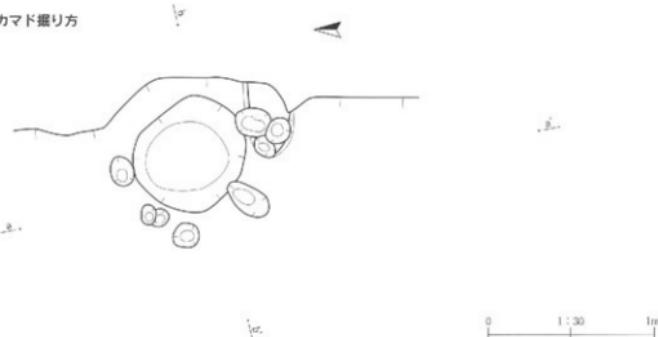
(3) 大曲遺跡



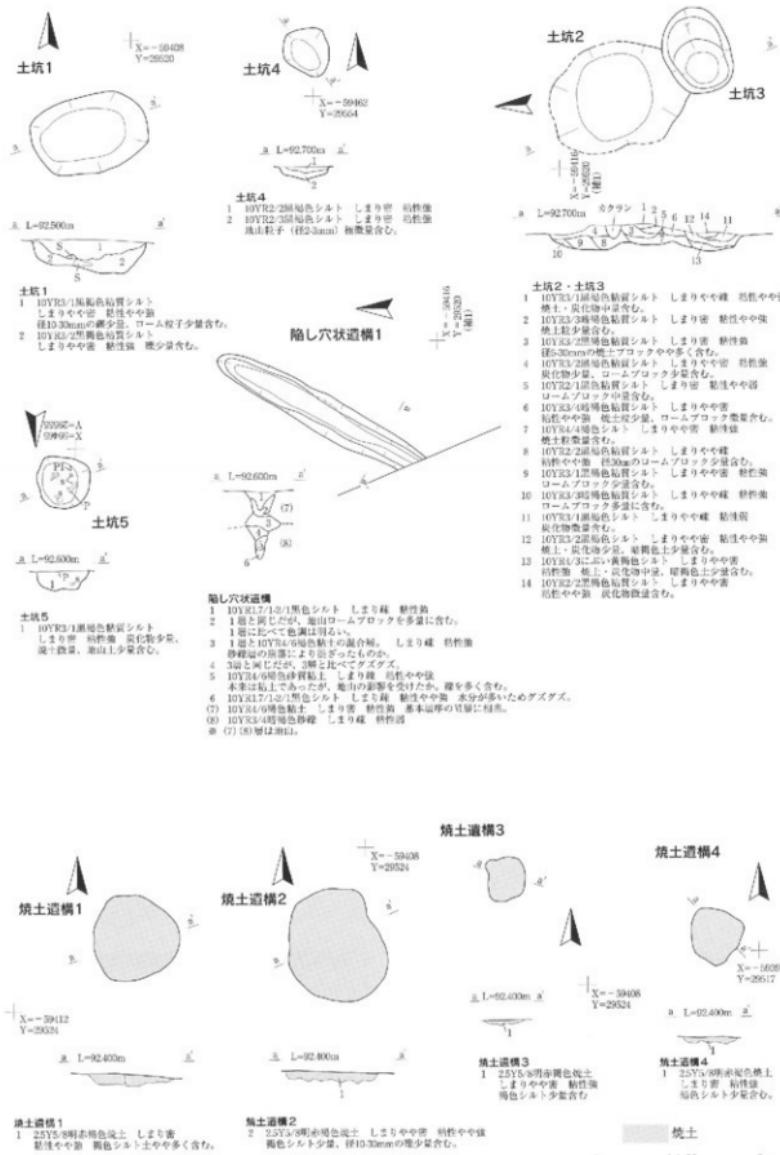
竪穴住居跡 カマド

1	10Y33-2	層毛色熱質シルト	しまりやや密 粘性やや弱 径1mmの洗土粒混含む。
2	10Y33-1	層毛色熱質シルト	しまりやや密 粘性やや弱 洗土・炭化物少量、徑1mmのローム粒少量含む。
3	10Y33-1	層毛色熱質シルト	しまりやや密 粘性やや弱 洗土・炭化物や多く含む。
4	10Y33-2	層毛色熱質シルト	しまりやや密 粘性弱 (柱窓が植生時に埋没したもの)
5	23Y35-8	明黄褐色沙土	しまりやや密 粘性やや強 黒褐色熱質シルト少量含む。
6	10Y35-6	明黄褐色ローム	しまりやや密 粘性やや強 黄褐色熱質シルト少量含む。
7	10Y33-2	無褐色熱質シルト	しまりやや密 粘性やや強 洗土やや多く含む。
8	10Y33-2	褐褐色熱質シルト	しまりやや密 粘性やや強 洗土やや多く含む。
9	10Y33-3/4	褐褐色熱質シルト	しまりやや密 粘性やや強 洗土多量、炭化物少量含む。並部。
10	10Y33-2	層毛色熱質シルト	しまりやや密 粘性やや強 洗土やや多く含む。少量含む。種部。
11	5Y36-8	男形陶器底土	しまりやや密 粘性やや強 混雜部。
12	5Y36-8	褐色地土	しまりやや密 粘性やや強 混雜部。
13	10Y33-1	黑褐色熱質シルト	しまりやや密 粘性強 洗土・炭化物少量含む。
14	10Y33-2	層毛色熱質シルト	しまりやや密 粘性強 黃褐色ローム少量含む。
15	10Y33-3	褐褐色熱質シルト	しまりやや密 粘性やや弱 洗土多量、炭化物少量含む。

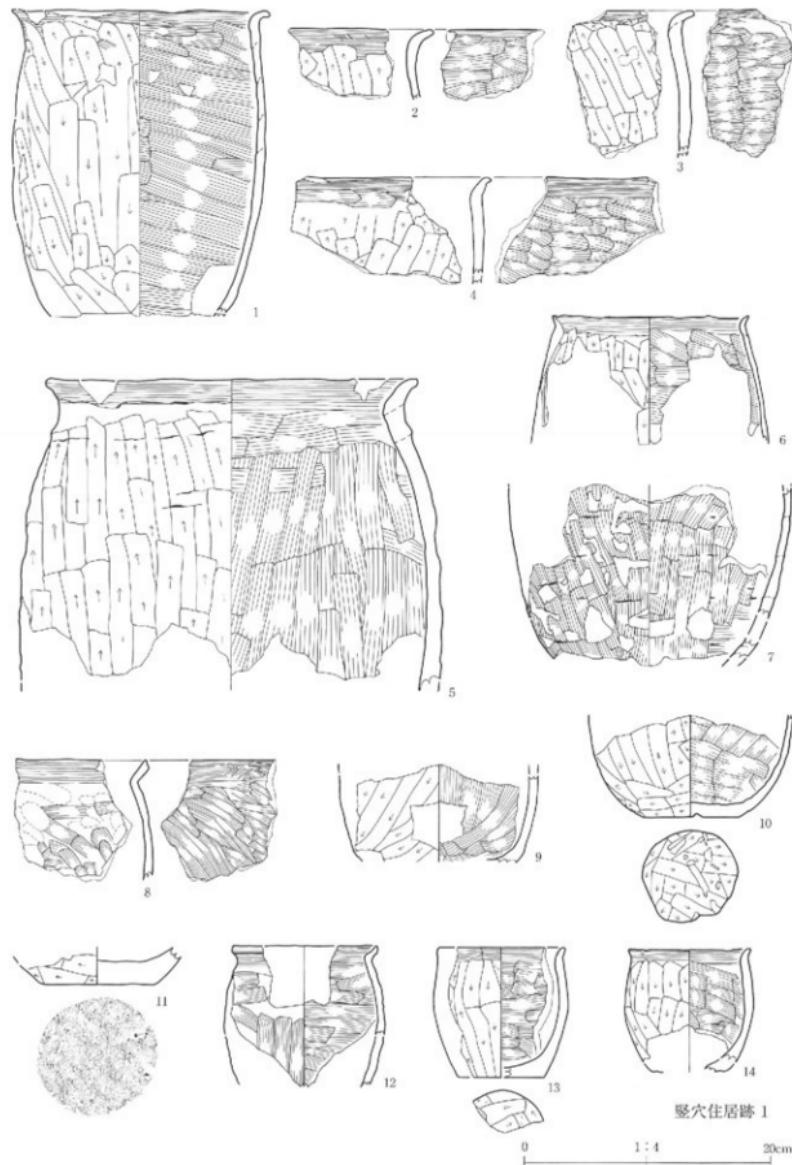
カマド掘り方



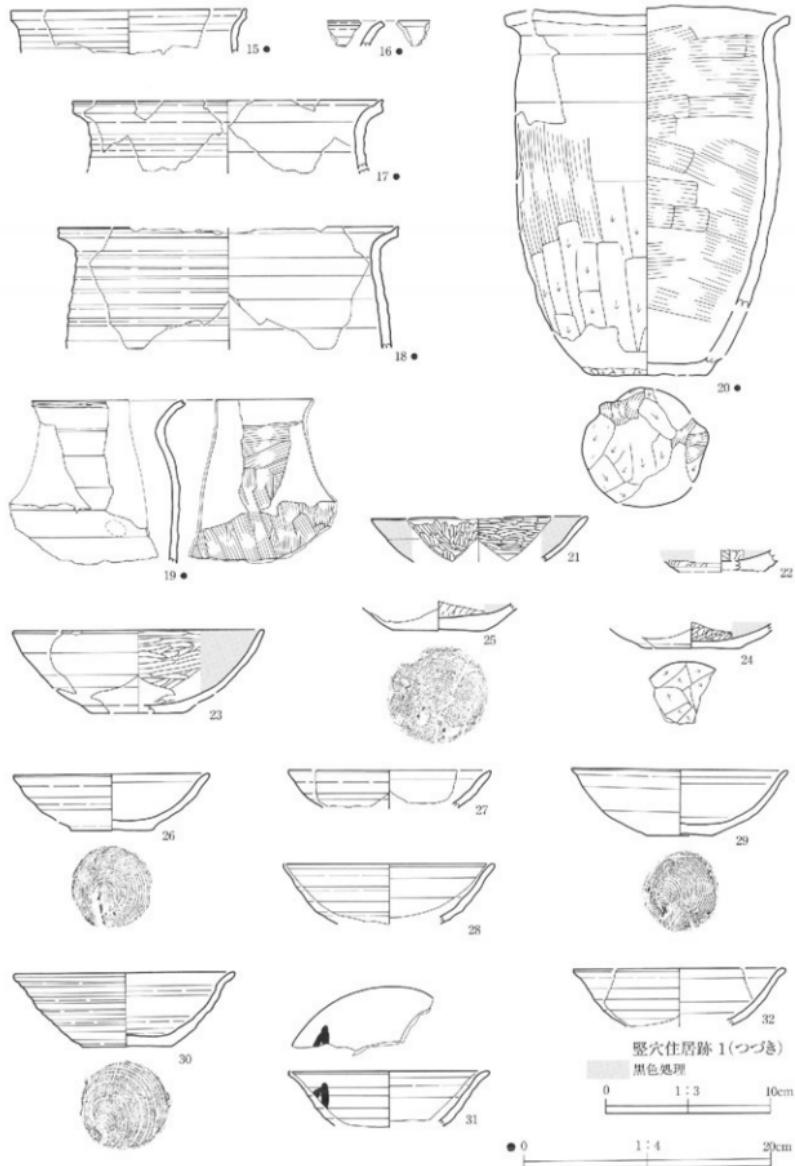
第4図 大曲遺跡 竪穴住居跡 (2)



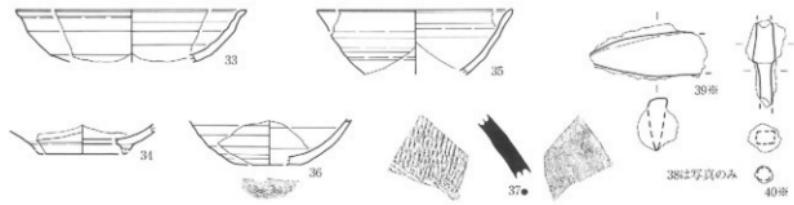
第5図 大曲道路 土坑・陥し穴状遺構・焼土遺構



第6圖 大曲遺跡 出土遺物 (1)



第7図 大曲遺跡 出土遺物 (2)



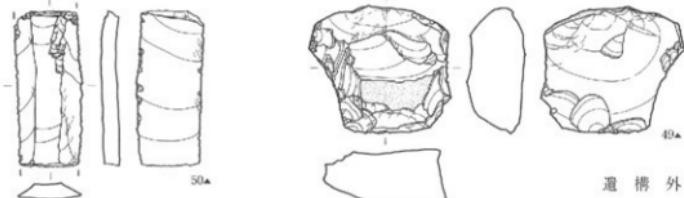
堅穴住居跡 1(つづき)



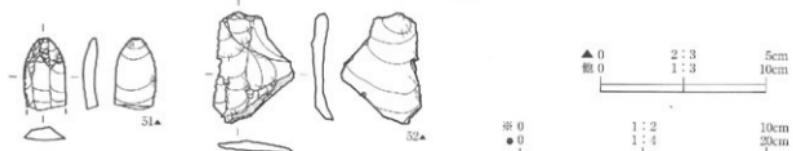
土坑 2



土坑 3



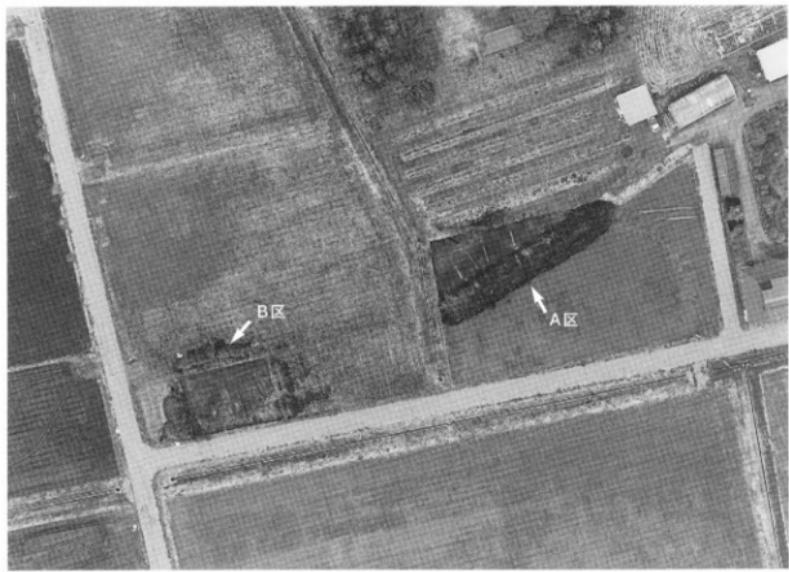
遺構外



第8図 大曲遺跡 出土遺物 (3)



遺跡遠景（東から 矢印が調査地点）



調査区全景（東から）

写真図版1 大曲遺跡 航空写真

(3) 大曲遺跡



A区 調査開始前状況（南東から）



基本土層①（東から）



基本土層②（北から）



基本土層③（西から）



竪穴住居跡1 完掘状況（西から）

写真図版2 大曲遺跡 調査前状況・基本層序・検出遺構（1）



竪穴住居跡1 断面（南から）



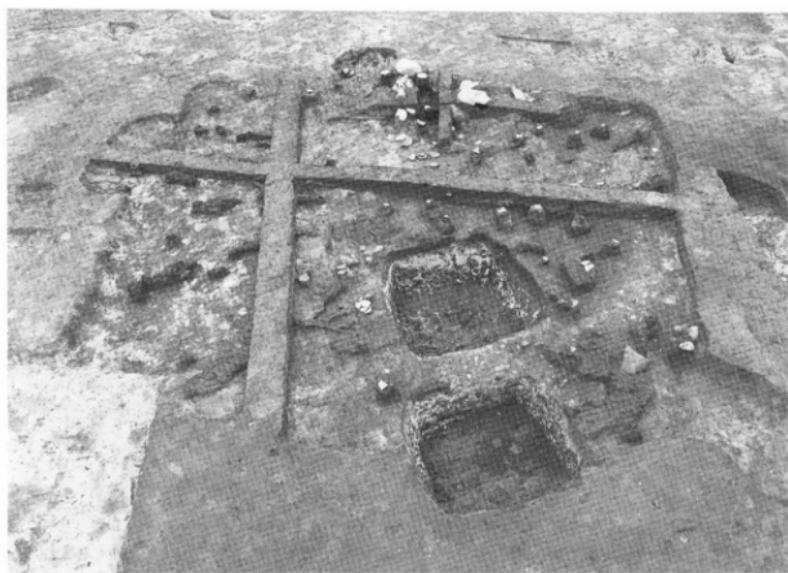
竪穴住居跡1 断面（西から）



竪穴住居跡1 焼土検出状況（西から）



八重畠小学校 遺跡見学の様子



竪穴住居跡1 炭化材・遺物出土状況（西から）

写真図版3 大曲遺跡 植出遺構（2）

(3) 大曲遺跡



豊穴住居跡1 カマド検出状況（南西から）



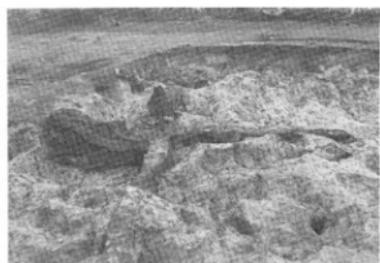
豊穴住居跡1 カマド断面（西から）



豊穴住居跡1 カマド断面（北から）



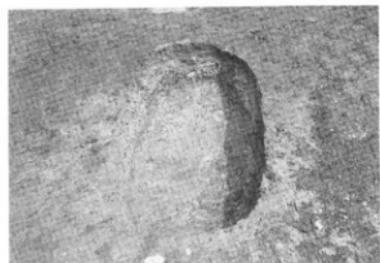
豊穴住居跡1 カマド掘り方完掘状況（北東から）



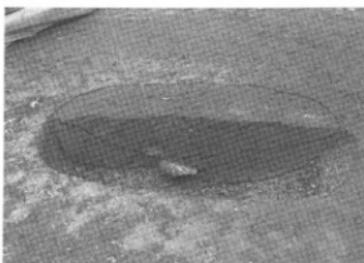
豊穴住居跡1 カマド掘り方断面（北から）



豊穴住居跡1 調査終了状況（西から）



土坑1（西から）



土坑1 断面（南から）

写真図版4 大曲遺跡 検出遺構（3）



土坑2（西から）



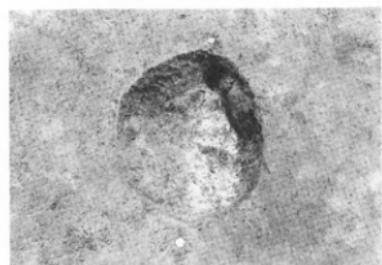
土坑2 断面（西から）



土坑3（西から）



土坑3 断面（西から）



土坑4（北西から）



土坑4 断面（南西から）



土坑5（北から）



土坑5 断面（北から）

写真図版5 大曲遺跡 検出遺構（4）

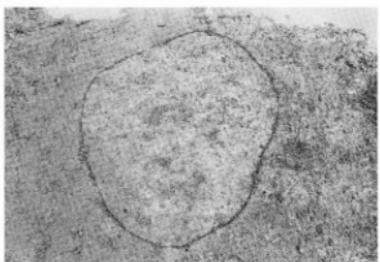
(3) 大曲遺跡



陥し穴状遺構 1 (南西から)



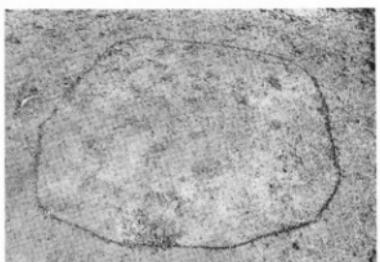
陥し穴状遺構 1 断面 (北東から)



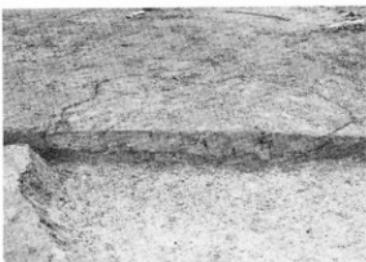
焼土遺構 1 (西から)



焼土遺構 1 断面 (南から)



焼土遺構 2 (西から)



焼土遺構 2 断面 (南から)

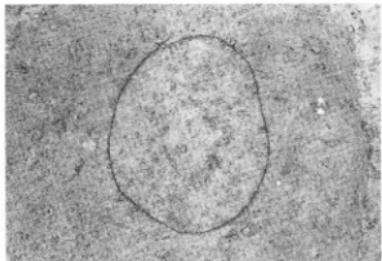


焼土遺構 3 (南東から)

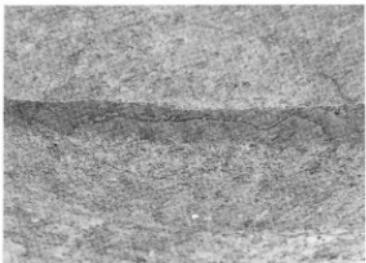


焼土遺構 3 断面 (南西から)

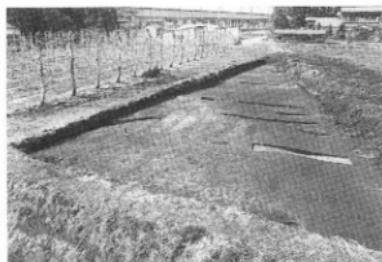
写真図版 6 大曲遺跡 検出遺構 (5)



焼土遺構4（南から）



焼土遺構4 断面（西から）



A区 終了状況（南東から）



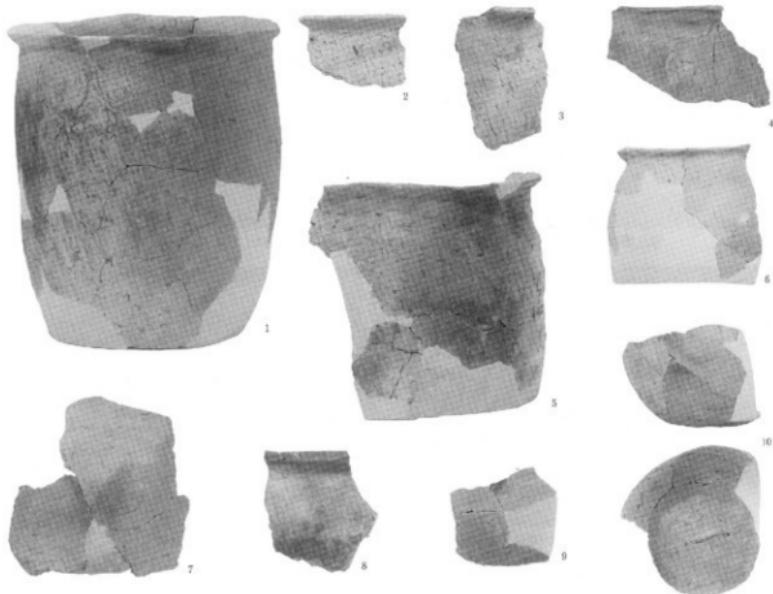
作業風景



B区 終了状況（南西から）

写真図版7 大曲遺跡 検出遺構（6）

(3) 大曲遺跡

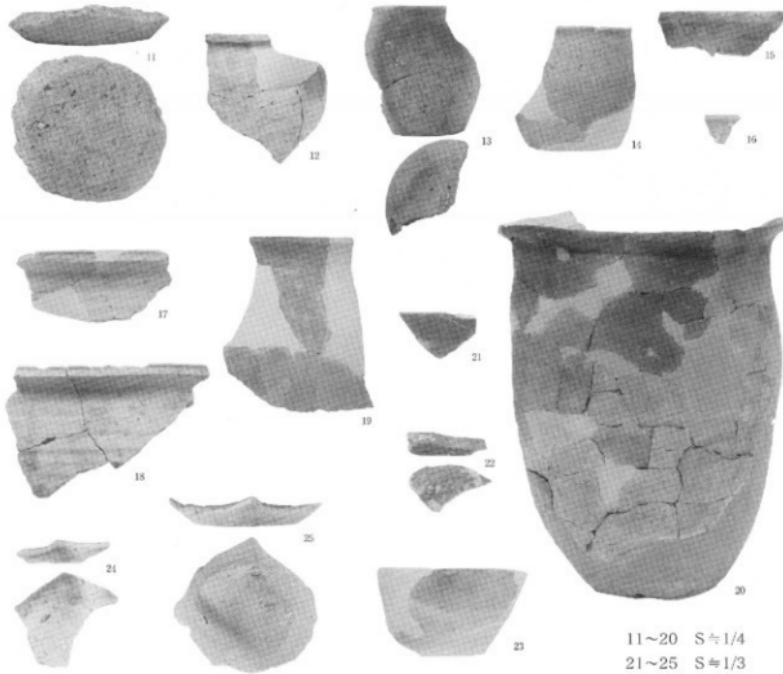


S ≈ 1/4

番号	出土地点・層位	種別	器種	部位	径 直 (cm)			成形	調査等 内面／外面	破成	色調	備考	図版
					口径	直徑	厚さ						
1	壁穴住居跡 1 146・ 151・153・カマド塗土 中・カマド焼土塗下 土塗 5 1 總	土器部 壁	口縁～体 部下半		20.8	—	<2.5	素ロクロ	横ナード・ヘラナード／横 ナード・ヘラケズリ	良好	に高い根～ 根	小縫少量。白色粒子ごく微量。 内外面スス抜け痕あり。	6
2	壁穴住居跡 1 149	土器部 壁	口縁		—	—	<5.5	素ロクロ	横ナード・ヘラナード／横 ナード・ヘラケズリ	良好	根～浅黃	小縫や多量。	6
3	壁穴住居跡 1 119	土器部 壁	口縁～体 部中半		—	—	<12.1	素ロクロ	横ナード・ヘラナード／横 ナード・ヘラケズリ	良好	根～に高い 根	小縫や多量。外側に張り穴 はないが、付着物あり。	6
4	壁穴住居跡 1 カマド 焼土塗中	土器部 壁	口縁		—	—	<8.7	素ロクロ	横ナード・ヘラナード／横 ナード・ヘラケズリ	良好	に高い根～ 根	白色粒子ごく微量。	6
5	壁穴住居跡 1 122・ 150・カマド焼土塗付近	土器部 壁	口縁～体 部中半	(21.2)	—	<18.0	素ロクロ	横ナード・ヘラナード／横 ナード・ヘラケズリ	良好	根～浅黃	小縫や多量。外側にスス黒 けの剥離あり。	6	
6	壁穴住居跡 1 146・ 151・焼土塗中・カマ ド・土塗上の中	土器部 壁	口縁～体 部中半	(15.9)	—	<10.6	素ロクロ	横ナード・ヘラナード／横 ナード・ヘラケズリ	良好	に高い根～ 根	小縫や多量。表面や赤み。	6	
7	壁穴住居跡 1 116・ 156・カマド焼土塗付近	土器部 壁	体部中～ 下部		—	<14.9	素ロクロ	ヘラナード・ヘラナード	良好	に高い根～ 根	小縫・全縫多く黒縫。外側 のナードに剥離。	6	
8	壁穴住居跡 1 壁直	土器部 壁	口縁～体 部中半		—	—	<9.8	素ロクロ	横ナード・ヘラナード／横 ナード・ヘラナード	良好	に高い根～ に高い根	に高い根縫 ～に高い根縫 外側に剥離あり。小縫ごく 微量。内外面一派スス抜けあ り。	6
D	壁穴化窯跡 1 底直・ カマド・土塗との境中・ カマド焼土塗中・カマ ド焼土塗付近	土器部 壁	体部下半		—	—	<8.0	素ロクロ	ヘラナード・ヘラケズリ	良好	に高い根～ に高い根	底部剥落。 白色粒子帶出。	6
10	壁穴住居跡 1 151・ 152・カマド10割・カマ ド焼土塗中・堆土塗下	土器部 壁	体部下半 ～底部		—	7.7	<8.5	素ロクロ	ヘラナード・ヘラケズリ	良好	に高い根縫	底部黒け。小縫・白色 粒子ごく微量。	6

() は推定値、< >は残存高・長を示す。

写真図版8 大曲遺跡 出土遺物(1)



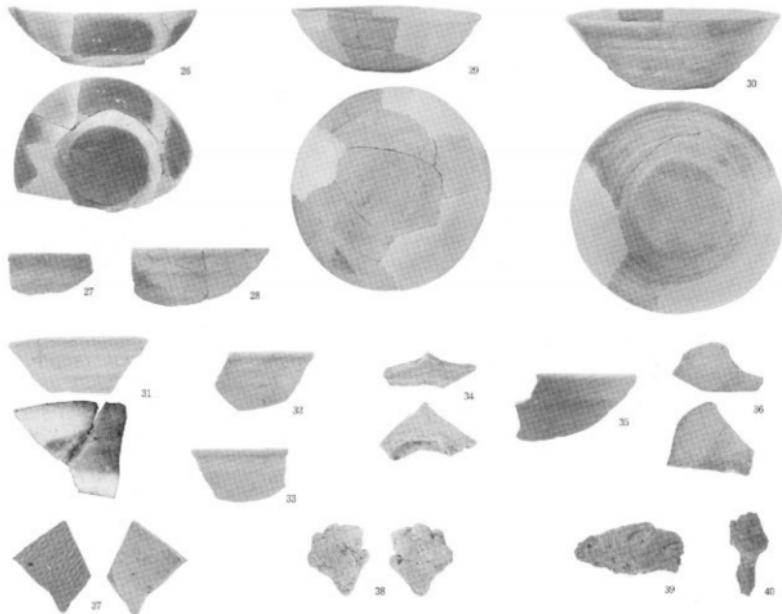
11~20 S₁ 1/4
21~25 S₁ 1/3

登録番号	黒土地點・施設	埋置・基壇	器物	法 周 (cm)		残形	表裏等 内面・外面	軽度	色調	備考	図版	
				(3D)	(4D)							
11	壁穴住居跡 1 断面六段柱中	上部基盤	底部	~	8.5	<1.5>	漆器クロ	/ハラタズリ	白灰	壁	化粧ヘラタズリ。小溝やや多量。全周得てく短縫。白い灰子塗装。	6
12	壁穴住居跡 1 -33	上部基盤 小窓裏	口縁一体 鉢下部	(118)	-	<1.6>	漆器クロ	蜜ナダ・ナマナダ・板ナ ダ・ハラナダ	白灰 自然・赤茶	自然度一級	自然灰・小窓ごく短縫。	6
13	壁穴住居跡 1 -36	土足器 小窓裏	口縁一塊 鉢底片	(106)	17.7	10.7	漆器クロ	漆ナダ・ハラナダ・板ナ ダ・ハラナダ	白灰 自然・赤茶	自然度一級	自然灰・底縫ごく濃厚。石突ごく多量。	6
14	壁穴住居跡 1 -37・セカン	土足器 小窓裏	口縁一塊 鉢下部	(98)	-	10.0	漆器クロ	漆ナダ・ハラナダ・板ナ ダ・ハラナダ	白灰 自然・赤茶	自然度一級	自然灰・底縫ごく濃厚。石突ごく多量。	6
15	壁穴住居跡 1 滅土跡	上部基盤	口縁	(19.2)	-	<1.7>	ロクロ	ロクロナダ・ロクロナダ	白灰 自然・赤茶	自然度一級	自然灰・底縫ごく濃厚。	7
16	壁穴住居跡 1 オマド滅土跡	上部基盤	口縁	-	<2.0>	ロクロ	ロクロナダ・ロクロナダ	白灰 自然・赤茶	自然度一級	自然灰・底縫ごく濃厚。	7	
17	壁穴住居跡 1 -34・滅土跡	上部基盤	口縁	(28.2)	-	<1.6>	ロクロ	ロクロナダ・ロクロナダ	白灰 自然・赤茶	自然度一級	自然灰・底縫ごく濃厚。	7
18	壁穴住居跡 1 -34・135・156	上部基盤	口縁	(27.6)	-	<1.6>	ロクロ	ロクロナダ・ロクロナダ	白灰 自然・赤茶	自然度一級	自然灰・底縫ごく濃厚。石突ごく多量。	7
19	壁穴住居跡 1 -35・156・セマド滅土跡	上部基盤	口縁一塊 鉢下部	-	-	<1.5>	ロクロ	ロクロナダ・ハラナダ ダ・ハラナダ	白灰 自然	自然度一級	自然灰・底縫ごく濃厚。白化粧度あり。自然灰ごく微重。	7
20	壁穴住居跡 1 -35・155・157・158・ 140・141・154・159・滅土跡・カマリ 巻上の短柱・オマド滅土跡・カマリ12 脚・地土層より上・廻上2よりの地 上・土成底 P4-P2-F3-A区 云跡	土足器 基盤	口縁一塊 鉢下部	(21.6)	9.8	20.4	ロクロ	ロクロナダ・ハラナダ ダ・ハラナダ・ハラナダ ダ・ハラナダ	白灰 自然度一級	自然度一級	底部ヘラタズリ。手洗被了底張。小窓・自然ごく濃厚。	7
21	壁穴住居跡 1 壁面施土下	土足器 基盤	口縁一塊 鉢下部	(13.2)	-	<1.7>	ロクロ	ハラタズリ・ハラタズリ ダ・ハラタズリ	白灰 自然	内側面三箇所焼過。	内側面三箇所焼過。	7
22	壁穴住居跡 1 -39	土足器 基盤	口縁一塊 鉢下部	-	8.5	<1.5>	ロクロ	ハラタズリ・ハラタズリ ダ・ハラタズリ	白灰 自然	内側面三箇所焼過。部分焼過。白化 粧度ごく濃厚。	内側面三箇所焼過。白化粧度ごく濃厚。	7
23	壁穴住居跡 1 壁面施土下	土足器 基盤	口縁一塊 鉢下部	(15.5)	17.5	5.1	ロクロ	ハラタズリ・ロクロナダ	白灰 自然度一級	内側面三箇所焼過。実物焼成度高い。	内側面三箇所焼過。実物焼成度高い。	7
24	壁穴住居跡 1 -37	土足器 基盤	口縁一塊 鉢下部	-	8.6	<1.6>	ロクロ	ハラタズリ・ロクロナダ	白灰 自然度一級	内側面三箇所焼過。白化粧度ごく濃厚。	内側面三箇所焼過。白化粧度ごく濃厚。	7
25	壁穴住居跡 1 -47	土足器 基盤	口縁一塊 鉢下部	-	8.6	<1.8>	ロクロ	ハラタズリ・ロクロナダ	白灰 自然	内側面三箇所焼過。	内側面三箇所焼過。	7

() は推定形、< > は残存高・長を示す。

写真図版9 大曲遺跡 出土遺物(2)

(3) 大曲跡

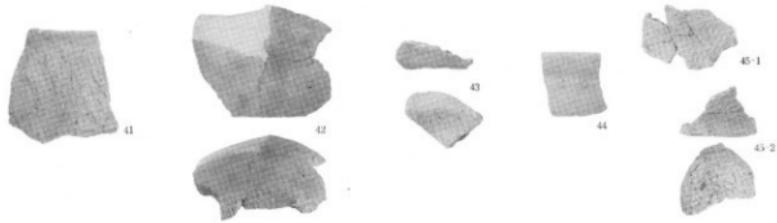


37 S ≈ 1/4 26~36, 38 S ≈ 1/3 39, 40 S ≈ 1/2

登録 番号	出土地点・層位	種別・器種	部位	法 量 (cm)		成形	試験室 内面／外側	成形	色調	備考	回収
				口径	底径						
26	堅穴住居跡 1	土器器 环	口縁～底 盤	(11.8)	8.1	5.5	ロクロナデ／ロクロナデ	やや赤 に赤い質感 ～浅黒	褐色斑あめり。焼けムラ有 り。	7	
27	堅穴住居跡 1	土器器 环	口縁～底 盤の平	(12.4)	-	<2.3>	ロクロナデ／ロクロナデ	良好	に赤い質感 白色粒子ごく微混	7	
28	堅穴住居跡 1	土器器 环	口縁～底 盤の平	(13.0)	-	<3.7>	ロクロナデ／ロクロナデ	良好	に赤い質感 赤色粒子・斑石ごく微混	7	
29	堅穴住居跡 1	土器器 环	口縁～底 盤	(13.2)	4.0	4.0	ロクロナデ／ロクロナデ	良好	煙～淡煙 成形弱軸切り。底面火跡 あり。	7	
30	堅穴住居跡 1	土器器 环	口縁～底 盤確定形	(13.0)	5.4	4.5	ロクロナデ／ロクロナデ	良好	煙～灰い 成形弱軸切り。内面深淵多 い。石軸ごく微混	7	
31	堅穴住居跡 1	土器器 环	口縁～底 盤の元形	(12.4)	-	<3.5>	ロクロナデ／ロクロナデ	良好	赤色斑あめり。体外表面 に留着。(...)	7	
32	堅穴住居跡 1	土器器 环	口縁～底 盤下平	(12.5)	-	<3.5>	ロクロナデ／ロクロナデ	良好	に赤い質感 白色粒子ごく微混	7	
33	堅穴住居跡 1	土器器 环	口縁～底 盤下平	(14.0)	-	<3.2>	ロクロナデ／ロクロナデ	良好	皮質軟 赤色反応微混	8	
34	堅穴住居跡 1	土器器 环	底盤～底 盤	-	(5.2)	<1.8>	ロクロナデ／ロクロナデ	良好	浅黒 既付け高台。高台の辺りけ方 は難解。	8	
35	堅穴住居跡 1	土器器 环	口縁～底 盤	(11.8)	-	<1.0>	ロクロナデ／ロクロナデ	良好	に赤い質感 内外面ともすすぐれいる。	8	
36	堅穴住居跡 1	土器器 环	底盤下平	-	(3.2)	<2.8>	ロクロナデ／ロクロナデ	良好	に赤い相 赤褐色斑あめり。白色粒子微 混。	8	
37	堅穴住居跡 1	土器器 环	底盤	-	-	<3.4>	ロクロナデ／ロクロナデ	良好	灰	白色粒子微混。	8
登録 番号	出土地点・層位	種別	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	備考	回収			
38	堅穴住居跡 1	石工具	石工具	21.13	写真のみ	-	-	-			
登録 番号	出土地点	器種	残存部 (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	備考	回収		
39	堅穴住居跡 1	石器	刀子	<4.7>	2.2	1.6	11.93	端斜し削	8		
40	堅穴住居跡 1	石器	多角	<3.6>	1.6	1.5	43	端斜し削	8		

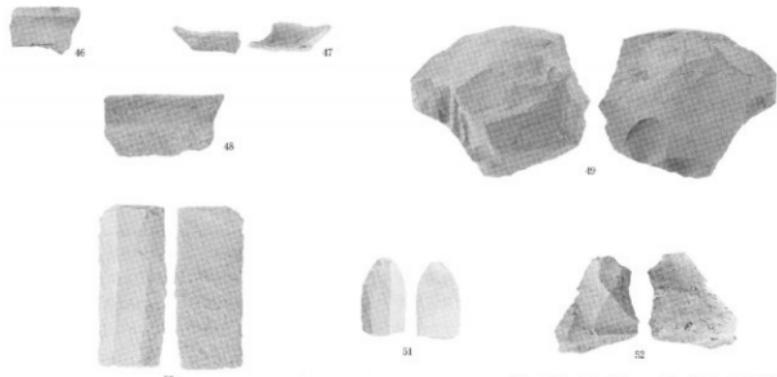
() は推定径、< > は残存高・長を示す。

写真図版10 大曲跡 出土遺物 (3)



41、42 S 1/4 43～45 S 1/3

登録番号	出土地点・層位	種別 否標	部位	法量 (cm) 口徑 底径 厚さ	成形	調査等 内面・外面	測定	色調	備考	国版
41	上杭2・3層	土器部 斧	口縁	- - -	<7.4>	素面クロ	サナデ・ハフナデ/襷ナ ア・ハラケズリ	良好	に赤い斑模 焦げ目あり。白色粒子少々含 む。	8
42	土杭2・3層中	土器部 斧	体部下半 体部下端	- (12.0) <8.8>	素面クロ	ハケメ/ハケメ	良好	母子に赤い 斑模。白色粒子少々含 む。	8	
43	上杭2・3層中	土器部 斧	体部下半 体部下端	- (5.0) <4.4>	ロクロ	ロクロナデ/ロクロナデ	良好	に赤い斑模 焦げ目あり。	8	
44	土杭3・14層	土器部 斧	口縁・体 部下端	- - -	<4.3>	ロクロ	ロクロナデ/ロクロナデ	良好	赤色粒子斑模。白色粒子少々 含む。	8
45	土杭3・12層	魂文土器 法鉢	体部・底 部	- 4.6 <4.0>	粘土鉢	L R 単薄	- -	底部木素痕? 剥離着 同一個体か。	8	



46～48 S 1/4 49～52 S 2/3

登録番号	出土地点・層位	種別 否標	部位	法量 (cm) 口径 底径 厚さ	成形	調査等 内面・外面	熱流	色調	備考	国版
46	A区とB区の間 表面	土器部 斧	口縁	- - -	<3.5>	ロクロ	ロクロナデ/ロクロナデ	やや良	底 白色粒子斑模。調査部分内面 に多い。	8
47	B区 表面中	土器部 斧	体部下半 小型斧	- - -	<2.4>	素面クロ	ハケメ/ハラケズリ	良好	赤褐色斑模。白色粒子少々。	8
48	B区 表面中	土器部	口縁	(13.7)	<4.8>	素面クロ	サナデ・ハケメ/ ハラケズリ	良好	白色粒子少々。	8

登録番号	出土地点・層位	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	材質・記述・出土地代	備考	国版
49	A区 脱離時	石核	3.9	4.36	1.8	35.87	頁岩・薄切山脈・新生代第四紀		8
50	堅穴住居跡1 カマド埋 土中	石刀	(4.8)	2.1	0.6	6.56	頁岩・奥羽山脈・新生代第四紀	上下兩端欠損。	8
51	堅穴住居跡1 脱離中	石刀	(2.2)	1.3	0.5	1.29	頁岩・奥羽山脈・新生代第四紀	下端欠損。	8
52	堅穴住居跡1 脱離中	刮片	3.4	2.45	0.7	2.69	頁岩・奥羽山脈・新生代第四紀		8

() は推定値、< >は残存高・長を示す。

写真図版11 大曲遺跡 出土遺物(4)

報告書抄録

ふりがな	へいせいじゅうはちねんどはくつちょうさほうこくしょ						
書名	平成18年度発掘調査報告書						
副書名	大曲遺跡						
卷次							
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書						
シリーズ番号	第505集						
編著者名	戸根貴之・須原 拓						
編集機関	(財) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター						
所在地	〒020 0853 岩手県盛岡市下飯闇11地割185番地 TEL(019) 638-9001						
発行年月日	2007年3月26日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	北緯 遺跡番号	東経 ° ° °	調査期間	調査面積	調査原因
大曲遺跡	岩手県花巻市石鳥谷町戸塚9地割48番地1ほか	LE97-2166	39度27分47秒	141度10分34秒	2006.4.7～2006.4.28	250m ²	経営体育成基盤整備事業戸塚地区に伴う緊急発掘調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
大曲遺跡	集落跡・狩猟場	縄文時代	陥し穴状遺構	1基	縄文土器、石器(石核)	平安時代の堅穴住居は焼失住居である。	
		平安時代	堅穴住居跡	1棟	土師器、須恵器、鉄製品(刀子、鉄鎌)		
		時期不明	土坑	1基	石器(石刀、剣片)		
	その他	焼土遺構	1基				
要約	縄文時代の陥し穴状遺構、平安時代の堅穴住居跡・土坑が検出された。大曲遺跡では昭和49年の東北新幹線建設に係る発掘調査でも、今回の調査で見つかっている堅穴住居跡とほぼ同時期とみられる平安時代(9世紀後半～10世紀初頭頃)の焼失住居が1棟、A区の約60m西、現在の新堀塙になっている部分から見つかっている。また、今回の調査では縄文時代に帰属すると考えられる滑状の陥し穴状遺構が検出されている。 以上のことから、大曲遺跡は縄文時代の狩猟場であるとともに、平安時代の集落跡であった可能性がてきた。						

※緯度・経度は世界測地系における数値である。

(4) 中村遺跡 第2次調査

所 在 地	花巻市石鳥谷町八重畑第18地割18番	遺跡コード・略号	ME06-2387・NM-06
委 託 者	県南広域振興局花巻総合支局農林部農村整備室	調査対象面積	3,600m ²
事 業 名	経営体育成基盤整備事業八重畑地区	調査終了面積	3,600m ²
発掘調査期間	平成18年4月7日～5月19日	調査担当者	川又 晋・千葉正彦

1 調査に至る経過

中村遺跡は、経営体育成基盤整備事業八重畑地区の実施に伴い、その事業区域内に存することから発掘調査を実施することになったものである。

本事業地は、花巻市に位置し、一般河川北上川の左岸、稗貫川と添市川に囲まれた平坦な地域であるが、地区内水田は10a区画で道路は幅員が狭く土砂道であり、水路も土木路で用排水兼用のため水利用の合理化が図りにくく、農業機械の大型化や水田の汎用化ができず営農に多人な労力を費やすていた。

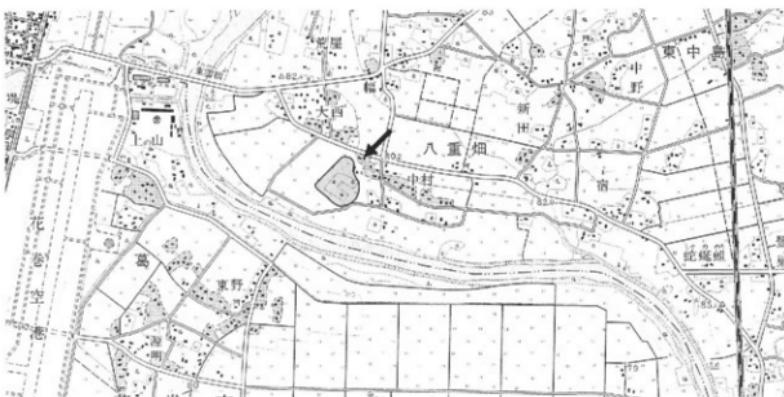
このため、本事業により1haを標準とする区画の大型化や道路・用排水路の整備を実施し、農地の流動化と扱い手農家への集積を進めるとともに、農業生産性の向上と農業経営の安定を図るために、平成9年度より371haの区画整理を実施している。

当事業の施行にかかる埋蔵文化財の取扱いについては、花巻地方振興局農林部農村整備室から平成16年11月17日付花地農（整）第162-11号「埋蔵文化財の試掘調査について（依頼）」により岩手県教育委員会に対し試掘調査の依頼を行なった。

依頼を受けた岩手県教育委員会は平成16年11月17日に試掘調査を実施し、工事に着手するには、発掘調査が必要となる旨を平成16年12月2日付教生第1212号「ほ場整備事業等における埋蔵文化財の試掘調査について（回答）」により当農村整備室に回答してきた。

その結果を踏まえて当農村整備室は岩手県教育委員会と協議し、調整を受けて平成18年4月3日付けで財団法人岩手県文化振興事業団との間で委託契約を締結し、発掘調査を実施することとなった。

（県南広域振興局花巻総合支局農林部農村整備室）



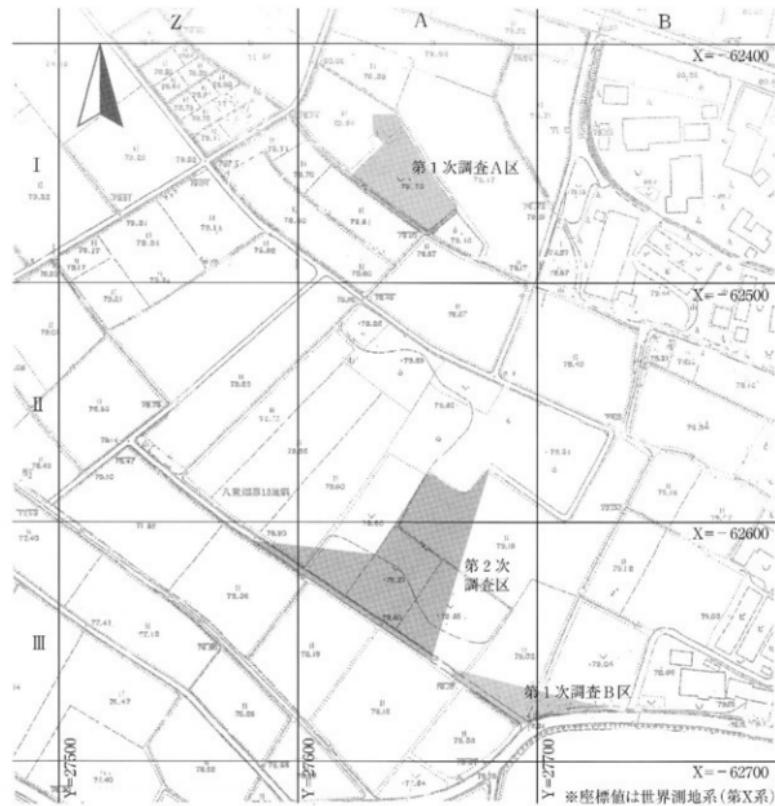
第1図 中村遺跡 遺跡の位置

2 遺跡の位置と立地

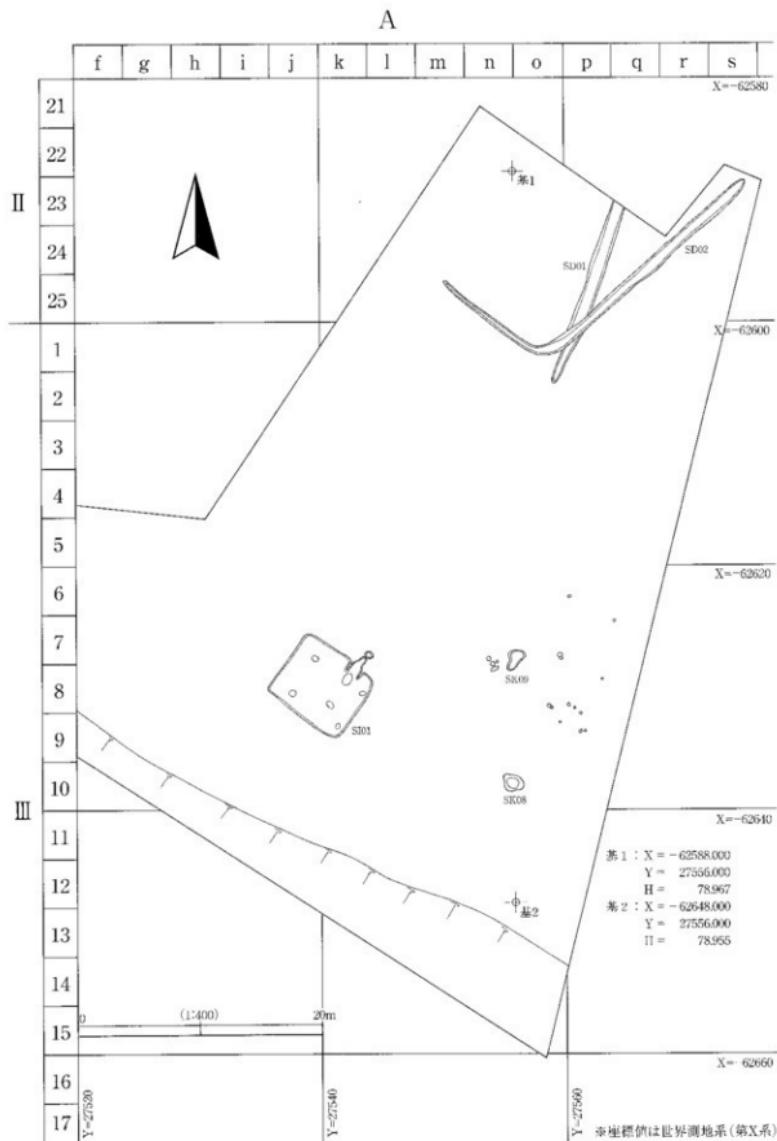
中村遺跡は、いわて花巻空港の東方約1.5kmに位置し、北上川によって形成された自然堤防上の細長い微高地に立地する。調査前は水田であった。第1次調査では南北に離れた2地点をA区・B区として調査しており、第2次調査区は、第1次調査B区の北西側に隣接する。(第2図)

3 基本層序

調査区内の基本層序は、I層が暗褐色シルト(現耕作土)、II層が褐色粘土質シルト(盛土)、III層が黄褐色砂質シルトである。I・II層は近年に動かされた土であり、III層上面が遺構検出面である。北側～中央部では、I・II層の厚さが20～30cm程度である。近年の水田造成時に削平を受けたものとみられ、その直下のIII層上面は概ね平坦であった。この平坦部の標高は78m前後である。これに対し、調査区南辺付近は、南側の低位面へ向かって急激に落ち込む斜面となっており、南側に行くほどII層が厚く、最厚部では1m近くに達する。第1次調査B区で確認された状況と類似しており、段丘の縁辺部にあたるとみられる。



第2図 中村遺跡 調査区配置図



第3図 中村遺跡 遺構配置図

4 調査の概要

今回の調査で確認された遺構は、堅穴住居跡1棟、土坑2基、柱穴状土坑17個、溝跡2条である。これらはすべて調査区中央～北側の平坦部で検出したものである。前項で述べた通り、この平坦部は広域にわたり削平された模様で、各遺構とも上部は削平を受けたとみられる。

調査区南辺の斜面部分では、遺構は検出されなかった。数箇所にトレンチを入れⅢ層以下の確認を行ったが、遺構・遺物とも認められなかつたため、全域の掘り下げは行なわず調査終了とした。

なお、調査区のグリッド設定は、第1次調査時の大グリッド(100×100m)、小グリッド(4×4m)を踏襲した。遺構配置図、本文中の遺構の位置の表記に用いている。遺構番号は、第1次調査からの連番としており、SK(土坑)は08から、P(柱穴状土坑)は08からとしている。

(1) 遺構

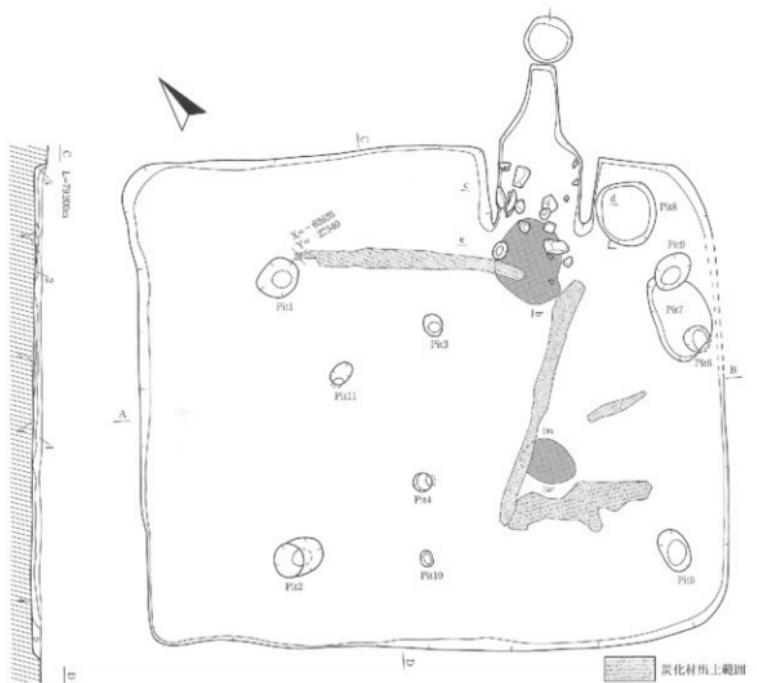
S 101堅穴住居跡(第4・5図、写真図版2・3)

平安時代の堅穴住居跡で、ⅢA8 kグリッド付近に位置する。検出時、Ⅲ層上面において、暗褐色土の方形プランとして確認した。プランの北辺付近では、埋土中に焼土・炭化物粒が多く含み、埋土上面まで礫が露出していたことから、この付近にカマドがあるものと予想された。十字にベルトを設定し、掘削を開始したところ、複数の地点において炭化物を確認した。掘削を全面に拡張したところ、炭化物のまとまりは直線状に延び、1つは住居の北壁に沿う方向、別の1つは東壁に沿う方向で、2つが直交するような位置関係となった。炭化材は木目の方向が一定しており、出土状況から原位置・原型を留めているようであったが、厚さは殆どなく、1cm程度であった。家屋の構築材の一部が、焼失により炭化した可能性が高いと考えられるが、詳細は定かではない。

床面は、炭化材の直下で確認した。確認面から床面まで10cm程度であり、上部はかなり削平されたものとみられる。埋土は、暗褐色土を主体とするが、壁際は褐色に近く、わずかに炭化物が混入するものの、地山との区別は非常に困難であった。規模は、検出時に見えていた暗褐色土プランよりもかなり広がる格好となった。なお、埋土の一部では僅かであるが白色のブロックが混入しており、十和田aテフラの可能性が高いとみられる。床面は平坦であり、硬化した部分などは特にみられない。住居跡全体の形状は方形で、規模は705×610cmである。壁は直立する。

カマドは北壁の東よりに設置され、煙道の方向はN-50°-Eである。カマド付近は、複数の礫が重なり合う状況であったが、大半はカマドの構築材が崩落したものと判断し、除去した。最終的には、5個の礫がソデの内側で直立するように埋設されているのが確認された。さらに、礫のない場所にも掘り方が確認されたことから、本来はもう一個の礫が立っていて、煙道の中軸線に対して対称となるよう3個ずつ2列に据えられたものとみられる。カマド内部の崩落土中からは多量の土師器が出土した。袖部分は地山を削り出したものであり、内側が弱く焼けていた。燃焼部は、105×80cmの範囲で被熱し、中央が極めて堅く縮まる。断ち削ったところ、火床面から13cmの深さまで被熱のため変色していた。

床面施設として、ピット11基(Pit 1~11)、地床炉1基を確認した。ピットは、はっきりとしたプランで確認できた訳ではなく、ほんやりとした炭化物のまとまりとして床面上に検出したもので、地山と殆ど区別がつかない。Pit 1・2・5・9は正方形に配列し、他と比べて規模も深いことから、主柱穴であると推測される。4個のいずれにおいても、底面には柱痕跡とみられる円形にグライ化した部分が確認された。Pit 8は規模・位置から、貯蔵穴と考えられる。Pit 6~8からは土師器が出土しており、特にPit 8では完形の土師器壺3点(1・8・12)が出土した。地床炉は、カマド煙道の

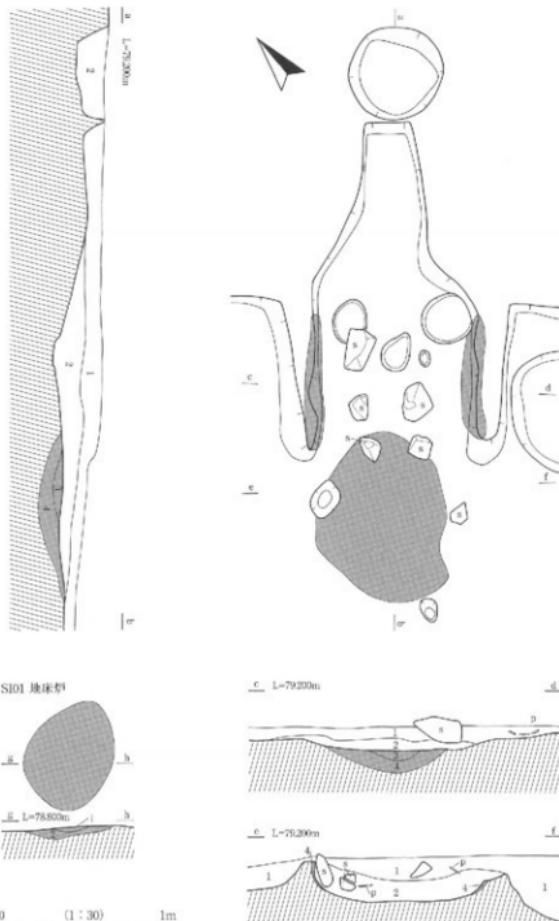


S101 A-B, C-D

- 1 10YR2/4 黒褐色シルト 粘性質 緩まり強 水化物少量
- 2 濃化土
- 3 10YR3/4 黒褐色シルト 粘性質 緩まり強 地下水多量
- 4 10YR3/4 黒褐色シルト 粘性質 緩まり強 水化物多量・上面に火成灰?
- 5 10YR3/4 黑褐色粘土質シルト 粘性質 緩まり強 水化物微量

SB10P1 (65cm) 10YR2/4 黒褐色シルト 粘性中 緩まり弱 水化物微量
 SB10P2 (31cm) 10YR3/4 黑褐色シルト 粘性中 緩まり弱 地下水物質多量
 SB10P3 (5cm) 10YR3/2 黑褐色シルト 粘性中 緩まりやや強 地下水物質少量
 SB10P4 (33cm) 10YR2/3 黑褐色シルト 粘性中 緩まりやや強 地下水物質少量
 SB10P5 (29cm) 10YR4/6 黑褐色シルト 粘性有 緩まり弱 地下水物質少量
 SB10P6 (22cm) 10YR4/6 黑褐色シルト 粘性有 緩まり弱 地下水物質少量
 SB10P7 (23cm) 10YR4/6 黑褐色シルト 粘性有 緩まり弱 地下水物質少量・白粘土層少量
 SB10P8 (21cm) 10YR5/4 にじむ黒褐色シルト 粘性弱 緩まり弱
 SB10P9 (72cm) 10YR4/2 黑褐色シルト 粘性中 緩まりやや強 地下水物質少量
 SB10P10 (115cm) 10YR5/2 黑褐色シルト 粘性中 緩まりやや強 地下水物質少量
 ※() 内は、底面までの深さを示す。

第4図 S101 壕穴住居跡（1）



- SI01地床炉 a-b, c-d, e-f**
1. 30VR3-8 硅酸セシルト 硅酸岩 剥まり状 淡化物少量
 2. 30VR3-3 硅酸セシルト 硅酸なし 剥まり状 淡化物少 - 灰土塊・白色土上が混合 カマド天井部崩落土
 3. 30VR3-6 明赤褐色セシルト 硅酸なし 剥まり集めて鉢 カマド熱底部底土 (焼成窓)
 4. SY10-6 硅酸褐色セシルト 硅酸岩 剥まり状 カマド燃焼型焼土 (炭灰層)

- SI01地床炉 g-h**
1. SY10-8 明赤褐色セシルト 硅酸なし 剥まり極めて薄 灰土
 2. SY10-6 硅酸褐色セシルト 硅酸岩 剥まり状 灰土

第5図 SI01 穴住居跡 (2) カマド・地床炉

延長線上にあり、カマド燃焼部の南西側150cmの位置にある。被熱した範囲は70×50cmで、カマド燃焼部と類似し、中央部が硬化していた。

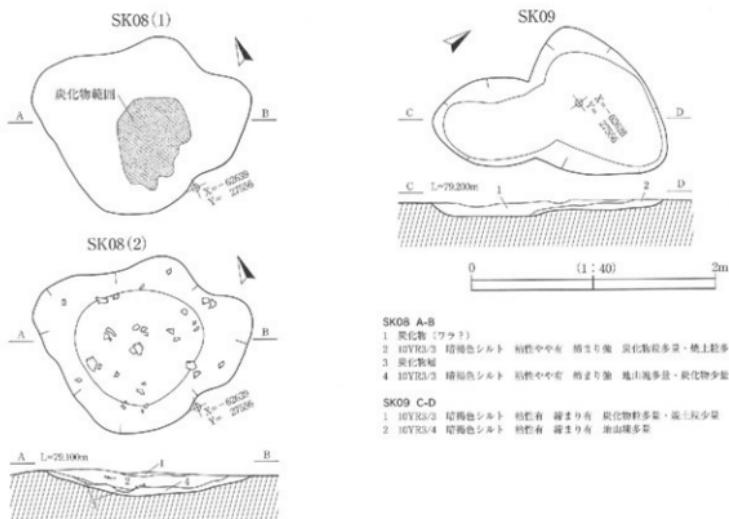
出土遺物は、住居内すべての合計で、土師器5,637g（坏1,986g、甕3,651g）、須恵器56gである。出土位置は、カマド埋土中が最も多く、次いでPit6・7・8などのピットである。炭化できたものは、土師器坏18点（1～18）、土師器甕5点（21～25）、須恵器甕1点（26）である。土師器坏はすべてロクロ成形で、内面に黒色処理されたものの割合が多い。3は、SK08出土品と接合した。土師器甕は、ロクロ成形のものが大半を占める。

SK08土坑（第6図・写真図版4）

III A10 o グリッドに位置する。平面形は歪で、長軸方向はN-45°-Wである。規模は、開口部径180×150cm、深さ20cmである。底面と壁の境界は不明瞭であり、開口部まで緩やかに立ち上がる。暗褐色土の不整形プランとして検出したが、中央に炭化物の集中がみられ、遺物も一部が露出していた。炭化物は葉とみられ、厚さは1cm程度であった。埋土は暗褐色土主体で、炭化物を多く含む。埋土の中位には炭化物のみの層がある。遺物は、土師器1,062g・須恵器184gが出土した。このうち土師器坏3点（3・19・20）、須恵器長頸甕1点（27）を掲載した。なお、3は、SI01出土品と接合したものである。土器破片を一括で廃棄したような状況であるが、詳細は不明である。出土遺物から、平安時代以降の遺構と考えられる。

SK09土坑（第6図・写真図版4）

III A8 o グリッドに位置する。平面形は歪で、長軸方向はN-45°-Eである。規模は、開口部径185×120cm、深さ10cmである。底面は平坦であるが、壁の立ち上がりは明瞭ではない。埋土は暗褐色



第6図 SK08・09 土坑

土主体で、上位には炭化物粒を含む。出土遺物はなく、遺構の時期・性格等は不明である。

S D01・02溝跡（第7図、写真図版4）

S D01・02とも調査区北東端に位置し、重複する。検出時にはS D01が切っているように見えたが、断面観察では明瞭な切り合い関係は確認できなかった。

S D01は、軸方向N-15°-Eで、一直線状に伸びる。南端はⅢ A 2 o グリッドで途切れるが、北端はⅡ A 23 q グリッドで調査区外へ伸びるため、全容は明らかではない。調査区内で確認された部分は、長さ15.6mで、深さ15~30cmである。底部標高は、中央付近がもっとも低く、北側、南側に進むにつれ高くなる。埋土は、暗褐色シルトを主体とし、炭化物粒を含む。

S D02は、途中でL字状に折れ曲がる形状である。北東端がⅢ A 23 s グリッドに位置し、東半部は軸方向N-45°-Eである。Ⅲ A 1 o グリッドで屈曲し、西半部はN-60°-E、西端がⅢ A 25 m グリッドにある。主体部の深さは20~40cmであるが、西端に近づくほど浅くなる。底部標高は北東側が低く、西側が高くなる。埋土は、S D01と大差ではなく、炭化物混じりの暗褐色土である。

S D01・02とも出土遺物がなく、性格・帰属時期等は不明である。

柱穴状土坑（第8図）

調査区内で17個確認された（P 8~24）。規模・埋土の状況等は第8図中の表にまとめて記した。配置に規則性は見出せず、建物を構成する柱穴とする根拠は少ない。埋土は暗褐色～黒褐色土を主体とし、一部には少量の炭化物が含まれる。いずれも出土遺物はなく、時期は不明である。

(2) 遺物（第9・10図、写真図版5・6）

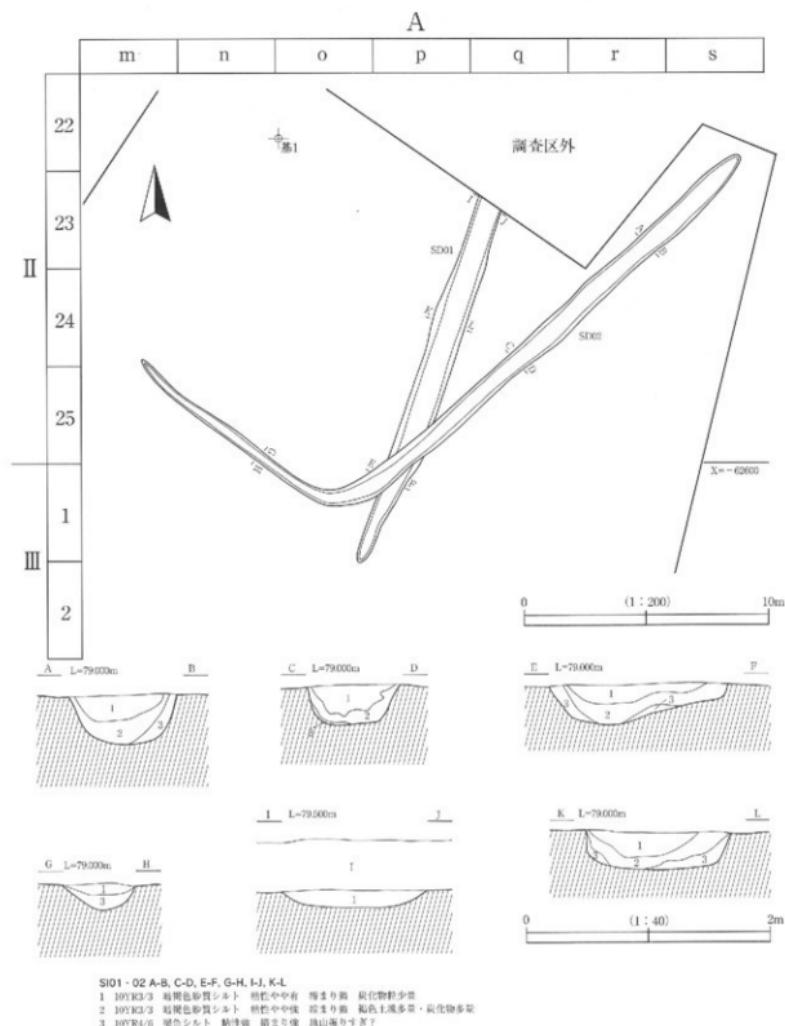
調査区から出土した土器の総量は中コンテナ2箱（土師器7,489g、須恵器241g）であるが、その大半はS I 01堅穴住居跡出土である。復元作業を行い、土師器25点（1~25）、須恵器2点（26・27）の計27点を図示した。19・20・27はSK08、それ以外はS I 01出土であるが、3はS I 01とSK08の破片が接合したものである。

1~20は土師器壺で、すべてロクロ成形である。1・2・8・9・12は完形で出土した。1・9は、体部下半に墨書きがみられる。20は口縁部のみの小片であるが、墨書き土器の一部とみられる。10は、底部に十字の浅い刻みがある。2は、口縁部の内外にタール状の付着物がみられる。1~7・20は、黒色処理されない壺である。このうち1・2・5・7・20は内外面ともロクロナデ以外に調整はなく、3・4・6は内面のみミガキが施される。底部は、6・7が不明である以外は回転糸切り痕が確認されている。器形は、体部が内湾するものである。8~15・19は、内面のみ黒色処理された壺である。底部は、8~11が回転糸切り、12・13がヘラケズリ、14・15が回転ヘラ切りである。器形は、体部が内湾し、口縁部付近でわずかに外反する。16~18は、内・外面ともにミガキの後黒色処理された壺である。16・17の口径は17cmで、他の壺よりやや大きめである。体部は内湾して立ち上がる。

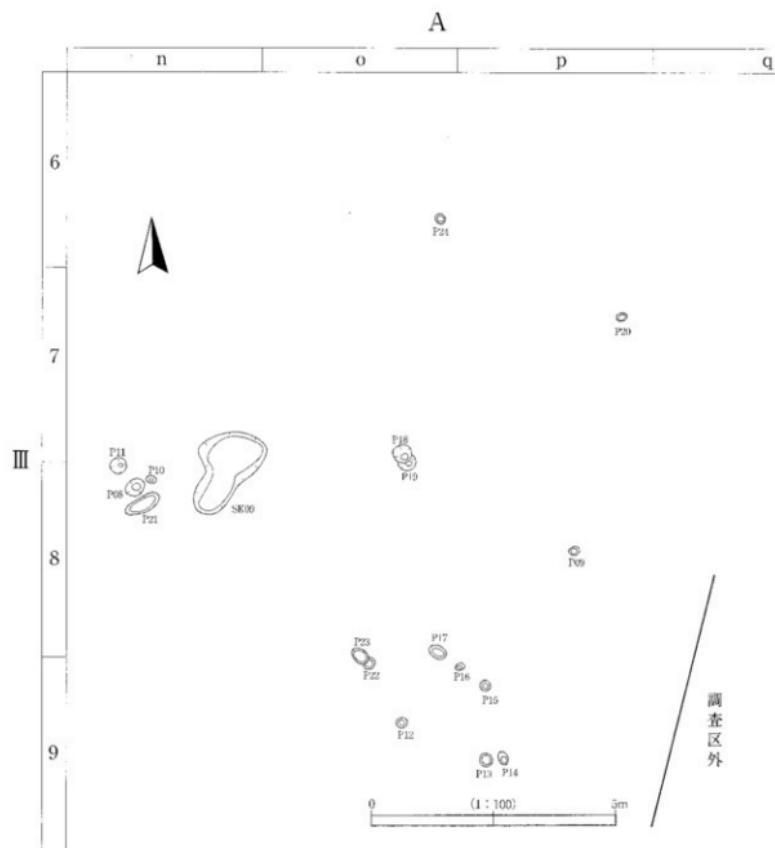
21~25は土師器壺で、21~24はロクロ成形である。壺は口縁部～底部まで接合できたものがない。22~25は長胴壺である。口縁部付近はロクロナデ、体部～底部はヘラナデ・ヘラケズリが施される。口縁部は、短く外反する。

26は須恵器壺、27は須恵器長頸壺である。いずれも、口縁部のみの残存である。

なお、土器の他にも、遺構外から近・現代のものとみられる陶磁器片や鉄製品が少量出土しているが、掲載はしていない。



第7図 SIO1・02 溝跡



	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	底面標高 (m)	理 上	重 指
P08	46	36	22	78.79	10YR3/4暗褐色シルト	
P09	18	18	29	78.80	10YR3/4暗褐色シルト	
P10	18	13	20	78.84	10YR2/3暗褐色シルト	
P11	46	32	15	78.84	10YR3/4暗褐色シルト	
P12	18	17	16	78.97	10YR3/4暗褐色シルト	
P13	24	21	23	78.86	10YR3/4暗褐色シルト	腐化物粒少量
P14	24	18	39	78.58	10YR3/4暗褐色シルト	
P15	22	16	14	78.86	10YR3/4暗褐色シルト	
P16	15	13	未計測	未計測	10YR3/3暗褐色シルト	
P17	34	21	24	78.91	10YR3/4暗褐色シルト	
P18	37	33	29	78.85	10YR3/4暗褐色シルト	腐化物粒少量
P19	34	-	24	78.91	10YR3/3暗褐色シルト	腐化物粒少量
P20	18	14	16	78.98	10YR2/3暗褐色シルト	
P21	74	32	14	78.89	10YR3/4暗褐色シルト	
P22	24	13	未計測	未計測	10YR3/4暗褐色シルト	P27を切る
P23	38	28	未計測	未計測	10YR3/4暗褐色シルト	P28に切られる
P24	20	16	14	79.01	10YR3/4暗褐色シルト	

第8図 柱穴状小土坑

5 まとめ

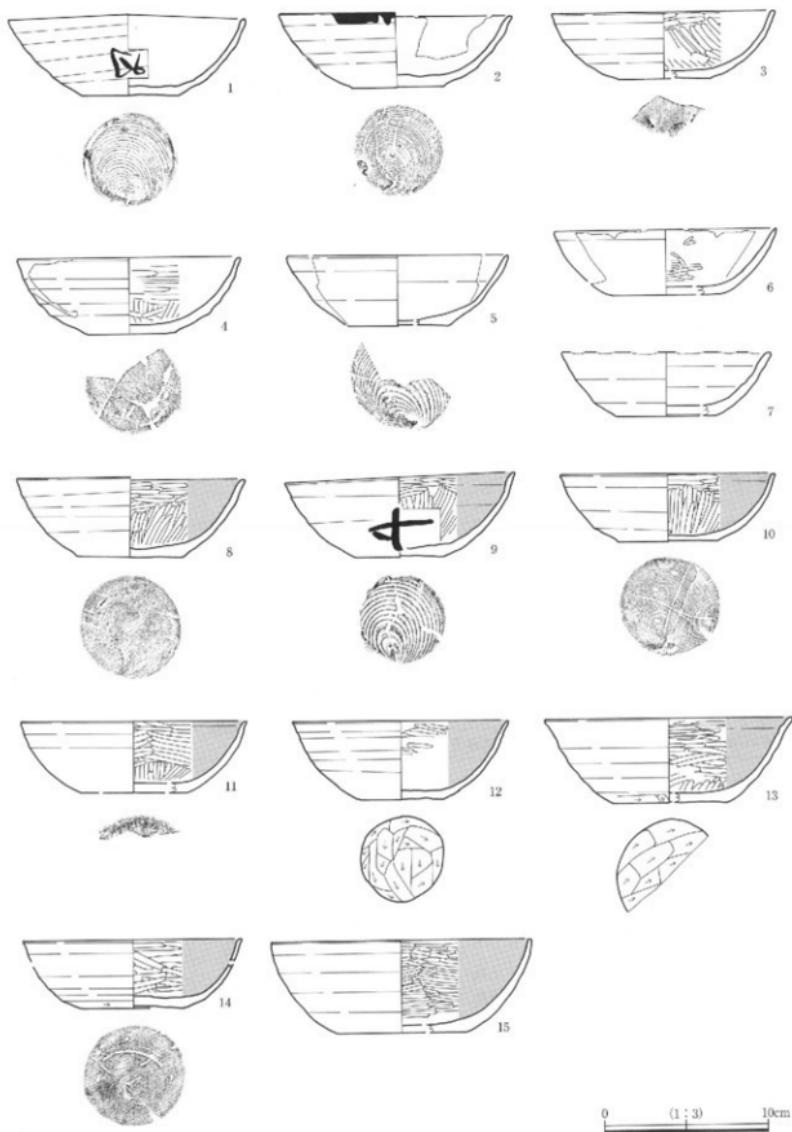
今回の調査で確認された遺構・遺物は上記の通りである。今回の調査区は、平安時代の集落の一部であった可能性が高いが、削平のためか、堅穴住居跡は1棟を確認したのみであった。周辺に同様の住居跡が存在した可能性は高いと考えられる。また、第1次調査では、縄文時代晚期の遺物包含層を確認しているが、今回出土した土器は、土師器・須恵器のみで、時期によって生活の場を変えていた可能性がある。

なお、中村遺跡第2次調査に関する報告は、これをもってすべてとする。

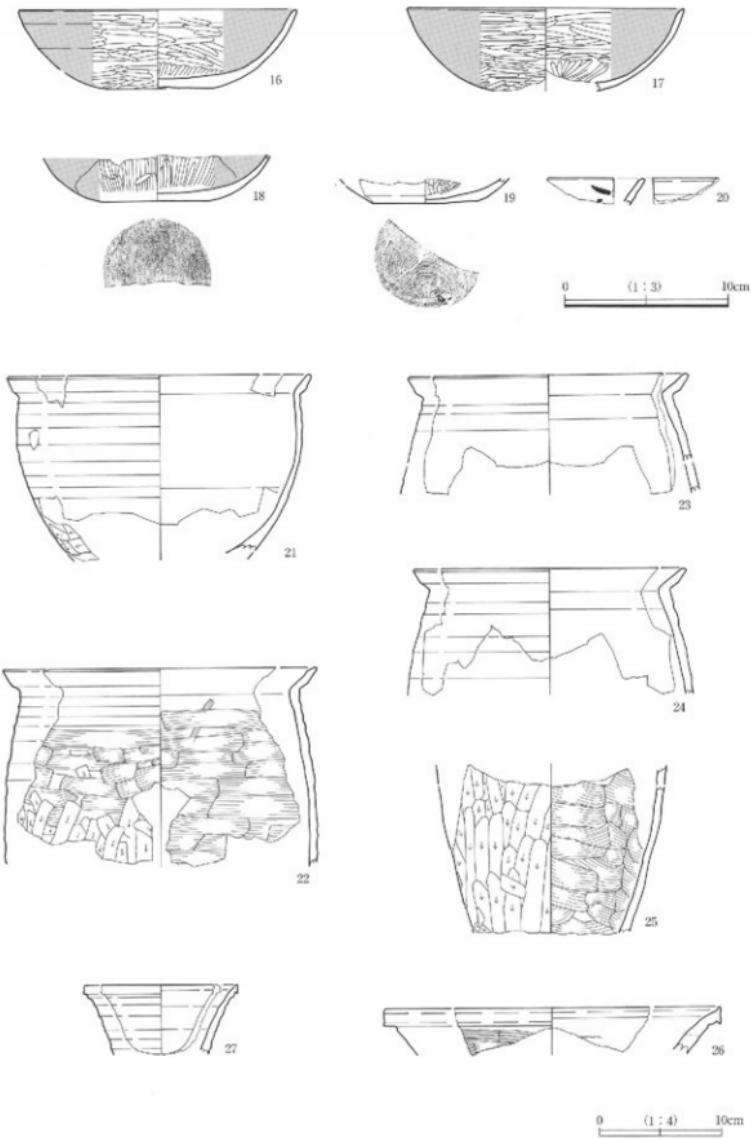
報告書抄録

ふりがな	へいせいじゅうはちねんはくつちょうさほうこくしょ						
書名	平成18年度発掘調査報告書						
副書名	中村遺跡第2次調査						
卷次							
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書						
シリーズ番号	第505集						
編著者名	川又晋						
編集機関	(財) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター						
所在地	〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡11地割185番地 TEL (019) 638-9001						
発行年月日	2007年3月26日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	北緯 遺跡番号	東経 。	調査期間	調査面積	調査原因
中村遺跡 第2次調査	岩手県花巻市石 鳥谷町八重畑18 地割18番地	03205	ME06-2387	39度 26分 06秒	141度 09分 12秒	2006.04.07 ～ 2006.05.19	3,600m ² 経営体育成基 盤整備事業八 重畑地区に伴 う緊急発掘調 査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
中村遺跡 第2次調査	集落跡	平安時代 時期不明	堅穴住居跡 上坑 溝跡 柱穴状小土坑	1棟 2基 2条 17個	土師器壺・壺 須恵器甕・長頸瓶		
要約	中村遺跡は、花巻市石鳥谷町に位置し、北上川東岸の自然堤防上に立地する。第2次調査では、平安時代の堅穴住居跡1棟、土坑2基、溝跡2条、柱穴状土坑17個などの遺構を検出し、遺物は、主に堅穴住居跡から、土師器壺、壺、須恵器甕などが出土した。平安時代の集落の一部である可能性が判明した。						

*緯度・経度は世界測地系における数値である。



第9図 中村遺跡 出土遺物（1）

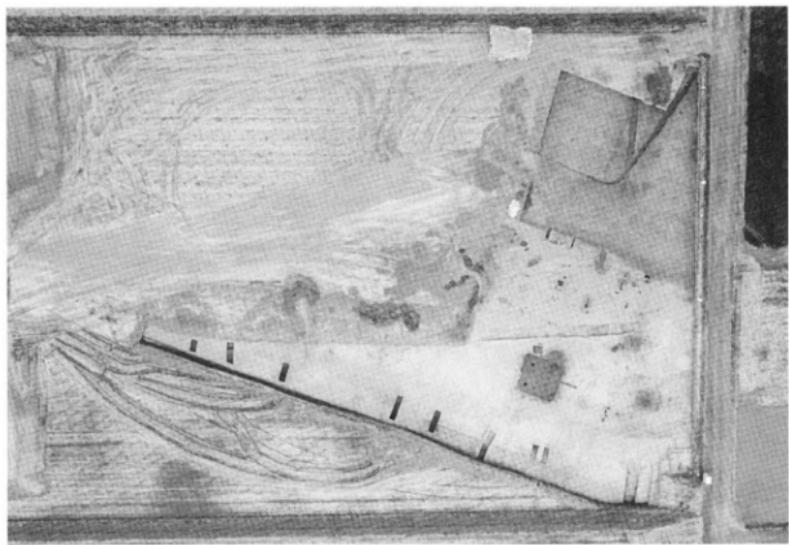


第10図 中村遺跡 出土遺物（2）

測定No.	種別	器種	器種部位	出土地点	口径 (cm)	底径 (cm)	高さ (cm)	重量 (g)	内面調整	外面調整	底部	色調	焼成	備考
1	土師器	杯	完全形	S501 pit88号土	14.4	5.8	51	154	ロクロナデ	ロクロナデ	回転余切り	黄褐	良好	タルガ合羽形
2	土師器	杯	完全形	S501 pit74号土	14.3	5.6	4.7	136	ロクロナデ	ロクロナデ	回転余切り	にぶい黄	良好	
3	土師器	杯	口径～底部	S508 瓢箪形土	13.6	5.4	51	24	ミガキ	ロクロナデ	回転余切り	にぶい黄	良好	
4	土師器	杯	口径～底部	S501 カマド型土	13.5	5.5	4.7	56	ミガキ	ロクロナデ	回転余切り	にぶい黄	良好	
5	土師器	杯	口径～底部	S501 pit74号土	13.6	6.2	4.5	88	ロクロナデ	ロクロナデ	回転余切り	にぶい黄	良好	
6	土師器	杯	口径～底部	S501 カマド型土	13.6	6.6	4.0	49	ミガキ	ロクロナデ	回転余切り	にぶい黄	良好	
7	土師器	杯	口径～底部	S501 カマド型土	12.8	6.3	3.9	37	ロクロナデ	ロクロナデ	回転余切り	にぶい黄	良好	
8	土師器	杯	完全形	S501 pit88号土	14.0	6.5	5.0	161	ミガキ・黒色處理	ロクロナデ	回転余切り	にぶい黄	良好	
9	土師器	杯	完全形	S501 瓢箪形土	14.1	5.4	5.2	143	ミガキ・黒色處理	ロクロナデ	回転余切り	にぶい黄	墨青	
10	土師器	杯	口径～底部	S501 瓢箪形土	13.6	3.0	4.2	128	ミガキ・黒色處理	ロクロナデ	回転余切り	にぶい黄	良好	
11	土師器	杯	口径～底部	S501 カマド型土上	13.8	6.4	4.4	41	ミガキ・黒色處理	ロクロナデ	回転余切り	にぶい黄	良好	
12	土師器	杯	完全形	S501 pit88号土上	13.2	5.0	4.8	127	ミガキ・黒色處理	ロクロナデ	ヘラケズリ・耳調整	黒	良好	
13	土師器	杯	口径～底部	S501 カマド型土上	15.2	7.0	5.2	92	ミガキ・黒色處理	ロクロナデ	ヘラケズリ・耳調整	にぶい黄	良好	
14	土師器	杯	口径～底部	S501 カマド型土	13.4	3.2	4.7	122	ミガキ・黒色處理	ロクロナデ	回転ヘラ切り	黒	良好	
15	土師器	杯	口径～底部	S501 pit65号土	16.0	5.1	5.7	67	ミガキ・黒色處理	ロクロナデ	回転ヘラ切り	黒	良好	
16	土師器	杯	口径～底部	S501 カマド型灰灰	17.0	6.8	4.9	157	ミガキ・黒色處理	ミガキ	黒色處理	マメツ		
17	土師器	杯	口径～底部	S501 pit65号土	17.0	—	5.1	55	ミガキ・黒色處理	ミガキ	黒色處理	—	黒	良好
18	土師器	杯	口径～底部	S501 pit88号土	—	6.4	—	24	ミガキ・黒色處理	ミガキ	黒色處理	回転ヘラ切り	黒	良好
19	土師器	杯	口径～底部	S508 瓢箪形土	—	6.6	4.6	46	ミガキ・黒色處理	ロクロナデ	回転余切り	にぶい黄	良好	
20	土師器	杯	口径形	S508 瓢箪形土	—	—	—	—	ロクロナデ	ロクロナデ	—	にぶい黄	良好	墨青
21	土師器	甕	口径～体部	S501 カマド型土	20.5	—	501	ロクロナデ	ロクロ・ヘラケズリ	ロクロ・ヘラケズリ	—	浅黄	良好	
22	土師器	甕	口径～体部	S501 カマド型土	25.8	—	—	245	ヘラナデ	ロクロナデ・ヘナ	—	にぶい黄	良好	
23	土師器	甕	口径～体部	S501 カマド型土	23.0	—	—	106	ロクロナデ	ロクロナデ	—	にぶい黄	良好	
24	土師器	甕	口径～体部	S501 カマド型土	22.1	—	—	106	ロクロナデ	ロクロナデ	—	浅黄	良好	
25	土師器	甕	体部	S501 カマド型土	—	—	—	208	ヘラナデ	ヘラケズリ	—	にぶい黄	良好	
26	聚財器	甕	11像足	S501 朱白	27.4	—	—	46	ロクロナデ	ロクロナデ・ハケメ	—	灰	良好	
27	聚財器	長颈甕	口径部	S508 瓢箪形土	12.6	—	—	32	ロクロナデ	ロクロナデ	—	黑	良好	



南方上空から

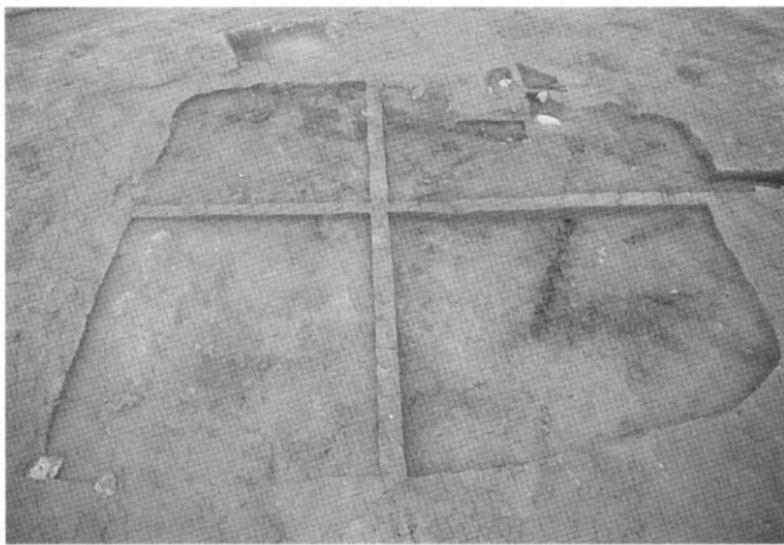


直上から

写真図版1 中村遺跡 航空写真

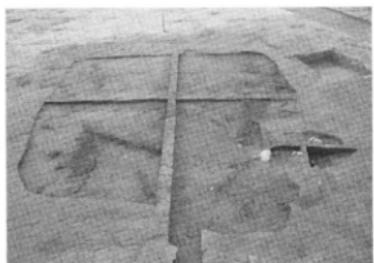


S101 整穴住居跡



S101 炭化材出土状況

写真図版2 中村遺跡 検出遺構（1）



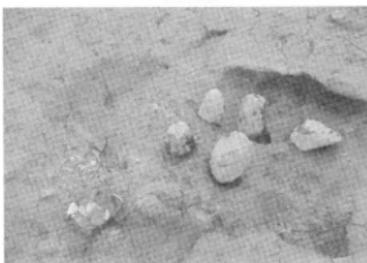
S101 炭化材出土状況



作業風景



S101 カマド 掘出土状況



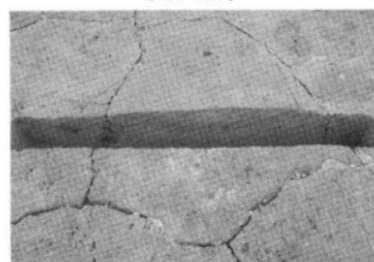
S101 カマド



S101 カマド



S101 カマド 燃焼部断面



S101 地床炉

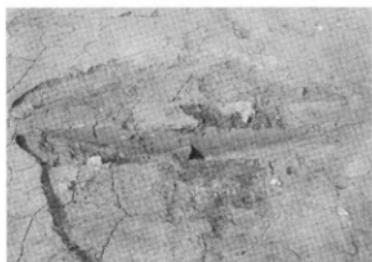


遺跡見学に訪れた小学生

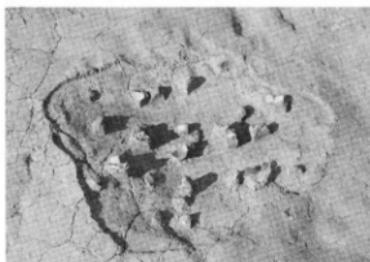
写真図版3 中村遺跡 棚出遺構（2）



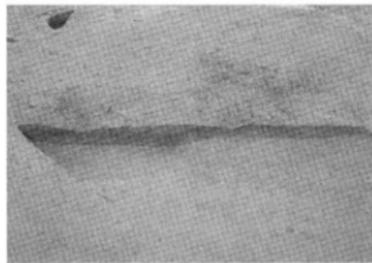
SD01-02 溝跡



SK08 土坑断面



SK08 遺物出土状況

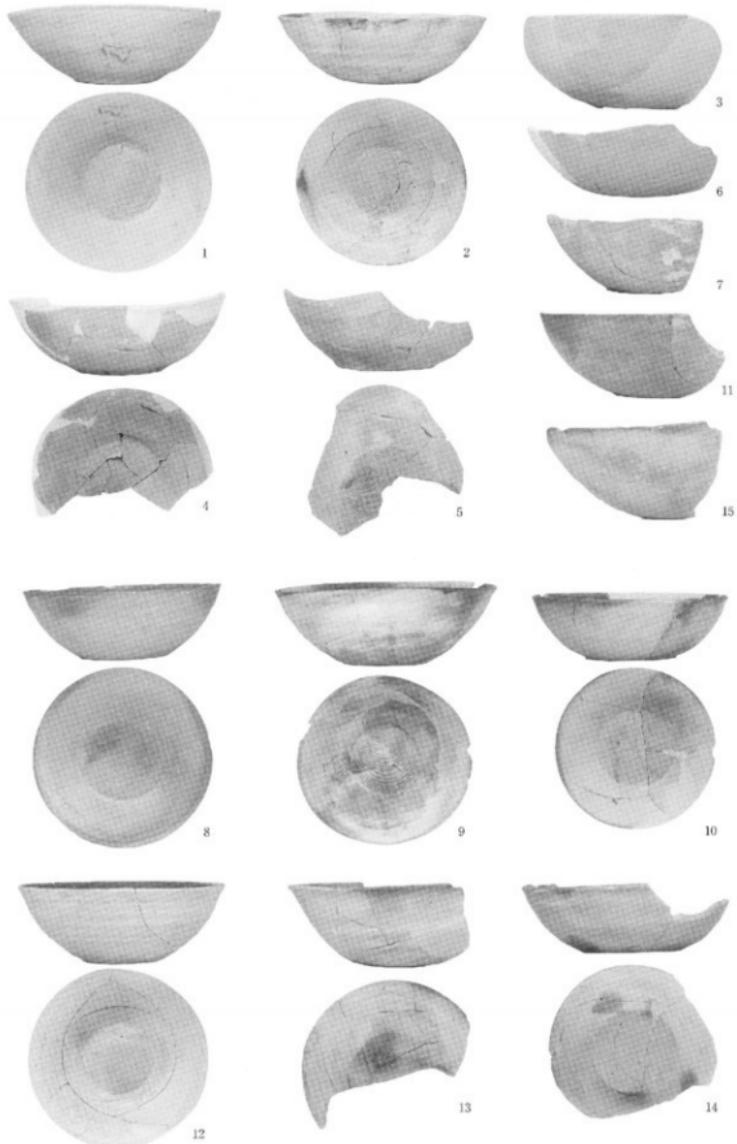


SK09 土坑断面

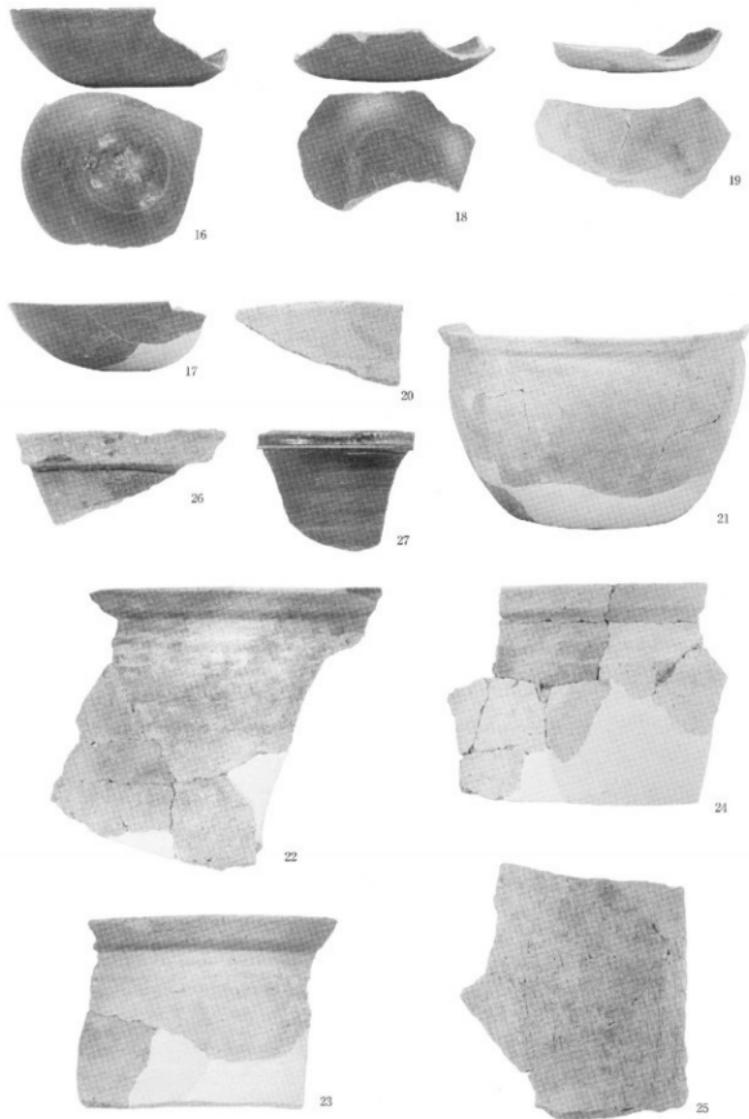


SK09 完壁

写真図版4 中村遺跡 検出遺構（3）



写真図版5 中村遺跡 出土遺物（1）



写真図版6 中村遺跡 出土遺物（2）

(5) 高日向遺跡

所 在 地	奥州市胆沢区小山字前四ツ屋378-1 ほか	遺跡コード・路号	NE46-1244・THN-06
委 託 者	県南広域振興局農林部農村整備室	調査対象面積	1,129m ²
事 業 名	経営体育成基盤整備事業徳岡東部地区	調査終了面積	1,129m ²
発掘調査期間	平成18年4月7日～4月28日	調査 担当者	丸山浩治・平野祐

1 調査に至る経過

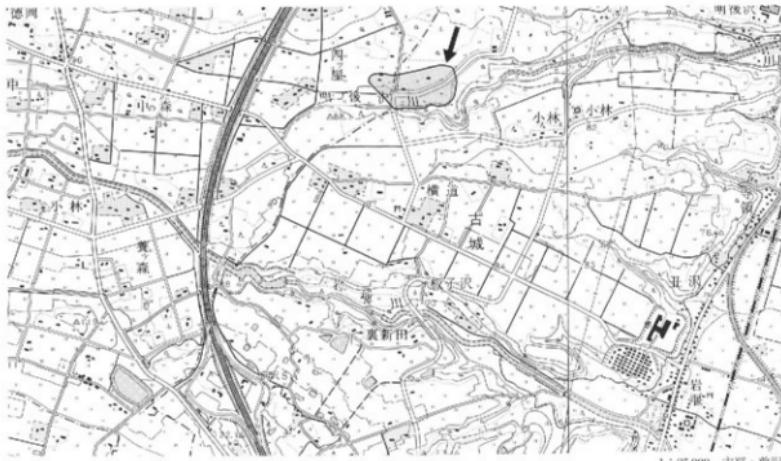
高日向遺跡は、「経営体育成基盤整備事業徳岡東部地区」の区画整理工事（は場整備）に伴い、その事業区域内に存在することから発掘調査を実施することとなったものである。

本地区は、奥州市胆沢区の南東部に位置し、前沢区の一部北西部にまたがる水田地帯である。しかし、農道は狭く水路も用排兼用素掘で断面狭小なため地下水位が高く、区画も10aと小区画なこともあり、大形農業機械の効率利用と農地流動化の大きな阻害となっていた。

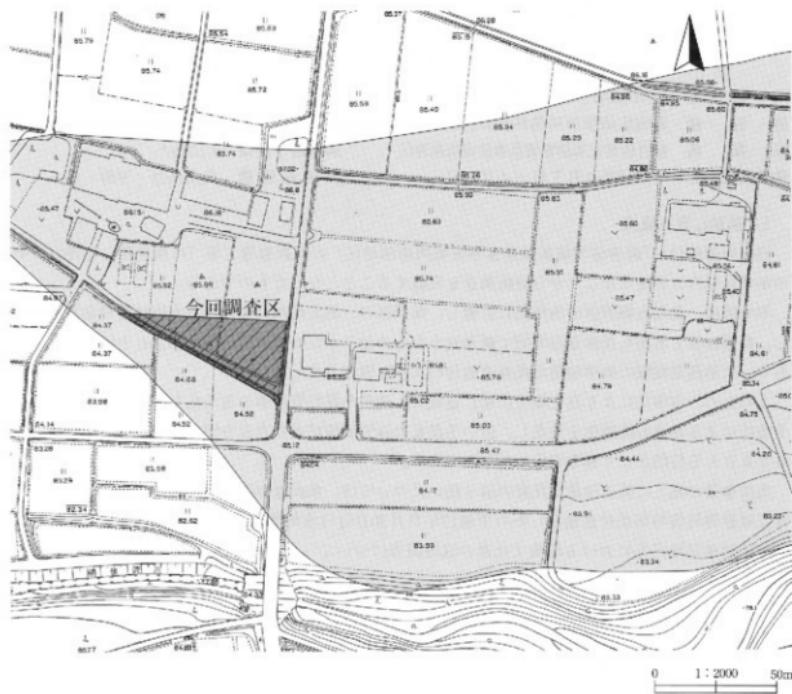
このため、本事業により高生産性は場に造成し、営農や維持管理等の省力化を図るとともに農作業受託による農地の流動化を促進し、担い手農家の経営規模拡大と育成を図り、農業経営の安定に寄与することを目的として事業着手したものである。

当該事業の施工に係る埋蔵文化財の取り扱いについては、水沢地方振興局農政部農村整備室（現県南広域振興局農林部農村整備室）から平成17年9月30日付け水地農整第597号「経営体育成基盤整備事業徳岡東部地区等における埋蔵文化財の試掘調査について（依頼）」により岩手県教育委員会に対して試掘調査の依頼を行った。

依頼を受けた岩手県教育委員会では平成17年10月12日から試掘調査（分布調査）が始められた。その結果、工事で地盤を下げる部分（切土部）において遺構が発見されたことから、平成17年12月5日付け教生第1291号「埋蔵文化財の試掘調査について（回答）」により、工事に着手するためには高日向遺跡の発掘調査が必要となる旨の回答があった。



第1図 遺跡の位置



第2図 高日向遺跡調査区と周辺の地形

その回答を踏まえて岩手県教育委員会と協議・調整のうえ、平成18年4月3日付けで財團法人岩手県文化振興事業団と当農村整備室の間で委託契約を締結し、発掘調査を実施することとなった。

(県南広域振興局農林部農村整備室)

2 遺跡の位置と立地（第1・2図）

高日向遺跡は、奥州市前沢区古城字高日向と同市胆沢区小山字前四ツ屋の境界付近に所在する。今回の調査範囲となった区域は、岩手県教育委員会事務局生涯学習文化課により平成17年10月および11月に試掘調査が行われた際に初めて遺跡の存在が明らかとなり、これにより新たに高日向遺跡に追加されることになった部分である。それ以前における高日向遺跡の指定範囲は第2図右側に示した部分とされ、前沢区内における弥生時代の遺跡として周知されていた。今回の調査範囲は区界を挟んだ胆沢区側に所在し、遺跡全体の西端部に位置することになる。南側には明後沢川が東流し、同河川により解析された河岸段丘の縁辺部に遺跡は立地している。標高はおよそ84~86mで、現況は畑地、水田等である。

3 基本土層（第3図）

本調査区の基本土層は以下のとおりである。

I層 現表土（現代の耕作土、耕地造成時の盛土）、および旧表土（近～現代）である。以下のように分層した。

I a 2.5Y3/1 黒褐色 シルト 粘性中・しまり中
現表土。耕作土。

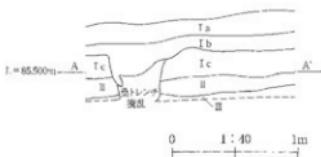
I b 10YR3/2 黒褐色シルトとⅢ層の混合土 粘性
中・しまり強 耕地造成時の盛土。

I c 10YR3/1 黒褐色 シルト 粘性中・しまり中
Ⅲ層粒（~5mm）2%、炭化物粒1%以下混入。
旧表土（近～現代）。

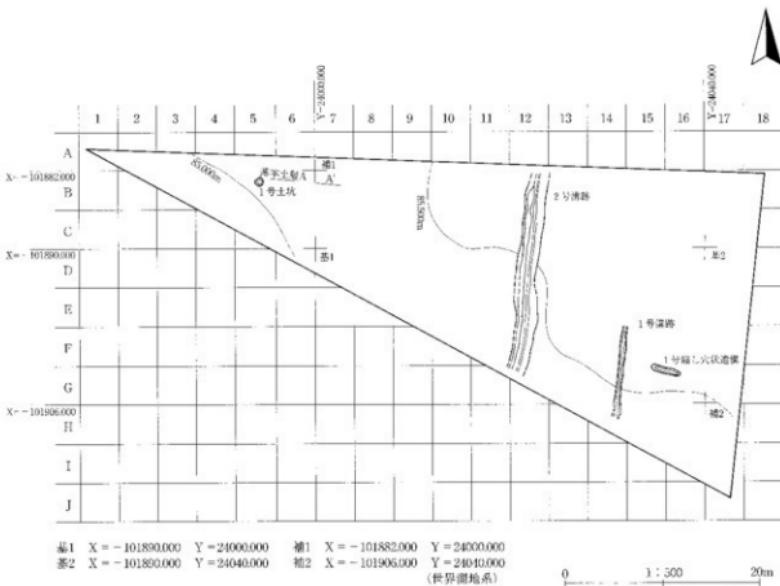
II層 10YR3/3 暗褐色 シルト 粘性強・しまり中 遺構検出面。

III層 10YR5/8 黄褐色 粘土 粘性強・しまり強 遺構検出面。

本調査区は明後沢川北岸の小規模な河岸段丘縁上にあり、微地形は緩く南に下る。この一帯は耕地造成等による地形変更・削平が進んでおり、とくに旧地形で標高が高かったと思われる北東側の削平度合いが大きい。基本土層の設定に際しては、比較的の残存状態の良い北端西部の土層を用いた。なお、II層は西側一部に残存するのみである。



第3図 高日向遺跡基本土層



第4図 高日向遺跡遺構配置図

4 調査の概要

(1) 造構（第4・5図、写真図版1・2）

今回検出された造構は、土坑1基、陥し穴状造構1基、溝跡2条である。

<土坑>検出面はⅡ～Ⅲ層である。開口部規模は $0.8 \times 0.67\text{m}$ で、平面形は不整な楕円形である。断面形は皿状を呈し、深さは最深部で13cmを測る。埋土は自然堆積である。なお、埋上下位から地紋のみの縄文土器片が7点出土しており、縄文時代前期初頭から前葉頃の構築である可能性が高い。

<陥し穴状造構>検出面はⅢ層である。開口部規模は $2.94 \times 0.56\text{m}$ で、平面形は溝形を呈する。長軸方向は西北西～東南東を向き等高線とほぼ並行する。深さは最深部で87cmを測る。埋土は自然堆積である。遺物は出土していない。形態的特徴から縄文時代の造構と推定される。

<溝跡>2条とも南北方向にのびる。1号は長さ8.5m・幅0.72mで、深さは最深部で14cmを測る。埋土は自然堆積である。構築時期は不明であるが、埋土の状況から2号よりは古く、近代以前のものと推定される。2号は長さ20m以上・幅2.36mで、さらに調査区外南北へ続く。深さは最深部で2.05mを測る。埋土最下位に自然堆積があるほかはすべて埋め戻し土で、上位半分は大規模地形改変時のものである。よって、構築時期は不明であるが近代以降に機能停止したものと推定される。

(2) 出土遺物（第6図、第1表、写真図版2）

地紋のみの縄文土器片が20点・224.4g出土した。うち4点・73.87g（出土総量の33%）を掲載している。1・2は1号土坑埋土中から出土した深鉢の胴部と底部付近の破片で、網目状撚糸文が施されている。厚手で、胎上に纖維を含むことから前期初頭～前葉の土器と思われる。3は深鉢の口縁部片で、口唇部に刻印が施されている。地紋はL R横回転の斜縄文である。4は深鉢の胴部片で、L R横回転の斜縄文が施されている。原体が他に比して細い。3・4は中期以降のものと推定されるが、詳細は不明である。

5 まとめ

今回の調査範囲付近は縄文時代に狩り場として利用されていたものと思われる。また、縄文時代前期初頭～前葉期の土器を伴う土坑の存在から、付近に同時期の生活痕跡が存在する可能性が高い。

なお、高日向遺跡に関する報告は、これをもって全てとする。

第1表 地点別遺物出土重量

出土地点・層位	遺物種別	重量(g)
1号土坑 Ⅰ層	縄文土器	94.94
D5 Ⅰc層	縄文土器	33.59
C13 Ⅰb層	縄文土器	14.49
C6 桑畠擾乱	縄文土器	5.32
C7 桑畠擾乱	縄文土器	16.37
C8 桑畠擾乱	縄文土器	13.45
G13 木路擾乱	縄文土器	8.87
未採	縄文土器	37.37
合計重量		224.40

＜参考文献＞

前沢町教育委員会 1998 「町内遺跡詳細分布調査報告書」 古城・白山地区 岩手県前沢町文化財調査報告書第6集

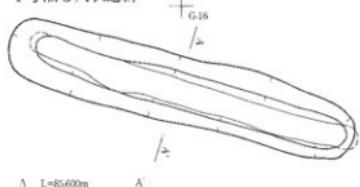
1号土坑



2号溝跡



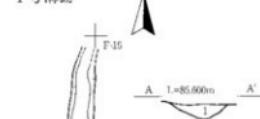
1号陷し穴状遺構



1号陷し穴状遺構

- 1 10YR5/1 黑褐色シルトと10YR4/2K黄褐色シルトの混土。(5:5) 粘性中・しまり中。
- 2 10YR3/1 黑褐色シルトと10YR4/2K黄褐色シルトの混土。(7:3) 粘性中・しまり中。
- 3 10YR4/2 黄褐色シルト 粘性中・しまり中 II層の底層土。
- 4 10YR5/2 黑褐色シルト 粘性中・しまり中。
- 5 10YR4/2K黄褐色シルト、10YR3/2黄褐色シルト、10YR5/8黄褐色粘土の混土。(5:3:2) 粘性中・しまり中。
- 6 20T5/2 黑褐色シルト 粘性強・しまり中 日～夕層の底層土。
- 7 20T5/3 黄褐色シルト 上部 粘性強・しまり中 II層の最底土。
- 8 20T5/2 黑褐色シルト、10YR3/2K黄褐色シルト、10T5/8黄褐色粘土の混土。(7:2:1) 粘性中・しまり中。
- 9 10YR3/1 黄褐色シルト 粘性中・しまり弱。
- 10 10YR3/1 黑褐色シルトと10YR6/6黑褐色粘土の混土。(5:5) 粘性強・しまり弱。
- 11 10YR5/8黄褐色粘土、20T5/6黄褐色粘土、10YR3/7黄褐色シルトの混土。(5:4:1) 粘性強・しまり中。

1号溝跡

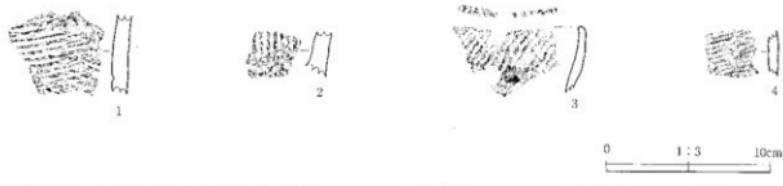


- 1号溝跡
1 10YR2/2 黑褐色シルト 粘性中・しまり中 II層灰(～5cm) 5%。

- 2号溝跡
1 1 溝蓋土。
1.1 1-2. 剥離として検査していた時剥いていた部分の表土。
1.2 3-4. 溝沿跡底跡の底土。
1 10YR5/3黄褐色粘土と10T5/2K黄褐色シルトの混土。(6:4) 黄褐色・しまり弱・堆め聚なし。
2 10T4/2 1K黄褐色シルト 粘性中・しまり弱 砂混入。 粘性強度に入る。

1:50(断面)
1:100(平面)
2.5m
5m

第5図 高日向遺跡検出遺構



No.	出土地点・層位	器種	部位	文様の特徴	重量(g)	備考
1	1号土坑 1層	深鉢	側部	單輪條条作第1類の文様(1・横)	37.09	底下に楕円形含む。
2	1号土坑 1層	深鉢	底部	單輪條条作第1類(1・綫)	13.42	底上に楕円形含む。
3	C13 16層	深鉢	口縁部	し R・横	14.49	
4	G13 水路擾乱	深鉢	側部	し R・斜	8.87	

第6図 高日向遺跡出土遺物

報告書抄録

ふりがな	へいせいじゅうはちねんどはくつちょうさほうこくしょ							
書名	平成18年度発掘調査報告書							
副書名	高日向遺跡							
卷次								
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第505集							
編著者名	平野祐・丸山浩治							
編集機関	(財) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター							
所在地	〒020-0853 岩手県盛岡市下飯田11地割185番地 TEL (019) 638-9001							
発行年月日	2007年3月26日							
ふりがな 所取遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	北緯 遺跡番号	東経 ° ° °	調査期間	調査面積	調査原因	
たかりなたいせき 高日向遺跡	岩手県奥州市 胆沢区小山字 前四ツ屋378- 1ほか	03215	NE46-1244	39度 04分 55秒	141度 06分 39秒	2006.04.07 ～ 2006.04.26	1,129m ²	経営体育施設 整備事業 東南部地区に ともなう緊急 発掘調査
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
高日向遺跡	狩獵場	縄文時代	陥し穴状遺構 土坑	1基 1基	縄文土器			
		近世以降	溝跡	2条				
要約	縄文時代の陥し穴状遺構と土坑、近世以降の溝跡を検出。縄文時代に本調査区付近は狩り場として利用されていたものと思われる。また、土坑埋土から前期初頭～前葉墳の縄文土器が出土しており、付近に同時期の生活痕跡が存在する可能性が高い。							

※緯度・経度は世界測地系における数値である。



調査区全景（西から）



基本土層（南から）



平面（南東から）



断面（南東から）



1号土坑

平面（西から）



断面（西から）

写真図版1 高日向遺跡検出遺構（1）

(5) 高日向遺跡



平面（南から）



1号溝跡

断面（南から）



平面（南から）



2号溝跡

断面（南から）



1



2



3



4

写真図版2 高日向遺跡検出遺構(2)、出土遺物

(6) 雲南遺跡

所 在 地 奥州市江刺区藤里字雲南127ほか
委 託 者 県南広域振興局土木部
事 業 名 交流ネットワーク道路整備事業
発掘調査期間 平成18年9月19日～11月6日

遺跡コード・路号 NE09-2111 UN-06
調査対象面積 3,200m²
調査終了面積 3,200m²
調査担当者 丸山直美・高橋聰子

1 調査に至る経過

雲南遺跡は、「交流ネットワーク道路整備事業赤金～分限城工区」の道路改良工事に伴い、その事業区域内に存在することから発掘調査を実施することとなったものである。

一般国道397号は、岩手県大船渡市から奥州市を経て秋田県十文字町へ続いている道路で、大船渡港と内陸の工業団地を結ぶ幹線道路である。

当該箇所は、平成18年度完成予定の大船渡港公共埠頭利用促進のため、陸路区間の解消を図ることを目的に事業着手したものである。

当事業の施工に係わる埋蔵文化財の取扱いについては、水沢地方振興局土木部から平成17年11月1日付水土第409号「埋蔵文化財発掘の通知について」により、岩手県教育委員会に対して試掘調査の依頼を行った。

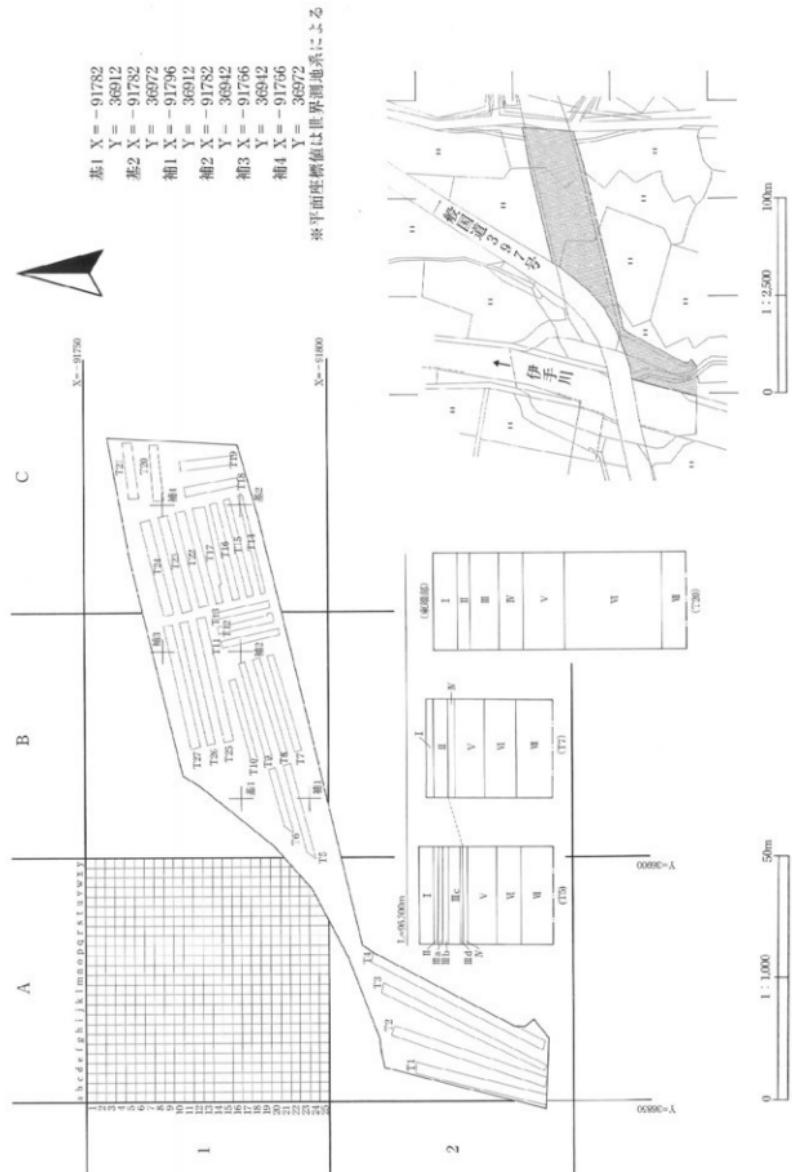
依頼を受けた岩手県教育委員会は平成17年11月7日～9日に試掘調査を実施し、工事に着手するには発掘調査が必要となる旨を平成17年11月14日付教生第1190号「埋蔵文化財の試掘調査について（回答）」により当土木部へ回答してきた。

その結果を踏まえて当土木部は岩手県教育委員会と協議し、調整を受けて平成18年8月29日付けで財団法人岩手県文化振興事業団との間で委託契約を締結し、発掘調査を実施することになった。

(県南広域振興局土木部)



第1図 遺跡の位置



第2図 雲南遺跡調査区・グリッド配置図／土層断面図

2 遺跡の位置と立地

本遺跡は、JR東北新幹線水沢江刺駅の北東約6.8kmに位置し、北流する伊手川東（右）岸の河岸段丘上に立地している。標高は95～96m前後で、現況は水田である

3 基本土層

本調査区の基本層序は次のように堆積している（第2図）。

I層 10YR3/1 黒褐色粘質シルト（表土・水田耕作土）層厚12～30cm

　　古代・縄文時代の遺物を少量含む

II層 10YR4/3 鈍い黄褐色砂質シルト（水田床上）層厚4～20cm

IIIa層 10YR5/6 黄褐色粗砂 層厚0～12cm 水成堆積層

IIIb層 10YR4/2 灰黄褐色砂 層厚0～18cm 水成堆積層

IIIc層 10YR4/1 褐灰色砂 層厚18～24cm 水成堆積層

IIId層 10YR5/2 灰黄褐色砂 層厚0～13cm 水成堆積層

IV層 N3/0 暗灰色粘質シルト（旧水田耕作土） 層厚0～12cm

　　縄文時代の遺物を含む（水田造成時に他所から混入した可能性が高い）

V層 2.5Y4/1 黄灰色砂 層厚0～16cm 水成堆積層 縄文時代の遺物を含む

VI層 10YR 5/3 鈍い黄褐色砂 層厚20cm 水成堆積層

　下位から礫層上面にかけて縄文時代晚期の遺物を含む

VII層 5Y4/1 灰色砂礫 層厚不明 自然堤防礫

* IIIaからIIId層は西側から中央にかけて局的に堆積するため、地点により様相が異なる。中央部東寄りではII層床上直下でIV層の旧耕作土があらわれる。東端部は伊手川の後背湿地にあたり、以下の異なる堆積状況を示す。

東端部基本層序

I層 5Y3/1オリーブ黒色粘質シルト（表土）層厚20cm

II層 10YR4/2 灰黄褐色粘質シルト（水田床上）層厚10cm

III層 10Y2/1 黒色粘質シルト 層厚30cm 腐食植物混入層

IV層 10GY4/1 暗緑灰色粘質シルト 層厚20cm 腐食植物混入層

V層 7.5GY5/1 緑灰色粘質シルト 砂礫混入 層厚25～40cm

VI層 N2/0 黒色粘質シルト 埋もれ木多量 層厚80cm

VII層 2.5GY5/1 オリーブ灰色砂礫 層厚不明

* いずれもグライ化の様相を呈する。III～VI層は低湿地特有の堆積状況を示す。

4 調査の概要

調査の結果、東側自然堤防付近を中心として希薄な縄文時代の遺物包含層と、表土下15～80cmの水成堆積砂下位層から近・現代が下限と見られる水田跡、畦畔跡が検出された。

(1) 造構

<縄文時代>

遺物包含層：調査区中央から東側で確認した。VI層からVII層の礫層上面にかけて縄文時代晚期の遺物を疎らに含む。東側自然堤防上及び上位の砂層およそ480m²の範囲から最も多く出土し、出土量は総量で大コンテナ3箱分（重量にして21,353.4g）である。遺物が疎らに廃棄されている状態で、ある程度のまとまりを持って接合・復元可能なものを若干数含むが、完形個体は皆無である。東側旧河道はT18～21を設定し、河床までの掘り下げを行ったところ、造構・遺物は検出されなかった。調査

区西側はT1～10のトレンチを設定し、縄層上面まで掘り下げを行ったが、同じく遺構・遺物は確認されていない。第3・4図に層位別・グリッド別の遺物重量を示した。

<～近・現代>

水田・畦畔跡：水田・畦畔跡は当初、西端部の表上下80cmの地点で確認された。水田面からは砂に覆われた無数の蹄痕が検出され、形状から牛か馬と推定された（写真図版2）。

本遺構に関しては確認面から判断して、所属時期が古代まで遡る可能性を想定し精査を開始した。その結果、耕作土層は当初の検出地点から一貫して東端部まで続いており、中央部で現床土直下、表土下15cmに位置する浅いものであることが後に判明したものである。この為、本遺構に関してはこの時点で図面作成を行わないこととし、写真撮影のみの記録に留めている。

更に周辺住民の方々からの聞き取り調査の結果、以前の所有者が昭和30年代に入ってからも暫く牛耕を行っていたという証言を得たことから、水田の開始時期については明らかではないものの、その下限を近・現代に求めることができるものと思われる。また、遺構の直接的な時期を示すものではないが、牛馬耕に関連する遺物としてT2の1層より踏鉄1点が出土している。

(2) 遺物

出土した遺物は縄文土器片（晩期）、土師器・須恵器片、石器（スクレイバー1点）、土製品（土版4点）、鉄製品（踏鉄ほか）合わせて大コンテナ3箱分である（第5～9図）。以下では層位・器種毎に出土遺物について簡単に触れる。

<縄文土器> IV層（旧水田耕土）からは799.0gが出土し、2点を掲載した。1は深鉢の胴部片、2は粗製壺の口縁～胴部片である。これらは水田造成の際の他所からの混入とみられる。V層（旧水田耕土下位層）からは1,281.2gの遺物が出土しており6点を掲載した。3～5は深鉢の口縁～底部片で、3・5は口縁部に小波状の刻目を持つ。6は鉢の口縁～胴部片で、沈線により雲形状のモチーフが描かれる。7～8は台付鉢の口縁～底部片である。VI層（灰黄褐色砂層）からは6,394.1gの遺物が出土しており21点を掲載した。9～22は深鉢の口縁～底部片で、口縁部小波状の刻目+横沈線による文様を持つものが大半を占める。15～17は地文と共に縦位の結節回転文が施文される。18は胴部片で羽状縄文による地文が施文される。23・24は台付鉢の台部片、25～27は浅鉢の口縁・底部片である。25は横沈線区画内に羊齒状沈線が描かれる。28は浅鉢の口縁～胴部片、29は壺口縁部片とみられる。VII層（自然堤防疊面上）からは12,079.3gの遺物が出土しており14点を掲載した。30～39は深鉢の口縁～底部片、40～42は鉢の口縁部片で、40は原体が方向を変えて羽状に施文される。41は口縁部に横位の円形刺突+横沈線が一周する。43は壺の口縁部片で、口縁部無文で胴部に磨消縄文を持つ。

<土製品> 旧水田耕作土からVI層中にかけて上版4点が出土し、すべて掲載した。44～46は同一個体と思われるが接合しない。47は灰黄褐色砂層から出土した晩期の土版で、沈線による曲線的なモチーフが描かれる。

<右器> VII層中よりスクレイバー1点が出土している（48）。中心部から欠損しており、使用によるもの可能性がある。

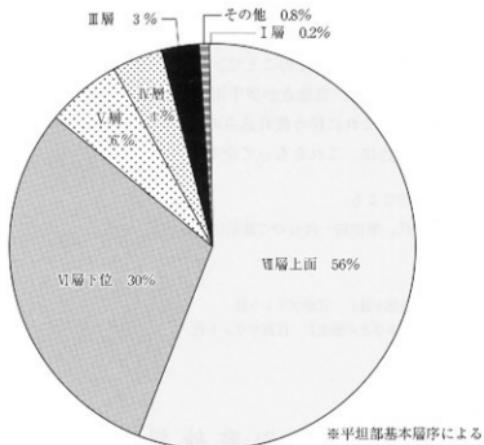
<土師器> 調査区西半部I層を中心として5点が出土している。49～52は土師器坏片である。磨耗顯著な50を除き、全て製作に際しロクロを使用するもので、内面はミガキ+黒色処理される。底部は回転糸切りされている。53は須恵器坏片である。

<陶磁器> 表採により1点が出土している。54は肥前の染付皿片で、17世紀前半代に位置づけられる。

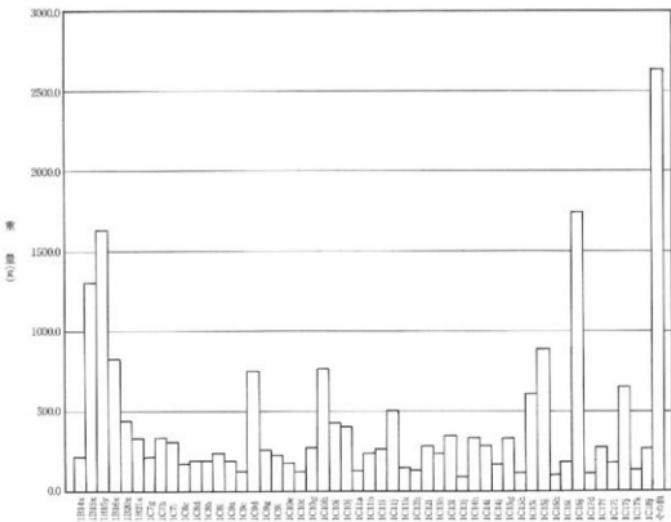
<鉄製品> 表上および盛土中から棒状鉄製品と、踏鉄がそれぞれ1点出土している。

5 まとめ

本遺跡は伊手川右岸（東岸）の河岸段丘上に立地し、現況は水田である。調査の結果、東側自然堤防付近を中心として希薄な縄文時代の遺物包含層と、表土下15~80cmの水成堆積砂下位層から・



第3図 層位別遺物出土量



第4図 グリッド別遺物出土量

現代が下限と見られる水田跡、畦畔跡が検出された。今回の調査で縄文時代・古代に属する遺構は確認されていないが、当地点の東方200mの畑地から土地所有者による耕作造成時に、縄文土器(晚期)、土師器壺・甕、須恵器壺・長頸瓶・大甕等が出土しており、調査区の東方につづく丘陵緩斜面上に縄文時代と古代の集落跡が存在する可能性が高いと思われる^(注1)。本遺跡における出土遺物は、殆ど縄文時代晩期の上器で、旧河道落ち際の自然堤防上面に集中しており、東側の集落跡から調査区内への動きに伴う遺物の移動があった可能性を窺わせる。また、昭和30年代に調査区一帯で自費開田が行われた際、人力による盛土造成が行われたとのことで、水田耕土および盛土から出土した遺物の多くは、この時の混入とみられる^(注2)。また、当地点が伊手川の屈曲地点にあたり、しばしば洪水による氾濫に見舞われることから、一部はこれに伴う流れ込みの可能性もあろう。

なお、雲南遺跡に関わる報告は、これをもって全てとする。

註 (1) 杉木喜美男氏のご教示による。

(2) 佐藤清人氏、及川涉氏、新田精一氏らのご教示による

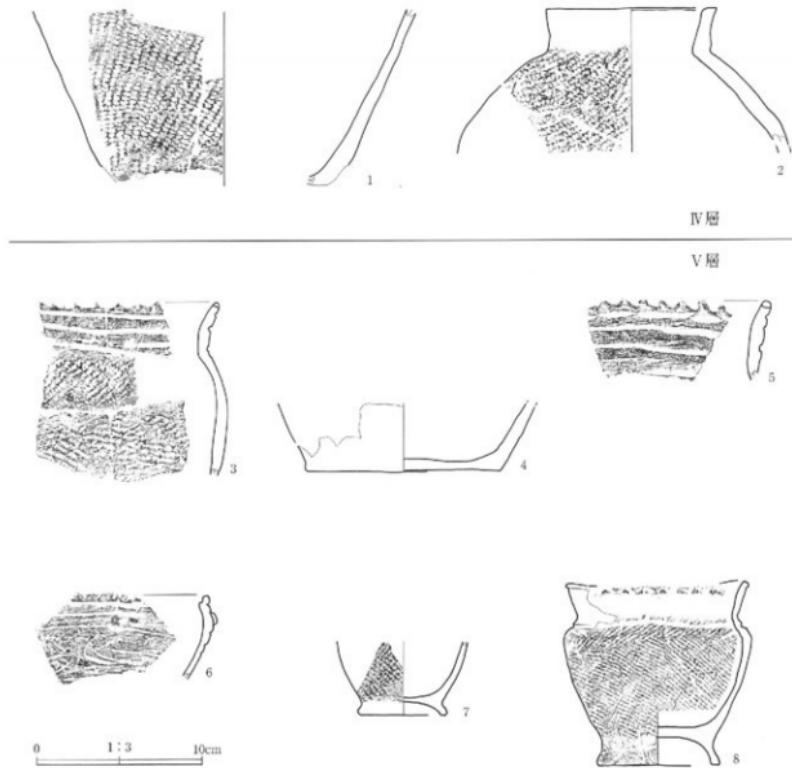
＜参考文献＞

藤里郷土誌編纂委員会 1986『藤里郷土誌』 江刺プリント社
藤里史談会・藤里公民館 2003『ふるさとの歴史』 江刺プリント社

報告書抄録

ふりがな	へいせいじゅうはちねんどはっくつちょうさほうこくしょ					
書名	平成18年度発掘調査報告書					
著書名	雲南遺跡					
卷次						
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書					
シリーズ番号	第505集					
編著者名	丸山直美・高橋聰子					
編集機関	(財) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター					
所 在 地	〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡11地割185番地 TEL (019) 638-9001					
発行年月日	2007年3月26日					
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村：遺跡番号	北緯 度	東経 度	調査期間	調査面積
雲南遺跡	岩手県奥州市江刺区 藤里字雲南127	03382 NE09-2111 他	39度 10分 21秒	141度 15分 38秒	2006.9.19 ～ 2006.11.6	3,200m ² 交流ネットワーク道路整備事業に伴う発掘調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項	
雲南遺跡	遺物包含層	縄文時代	遺物包含層(晚期)	縄文土器・土版ほか		
要約	本遺跡は伊手川右岸の自然堤防および後背湿地にある。縄文時代の遺物は殆どが東側自然堤防上から出土しており、疎らな遺物包含層(縄文時代晩期)を形成している。本遺跡の東方200mには土地所有者による耕作造成時に縄文時代晩期、平安時代の土師器・須恵器が出土しており、集落の中心が一段上位の河岸段丘上に存在する可能性を示唆している。また、現表土下15~80cm下位から、造成土及び洪水砂に覆われた状態の旧水田面を検出している。					

*緯度・経度は世界測地系における数値である。

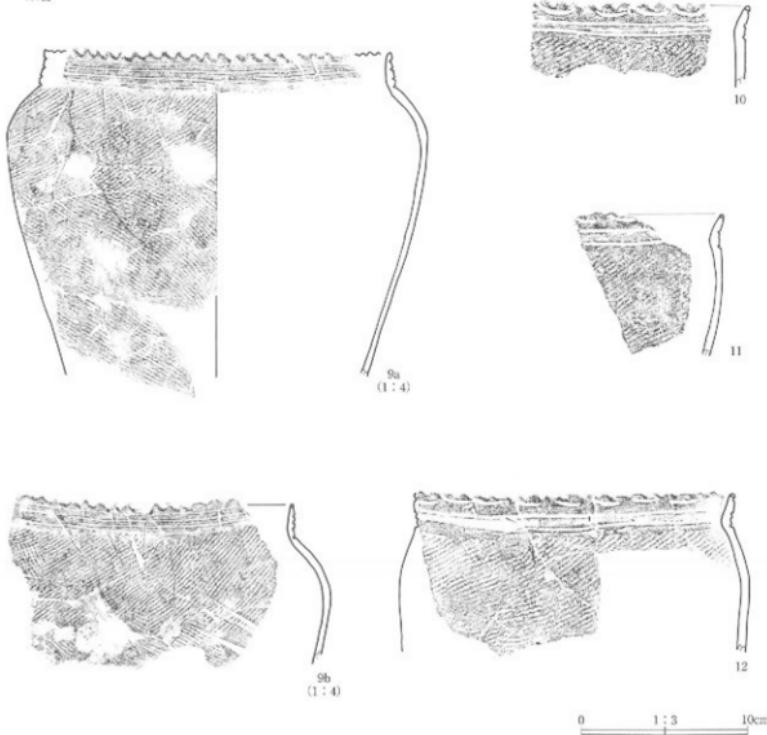


第1表 繩文土器観察表

No.	グリッド	層位	型種名	部位	文様特徴	原体	備考
1	I C17 f-g	IV層(水田面)	深鉢	胴部	地文のみ	RL	
2	I B30 x	IV層(水田面)	盤	口縁～胴部	口縁部：無文、胴部：地文のみ 口縁部：無文、胴部：地文のみ	LR	
3	I B15 x	V層(水田下)	深鉢	口縁～胴部	口縁部：無文、胴部：小波状刻目、横沈線	L	
4	I B15 x	V層(水田下)	深鉢	胴ト底部	-	-	
5	I C17 d	V層(水田下)	深鉢	口縁部	口縁部：小波状刻目、横位に連続する包沈線+横沈線	-	
6	I B16 x	V層(水田下)	鉢	口縁～胴部	口縁部：沈線による雲形状モチーフ	内外面炭化物付着	
7	I B15 w	V層(水田下)	台付鉢	胴下～底部	地文のみ	RL	
8	I B16 x	V層(水田下)	台付鉢	口縁～底部	口縁部：無文、頸部：横沈線、胴部：地文のみ	L	
9	I B15 y	V層	深鉢	口縁～胴部	口縁部：小波状刻目、横沈線、羽状縞文	LR	
10	I B16 x	V層	深鉢	口縁～胴部	口縁部：小波状刻目、横沈線+横沈線	LR	
11	I B16 x	V層	深鉢	口縁～胴部	口縁部：刻目、横位に連続する弧状切沈線+横沈線	LR?	胴部磨耗
12	I B16 x	V層	深鉢	口縁～胴部	口縁部：刻目、横位に連続する弧状切沈線+横沈線	LR	
13	I C7 h	V層	深鉢	胴下～底部	地文のみ	LR	器面磨耗
14	I C9 a	V層下位	深鉢	胴ト～底部	地文のみ	LR	
15	I C10-11i	V層	深鉢	胴下～底部	地文+鏡びのの軽質回転文	LR	
16	I C11h	V層	深鉢	胴部	地文+鏡びのの軽質回転文	RL/L	外面炭化物付着
17	I C11i	V層	深鉢	胴部	地文+鏡びのの軽質回転文	RL	外面炭化物付着
18	I C13 h	V層	深鉢	胴部	地文のみ、羽状縞文	RL/LR	
19	I C14h-i	V層	深鉢	口縁部	口縁部：小波状刻目、横沈線	LR	
20	I C15a	V層	深鉢	口縁部	口縁部：小波状刻目、横位に連続する包沈線+横沈線	RL	

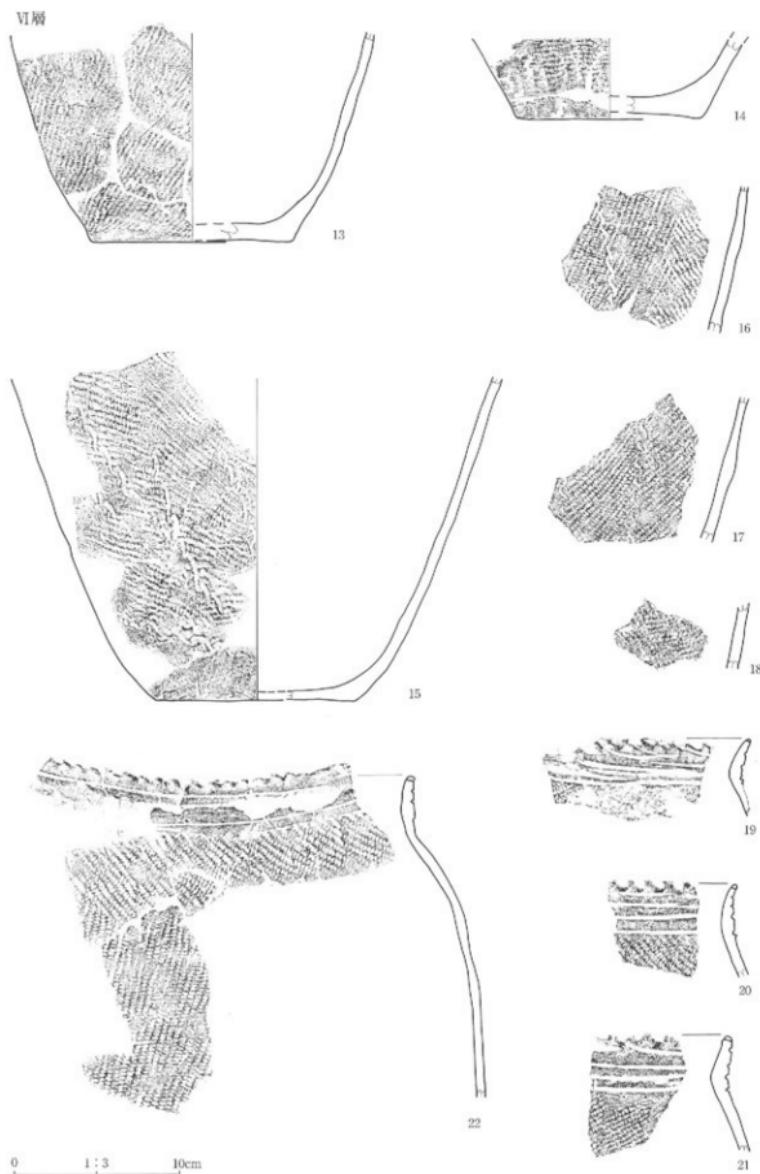
第5図 雲南遺跡出土遺物（1）

VI層

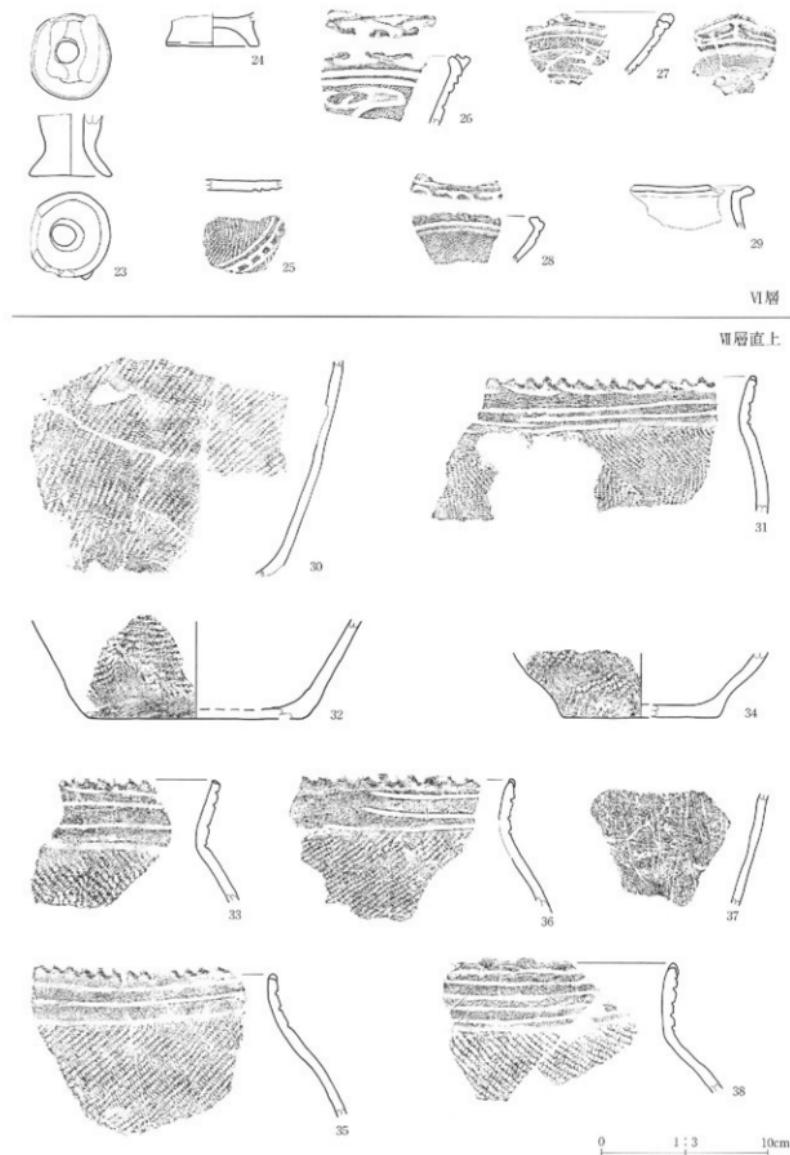


No.	グリッド	層位	器物名	部位	文様特徴	原体	備考
21	I C16	VI層	漢鉢	口縁～側部	I縁部：小波状刻目、横位に連続する波状彫沈線+横沈線	LR	
22	I C16	VI層	漢鉢	口縁～側部	I縁部：小波状刻目、横沈線	RL	
23	I C15i-j	VI層	台付鉢	台部	無文、透かし有り	-	
24	I C8e	VI層下位	台付鉢	台部	-	-	
25	I C10h	VI層	浅鉢	底部	横沈線区画内に羊齒彫沈線	LR	
26	I C11b	VI層	浅鉢	口縁部	横沈線、磨消面文	LR?	
27	I C6g	VI層	浅鉢	口縁～側部	I縁部：山形+重複凹状沈線、側部：横沈線、磨消面文	LR	
28	I C15j	VI層	浅鉢？	側部	人面三叉文、横沈線	LR?	地文不明瞭
29	I C9h	VI層上位	壺	口縁部	口縁部：無文	-	
30	I C7g	Ⅴ層直上	深鉢	側部	地文のみ	RL	
31	I C33d	Ⅴ層直上	深鉢	口縁～側部	I縁部：小波状刻目、横位に連続する斜依彫沈線+横沈線	RL	
32	I C10h	Ⅴ層直上	深鉢	側部	地文のみ	LR	内面炭化物付着
33	I C10j	Ⅴ層直上	深鉢	口縁部	口縁部：小波状刻目、横位に連続する短沈線+横沈線	-	
34	I C11k	Ⅴ層直上	深鉢	側部	側部：地文のみ	LR	内面炭化物付着
35	I C12h	Ⅴ層直上	深鉢	口縁～側部	I縁部：小波状刻目、横沈線	LR	
36	I C12g	Ⅴ層直上	深鉢	口縁～側部	I縁部：小波状刻目、横沈線	LR	
37	I C14j	Ⅴ層直上	深鉢	側部	条状孔のケツリ	-	
38	I C15h	Ⅴ層直上	深鉢	口縁～側部	I縁部：山形+2個1対の粘土瘤、横沈線	RL	
39	I C15i	Ⅴ層直上	深鉢	口縁～側部	I縁部：小波状刻目、横位に連続する短沈線+横沈線	RL	
40	I B16v	Ⅴ層直上	鉢	口縁～側部	側部：底付方向を束ねて羽状に施文	L	
41	I C7i	Ⅴ層直上	鉢	I縁～側部	I縁部：横位の円形刻穴、横沈線、羽状施文	RL-LR	羽状施文、内面炭化物付着
42	I C18j	Ⅴ層直上	鉢	口縁～側部	I縁部：無文、側部：磨消面文	LR?	地文不明瞭
43	I C9f	Ⅴ層直上	壺	口縁～側部	I縁部：無文、側部：磨消面文	LR	

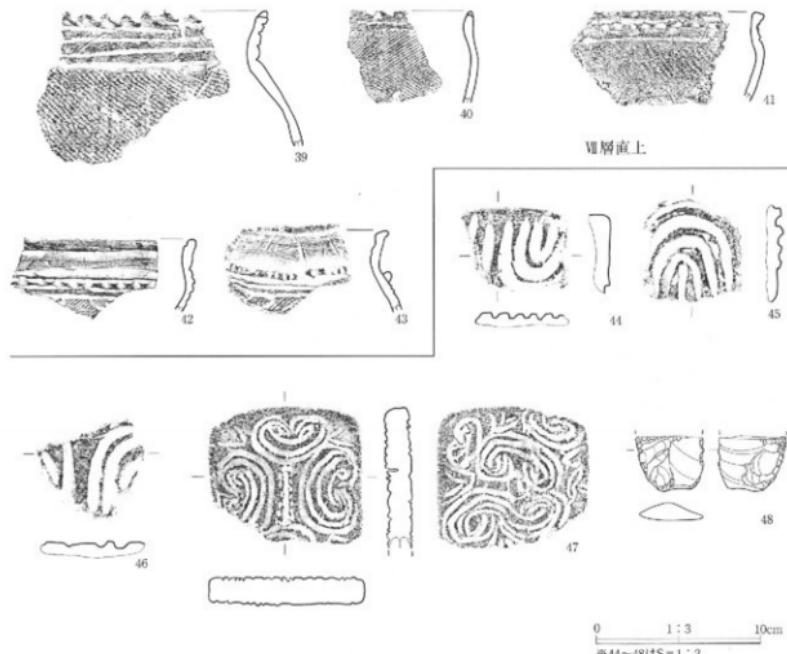
第6図 雲南遺跡出土遺物（2）



第7図 雲南遺跡出土遺物（3）



第8図 雲南遺跡出土遺物 (4)



第3表 土器製品観察表

No.	出土地點	種類	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備考
44	I C17 c	Ⅱ層(水田面)	土器	△3.3	△4.3	△0.8	△10.0 42・43と同一個体
45	I C17 c	Ⅱ層(水田面)	土器	△4.0	△3.8	△0.7	△9.6 41・43と同一個体
46	I C17 d	Ⅱ層下位	土器	△3.9	△4.2	△0.6	△8.3 41・42と同一個体
47	I B13e	Ⅱ層下位	土器	△5.9	6.3	1.1	△55.8

* 表中の△は残存値を表す

第3表 石器観察表

No.	出土地點	種類	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石材	产地	備考
48	I C16	Ⅱ層	スクレイバー	△2.2	2.7	0.7	△4.9	頁岩	男羽山脈 新生代新第三紀

* 表中の△は残存値を表す

第4表 土器器・須恵器観察表

No.	出土地點	種類	長さ	幅	残存率	主な外表面要因	主な内面要因	底部	備考
49	I C18 h	I 層	上部器	環	10%以下	(口～体) ロクロナデ	(口～体) ミガキ	-	内面黒色処理
50	I B21 b	I 层	上部器	環	10%以下	-	-	-	磨耗跡著
51	I B18 y	I 层	上部器	環	10%以下	(体) ロクロナデ	(体) ミガキ	回転系切り	内面黒色処理
52	夷揮	土器	環	10%以下	(体) ロクロナデ?	(体) ミガキ	回転系切り?	磨耗跡著、内面黒色処理	
53	夷揮	須恵器	環	10%以下	(口～体) ロクロナデ	(口～体) ロクロナデ	(口～体) ロクロナデ		

第5表 陶器器観察表

No.	出土地點	層位	種類	胎土	釉薬・焼付	製作地	制作年代
54	夷揮	不明	灰	灰白色	焼付	肥前	17世紀前半代

第6表 鉄器製品観察表

No.	出土地點	種類	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備考
55	I C区南側	II層	棒状裏裏	△14.2	2.2	0.6	△80.6
56	川沿いトレッサT2	I層	鍔執	△11.3	11.4	0.7	152.4 長方形の釘孔6箇所

* 表中の△は残存値を表す

第9図 雲南遺跡出土遺物(5)



遺跡遠景①（東から）

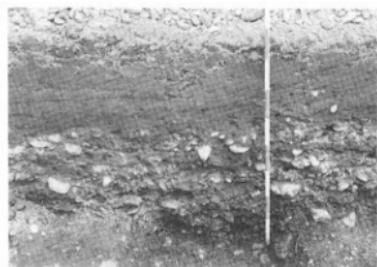


遺跡遠景②（東から）

写真図版 1 遺跡遠景



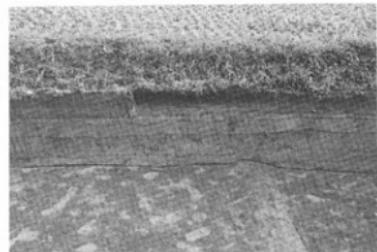
西側T1~4 挖削状況（南から）



T3 深掘断面（表土下1.5m）



水田面検出作業

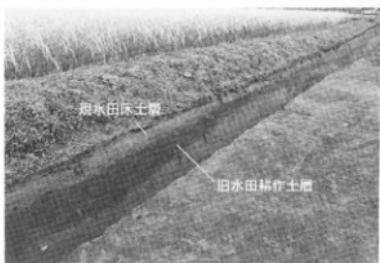


中央部水田・鞋跡（補1付近）

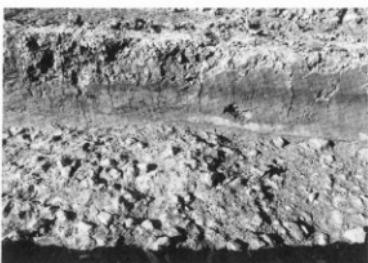


T5 自然堤防礫面確認状況

写真図版2 トレンチ掘削・遺構検出状況



旧水田耕作土確認状況（表土下15cm）



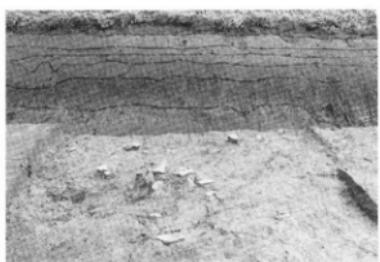
T23 土層断面



T23 自然堤防碌面確認状況



遺物出土状況①



遺物出土状況②



遺物出土状況③



遺物出土状況④

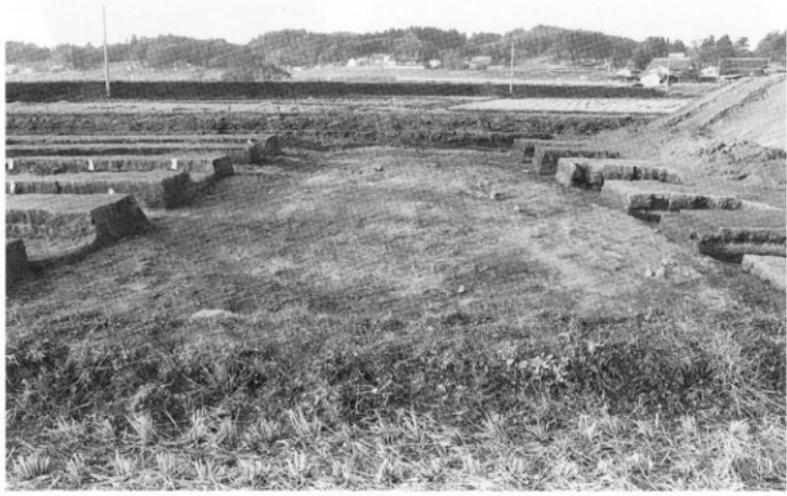


遺物出土状況⑤

写真図版3 トレンチ掘削・遺物出土状況

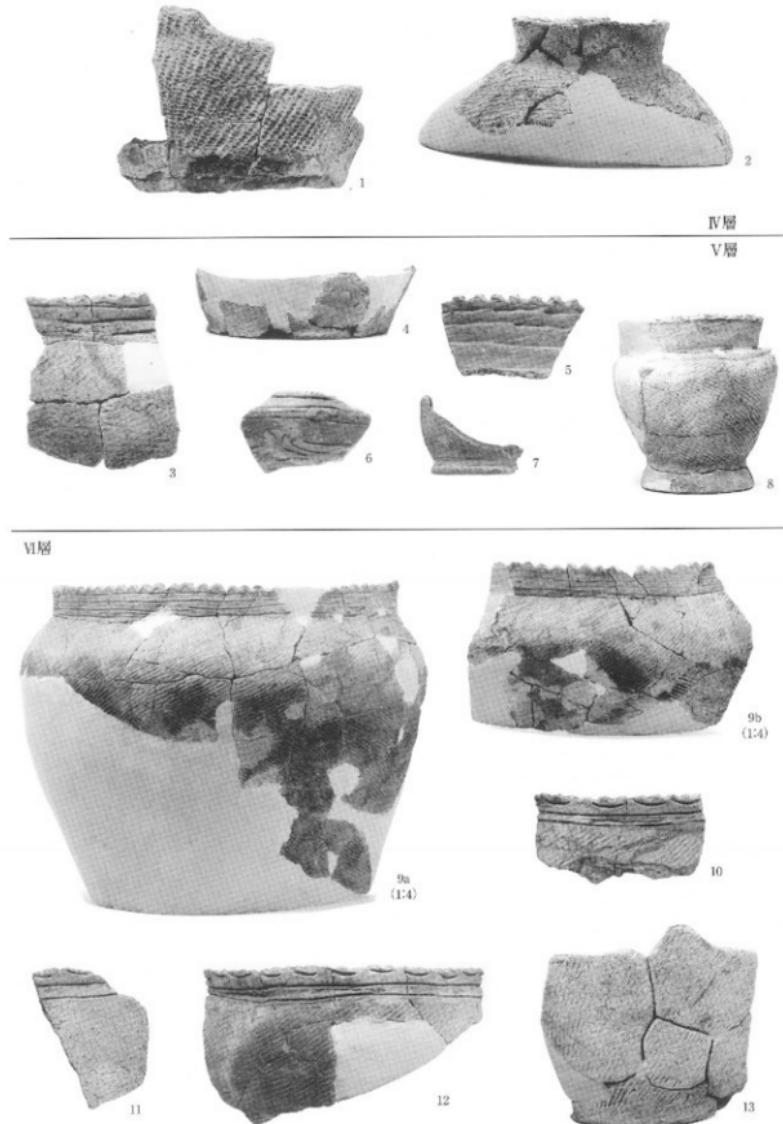


調査区造景（東から）

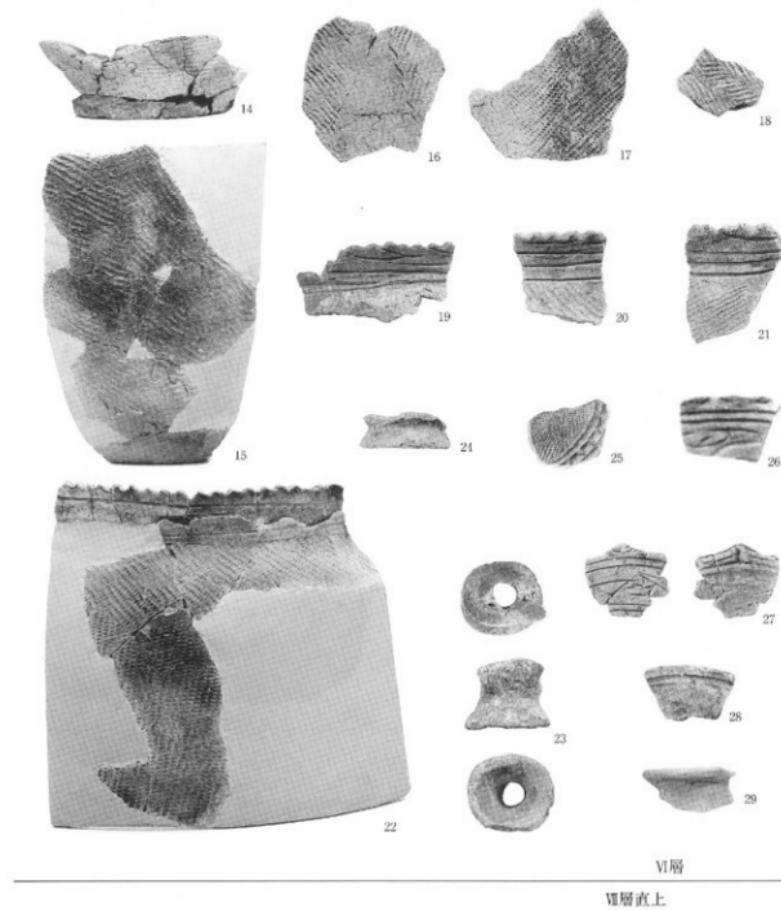


東側自然堤防礎面確認状況（南から）

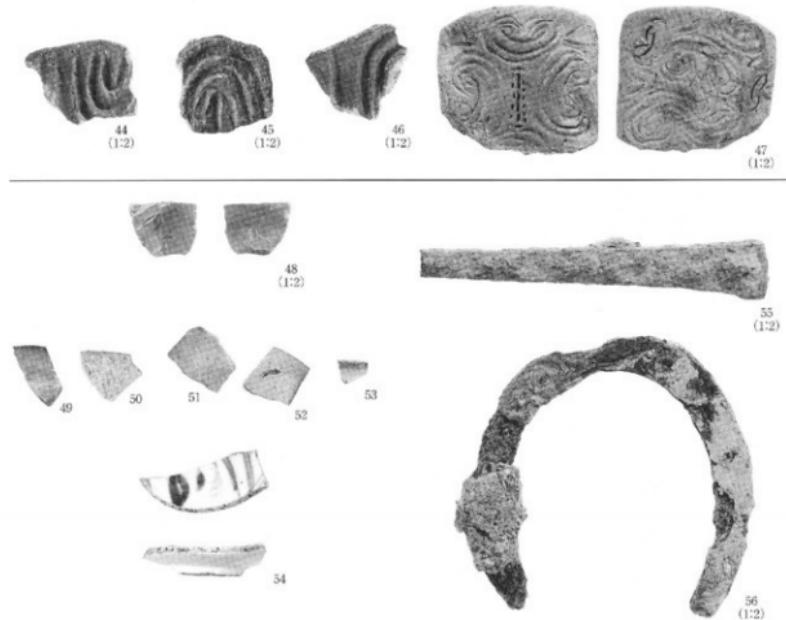
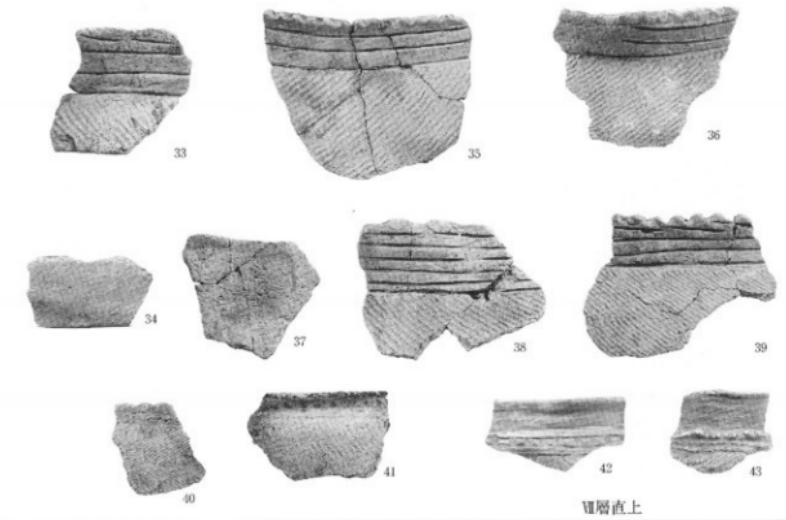
写真図版4 調査区全景・東側自然堤防礎面確認状況



写真図版5 雲南遺跡出土遺物（1）



写真図版6 雲南遺跡出土遺物（2）



写真図版7 雲南遺跡出土遺物（3）

(7) 坂下遺跡 第9次調査

所 在 地 西磐井郡平泉町平泉字坂下11-15ほか
委 託 者 国土交通省東北地方整備局岩手河川国道事務所
事 業 名 一関遊水地事業JR東北本線衣川橋橋梁改築工事
発掘調査期間 平成18年9月4日～11月2日

遺跡コード・路号 NE76-0000・SS-06-09
調査対象面積 1,125m²
調査終了面積 1,125m²
調査担当者 村上 拓・菅野 梢

1 調査に至る経過

坂下遺跡第9次は、北上川上流改修一関遊水地事業衣川地区の事業区域内に位置しているため、当該事業の施行に伴い発掘調査を実施することになったものである。

当該地区は東北本線平泉・前沢間衣川橋りょうの桁下高不足を解消し、支川衣川において周辺地域を洪水から守るために堤防整備をすすめていくことにしている。

当該事業区域の埋蔵文化財包蔵地については、当該事業の施行主体である国土交通省東北地方整備局岩手河川国道事務所の依頼を受け、平成17年度に岩手県教育委員会事務局との協議により、平成18年度財團法人岩手県文化振興事業団に調査を委託することになったものである。

(国土交通省東北地方整備局岩手河川国道事務所)

2 遺跡の位置と立地

坂下遺跡は平泉町の北部に位置し町域中心部に密集する遺跡群の北東の一角を占めている。国指定特別史跡中尊寺の東縁に接し、衣川と北上川の合流点付近に形成された氾濫原に面する段丘上に立地する。全体面積は約175,000m²で、南北長約700m、東西幅約250mの範囲を占めている。

今次調査区はJR平泉駅の北東約1.4km、平泉レストハウス敷地東縁に位置し、遺跡範囲の南東部に相当する。同年度に調査を実施した坂下遺跡第10次調査区は、遺跡範囲の北西部に当たり、今次調査区の北北西約500mに位置する。



第1図 遺跡の位置

1:25,000 一関・古戸・平泉・前沢

3 基本土層

(1) 調査区

調査区はJR東北本線現軌道の西側に接する平泉レストハウス敷地東縁部で、全長約190m・幅15~4mの細長い形狀を呈する。北端区（水田）・中央北区および中央南区（平泉レストハウス駐車場）・南端区（建築物跡地）の4区画に分けて扱っている。

(2) 基本層序

遺跡内に堆積する土層は各地点において個別の性状に相違が認められるものの、その成因と性格から、以下のⅠ~Ⅳ層に矛盾なく対比できる。

- I a 現表土層 [北端区] 10YR4/2灰黄褐色~4/3にぶい黄褐色シルト (現水田耕土)
[中央北・南区] 碎石層 (駐車場舗装)
[南端区] 10YR2/3黒褐色シルト 小礫やや多
- I b 現代盛土層 [各区共通] 10YR3/3暗褐色シルト Ⅳ層土ブロック大量
- I c 現代盛土層グライ化部
(中央北・南区のみ)
- II 盛土前旧表土層 [北端区] 10YR5/2~4/2灰黄褐色粘土質シルト (旧水田耕土)
[中央北区~南端区] 10YR3/3暗褐色シルト
- III 遺物包含層・遺構埋土主体土層
[各区共通] 10YR3/1~3/2黒褐色シルト
- IV 地山 [北端区] 2.5Y5/2暗灰黄~5/3黄褐色シルト (グライ化)
[中央北区~南端区] 10YR5/6黄褐色シルト

4 調査成果

以下、成果の概要を区ごとに記述する。

(1) 北端区

現況は水田。南西隅付近が最も高く、全体に北東方向に緩く傾斜している。区域北部の低位面ではⅣ層下位に位置づけられる漂層が表土直下にあらわれており湧水がみられる。

当区南西部の高位面では計6個の柱穴が検出され、このうち長方形に配置された4個を建物跡1とした。柱間は東西195×南北125cm、柱穴の直径は25~30cm、深さは25~35cmである。調査区西側境界に接する位置にあり、本遺構に帰属する別の柱穴が調査区外に存在する可能性もある。pp 1の埋土からは12世紀代のかわらけ片1点(1)が出土しているが、埋土の主体土はⅡ層土に類似しており本遺構の帰属年代はさらに新しい可能性が高い。このほか表土層下面からも数点の土器片が出土し、形態復元が可能な一部を図示している(2・3)。出土土器の総重量は105gである。

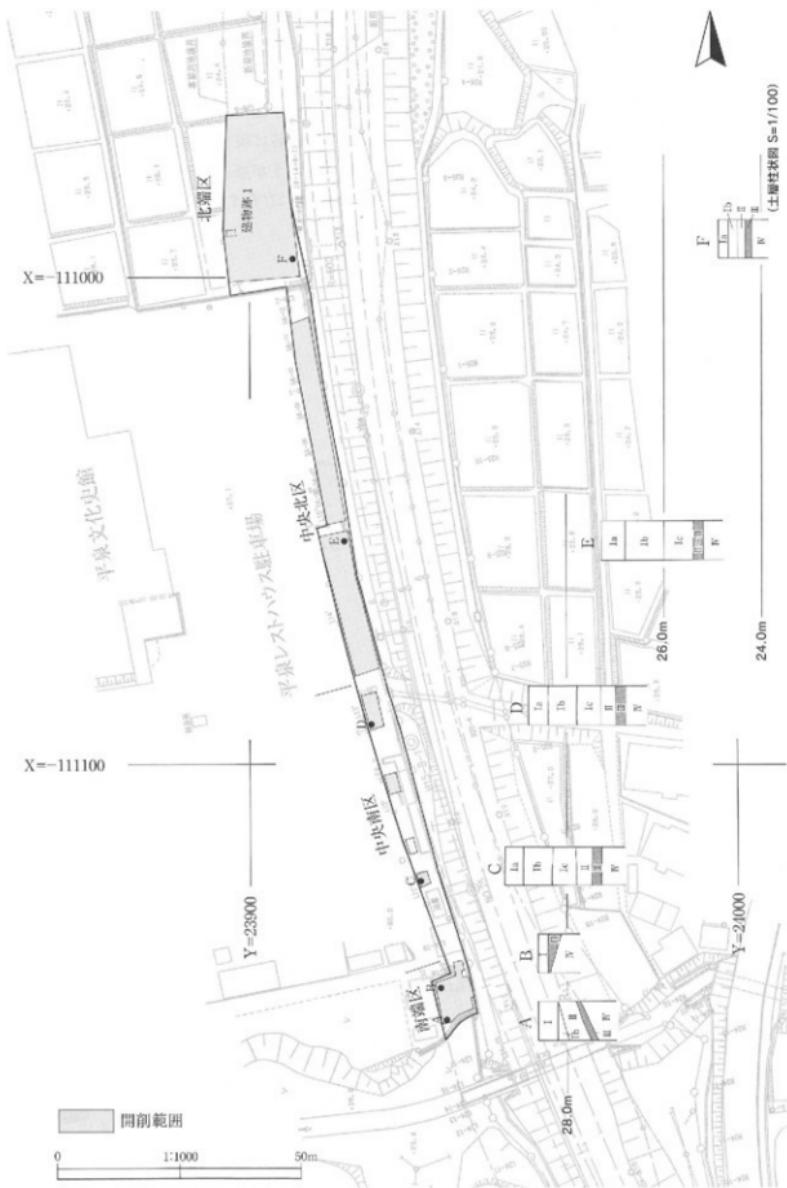
(2) 中央北部・中央南部

平泉レストハウスの駐車場東縁部であり、全面がアスファルト舗装されていた。北部はほぼ全域を面的に開削し、一方、南部ではレストハウス関連の現存施設の間にトレーナーを設定し調査を行った。

調査の結果、この区域はいずれの地点でも現地表面から、層上面(遺構検出面に相当)まで約2mの深さをもち、極めて厚い盛土が施されていることが判明した。遺構・遺物とも検出されなかった。

(3) 南端区

現況は宅地跡で調査開始時は建築物基礎が残された状況であった。当区中央部は西側からのびる微高地頂部に相当し、北側には緩やかに、南側は急激に下っている。中央部付近からは県教委の試掘調査で確認されていた柱穴状ビットや土坑状の遺構が検出されたが、精査の結果、いずれの埋土もⅡ層土



第2図 調査区全体図

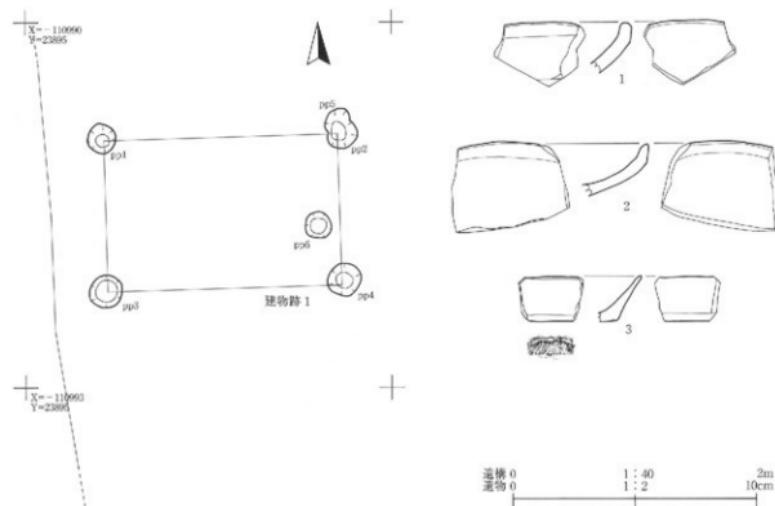
を主体としており近代以降の擾乱と判断した。遺物としては数点の土器片の出土があったが、全てが國化不能な小片であり近隣から流入したものと判断した。

5まとめ

今次調査の範囲内には明確な遺構が存在せず出土遺物も極めて少量であった。土層の堆積状況等から、現況は旧地形から大きな改変を受けていることが確認され、特に現在平泉レストハウスの駐車場となっている中央南北両区の一带は現代の造成によって厚い盛り土が施されていることが判明した。

埋蔵文化財の分布の主体は今次調査区のさらに西側(中尊寺側)に存在する可能性が高い。

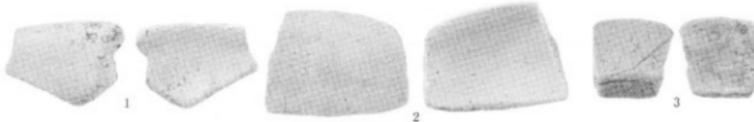
なお、坂下遺跡第9次調査の報告はこれをもって全てとする。



柱穴一覧

	開口部径	深さ	底面標高
pp1	25×23cm	33.5cm	24.012m
pp2	25×20cm	36.2cm	23.942m
pp3	28×28cm	26.0cm	24.030m
pp4	30×27cm	24.4cm	24.076m
pp5	24×20cm	36.2cm	23.942m
pp6	20×20cm	-	-

※pp1～5 理土: 10YR3/1～2/1シルト。地山ブロック少量含。
※pp6は現代の杭穴。材残存し未削。



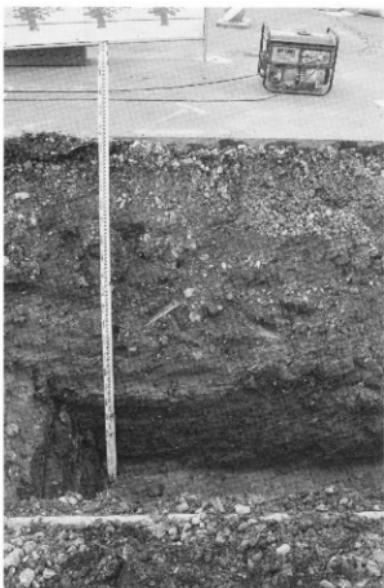
第3図 掘出遺構と出土遺物



写真図版 1 坂下遺跡 第9次調査



北端区東壁土層断面



中央南区土層断面



中央南区全景（南から）

写真図版2 坂下遺跡 第9次調査

報告書抄録

ふりがな	へいせいじゅうはちねんどはくつちょうさほうこくしょ						
書名	平成18年度発掘調査報告書						
副書名	坂下遺跡第9次調査						
卷次							
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書						
シリーズ番号	第505集						
編著者名	村上 拓						
編集機関	(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター						
所在地	〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡11地割185番地						
発行年月日	西暦2007年3月26日						
ふりがな 所取遺跡名	ふりがな 所在地	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
坂下遺跡 第9次調査	岩手県盛岡市平泉字坂下 11-15ほか	03402	NE76-0000	38度 59分 56秒	141度 06分 35秒	2006.09.04 ～ 2006.11.02	1,125m ² 一関逆水地事業 JR東北本線 衣川橋梁架設工事に伴う 緊急発掘調査
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
坂下遺跡	寺社跡	平安時代	建物跡・柱穴	かわらけ	建物跡・柱穴は12世紀より 新しい可能性大		
要約	遺跡は国指定特別史跡中尊寺の東側に隣接している。今次調査区の大半は湧水のある低位面で、12世紀に帰属する遺構はなかった。遺跡の主体は西側の高位面にあるものと思われ、出土遺物も高位面から流入した可能性が高い。						

※緯度・経度は世界測地系における数値である。

II 試掘・確認調査報告

凡例

本書で記載されているコンテナの大きさについては下記のとおりである。

大コンテナ：42×32×30cm

中コンテナ：42×32×20cm

小コンテナ：42×32×10cm

(8~12) 八木沢駒込Ⅰほか4遺跡
や ぎ ざ わ こ ま ご め

所 在 地	宮古市大字八木沢・千穂地区	調 査 対 象 面 積	86,290m ²
委 託 者	国土交通省東北地方整備局三陸国道事務所	試掘・確認調査終了面積	5,619m ²
事 業 名	三陸縦貫道路宮古道路建設事業	調 査 担 当 者	米田 寛・福島正和 横井猛志・荒谷伸郎 鈴木博之
発掘調査期間	平成18年4月7日~11月21日		

調査に至る経過

八木沢駒込Ⅰほか4遺跡は一般国道45号宮古道路事業の事業区域内に位置しているため、当該事業の施行に伴い、試掘・確認調査を実施することとなったものである。

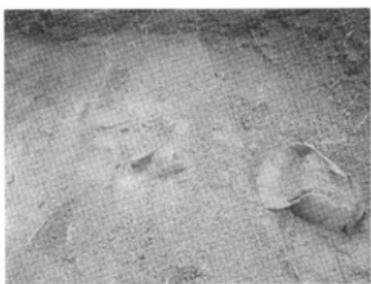
宮古道路事業は、宮古市内の国道45号の線形不良及び陥路箇所を解消し、増大する交通需要に対応するとともに、三陸沿岸地域への高速交通サービスの充実を図り、地域経済の発展、連携・交流の促進のために、平成15年度から事業化している。

これに係わる埋蔵文化財包蔵地の取り扱いについては、平成16年1月26日付け国東整陸調第78号により、国土交通省三陸国道事務所長から、岩手県教育委員会生涯学習文化課長に、埋蔵文化財包蔵地の確認依頼を行い、平成16年1月26日~1月28日、2月24日~2月25日にわたり分布調査を実施した。

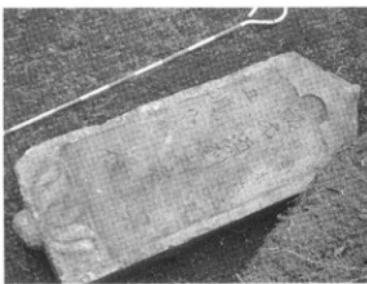
その結果、平成16年3月4日付け「教生第1879号」により、宮古道路建設事業に関連する包蔵地として回答がなされた。

その後、岩手県教育委員会と三陸国道事務所が協議を行い、平成18年2月28日付け「教生第1707号」により、試掘・確認調査を財團法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターに委託することとなったものである。

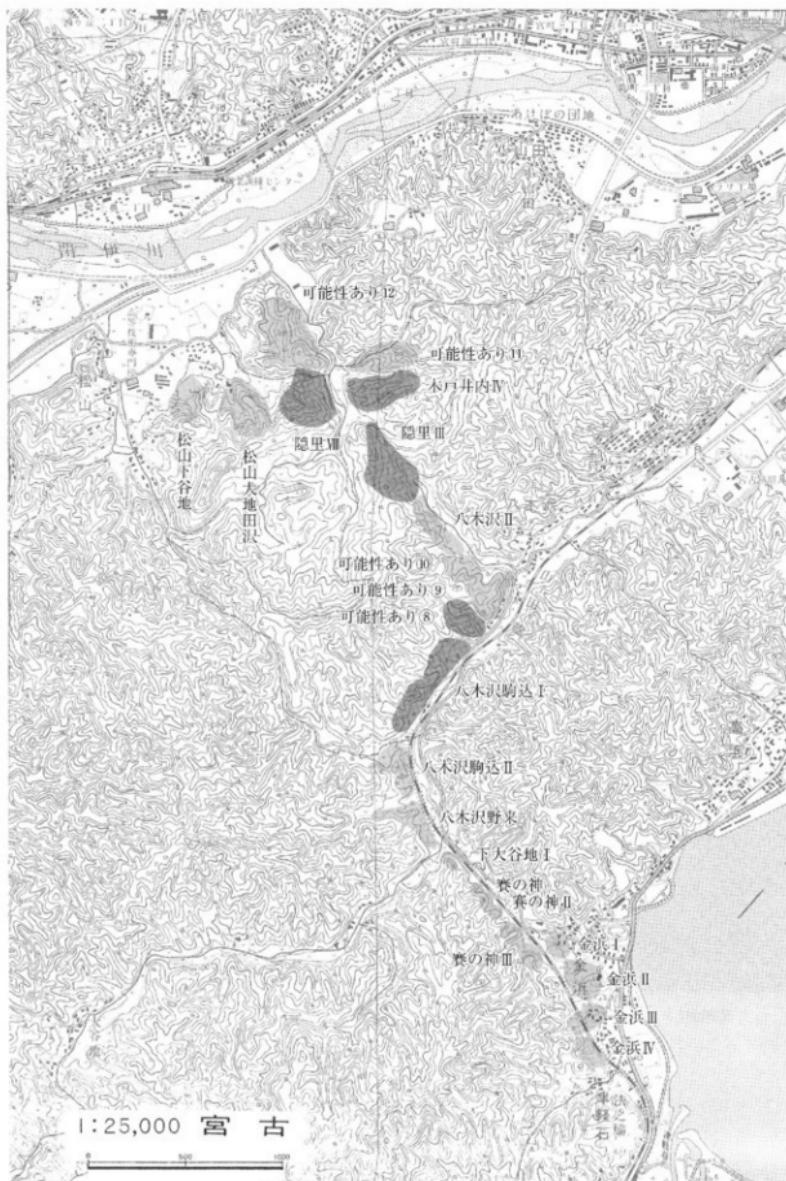
(国土交通省東北地方整備局三陸国道事務所)



写真図版1 八木沢駒込Ⅰほか4遺跡T124出土土師器



写真図版2 八木沢駒込Ⅰ遺跡T10出土墓標
（「宝永六年」の紀年銘を持つ）



第1図 宮古道路関連遺跡位置図

(8) 八木沢駒込Ⅰ遺跡

所 在 地 宮古市大字八木沢第8地割字駒込29-1ほか 調査対象面積 31,100m²
 遺跡コード・略号 LG43-1206・YGK1-06 確認調査終了面積 1,928m²

1 遺跡の位置と立地

本遺跡は、JR磯駒駅の南西約3.6kmに位置し、宮古湾に向かって北流する八木沢川西岸に立地している。現況は畑地、山林である。今回の確認調査範囲は西部の山地から続く尾根部と、それに隣接する斜面部・谷部及び八木沢川が迂回する独立丘陵からなる。

2 基本層序

尾根部・斜面部	谷部（畑地・T601～T609）
I層 黒褐色～暗褐色土（表土）	I層 黒褐色～暗褐色土（表土）
層厚 20～60cm	層厚 30～40cm
II層 黒色土 層厚 0～70cm	II層 灰黄褐色土（砂層） 層厚 50～80cm
III層 暗褐色～黒褐色土 層厚 0～60cm	III層 灰オリーブ色土（グライ化した砂層） 層厚 20cm
IV層 褐色～黄褐色土（マサ土）	IV層 明黄褐色土（砾層） 層厚不明
最終遺構検出面	
	層厚不明

3 調査概要

調査範囲内に163ヶ所のトレンチを設定した。畑地の9ヶ所は重機、それ以外のトレンチは入力による掘削を行った。表土下の各層上面で遺構検出作業を行い、IV層上面での検出作業を最終とした。西側から続く山地は急峻な地形であり、遺構の分布密度は尾根部・斜面部とも非常に低い。遺構・遺物は主に調査区北端の独立丘陵とその麓の谷部及び、調査区南端に集中している。

独立丘陵上では縄文時代晩期の土器が多數出土しており、竪穴住居跡（T27）も検出されたことから当該時期の集落跡と思われる。このT27付近では不自然な盛り上がりが見られ、人工的な盛土の可能性がある。独立丘陵上の堆積はI～IV層上面までが10～30cm程度である。

独立丘陵南側に位置する八木沢川沿いの谷部では、表土直下の洪水堆積層上面から遺構・遺物を確認した。T23では方形の平面形を呈する遺構を2基検出した。それらは重複しており、いずれも埋土に炭化物を含んでいる。付近からは羽口片や鉄滓が出土しているため、工房跡であると考えられる。また、T23の西側に位置するT50においても鉄滓や鉄製品を伴う平面方形の遺構を確認した。ともに表土直下で検出した。

調査区南側の谷部ではT4で炭窯を検出し、T3のII層上部ではブロック状の「和田中揮火山灰」が確認された。また、この谷部から沢を挟んだ調査区南端ではT41から「宝永六年」（1709年）の紀年銘を持つ墓標が出土し、T39では縄文時代の竪穴住居跡を検出した。調査区南端の遺構の一部は、II層上部から掘り込まれている可能性がある。

- (1) 検出遺構 竪穴住居跡4棟、住居状遺構4基、土坑5基、炭窯3基、墓壙2基
- (2) 出土遺物 縄文土器（前期・晩期）9号袋1袋、縄文時代の石器（特殊磨石・磨石・磨製石斧）計4点、陶磁器片（近世以降）11点、鉄滓・鉄製品7点、羽口片2点、近世墓標1点

八木沢駒込I遺跡

トレンチ	遺構	遺物
T2		To-cuブロックが散乱
T3		縄文土器
T4	炭窯I基	近世陶器
T8		近世陶器（相馬焼）
T12		縄文土器（沈綴文、後期か？）
T14		陶器
T21		炭化物
T22	石敷きの道路状遺構（現代）	ガラス片
T23	住居状遺構（工房か？）2基、土坑1基	鉄滓、羽口、炭化物
T25	住居状遺構1基	炭化物
T26	土坑2基	縄文土器
T27	堅穴住居跡1棟	縄文土器（前期・晚期）
T28		縄文土器
T29		縄文土器（晚期）
T31		縄文土器
T35		縄文土器
T39	堅穴住居跡2棟（縄文）	縄文土器（前期・晚期）
T40		縄文土器
T41	墓塚2基	近世墓標（宝永年間）、鉄釘
T43	土坑1基	縄文土器
T46	土坑1基	縄文土器
T49		鉄製品、筋鉢車？
T50	堅穴住居跡1棟（工房か？）	鉄滓、鉄製品、筋鉢車の軸、炉壁、磁器
T51		縄文土器、磨製石斧
T52		砥石
T55		縄文土器
T208		砥石
T209		縄文土器
T215		縄文土器
T219		縄文土器、赤化塵
T221		縄文土器
T224		縄文土器
T519	炭窯I基	
T522	住居状遺構1基	炭化物

報告書抄録

ふりがな	へいせいじゅうはちねんどはくつちょうさほうこくしょ
書名	平成18年度発掘調査報告書
副書名	八木沢駒込I遺跡
巻次	
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第505集
編著者名	鈴木博之
編集機関	(財) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
所在地	〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡11地割185番地 TEL(019) 638-9001
発行年月日	2007年3月26日

ふりがな 所取遺跡名	ふりがな 所在地	コード	北緯 °.′.″	東経 °.′.″	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村 遺跡番号					
八木沢 駒込I遺跡	いわきんさんごこし 岩手県宮古市 八木沢駒込I遺跡	03202 LG43-1206	39度	141度	2006.4.10		
			36分	55分	~	1,928m ²	
			35秒	56秒	2006.11.21		
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項	
八木沢 駒込I遺跡	集落跡 生産遺跡 その他の墓	縄文時代 古代 近世	堅穴住居跡 住居状遺構 土坑	4棟 4基 5基 2基	縄文土器、特殊磨石、 磨石、磨製石斧、 羽口、鉄滓、鉄製品、 近世陶器、近世墓標		

本遺跡は八木沢川西岸に立地し、西岸の山地から続く尾根部と隣接する斜面部、谷部及び、八木沢川が迂回する独立丘陵で構成される。調査区北側の独立丘陵上は縄文時代晚期の集落跡で、独立丘陵麓の八木沢川沿い平坦部は製鉄関連のスペースであった。調査区南側は縄文時代の集落で、一部は宝永年間（1701～1710年）に墓域として使われた空間であったと想定される。

*緯度・経度は世界測地系における数値である。

(9) 可能性あり⑧

所 在 地 宮古市大字八木沢第8地割字駒込7-1ほか 調 査 対 象 面 積 9,300m²
遺跡コード 確認調査終了面積 274m²

1 遺跡の位置と立地

本遺跡は、JR磯鶴駅の南西約3.4kmに位置し、宮古湾に向かって北流する八木沢川西岸に立地している。現況は山林である。今回の試掘調査範囲は西部から続く山地の尾根部と、それに隣接する斜面部及び谷部からなる。

2 基本層序（谷部）

I 層	暗褐色土（表土）	層厚 10~90cm
II 層	黒色土	層厚 0~50cm
III 層	黒褐色土	層厚 0~40cm
IV 層	褐色～黄褐色土（マサ土） 最終遺構検出面	層厚不明

※尾根部・斜面部の堆積は I 層と IV 層のみ確認できた。

3 調査概要

調査範囲内に51カ所のトレンチを設定し、すべて人力による掘削を行った。表土下の各層上面で遺構検出作業を行い、IV 層上面での検出作業を最終とした。

本調査区は、急峻な地形であり集落の形成には適していない。南側谷部の中央付近は堆積が厚く、IV 層まで掘削すると湧水する。II 層は他の遺跡では遺物包含層に相当するが、遺物は出土しなかった。また、斜面部に近い谷部では表土直下で岩盤が露出している。したがって、谷部は植林を行った際に削平された可能性がある。

南側斜面で焼土を伴う不定形遺構を 1 基検出した (T11)。埋土の一部にサブトレンチを入れたところ壁が立ち上がり、平坦面を確認した。焼土は帶状を呈し、竪穴住居跡もしくは炭窯の煙道部に由来する可能性がある。遺物は伴っておらず、周囲のトレンチからは遺構・遺物ともに確認できなかつた。

(1) 検出遺構 不定形遺構 1 基

(2) 出土遺物 鉄釘 1 点



写真図版3 可能性あり⑧作業風景



写真図版4 可能性あり⑧T11検出遺構

可能性あり⑧

トレンチ	遺構	遺物
T11	不定形遺構	
T17		鉄釘

報告書抄録

ふりがな	へいせいじゅうはちねんどはっくつちょうさほうこくしょ
書名	平成18年度発掘調査報告書
圖書名	可能性あり⑧
卷次	
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第505集
編著者名	鈴木博之
編集機関	(財) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
所在地	〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡11地割185番地 TEL (019) 638 9001
発行年月日	2007年3月26日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ′ ″	東経 ° ′ ″	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
可能性あり ⑧	岩手県宮古市 八木沢川西岸 大字八木沢第 8地割字駒込 7-1ほか		03202	39度 36分 45秒	141度 56分 04秒	2006.4.10 ~ 2006.11.21	274m ²	道路整備事業 に伴う試掘調 査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
可能性あり ⑧	生産遺跡		不定形遺構		1基	鉄釘		
要約	宮古湾に向かって北流する八木沢川西岸に立地し、現況は山林である。西部の山地から続く尾根部と隣接する斜面部、谷部で構成される。急峻で集落形成には適さない地形である。尾根部・谷部共に明瞭な遺構は確認できず、南斜面部で焼土を伴う不定形遺構が1基のみ検出されたが、それに伴う遺物は確認できなかった。時期は不明である。							

※緯度・経度は世界測地系における数値である。



第2図 八木沢駒込 I 遺跡、可能性あり⑧トレンド配置図

(10) 隠里Ⅲ遺跡

所 在 地 宮古市大字八木沢第3地割字中村119-3ほか 調査対象面積 21,400m²
 遺跡コード・略号 LG33-2292・KZⅢ-06 確認調査終了面積 1,550m²

1 遺跡の位置と立地

本遺跡は、JR磯鶴駅の西約3kmに位置し、閉伊川と八木沢川に挟まれた山地に立地している。現況は山林である。今回の確認調査範囲は西部から続く山地の尾根部と、それに隣接する斜面部及び谷部からなる。

2 基本層序

尾根部・斜面部	谷部
I層 黒褐色～暗褐色土（表上）	I層 暗褐色土～表土
	層厚20～80cm
II層 黒色土	II層 明褐色土～シルト質砂
	層厚 0～40cm
III層 暗褐色土	III層 褐色土～砂質シルト
IV層 褐色～黄褐色土（マサ上）	IV層 黒褐色土
最終遺構検出面	V層 灰褐色土～砂質シルト
	層厚不明
	VI層 灰褐色土～シルト
	層厚 5～20cm
	VII層 黒褐色土～シルト
	層厚 5cm
	VIII層 黄褐色土～シルト
	層厚不明

3 調査概要

調査範囲内に149ヵ所のトレンチを設定し、調査区南側の谷部と斜面部は重機、それ以外のトレンチは人力による掘削を行った。表土下の各層上面で遺構検出作業を行い、尾根部・斜面部はIV層上面、谷部はV層上面での検出作業を最終とした。

尾根部には、鉄塔に因るワイヤー製アース線が埋設されており、T1～T3とT5～T6で確認した。尾根頂部付近に設定したT22とT23では、V字型の断面形を持ち南北に細長い平面プランを断片的に確認した。地形観察の結果、これらは斜面を掘削して作られた山道が平面プランとして検出されたものと思われる。西側の谷部でも山道が形成されている。

遺構は、調査区北側の鉄塔より東側の尾根部～谷部と、調査区南側の尾根部～斜面部にかけて集中的に分布している。調査区北側では尾根部で竪穴住居跡（T107, T110）、谷部で土坑（T101, T103）と炭窯（T119）、鉄塔より南側の尾根頂部付近で陥し穴2基（T10, T12）を検出した。西側の斜面部では焼土を検出した（T39）。竪穴住居跡は方形の平面形が想定されるため古代（奈良～平安時代）に属するものと思われる。調査区南側では北側より続く尾根部先端付近で土師器と焼土を伴う竪穴住居跡（T601）、この尾根より西側の斜面部と谷部では炭窯（T605, T633）を確認した。竪穴住居跡は古代に属すると思われる。

今回の調査区南側の事業用地外には10,000m²以上の平場が存在している。集落が形成されるとすればこの平場を居住活動の中心とするであろう。

- (1) 検出遺構 竪穴住居跡3棟、陥し穴2基、土坑5基、柱穴3個、炭窯4基、焼土遺構1基
- (2) 出土遺物 縄文土器（後～晩期）4号袋1袋、土師器5点

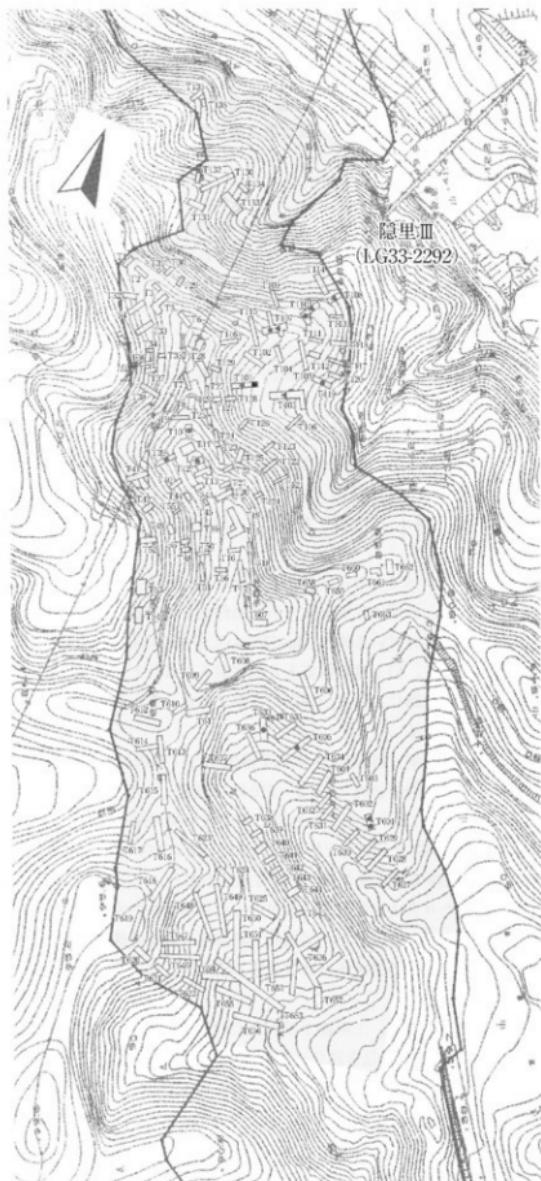
隠里Ⅲ遺跡

トレンチ	遺構	遺物
T10	陥し穴1基	
T12	陥し穴1基	
T39	焼上遺構1基	
T101	土坑1基	縄文土器
T103	土坑4基・柱穴3個	繩文土器
T107	堅穴住居跡(古代?)	縄文土器
T108		縄文土器
T110	堅穴住居跡(古代)	
T119	炭窯2基	
T601	堅穴住居跡(古代)	土師器
T605	炭窯1基	炭化物
T633	炭窯1基	炭化物

報告書抄録

ふりがな	へいせいじゅうはちねんどはくつちょうさほうこくしょ							
書名	平成18年度発掘調査報告書							
副書名	隠里Ⅲ遺跡							
巻次								
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第505集							
編著者名	鈴木博之							
編集機関	(財) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター							
所在地	〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡11地割185番地 TEL (019) 638-9001							
発行年月日	2007年3月26日							
ふりがな 所取遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	北緯 遺跡番号	東経 ° ° °	調査期間	調査面積	調査原因	
いわてけんみやこじ 岩手県宮古市 大字八木沢 3地割字中村 119 - 3ほか		03202	LG33-2292	39度 37分 35秒	141度 55分 46秒	2006.4.10 ~ 2006.11.21	1,550m ²	道路整備事業 に伴う確認調査
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
隠里Ⅲ遺跡	集落跡	縄文時代 古代	堅穴住居跡 陥し穴 土坑 炭窯 焼上遺構	3棟 2基 5基 4基 1基	縄文土器 土師器			
要約	北上山地から宮古湾に注ぐ伊川と宮古湊に向かって北流する八木沢川に挟まれた山地に立地し、現況は山林である。西部の山地から続く尾根部と隣接する斜面部及び谷部で構成される。調査区北側は、送電線鉄塔とそれに伴うアース線、作業道路などで削平を受けているところがある。遺構が確認されたのは調査区南側と北側のそれぞれ限られた範囲である。堅穴住居跡は平面形や出土遺物から古代に属するものと想定される。陥し穴は尾根頂部付近、土坑は谷部、炭窯は谷部と斜面部で検出したが、いずれも時期不明である。本遺跡と隣接する八木沢Ⅱ遺跡北端の尾根部は遺構が高密度で確認されているが、本遺跡の遺構密度は低い。							

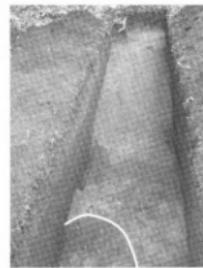
※緯度・経度は世界測地系における数値である。



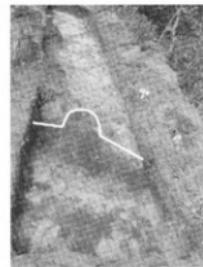
第3図 隠里III遺跡トレンチ配置図



写真図版5
隠里III遺跡T119検出遺構



写真図版6
隠里III遺跡T101検出遺構



写真図版7
隠里III遺跡T601検出遺構

※T14欠番
●遺構検出トレチ
▲遺物出土トレチ
0 50m
1 : 1500

(11) 木戸井内Ⅳ遺跡

所 在 地 宮古市大字千徳第14地割字木戸井内71 調査対象面積 8,400m²
 遺跡コード・略号 LG33-2263・KDN IV-06 確認調査終了面積 546m²

1 遺跡の位置と立地

本遺跡は、JR磯駒駅の西約3kmに位置し、閉伊川と八木沢川に挟まれた山地に立地している。現況は山林である。今回の確認調査範囲は東部から続く山地の尾根部と、それに隣接する斜面部及び谷部からなる。

2 基本層序

尾根部・斜面部		谷部	
I層 黒褐色～暗褐色土（表土）	層厚 5～60cm	I層 黒褐色～暗褐色土（表土）	層厚 10～30cm
II層 黒色土	層厚 0～60cm	II層 暗褐色土	層厚 0～50cm
III層 暗褐色土	層厚 0～30cm	III層 黒褐色	層厚 10～30cm
IV層 褐色～黄褐色土（マサ土）	最終遺構検出面 層厚不明	IV層 暗褐色～褐色土	層厚 0～40cm
		V層 黄褐色土（地山）	層厚不明

3 調査概要

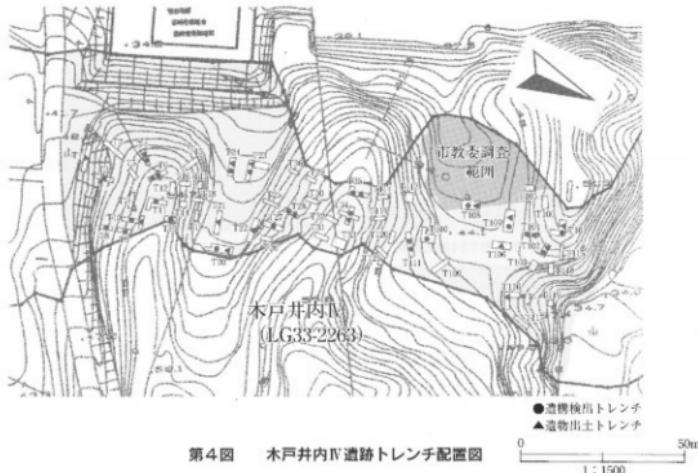
調査範囲内に56ヶ所のトレンチを設定し、すべて人力による掘削を行った。表土下の各層上面で遺構検出作業を行い、尾根・斜面部はIV層上面、谷部はV層上面での検出作業を最終とした。調査区西側の削平を受けている斜面部及び金網が設置されている約1,500m²についての調査は行っていない。

調査区南側の斜面は削平後に盛土されており、出土遺物は盛土と共に搬入されたと考えられる。また、調査区中央の尾根頂部付近は木材切り出し道路によって一部削平されている。しかし、遺構は調査区内のほぼ全域において高い密度で分布している。

調査区北側の谷部では、はたけ跡と遺物包含層（密度低）、土坑を検出した（T107・T108）。また、調査区北端の斜面部から尾根部にかけて竪穴住居跡2棟（T102・T104）と炭窯（T101）を検出した。T102の竪穴住居跡は土師器を伴うもので古代に属すると想われる。調査区中央の尾根頂部では工房跡と思われる遺構を検出した（T34）。多量の鉄滓と焼上を伴っている。谷部においても鉄滓が出土していることからT34の工房跡に関連する廃滓場が形成されている可能性がある。

今回の確認調査と、平成12～17年度にわたり宮古市教育委員会が行った発掘調査の成果から、本遺跡は縄文時代と古代以降の複合遺跡であることが判明した。尾根部・斜面部での遺構検出面は縄文・古代以降とともにIV層上面、谷部における古代以降の遺構検出面はIII層上面で、これより下層は縄文時代の遺物包含層である。

- (1) 検出遺構 竪穴住居跡8棟、住居状遺構4基、工房跡1棟、はたけ跡3ヶ所、焼土遺構1基、土坑5基、柱穴1個、溝跡1条、炭窯2基、遺物包含層2ヶ所
- (2) 出土遺物 縄文土器（前期・晚期）9号袋3袋、縄文石器（特殊磨石・磨石・石鎌）計3点、土師器9号袋3袋、須恵器・近世陶器9号袋1袋、鉄滓・鉄製品小コンテナ1箱、近世供養碑1点



第4図 木戸井内IV遺跡トレンチ配置図

木戸井内IV遺跡

トレンチ	遺構	遺物
T1		縄文土器（中期）、特殊磨石
T3		縄文土器（早期・後期）
T4	住居状遺構1基、土坑1基	縄文土器、土師器
T6	供養塔	縄文土器、赤化織
T8	土坑1基（炭窯か？）	
T9		鉄滓
T10	堅穴住居跡2棟（古代）	土師器
T11	住居状遺構1基、柱穴1個	
T12	住居状遺構1基	炭化物（多量）
T13	溝跡1条	
T20	はたけ跡1ヶ所、焼土遺構1基	鉄滓、近世陶器（相馬燒）、羽口
T21		縄文土器、鉄滓
T22		須恵器
T23	はたけ跡1ヶ所（古代）	土師器、鉄滓、磨石、剝片、羽口
T24	遺物包含層か？	縄文土器（前期）、鉄滓、須恵器大甕
T27	土坑1基	
T28	堅穴住居跡1棟（古代）	縄文土器、土師器
T34	工房跡1棟（焼土伴う）	鉄滓
T35	住居状遺構1基	鉄滓
T100	土坑1基	
T101	炭窯1基	縄文土器、炭化物
T102	堅穴住居跡1棟（古代）	土師器（奈良）
T104	堅穴住居跡1棟（古代）	鉄製品、近世陶器
T106		縄文土器、近世陶器
T107	はたけ跡（古代）、縄文包含層	縄文土器、土師器、炭化物、近世陶器、剝片
T108	はたけ跡（古代）、土坑1基、縄文包含層	縄文土器、（後期）、土師器、炭化物
T110	炭窯1基	
T111	はたけ跡（古代）、縄文包含層	縄文土器、石器、鉄滓、羽口、陶器（擂鉢）
T116		鉄滓、鉄製品



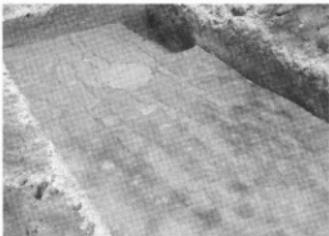
写真図版8 木戸井内IV遺跡T34検出遺構



写真図版9 木戸井内IV遺跡T35検出遺構



写真図版10 木戸井内IV遺跡T102検出遺構



写真図版11 木戸井内IV遺跡T108検出遺構

報告書抄録

ふりがな	へいせいじゅうはちねんどはくつちょうさほうこくしょ						
書名	平成18年度発掘調査報告書						
副書名	木戸井内IV遺跡						
巻次							
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書						
シリーズ番号	第505集						
編著者名	鈴木博之						
編集機関	(財) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター						
所在地	〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡11地割185番地 TEL(019) 638-9001						
発行年月日	2007年3月26日						
ふりがな 所取遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	北緯 遺跡番号	東経 ° ° °	調査期間	調査面積	調査原因
木戸井内IV 遺跡	岩手県盛岡市 大字千徳第14 地割字木戸井 内71	03202	LG33-2263	39度 37分 22秒	141度 55分 44秒	2006.4.10 ～ 2006.11.21	546m ² 道路整備事業 に伴う確認調 査
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
木戸井内IV 遺跡	集落跡 生産遺跡	縄文時代 古代 近世	堅穴住居跡 住居状遺構 工房跡 はたけ跡 遺物包含層 土坑 溝跡	8棟 4基 1棟 3ヵ所 2ヵ所 5基 1条	繩文土器 磨製石斧 土師器 須恵器 羽口 鉄滓 鉄製品		
要約	北上山地から宮古湾に注ぐ閉伊川と宮古湾に向かって北流する八木沢川に挟まれた山地に立地し、現況は山林である。西部の山地から続く尾根部と隣接する斜面部及び谷部で構成される。調査区内のほぼ全域に高い密度で遺構・遺物が分布している。調査区南側と北側の谷部ではたけ跡、北端の尾根部で堅穴住居跡、調査区中央から北側の尾根部・斜面部で製鉄関連の遺構・遺物を確認した。縄文時代～古代以降の複合遺跡である。						

※緯度・経度は世界測地系における数値である。

(12) 隠里Ⅷ遺跡

所 在 地 宮古市大字千徳第14地割字木戸井内11-8ほか 調査対象面積 16.090m²
 遺跡コード・略号 LG33-2260・KZⅧ-06 確認調査終了面積 1.324m²

1 遺跡の位置と立地

本遺跡は、JR磯崎駅の西約3kmに位置し、閑伊川と八木沢川に挟まれた山地に立地している。現況は山林・畠地である。今回の確認調査範囲は西部から続く山地の尾根部と、それに隣接する斜面部及び、谷部でからなる。

2 基本層序

尾根部・斜面部	谷部
I層 黒褐色～暗褐色土（表土） 層厚20～70cm	I層 褐色土～シルト 層厚10～70cm
II層 黒色土 层厚 0～80cm	II層 明褐色土～シルト 層厚10～50cm
III層 暗褐色土 层厚 0～30cm	III層 黒色土～シルト 層厚30cm以上
IV層 褐色～黄褐色土（マサ土）	IV層 黒褐色土～シルト 層厚20cm以上
最終構造確認面	V層 明褐色～黄橙～棕土（地山） 層厚不明
層厚不明	

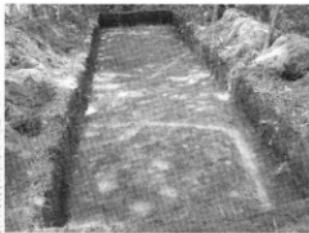
3 調査概要

調査範囲内に145カ所のトレーナーを設定し、すべて人力による掘削を行った。表土下の各層上面で遺構検出作業を行い、尾根・斜面部はIV層上面、谷部はV層上面での検出作業を最終とした。調査区東端から南側の斜面部については地形が急峻であり、道路への土砂流出が懸念されるため調査は行っていない。調査区は東西に長く、中央と東側の尾根・斜面部及び西・南・北に位置する谷部で構成される。

中央と東側の尾根・斜面部では高密度で遺構を確認した。堅穴住居跡は出土遺物から縄文～弥生時代と古代に属するものと思われる。表土直下で平面プランを確認でき、3棟以上の重複が見られるものもある。尾根部に位置する堅穴住居跡の埋土は10～30cm程度である。しかし、中央から東側の尾根にかけての緩い斜面に位置するものはII層下の検出で、埋土は35～60cmに達する。土坑も堅穴住居跡とはほぼ同じ範囲にまとまっている。

南側谷部で盛土状の高まりを確認した（T115）。時期は不明であるが、上面から土師器片が出土している。また、北側谷部では遺物包含層を確認した。表土直下の検出で深さは約80cmある。縄文土器（中期）が出土している。西側谷部は平坦な地形で表土下は水成堆積である。明確な遺構は確認していない。耕作土中からわずかに出土した遺物の中に鉄滓が含まれているが、周辺で製鉄関連遺構は確認できなかった。耕作土は外部から幾度か搬入されているよう、鉄滓はその客土に混入していた可能性が高い。

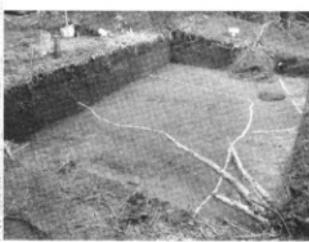
- (1) 検出遺構 堅穴住居跡18棟、住居状遺構4基、土坑18基、柱穴3個、溝跡1条、炭窯2基、遺物包含層2カ所、盛土状遺構1基
- (2) 出土遺物 縄文土器（中期・後期・晚期）4号袋1袋、弥生土器9号袋1袋、石器（剥片・磨石）9号袋1袋、石製有孔円盤1点、土師器小コンテナ1箱、陶磁器類9号袋1袋、鉄滓・鉄製品4号袋1袋



写真図版12 隠里Ⅷ遺跡T122検出遺構



写真図版13 隠里Ⅷ遺跡T122検出遺構



写真図版14 隠里Ⅷ遺跡T128検出遺構

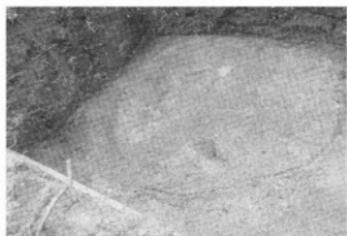
- 遺構検出トレンチ
- ▲ 遺物出土トレンチ

0
50m
1:1500

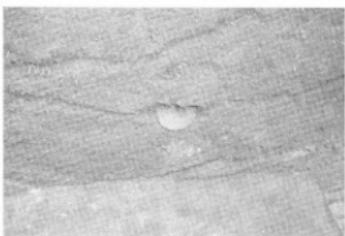
第5図 隠里Ⅷ遺跡トレンチ配置図

隅里Ⅶ遺跡

トレンチ	遺構	遺物
T7	土坑1基	
T9	炭窯1基	
T10	住居状遺構1基	
T12	堅穴住居跡2棟(古代)	
T14	堅穴住居跡1棟(古代)	
T15	住居状遺構1基	
T19	柱穴1個	
T23	土坑1基	上器
T28	堅穴住居跡1棟(古代)	
T50		炭化物、鉄製品
T58		近世陶器、鐵滓
T105		縄文土器(後期)
T106		縄文土器(中期・晚期)、土器
T107		濁片
T108		縄文土器(中期・晚期)、土器、上師器、鉄滓
T109	柱穴2個	土師器、土器、陶器
T110		縄文土器(晚期)、弦生土器
T111	炭窯1基	
T115	堅土状遺構1基	土師器(奈良)、石製有孔円錐
T119	溝跡1条	
T121		土師器
T122	堅穴住居跡3棟(古代)	粘土塊、縄文土器
T124	堅穴住居跡1棟(奈良)	土師器(奈良)
T125		縄文土器
T127	土坑2基	土師器
T128	堅穴住居跡2棟(古代)	縄文土器(晚期)、弦生土器、土師器
T129		縄文土器、上師器
T130	堅穴住居跡1棟(古代)	土師器
T131	土坑1基	縄文土器(晚期)
T135	土坑2基	
T201	土坑5基	
T203	住居状遺構1基、土坑2基	縄文土器(晚期)
T205	堅穴住居跡2棟	縄文土器(晚期)、弦生土器
T207	土坑1基	
T209	堅穴住居跡2棟(縄文)	
T210	土坑1基	
T211	堅穴住居跡1棟(縄文)	
T212	縄文遺物包含層	縄文土器(中期)、陶器
T216	堅穴住居跡(古代)	
T218	縄文遺物包含層(約80cm)	縄文土器(中期)、弦生土器
T219	縄文遺物包含層(約80cm)	縄文土器(中期)
T220		縄文土器(中~晚期)、弦生土器
T223		縄文土器
T227	住居状遺構1基(縄文)	縄文土器(晚期)
T236	堅穴住居跡2棟(縄文)	縄文土器
T237	土坑3基	
T238	土坑1基	



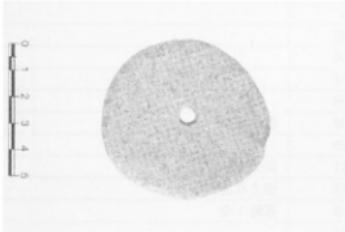
写真図版15 隠里Ⅷ遺跡T124検出遺構



写真図版16 隠里Ⅷ遺跡T115遺物出土状況



写真図版17 隠里Ⅷ遺跡出土土器



写真図版18 隠里Ⅷ遺跡出土石製有孔円盤

報告書抄録

ふりがな	へいせいじゅうはちねんどはくつちょうさほうこくしょ					
書名	平成18年度発掘調査報告書					
副書名	隠里Ⅷ遺跡					
卷次						
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書					
シリーズ番号	第505集					
編著者名	鈴木博之					
編集機関	(財) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター					
所在地	〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡11地割185番地 TEL(019) 638-9001					
発行年月日	2007年3月26日					
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	北緯 遺跡番号	東経	調査期間	調査面積
隠里Ⅷ遺跡	岩手県盛岡市 大字千徳第14 地割字木戸井 内11-8ほか	03202	LG33-2260	39度 37分 26秒	141度 55分 31秒	2006.4.10 ～ 2006.11.21
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項	
隠里Ⅷ遺跡	集落跡	縄文時代 古代	堅穴住居跡 住居状遺構 遺物包含層 土坑 溝跡 盛土状遺構	18棟 4基 2カ所 18基 1条 1基	縄文土器、弥生土器、 磨石、剥片、土器器、 鉄滓、鉄製品、陶磁器	道路整備事業 に伴う確認調査
要約	北上山地から宮古湾に注ぐ閉伊川と宮古湾に向かって北流する八木沢川に挟まれた山地に立地し、現況は畠地・山林である。西部の山地から繋ぐ尾根部と隣接する斜面部及び谷部で構成される。調査区中央～東側にかけての尾根部と斜面部では高い密度で遺構・遺物が分布している。縄文時代の堅穴住居跡が11棟検出され、複合遺跡であることを確認した。調査区西側は急峻な斜面と平坦な谷部で構成され、谷部は湧水があり集落の形成には適しない。西側の谷部・斜面部共に明確な遺構は確認されず、わずかに出土した遺物もこの場所に由来するものではない可能性が高い。					

※緯度・経度は世界測地系における数値である。

III 発掘調査概報

1 国関係

凡例

本書で記載されているコンテナの大きさについては下記のとおりである。

大コンテナ：42×32×30cm

中コンテナ：42×32×20cm

小コンテナ：42×32×10cm

(13) 川日A遺跡 第5次調査

所 在 地	盛岡市川日5地割内	遺跡コード・路号	LE28-0151・YKA-06-05
委 託 者	国土交通省東北地方整備局岩手河川国道事務所	調査対象面積	1,080m ²
事 業 名	一般国道106号都南川日道路	調査終了面積	250m ²
発掘調査期間	平成18年8月1日～11月2日	調査 担当者	八木勝枝・藤原大輔

遺跡の立地

本遺跡はJR東北本線盛岡駅の南東約7.5kmに位置し、南大橋付近で北上川に合流する蘂川によって形成された河岸段丘上の左岸に立地する。標高は179m前後である。

調査の概要

基本層序はI～VI層。I層現耕作土・表土、II層暗褐色土層、III層暗褐色土層、IV層黒褐色土層、V層小礫混じりのにぶい黄褐色土層、VI層にぶい黄褐色土層で、遺構検出面はII～IV層上面である。II～IV層は遺物包含層で、調査区全体に広がる。III層は主に南山側からの土砂堆積に起因し、a～c層に分層される。非常に薄く、水平に堆積している部分もある。II層は晩期が大部分で、IV層は中期末～後期前葉が含まれる。III層は後期前葉～晩期前葉が含まれる。

過去に岩手大学草間教授によって3度、盛岡市教育委員会によって1度の発掘調査が行われており、縄文時代後・晩期の配石造構が検出されている。過去調査地点はいずれも今回調査区以北に位置する。今回調査区内の北側約350m²の範囲でも配石造構が検出され、遺跡全体としての配石造構群の南限を把握することができた。配石造構の下部には土坑が伴うものもあり、墓壙と考えられる。また、配石造構群範囲内で配石を伴った状態で埋設土器造構が見つかっており、配石造構群は大規模な墓域と考えられる。配石造構12基・埋設土器造構5基・焼土1基を検出した。配石造構の中には焼成面が認められない石圓炉形を呈するものがある。

南山側包含層(250m²)は出土土器が中期末・後期前葉・後期中葉と続き、後期後葉が欠落する。その後、晩期前葉の遺物が堆積している。調査区外南側は急傾斜の山斜面となっており、III層の起源となる度重なる土砂崩れの痕跡を確認した。土層の堆積順序から、直径1m前後の山礫で構成される大規模な土砂崩れは後期後葉に起きたものと考えられる。調査区南では縄文時代の焼土1基・土坑1基・柱穴状小土坑3個を検出した。

出土遺物は、縄文時代中期末・後期・晩期土器大コンテナ58箱、石器中コンテナ9箱、土製品（土偶・スタンプ形土製品・土製耳飾・土製腕輪・土器片円板）、石製品（石棒類・玉）がある。



配石造構全景（北西から）



石圓炉形の配石造構（北から）

(14) 飯岡才川遺跡 第13次調査

所 在 地	盛岡市飯岡新田2才川48-1ほか	遺跡コード・路号	LE16-2291・ISW-06-13
委 託 者	国土交通省東北地方整備局岩手河川国道事務所	調査対象面積	2,280m ²
事 業 名	一般国道46号盛岡西バイパス建設事業	調査終了面積	2,280m ²
発掘調査期間	平成18年6月21日～7月31日	調査 担当者	丸山直美・高橋聰子

遺跡の立地

本遺跡は、季石川右（南西）岸の河岸段丘上に立地し、旧河道や自然堤防が複雑に入り組む地点に位置する。今回の調査区は昨年度調査分の南側に隣接する2,280m²が対象となった。標高は122～123m前後で、現況は畠地である。

調査の概要

今回の調査で検出された遺構は、縄文時代の陥し穴状遺構8基、平安時代の竪穴住居跡1棟、竪穴住居状遺構2棟、近世以降の掘立柱建物跡5棟、土坑1基、井戸跡1基、溝跡1条、柱穴状小土坑28個で、当地点が古代から集落の一部を構成していたことが判明した。調査区北西側RA042竪穴住居跡には埋土中位に十和田a 降下火山灰とみられるテフラがレンズ状に堆積している。また、RE013竪穴住居状遺構の底面焼土に対し簡易フローテーションを実施したところ、少量の炭化種子（オオムギ・ムギ類・不明炭化種実）が検出されている。

遺物は小コンテナ1箱分が出土している。内訳は土師器片（壺・甕：共にロクロ調整）、須恵器片（壺・甕壺類）、陶磁器片（碗皿類、擂鉢）、硯、炭化種子等である。



航空写真（南から）

(15) 矢盛遺跡 第9次調査

所 在 地	岩手県盛岡市飯岡新田4畠中10ほか	遺跡コード・路号	LE26-0139・IYM-06-09
委 託 者	国土交通省東北地方整備局岩手河川国道事務所	調査対象面積	3,055m ²
事 業 名	一般国道46号盛岡西バイパス建設事業	調査終了面積	3,055m ²
発掘調査期間	平成18年4月10日～5月31日	調査 担当者	丸山直美・高橋聰子

遺跡の立地

本遺跡は零石川右（南）岸の河岸段丘上に立地し、旧河道や自然堤防が複雑に入り組む地点に位置している。この為、調査区内の層序及び構造埋土中には随所に水成堆積の様相が認められる。標高は122m前後で、現況は畑地である。西方30mには本年度調査が行われ、中世の居館跡が検出された矢盛遺跡第11次調査区が隣接する。

調査の概要

今回の調査で検出された遺構は、平安時代の溝跡2条、時期不明の掘立柱建物跡2棟、土坑2基、溝跡5条、柱穴列1列、柱穴状小土坑201個である。このうち、平安時代の溝としたRG008は、底面に2～3列の工具痕を認め、埋土中位に十和田aテフラとみられる混入物が堆積する。

このほか、隣接する矢盛遺跡第11次調査区から延びる旧河道を1箇所検出している。本河道は調査区を東西方向に横断し、更に東方へ延びる。遺物は出土していないが、堆積土上位に白色細砂状の堆積物をごく淡く含む。理化学分析は未実施であるが、十和田aテフラ（水成二次堆積？）の可能性がある。

遺物は小コンテナ1箱分が出土した。内訳は土師器片5点（环：ロクロ調整、内黒、底部回転糸切り）、須恵器片1点（壺蓋類）、陶磁器片21点（碗皿類、急須、擂鉢ほか）である。



航空写真（東から）

(16) 細谷地遺跡 第12次調査

所 在 地	盛岡市飯岡新田2才川67ほか	遺跡コード・路号	LE26-0214・OHY-06-12
委 託 者	国土交通省東北地方整備局岩手河川国道事務所	調査対象面積	3,240m ²
事 業 名	一般国道46号盛岡西バイパス建設事業	調査終了面積	3,240m ²
発掘調査期間	平成18年4月10日～6月15日	調査 担当者	北村忠昭・溜 浩二郎 丸山直美

遺跡の立地

本遺跡は盛岡市の南西部、JR東北本線盛岡駅から南に約2.8kmに位置し、半石川右岸の中位～低位段丘上に立地する。調査区の標高は約122m～124mである。

調査の概要

今回の調査では縄文時代の陥し穴状遺構11基、近世の掘立柱建物跡9棟、墓壙17基、土坑2基、溝跡2条、井戸跡1基、柱穴状土坑155個、時期不明の墓壙1基、土坑7基、溝跡10条が検出された。過年度の調査では古代の集落跡が確認されているが、本調査区は近世の掘立柱建物跡と墓壙を中心となっている。両者の分布する間には溝が検出され、溝によって区画されていた可能性が高い。

出土遺物は大コンテナ換算で約0.7箱、土師器、須恵器、陶器、磁器、石器、土製品、陶器製品、石製品、金属器、錢貨、木製品などが出土した。



航空写真（東から）

や ぎ さ わ の う らい
(17) 八木沢野来遺跡 第1次調査

所 在 地	宮古市大字八木沢第8地割字胸込123-1ほか	遺跡コード・略号	LG43-1257・YGNR-06
委 託 者	国土交通省東北地方整備局三陸国道事務所	調査対象面積	2,300m ²
事 業 名	三陸縦貫自動車道宮古道路建設事業	調査終了面積	2,300m ²
発掘調査期間	平成18年6月12日～9月11日	調査担当者	米田 寛・横井猛志・鈴木博之

遺跡の立地

本遺跡はJR山田線磯鳩駅から南に約3.5kmの地点に位置し、宮古湾に向かって北流する八木沢川西岸に立地している。今年度調査範囲は南部を八木沢川の河成段丘面である低地面（現況：畑地・山林）、北部を西部の山地から続く尾根部（現況：山林）からなる。低地面では表土下で湧水がみられ時代によっては建物構築に適さない環境であったと考えられる。低地面では明確な遺構を確認していない。

調査の概要

今回の調査では堅穴建物跡8棟（住居状7・工房1）、溝跡2条、土坑7基、木炭窯1基、焼土遺構4基を検出した。遺物は、土器では縄文時代前期の大木2a式・4式土器、弥生土器が出上し、全体に占める割合は結節回転文が口縁部に施文される大木2a式が高い。石器では石鎌、石匙、剥片、碎片、磨石類などが出土している。古代以降の遺物としては鉄鎌、鉄鋤、鍛造剥片が出土している。検出遺構と出土遺物から、本遺跡は主に縄文時代前期前半の集落跡、古代以降の製鉄関連施設として利用されたと考えられる。



八木沢野来遺跡 空撮

(18) 賽の神遺跡

所 在 地	宮古市大字金浜第3地割字妻ノ上27-8ほか	遺跡コード・路号	LG43-2209-SK-06
委 託 者	国土交通省東北地方整備局三陸国道事務所	調査対象面積	1,500m ²
事 業 名	三陸縦貫自動車道宮古道路建設事業	調査終了面積	1,500m ²
発掘調査期間	平成18年9月12日～10月20日	調査 担当者	米田 寛・鈴木博之

遺跡の立地

本遺跡はJR山田線を横断するように位置する。今回の調査範囲は山地から延びる尾根部と谷部を主体とする。尾根部の大半は木材切出し道路の造成によって削平されている。調査の結果、谷部には尾根部や西側斜面部からの流れ込みによると見られる遺物が数点出土した。谷部には南側に沢が流れしており、調査中も湧水が数多く見られた。

調査の概要

今回の調査では斜面下部に造成された平場から製鉄関連遺構1基、柱穴2個を検出した。この平場は東側調査区外へ広がっている。製鉄関連遺構では製鉄炉を確認しており、鉄滓が多量に出土した。遺物は弥生土器3点、石器2点、鉄滓9号袋3袋、鉄製品1点、近世陶器1点が出土している。

本遺跡は、遺構・遺物分布密度が低いものの、古代以降の製鉄関連施設の利用を主体とする生産遺跡であったと考えられる。



調査区北側全景



調査区南側全景



製鉄関連遺構



鉄滓集中部セクション

(19) 下大谷地 I 遺跡

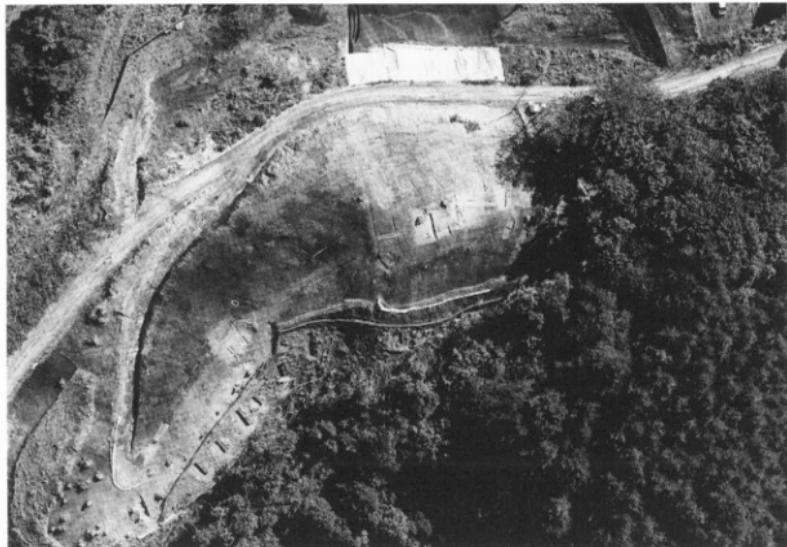
所 在 地	宮古市大字金浜第3地割字妻ノ上27-1ほか	遺跡コード・略号	LG43-2208・SOY 1-06
委 託 者	国土交通省東北地方整備局三陸国道事務所	調査対象面積	3,900m ²
事 業 名	三陸縦貫自動車道宮古道路建設事業	調査終了面積	3,900m ²
発掘調査期間	平成18年6月26日～9月13日	調査 担当者	福島正和・荒谷伸郎

遺跡の立地

本遺跡は、JR山田線磯鶴駅の南約4kmに位置し、宮古湾に向かって北流する八木沢川の東側丘陵に立地する。調査前の現況は畑地、山林であった。調査区は尾根部から谷部にかけてであり、尾根頂部の最高位が標高73m前後、谷部最低位が標高60m前後である。

調査の概要

調査では竪穴住居跡2棟、竪穴住居状遺構3基・炭窯3基・土坑7基を検出した。2棟とも円形の平面形態を呈し石囲炉を有する。うち1棟の床面では繩文土器がまとまって出土した。この遺物から繩文時代中期の竪穴住居跡であると考えられる。また、この竪穴住居跡周辺では3基の竪穴住居状遺構を検出し、遺構や遺物等から竪穴住居跡とはほぼ同時期に属すると考えられる。これらよりやや離れた北に位置する1棟は、出土遺物から繩文時代晩期に属する竪穴住居跡であると考えられる。その他の遺構は遺物を伴わないため所属時期は不明である。出土遺物は繩文土器小1箱、石器0.5箱である。



航空写真（上が西）

(20) 賽の神 II 遺跡

所 在 地	宮古市大字金浜第3地割字妻ノ上11ほか	遺跡コード・略号	LG43-2310・SK II -06
委 託 者	国土交通省東北地方整備局三陸国道事務所	調査対象面積	4,300m ²
事 業 名	三陸縦貫自動車道宮古道路建設事業	調査終了面積	4,300m ²
発掘調査期間	平成18年9月14日～11月21日	調査 担 当 者	福島正和・荒谷伸郎・横井猛志

遺跡の立地

本遺跡は、JR山田線磯崎駅の南約4.3kmに位置し、宮古湾に向かって北流する八木沢川の東側丘陵に立地する。調査区は東西に並ぶ2つの尾根部とその谷部からなり、尾根頂部の最高位が標高74m前後で、谷部最低位が標高40m前後である。

調査の概要

調査では炭窯7基、土坑8基を検出した。炭窯はいずれも尾根よりやや下った斜面部に位置し、長方形あるいは長楕円形の平面形態である。長軸方向は等高線と平行し、底面は比較的平坦な構造である。埋土中には多量の炭化材が認められ、底面は被熱によって赤化した部分も存在する。これら炭窯から炭化材以外の遺物は出土しなかったが、遺構の規模や形態より古代に属する炭窯であり、周辺遺跡の鍛冶関連遺構と何らかの関わりがあるものと考えられる。検出した土坑はいずれも時期および性格は不明である。また、少量の縄文土器片や石器等が出土したが、いずれも遺構外の出土である。



北側尾根部全景（南から）

(21) 大平野Ⅱ遺跡
おおひらの

所 在 地	奥州市胆沢区若柳字大平野1-132ほか	遺跡コード・略号	NE30-2300・ODN II-06
委 託 者	国土交通省東北地方整備局胆沢ダム工事事務所	調査対象面積	36,500m ²
事 業 名	胆沢ダム建設事業	調査終了面積	36,500m ²
発掘調査期間	平成18年6月1日～11月7日	調査 担当者	丸山浩治・平野 祐

遺跡の立地

遺跡は、石淵ダムの南西約4kmに位置し、北西から延びる丘陵裾野の南東向き緩斜面上に立地する。本遺跡付近一帯は、南東側を北流する前川によって形成された河岸段丘と、北東側丘陵から流入する小寒沢などの小河川によって形成された扇状地地形から成っており、山地内にあって広い平坦面を有する。標高はおよそ358～371mで、現況は山林である。

調査の概要

今回の調査では、竪穴住居状遺構2基、土器埋設遺構2基、土坑25基、炉跡（いわゆるカマド状遺構を含む）8基、焼土遺構18基、炭化物集中2箇所、溝跡5条、柱穴状土坑36個が検出された。

竪穴住居状遺構、土器埋設遺構は一区域に近接して位置する。竪穴住居状遺構は2基とも自然地形の凹みを利用した簡易なもので大規模な掘削は成されておらず、底面施設等はない。いずれの底面からも土器が漬れた状態で一括出土している。土器埋設遺構の土器はいずれも正立状態で、上半部を欠く。ただし近年の削平等による欠損ではない。以上の各遺構は土器型式から縄文時代中期末葉～後期初頭頃の遺構といえる。加えて、同遺構群の周辺から7基の土坑が検出されており、遺物の広がり等からこれらを含め一時期の聚落跡と考えてよさそうである。他方、これらとは位置を異にして土坑5基、柱穴状土坑6個および縄文期の遺物が比較的集中する区域が1箇所あり、うち土坑1基は縄文時代後期後葉頃の墓壙と推定される。今回調査範囲における縄文期の遺構は、遺跡内を流れる小寒沢流域の段丘線上に集中する傾向が見られる。

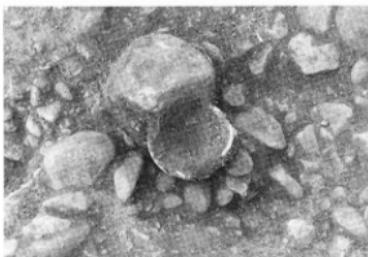
炉跡および焼土遺構は調査区南半に広く分布し、両者の分布域はおおむね類似する。炉跡は、形態から古代以降の構築・使用と考えられるが、伴出遺物が極めて少なく、現時点での詳しい時期推定は困難である。

溝跡は調査区南東部に、柱穴状土坑は全域に分布する。ともに時期不明である。

出土遺物は、土器（縄文時代中～後期主体）中コンテナ約4.5箱分、石器同約2箱分である。



竪穴住居状遺構調査状況



土器埋設遺構

(22) 山の神遺跡

所 在 地 奥州市胆沢区若柳字山の神地内
 委 託 者 農林水産省東北農政局いさわ南部
 　農地整備事業所
 事 業 名 国営いさわ南部農地整備事業
 発掘調査期間 平成18年4月7日～6月12日

遺跡コード・略号 NE24-2137・YK-06
 調査対象面積 39.169m²
 調査終了面積 39.169m²
 調査担当者 渡田 宏・吉田泰治・八木勝枝
 　菊池昌彦・藤原大輔

遺跡の立地

遺跡は、JR東北本線陸中折居駅の西方約8kmに位置し、胆沢扇状地の中央付近に東西に広がる堀切段丘上に立地している。現況は水田、畑地、牧草地、山林である。

調査の概要

今回の調査では、縄文時代の陥し穴状遺構21基、縄文時代の土坑9基、時期不明の焼土1基、現代の暗渠1条を検出した。

陥し穴状遺構はその形状で、溝状のもの10基、副穴を持つ楕円形のもの2基、副穴を持つ方形・円形9基に分類される。土坑はフラスコ状のものを数基含む。これらの縄文時代の遺構は、調査区南東側の一段高い地形面でのみ確認され、この周辺は狩り場あるいは食料の貯蔵場所として利用されていたことが明らかとなった。本遺跡のこれらの遺構には、昭和30年代の開田時に遺構上部が失われたものが多い。

出土した遺物は、縄文時代の土器片数点、石器類20点あまり、現代の陶磁器2点である。縄文土器片は、摩滅が激しいため詳細な時期は不明であるが、前期と推定されるものが含まれる。



航空写真（直上）

みやざわはらした
(23) 宮沢原下遺跡 第2次調査

所 在 地	奥州市胆沢区若柳字宮沢原地内	遺跡コード・路号	NE23-2347・MHS-06-02
委 託 者	農林水産省東北農政局いさわ南部 農地整備事業所	調査対象面積	36,855m ²
事 業 名	国営いさわ南部農地整備事業	調査終了面積	36,855m ²
発掘調査期間	平成18年5月24日～8月24日	調査 担 当 者	濱田 宏・菊池昌彦・吉田泰治 八木勝枝・藤原大輔

遺跡の立地

遺跡は、JR東北本線水沢駅の西南西10kmほどにあり、日本有数といわれる胆沢扇状地の中央部に広がる堀切段丘上に立地する。付近の標高は176.8m～179.2mで、調査前は水田や牧草地であった。

調査の概要

今回の調査範囲は、昨年度行われた第1次調査の東側に隣接する箇所である。検出された遺構は、縄文時代の陥し穴状遺構40基と土坑3基、埋土に十和田aテフラを含む平安時代の陥し穴状遺構23基、近世以降の掘立柱建物跡2棟、時期不明の溝跡4条、井戸6基である。

この調査によって宮沢原下遺跡の狩り場の範囲は、昨年度調査区のさらに東側に広がることが明らかとなり、2カ年の調査で確認された陥し穴状遺構の総数は270基あまりに及んだ。テフラの堆積の有無から、狩り場として使われた時期は縄文時代と平安時代に分かれ、さらに平面形状は前者で3種、後者で1種の計4種類に分類できる。また、上述したテフラを含む陥し穴状遺構の底面近くからは鉄製の紡錘車が出土し、このタイプの陥し穴が平安時代に属することが遺物からも裏付けられた。

出土した遺物は、縄文時代後期の土器片、砥石などの石器類、鉄製紡錘車、近世以降の陶磁器などがあるが、総量は小コンテナ1箱に満たない。



航空写真（直上）

がんとうづつみ

(24) 岩洞堤遺跡

所 在 地 奥州市胆沢区小山字岩洞沢地内
 委 託 者 農林水産省東北農政局いさわ南部
 農地整備事業所
 事 業 名 国営いさわ南部農地整備事業
 発掘調査期間 平成18年8月24日～11月15日

遺跡コード・略号 NE34-1263・GDZ-06
 調査対象面積 9,229m²
 調査終了面積 8,509m²
 調査担当者 吉田泰治・菊池昌彦・濱田 宏

遺跡の立地

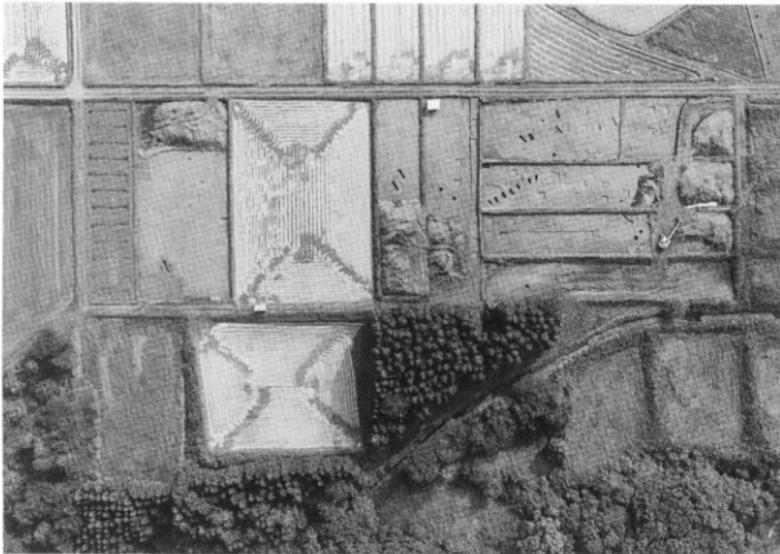
遺跡は、JR東北本線水沢駅の西南西およそ10.5km付近に位置し、胆沢扇状地の中央部にある横道段丘上に立地する。調査区の標高は142.0m～143.5m、遺跡の現況は休耕田・山林・荒地であった。

調査の概要

検出された遺構は、旧石器時代の遺物集中区2箇所のほか、陥し穴状遺構25基、土坑4基である。陥し穴状遺構は、平面形状から3種類に分けられ、時期はいざれも縄文時代と思われる。テフラが混入する陥し穴は確認できなかった。

出土した遺物は、後期旧石器時代の製品（ナイフ形石器・彫刻刀形石器など）12点、剥片・チップ類55点、台石1点、ハンマー6点、縄文時代の土器片3点、時期が明らかでない石器3点である。旧石器時代の遺物の年代は、土壤の堆積状況や出土した石器の特徴から、今からおよそ2～3万年前と考えられる。

調査は次年度も引き続き行われる予定であるが、今回横道段丘上に立地する遺跡から初めて旧石器の出土をみたこともあり、今後の調査への期待は大きい。



航空写真（直上）

(25) 濱原Ⅰ遺跡 第5次調査

所 在 地	西磐井郡平泉町平泉字森下66-2ほか	遺跡コード・路号	NE66-1047・SW I-06-05
委 託 者	国土交通省東北地方整備局岩手河川国道事務所	調査対象面積	6,046m ²
事 業 名	一般国道4号平泉バイパス建設事業	調査終了面積	6,046m ²
発掘調査期間	平成18年4月11日～6月30日	調査担当者	村田 淳・木戸口俊子

遺跡の立地

遺跡は、東北自動車道平泉前沢ICから約100m南東に位置する。北上川と徳沢川が合流する河岸段丘上にあり、検出面標高は28～38mである。調査前は水田及び畑地として利用されていた。

調査の概要

今次調査は、遺跡範囲の西側5地点を対象としている。5地点で堀跡2条、溝跡30条、土坑12基、方形周溝2基、性格不明遺構3基、焼上遺構1基、柱穴82個、旧河道1カ所を検出しているが、削平が著しいため遺存状況は良くない。遺物は小コンテナ4箱分出土しており、古代の土師器・須恵器・鉄製品・中世のかわらけ・国産陶器（涅美・壺器系・須恵器系）・輸入陶磁器（白磁・青白磁）・近世の陶磁器・木製椀・寛永通宝・繩文上器・繩文～弥生時代の石器など多岐にわたる。出土遺物が乏しく根拠として弱いが、遺構の重複関係と堆積土の共通性から溝跡のほとんどは古代～近世に属すると考えられる。堀跡は全長70m以上に及び防御・囲郭用の遺構と想定されるが、堆積土中から遺物がほとんど出土しておらず、また周辺でも関連する遺構・遺物が未検出であることから詳細は不明である。その他にもかわらけが重なった状態で出土した土坑やそれに隣接する道路のように直線的な遺構などがあるが、これらについても不明な点が多く今後の検討課題といえる。



B区SD01

(26) 濱原Ⅱ遺跡 第9次調査

所 在 地	西磐井郡平泉町平泉字瀬原56地内ほか	遺跡コード・路号	NE66-1086・SW II-06-09
委 託 者	国土交通省東北地方整備局岩手河川国道事務所	調査対象面積	10,335m ²
事 業 名	一般国道4号平泉バイパス建設事業	調査終了面積	10,335m ²
発掘調査期間	平成18年4月11日～8月31日	調査担当者	村木 敏・中村絵美ほか

遺跡の立地

遺跡は、東北自動車道平泉前沢ICより南東約1kmに位置し、北上川西岸の標高30mの河岸段丘上に立地する。現況は宅地及び水田である。同事業により調査された瀬原Ⅰ遺跡は徳沢川の支流を挟んだ北側にある。

調査の概要

検出された遺構は、竪穴住居跡11棟、掘立柱建物跡56棟、井戸跡4基、土坑23基、円形周溝3基、性格不明遺構4基、溝跡60条、柱穴1394個である。これらは平安時代から近世に所属する。

出土遺物は、土師器と須恵器が中心で中コンテナ14箱、その他には点数が少ないものの灰釉陶器、国産陶器、中国産磁器、近世陶磁器などがある。竪穴住居の土坑から灰釉陶器の壺が出土していることが特筆される。

遺構は立地する段丘の縁辺部付近に集中的に形成され、平安時代から近世にかけて断続的に集落が営まれていることが明らかになった。



遺跡全景

(27) 坂下遺跡 第10次調査

所 在 地	西磐井郡平泉町平泉字坂下43-5ほか	遺跡コード・路号	NE76-0000・SS-06-10
委 託 者	国土交通省東北地方整備局岩手河川国道事務所	調査対象面積	8,420m ²
事 業 名	一関遊水地事業JR東北本線衣川橋橋梁改築工事	調査終了面積	8,420m ²
発掘調査期間	平成18年4月11日～10月18日	調査担当者	村上 拓・菅野 桜

遺跡の立地

本遺跡は平泉町の北部に位置し国指定特別史跡中尊寺の東縁に隣接する。今次調査区は遺跡範囲の北西部に相当し、JR平泉駅からは北北西に約2.0kmの地点である。

調査の概要

検出遺構・出土遺物は次の通りである。

縄文時代：遺構／なし、遺物／土器（時期不明）石器各数点。古代（平安）：遺構／竪穴住居跡1棟・陥し穴状遺構6基・沢跡（十和田a火山灰堆積）2箇所、遺物：土師器壺壺・須恵器壺壺小コンテナ0.5箱。12世紀：遺構／掘立柱建物跡4棟以上・土坑12基・溝跡11条・池状遺構1箇所、敷石遺構1箇所、遺物：かわらけ大コンテナ4箱・国産（常滑・涅美）陶器中コンテナ1箱・鉄釘数点。

今次調査区の中央部は関山（中尊寺）側からのびる沢跡に挟まれた舌状の微高地となっている。上記の遺構・遺物は主にこの微高地周辺から検出されたものである。主体となる時期は12世紀である。

12世紀の遺構は北辺と南辺を溝で区画された微高地の頂部に集中して確認され、一方、区画の外部は洪水土砂に幾度も被覆されている低位面へと連続し、遺構・遺物の分布は認められなかった。

調査区西側の関山（中尊寺）に接する地点からは、ほぼ南北方向に走行する帯状の敷石遺構（道路跡か）が検出された。側溝と思われる溝は途中で東向きに屈曲し微高地南辺の区画溝へと連続している。屈曲部付近では敷石面の幅が広がり段差も生じていることから、この箇所が南北走行の道路と東側から上ってくる別の道路との合流点であった可能性もある。また、屈曲部の下方からは池状の落ち込みが検出された（「池状遺構」）。遺物の集中廐棄などはみられないが、出土遺物は12世紀代のものに限定される。北西部の底面には比較的密な石敷きが認められ、中央部には中島状の高まりを持つ。

以上の遺構群は、一時期、中尊寺の寺域の一部を構成していた可能性が高いものと思われる。



関山と調査区（東から）



道路状の敷石遺構

2 独立行政法人關係

(28) 細谷地遺跡 第13次調査

所 在 地	盛岡市向中野字細谷地4-1ほか	遺跡コード・路号	LE26-0214・OHY-06-13
委 託 者	独立行政法人都市再生機構岩手都市開発事務所	調査対象面積	2,530m ²
事 業 名	盛岡南新都市土地区画整備事業	調査終了面積	2,530m ²
発掘調査期間	平成18年7月3日～11月27日	調査 担 当 者	星 雅之・金子佐知子

遺跡の立地

遺跡は盛岡市の南西部、JR東北本線仙北町駅から南西に約1.3kmに位置し、半石川によって形成された冲積段丘上に立地する。調査区の標高は121～122mで、調査前の現況は宅地、畠地であった。

調査の概要

今回の調査では、竪穴住居跡13棟（奈良3棟、平安10棟）、掘立柱建物跡2棟、柱穴列1基、土坑15基、竪穴状遺構3棟、柱穴状土坑2個、溝跡3条を検出した。本次調査区は、東側が過年度調査区と、北側と南側が14次調査区と接することから、それらとまたがって所在する遺構もある。竪穴住居跡は調査区ほぼ全体にみられるが、奈良時代ではカマドが北西向きにつくられる特徴がある。掘立柱建物跡は、調査区の中央付近で確認され、構成する柱穴の埋土に十和田aテフラを含むものがある。

遺物は、土師器や須恵器などが中コンテナ5箱、礫石器小コンテナ2箱、鉄製品数点である。遺物は、竪穴住居跡から主体的に出土している。



航空写真（上が北）

(29) 矢盛遺跡 第10次調査

所 在 地	盛岡市飯岡新田4地割字畠中10ほか	遺跡コード・路号	LE26-0139・IYM-06-10
委 託 者	独立行政法人都市再生機構岩手都市開発事務所	調査対象面積	147m ²
事 業 名	盛岡南新都市土地区画整備事業	調査終了面積	147m ²
発掘調査期間	平成18年6月5日～6月15日	調査担当者	杉沢昭太郎・北田 熱

遺跡の立地

本遺跡はJR東北本線盛岡駅の南側約3kmに位置し、半石川南岸に形成された河岸段丘上に立地している。遺跡範囲は東西約500m、南北約450mである。遺跡の北西側ほど標高は高く、南東部ほど僅かに低くなっている。調査区内での標高は約123mである。本遺跡の北側には旧河道を挟んで細谷地遺跡や飯岡才川遺跡がある。

調査の概要

今回の調査区は矢盛遺跡の中でも南東部にあたる。11次調査区とは接しており、9次調査区は約150m南東側になる。

検出された遺構は中世に属するものが中心である。11次調査と合わせると竪穴建物跡6棟、掘立柱建物跡14棟（柱穴約730個）、井戸跡13基、土坑19基、堀跡2条、道路跡1カ所、土橋跡1カ所、屋外炉1基、溝跡22条である。このうち10次調査区からは堀跡1条が検出されている。上幅1.7～2.0m、深さは検出面から0.5～0.8m、底面は平坦で、北東～南西方向に35m程度確認された。両端はともに調査区外に延びている。もう1条の堀跡とは形状や規模が似ており同時期と考えている。

10・11次調査で検出された遺構・遺物から一辺70～80mのやや歪んだ方形に堀を巡らせた16世紀代の居館跡があり、その周囲には同時期頃の集落が広がっていると予想される。



矢盛遺跡第10・11次調査区 (上が北)

3 岩手県・市関係

(30) 板子屋敷3遺跡

所 在 地	九戸郡軽米町大字上館22地割25-13ほか	遺跡コード・略号	IF74-0096・IKY3-06
委 託 者	二戸地方振興局土木部	調査対象面積	5,200m ²
事 業 名	広域農道整備事業軽米九戸第2期地区	調査終了面積	5,200m ²
発掘調査期間	平成18年8月21日～11月8日	調査 担 当 者	中村絵美・村木 敏・菊池昌彦

遺跡の立地

遺跡は軽米町の北部、町役場の北東約4kmに位置し、遺跡南側を流れる雪谷川の支流、坊里沢に開析された丘陵縁辺部に立地する。調査区は中央に埋没谷、これを挟む東西の斜面地に分かれ、このうち東側を平成17年度、谷部と西側斜面を今年度の調査とした。2カ年の合計面積は10,000m²である。

調査の概要

今年度の調査区で検出された遺構は、竪穴住居跡14棟、土坑13基、配石遺構2基、焼土遺構3基である。竪穴住居跡をはじめとするこれらの遺構の大半は、谷部の南端、調査区の中でも最も低い場所に集中している。谷部南端以外では、西斜面西端、谷部の北端にフ拉斯コ状土坑が数基検出されたのみである。遺物は、土器が大コンテナ20箱、石器が中コンテナ5箱出土した。縄文時代後期の土器が大半を占め、これに晩期・早期のものが若干含まれている。

2カ年の調査結果、竪穴住居跡22棟、土坑46基、土器埋設遺構7基、配石遺構2基、焼土遺構5基が検出された。竪穴住居跡はいずれも縄文時代後期のもので、昨年度調査区である東斜面中腹や、谷部南端など、比較的傾斜な緩やかな場所を選んでおり、これ以外の遺構も同様の分布を示している。



航空写真（南東から）

(31) 吉田館遺跡

所 在 地	二戸市淨法寺町大手9-1ほか	遺跡コード・路号	JE37-0090・YDD-06
委 託 者	二戸地方振興局土木部	調査対象面積	3.345m ²
事 業 名	緊急地方道路整備事業二戸五日市線淨法寺工区	調査終了面積	3.345m ²
発掘調査期間	平成18年5月16日～10月6日	調査 担 当 者	千葉正彦・川又 晋

遺跡の立地

吉田館跡は二戸市西部の旧淨法寺町役場から南方0.5km、安比川右岸の標高198～210mの舌状台地上に占地する。当館跡は淨法寺氏一門の吉田氏が普請した中世城館跡と伝えられており、現況の地形でも複数の平坦面、切岸、堀跡などが確認できる。調査区は館跡の北側部分を東西方向に横断する形である。当館跡の周辺には同時期の城館跡である淨法寺城跡（西0.7km）、不動館跡（東0.3km）、館II遺跡（東0.5km）がある。

調査の概要

検出遺構は主に縄文時代と中世に属するものである。縄文時代の遺構は、中世の削平の影響が少ない調査区東側（下段平場部分）で主に検出された。種別は、後期の竪穴住居跡4棟、竪穴状遺構1棟、土坑7基、配石遺構2基、焼土遺構1基、剥片埋納遺構1基である。中世の遺構は城館に伴うもので、上中下3段の平場（平坦地）、切岸1箇所、堀跡3条、虎口1箇所、竪穴建物跡・竪穴状遺構8棟、門跡1棟を検出した。また平場の遺構面で縄文時代～近代の柱穴状土坑1,200個（掘立柱建物跡・柱穴列を含む）、時期不明の焼土遺構5基を検出した。

調査面積に比して遺物は非常に少なく、総量で大コンテナ3.5箱分である。遺構からの出土遺物は少なく、表土・盛土層から近現代遺物に混在する形で出土したもののが大半である。縄文時代の遺物には縄文土器（早・前・後・晩期）、石器・剥片類・軽石製品などがある。土器は少量ではあるが、竪穴住居跡から後期後葉の土器が纏まって出土している。平安時代は主に遺構外で土師器・須恵器の破片が出土している。中世～近代では、国産陶磁器（瀬戸美濃、唐津、伊万里など）および中国青磁の破片、刀子・釘・煙管など金属製品、中国銭（北宋銭・明銭）、模鋳銭、寛永通寶・文久永寶などの銭貨が出土した。量は少ないながらも16世紀代と思われる遺物が出土していることは、吉田館の存続時期を反映しているものと思われる。



上段平場の柱穴群、堀跡（南西から）



中段平場、堀跡、切岸（北から）

(32) 桂平I遺跡 かつらたい

所 在 地	二戸市淨法寺町御山字桂平地内	遺跡コード・路号	JE36-1308・KTI-06
委 託 者	二戸地方振興局土木部	調査対象面積	3,489m ²
事 業 名	緊急地方道路整備事業二戸五日市線淨法寺工区	調査終了面積	2,539m ²
発掘調査期間	平成18年8月17日～11月28日	調査担当者	川又 晋・千葉正彦ほか

遺跡の立地

遺跡は、二戸市役所淨法寺支所の南方0.5km、安比川右岸に形成された河岸段丘上に立地する。調査区は、段丘の縁辺部に沿った緩斜面にあり、標高は210～214mである。調査前は畠地であった。

調査の概要

検出遺構は、陥し穴状遺構20基、竪穴住居跡16棟、竪穴住居状遺構2棟、土坑10基、堀跡1条、柱穴状土坑500個、焼土遺構30基である。遺物は、土師器・須恵器中コンテナ5箱、磨石・鉄製品（鉄鎌・紡錘車・刀子など）が主に竪穴住居跡から出土し、この他に縄文土器、陶磁器、銅製品（銅錢・煙管）、石製品が出土している。

陥し穴状遺構は、溝状と楕円形のものがあり、出土遺物はないが、縄文時代の遺構と考えられる。竪穴住居跡は平安時代に属する。3棟が焼失住居とみられ、炭化材が床面上に残存していた。堀跡は、調査区東端で確認された。幅5m、深さ4mと大規模で、隣接する吉田館遺跡と関連のある中～近世の遺構とみられる。柱穴状土坑・焼土遺構は、調査区西側に多く分布する。付近から中～近世の陶磁器・銅錢が出土しており、遺構もこの時期に属するとみられるが、これらの大半は次年度調査の予定である。



調査区全景

かわぐち
(33) 川口I遺跡 第2次調査

所 在 地	二戸市金田一字川口23番ほか	遺跡コード・略号	IE79-1188・KG I -06-02
委 託 者	二戸地方振興局土木部	調査対象面積	2,133m ²
事 業 名	緊急地方道整備一般県道上斗米金田一 線豊年橋工区	調査終了面積	2,133m ²
発掘調査期間			調査 担 当 者 木戸口俊子・村田 淳
平成18年7月1日～9月15日			

遺跡の立地

遺跡は、JR東北新幹線二戸駅から北東約9kmに位置する。二戸市を縦断し北流する馬淵川とその支流海上川との合流地点に程近い馬淵川左岸段丘上に立地しており、対岸には縄文時代晚期の兩滝遺跡がある。昨年度調査区から南西へと続く東西に細長い調査区で現況は田畠であるが、生活用道路が横断し調査区周辺の住宅により分断されている。当調査区の標高は74m～76mである。

調査の概要

今年度の調査区では、全体的に1m強の盛土がなされ、攪乱を受けている部分が大変多い。特に生活用道路よりも南側の調査区については著しく時期不明の遺構も多い。その時期不明のものも含めて確認された遺構は、住居状遺構1棟、土坑37基、溝跡6条、配石遺構1基、埋設土器1基、柱穴状土坑354個である。この中で、住居状遺構と配石遺構は同じ区域で検出され、出土遺物等により縄文時代後期と考えられるが、検出面により若干の時期差が認められる。またその2つの遺構の時期に挟まれる状態で柱穴状土坑も検出されており、当該時期における生活状況が一部垣間見ることができる。遺物は縄文土器(後期中心)が中コンテナで4箱、石器小コンテナで2箱、その他土師器片、近世陶磁器、琥珀、古錢などが出土している。



航空写真（直上）

(34) 戸仲遺跡 第1次調査

所 在 地	盛岡市川日 4-60-16他	遺跡コード・路号	LE28-0232・YTT-06-01
委 託 者	盛岡地方振興局土木部	調査対象面積	654m ²
事 業 名	特定安全施設整備事業	調査終了面積	654m ²
発掘調査期間	平成18年7月18日～11月2日	調査 担 当 者	溜 浩二郎・北村忠昭

遺跡の立地

遺跡はJR東北本線盛岡駅から南東約8.7kmに位置し、篠川によって形成された河岸段丘上に立地する。遺跡の標高は190m前後で、調査前の現況は水田及び畑地である。

調査の概要

今回の調査は河岸段丘の先端～縁辺部にあたる東側の調査区と洪水堆積層を中心とする西側の調査区からなる。遺構の大半が検出された東側の調査区は調査前まで水田として利用されており、この影響で縄文時代晚期の遺構検出面や遺物の一部は削平・破壊を受けているが、縄文時代後期後葉の堆積層より下層は比較的遺構の残存状況が良好である。また、当時の段丘先端部にあたる西側の調査区東端の一部から廃棄したと考えられる縄文時代晚期中葉の遺物が多量出土している。遺構の大半は段丘高位面にあたる調査区東側から見つかっており、検出された遺構は配石遺構10基、焼土遺構6基、土坑6基、柱穴状土坑23個である。

遺物は縄文中期後葉～晚期中葉の土器を主に大コンテナで約31箱、他に石器が4箱、土製品（土偶・耳飾り）、石製品（石棒類・玉類）、獸骨の骨片などが出土している。



航空写真（東から）

(35) 宇曾沢遺跡 第2次調査

所 在 地 盛岡市川日2-20-11他
 委 託 者 盛岡地方振興局土木部
 事 業 名 特定安全施設整備事業
 発掘調査期間 平成18年9月1日～9月26日

遺跡コード・路号 LE28-0376・YOS-06-02
 調査対象面積 96m²
 調査終了面積 96m²
 調査担当者 北村忠昭・溜 浩二郎

遺跡の立地

遺跡は、JR東北本線盛岡駅から南東約10.0kmに位置し、築川右岸の河岸段丘上に立地する。遺跡の標高は約210m前後で、調査前の現況は宅地である。

調査の概要

検出された遺構は陥し穴状遺構1基、フラスコ状土坑1基、焼土遺構2基、柱穴状土坑1個である。時期は検出面から判断して、土坑・焼土遺構が縄文時代前期以降で陥し穴状遺構・柱穴状土坑はそれよりも古い時期に属するものと考えられる。

出土遺物は縄文土器（早期・前期・晩期）、石器類などで総量で小コンテナ1箱分である。



航空写真（西から）

(36) 細谷地遺跡 第14次調査

所 在 地 盛岡市向中野字細谷地2-6ほか
 委 託 者 盛岡市都市整備部盛岡南整備課
 事 業 名 盛岡南新都市土地区画整理事業
 発掘調査期間 平成18年4月10日～11月27日

遺跡コード・路号 LE26-0214・OHY-06-14
 調査対象面積 7,958m²
 調査終了面積 7,958m²
 調査担当者 金子佐知子・星 雅之

遺跡の立地

細谷地遺跡は、盛岡市の南西部、JR東北本線仙北町駅から南西約1.3kmに位置し、零石川によって形成された沖積段丘上に立地する。調査区の標高は122m前後である。

調査の概要

今回の調査では、竪穴住居跡25棟（奈良5棟、平安20棟）、竪穴状造構1基、溝跡17条、土坑44基などを検出した。ほとんどが、奈良、平安時代の遺構である。奈良時代の集落は調査区を北西から南へ走る埋没沢の東側に展開し、平安時代の集落は埋没沢を挟んで東西に分かれている。

特筆すべき遺構は平安時代の鍛冶工房跡と、焼失住居跡である。鍛冶工房跡は一辺が3～4mの竪穴住居跡で、床面中央付近に直径50～70cmの梢円形の鍛冶炉を持つ。炉の内外から鍛造剥片、床面から鉄製品が出土している。焼失住居跡は一辺が6.5mと大型で、埋土最下層から炭化材や焼土とともに炭化したトチの実、クリ、炭化米などの種子、種実が大量に出土している。

遺物は土師器、須恵器が中コンテナ13箱、鉄製品小コンテナ1箱、石製品・石器小コンテナ6箱、ガラス小玉2点、弥生時代後期の土器片少量が出土している。



炭化種実・種子が出土した竪穴住居跡

(37) 細谷地遺跡 第15次調査

所 在 地	盛岡市飯岡新田2地割71-2ほか	遺跡コード・略号	LE26-0214・OHY-06-15
委 託 者	盛岡市都市整備部盛岡南整備課	調査対象面積	1,675m ²
事 業 名	盛岡南新都市土地区画整理事業	調査終了面積	1,675m ²
発掘調査期間	平成18年10月16日～12月12日	調査担当者	金子昭彦・荒谷伸郎ほか

遺跡の立地

遺跡は、盛岡市の南西部、JR東北本線仙北町駅から南西約1.3kmに位置し、半石川によって形成された沖積段丘上に立地する。標高は122m前後である。調査区北半の中央付近で北西から南東方向に延びる沢跡が確認されたが、この沢跡は集落形成時には完全に埋まっていたものである。

調査の概要

今回の調査区は、遺跡の北端に位置し、平安時代の竪穴住居跡9棟（1棟は第8次調査の続き）、掘立柱建物跡1棟（第4・5次調査の続き）、土坑25基が検出され、土師器・須恵器が大コンテナ9箱、土錘1点（沢跡上面から出土）、鉄鎌等の鉄製品2点、琥珀1点（竪穴住居跡から出土）、砥石約10点などが出土した。鉄製品の出土が少ないのが特徴と言えようか。

竪穴住居跡の規模は、一辺約2.5～7mとマチマチだが、規模の大きなものは、調査区の北端（すなわち遺跡の北端）に集中する。7m級の住居は、住居自体1回の拡張があり、拡張前に1つ、拡張後に5つのカマドが認められ、遺物の出土も多い。煙道が住居壁で床面より高い位置に掘り込まれているカマドが目立つ。掘り方を碟で固めた柱穴も見られる。

掘立柱建物跡は、桁行2間、梁行1間の南北棟建物跡であることが改めて確認された。

土坑のうち沢跡付近に認められたものは、平面形は楕円～方形で、底面や壁が焼けているものが多く、焼土や灰、炭化物の堆積もしばしば認められた。

沢跡上面から遺物が比較的多く出土し、灰白色火山灰も検出された。

今回の調査区の西側は既に発掘調査されている。北半が第4・5次調査区、南半が第8次調査区に隣接する。調査区の北半は第4・5次調査と、南半は第8次調査と同様の傾向を示している。すなわち、北側は、住居数が多く、また比較的大型の住居がある一方、極めて小型のものも多く存在する。南側は、北側の続きで住居が密集している地点もあるが、基本的に遺構は疎らである。こうした傾向は、この集落が基本的に北側の段丘崖に沿って東西方向に展開しているためと思われる。



7m級の竪穴住居跡



沢跡から検出された土坑

(38) 飯岡才川遺跡 第12次調査(補)

所 在 地	盛岡市飯岡新田2地割字才川43-1ほか	遺跡コード・略号	LE16-2291・ISW-06-12
委 託 者	盛岡市都市整備部盛岡南整備課	調査対象面積	4,000m ²
事 業 名	盛岡南新都市土地区画整理事業	調査終了面積	4,000m ²
発掘調査期間	平成18年9月19日～11月24日	調査 担 当 者	村田 淳・金子昭彦・菅野 栄

遺跡の立地

遺跡は盛岡市の南西部、JR東北本線盛岡駅の南方約2kmに位置する。零石川右岸の河岸段丘上に立地しており、今次調査区の検出面標高は約123mである。調査前の現況は畑地であった。

調査の概要

今次調査区は、遺跡範囲の北西側に位置する。昨年度に表上除去及び一部遺構精査を行っており、今回はその継続調査にある。今年度検出された遺構は、竪穴住居跡7棟、古墳16基、土坑26基、陥し穴状遺構4基、溝跡2条、土器埋設遺構2カ所、ピット65個などであり、調査区の中央から南側に竪穴住居跡と陥し穴状遺構、北側に古墳とピットが分布する。遺物は土師器、須恵器大コンテナ約5箱、鉄製品（刀子・鐸・釘）、砥石、土鍤などがあり、主に竪穴住居跡と古墳から出土している。

竪穴住居跡は奈良～平安時代に属するものであるが、住居廃絶時にカマドの取り壊しや土器の持ち出しを行っているため遺存状況は良くない。古墳は直径10m前後のものが多く、周溝内出土土器から大半が古墳時代末～奈良時代に属すると考えられる。墳丘が削平されていたため葬者の性格などは不明であるが、零石川右岸における古代の墓制を知る上で貴重な資料を追加できたと考えられる。



古墳完掘状況（東から）

(39) 台太郎遺跡 第58次調査

所 在 地 盛岡市向中野字向中野40-16ほか
 委 託 者 盛岡市都市整備部盛岡南整備課
 事 業 名 盛岡南新都市土地区画整理事業
 発掘調査期間 平成18年8月7日～11月24日

遺跡コード・路号 LE16-2269・ODT-06-58
 調査対象面積 3,945m²
 調査終了面積 3,945m²
 調査担当者 北田 黙・杉沢昭太郎

遺跡の立地

本遺跡はJR東北本線仙北町駅の南西側約900m、零石川右岸に形成された微高地である沖積段丘上に立地しており、標高は約120mである。遺跡の規模は東西約800m、南北約500mの広がりを持っている。

調査の概要

本遺跡はこれまでの調査で、古墳時代末期の7世紀から平安時代の10世紀にかけて竪穴住居跡を中心とした集落が営まれ、中世には堀で囲まれた居館を中心とした集落、近世には建物跡を中心とした集落が営まれていたことが分かっている。

今回は遺跡のはば中央部と南東部の2箇所を調査した。遺構は奈良時代の竪穴住居跡10棟、平安時代の竪穴住居跡1棟、中世の竪穴建物跡4棟・掘立柱建物跡1棟・堀跡2条、時期不明の掘立柱建物跡6棟・土坑18基・溝跡14条・ピット約200個を検出した。遺物は土師器大コンテナ8箱を中心に須恵器壺片、中世陶器、近世～近現代の陶磁器、刀や鉄鎌などの鉄製品、紡錘車や土製の勾玉、近世錢貨が出土している。南東部の調査区で検出した堀跡は過年度の調査でも見つかっていたが、さらに南側に延びて西に折れ曲がっており、防衛施設の様相を呈している。



南調査区遠景（上が北）

(40) 向中野館遺跡 第9次調査

所 在 地 盛岡市飯岡新田2地割124-1 他
 委 託 者 盛岡市都市整備部盛岡南整備課
 事 業 名 盛岡南新都市土地区画整備事業
 発掘調査期間 平成18年6月16日～8月10日

遺跡コード・路号 LE26-0205・OMN-06-09
 調査対象面積 2,052m²
 調査終了面積 2,052m²
 調査担当者 杉沢昭太郎・北田 熹

遺跡の立地

遺跡は盛岡市の南西部、JR東北本線盛岡駅から南約2.5kmに位置し、零石川によって形成された沖積段丘上とその周辺の旧河道（湿地）に立地する。

調査の概要

向中野館跡（北館）に関連する遺構としては堀跡が1条検出されている。他に平安時代の堅穴住居跡が2棟ある。近世の掘立柱建物跡6棟、井戸跡2基、時期不明の遺構として堅穴遺構2棟、土坑類10基、焼土3基、柱穴約300個が検出されている。遺物は16世紀代の陶磁器数片、平安時代の土師器・須恵器大コントナ0.5箱、近世陶磁器大コントナ1箱が出土した。

今年度はこれまでの調査区より一段高い地形面にあたり、向中野館跡（北館）の主郭と考えられる。北館は北・南・東の三方を湿地に囲まれた微高地を3条の堀跡と湿地を活かしながら複数の曲輪に区画している。今年度調査した東側の堀跡は湿地を南北方向に掘削して造られていた。全域を通じて中世の遺構・遺物が薄いのが特徴で隣接する向中野館跡（南館）が居所としての機能を有していたと推測される。

古墳時代末から奈良時代にかけて周辺遺跡に集落が形成される中で、本遺跡では平安時代になってから集落が営まれる。細谷地遺跡や台太郎遺跡といった大規模な集落遺跡に挟まれた細長い微高地に占地する小規模な集落といえよう。



調査区近景（南東から）

(41) 矢盛遺跡 第11次調査

所 在 地 盛岡市飯岡新田4地割9ほか
 委 託 者 盛岡市都市整備部盛岡南整備課
 事 業 名 盛岡南新都市土地区画整備事業
 発掘調査期間 平成18年4月10日～6月15日

遺跡コード・路号 LE26-0139・IYM-06-11
 調査対象面積 3,891m²
 調査終了面積 3,891m²
 調査担当者 杉沢昭太郎・北田 熱

遺跡の立地

本遺跡はJR東北本線盛岡駅の南側約3kmに位置し、零石川南岸に形成された河岸段丘上に立地している。遺跡範囲は東西約500m、南北約450mで標高は調査区内で約123mあり、遺跡の北西側ほど標高は高く、南東部ほど僅かに低くなっている。

調査の概要

今回の調査区は矢盛遺跡の中でも南東部にあたる。検出された遺構は中世に属するものが中心である。堅穴建物跡6棟、掘立柱建物跡14棟（柱穴約730個）、井戸跡13基、土坑19基、堀跡2条、道路跡1カ所、土橋跡1カ所、屋外炉1基、溝跡22条である。堀跡は何れも調査区外に延びており1条は北東～南西方向に、もう一条は一辺70～80mのやや歪んだ方形に巡っていると推測される。この堀跡の南辺に土橋跡が設けられ、土橋の先に道路跡が南北方向に延びている。堀に囲まれた内部には中小規模の掘立柱建物跡や井戸跡が密に分布している。堀の外部では南側の道路跡に沿って掘立柱建物跡が3棟検出されているほか、堀の西側を中心に堅穴建物跡群が分布しており調査区外にも広がっている。こうした遺構の状況から堀を巡らせた居館跡といえ、周囲には集落が広がっていると予想される。

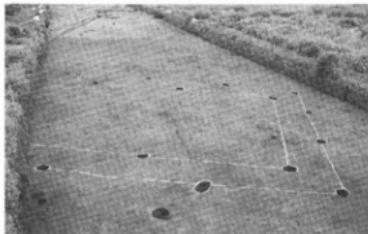
遺物は16世紀代の陶磁器が数片、刀子・釘・鉄製碗、曲げ物類などが出土している。



堀・土橋・道路遺構



堅穴建物跡



掘立柱建物跡

(42) 裳帶遺跡

所 在 地	宮古市和井内第21地割三十刈30-4 ほか	遺跡コード・路号	LF19-2060・HT-06
委 託 者	宮古地方振興局土木部	調査対象面積	8.698m ²
事 業 名	道路改築事業一般国道340号宮古和井内	調査終了面積	8.698m ²
発掘調査期間	平成18年5月1日～11月10日	調査 担当者	須原 拓・戸根貴之

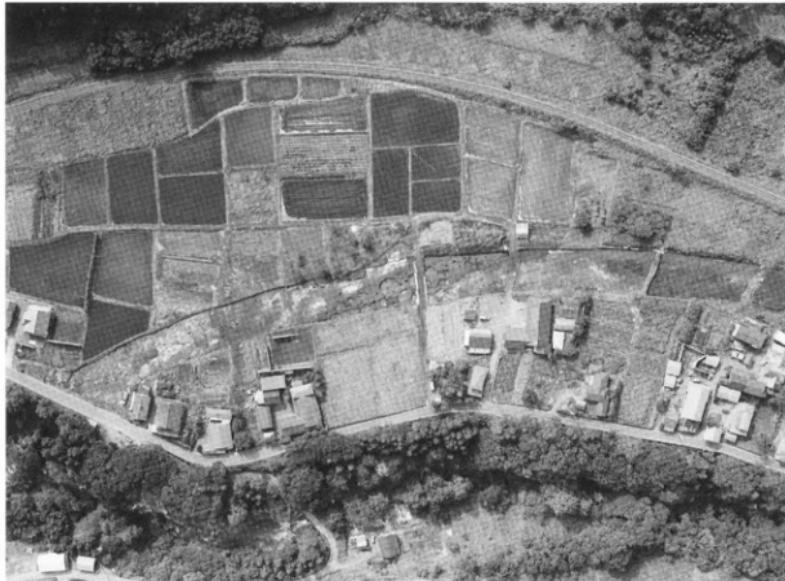
遺跡の立地

遺跡は宮古市の西部、新里地区に所在し、JR岩手和井内駅から南へ100mの場所に位置する。遺跡の東側を流れる刈屋川によって形成された河岸段丘上に立地する。標高は189～193mを測り、調査区の北西から南東へと緩やかに傾斜している。

調査の概要

検出された遺構は、縄文時代前期前葉の住居状遺構1棟、土坑1基、中期後葉の竪穴住居跡37棟、住居状遺構14棟、貯蔵窓11基、土坑53基、掘立柱建物跡3棟、柱穴状上坑数個、近世墓5基である。特に本遺跡は縄文中期後葉を主体とする集落遺跡であることが分かった。中期後葉の竪穴住居跡は円形を呈し、規模は径6～9mを測る。柱穴が6～8本と複式炉や石囲炉を伴う。

遺物は大コンテナ27.5箱分出土しており、土器は縄文時代中期後葉に比定されるものがほとんどであるが、早期や後期の土器も若干見受けられた。また斧状土器品が8点見つかっている。石器は石鎌、石錐、石匙、スクレイパー、磨製石斧、磨石、石皿などが見つかっている。出土量が土器に比べ非常に少ないので特徴である。



航空写真（直上から）

(43) 駒板遺跡

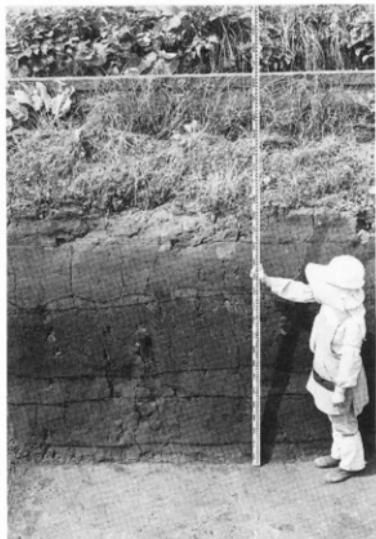
所 在 地	花巻市東十二丁目23地割31-1 ほか	遺跡コード・路号	ME36-2371・KI-06
委 託 者	県南広域振興局北上総合支局農政部農村整備室	調査対象面積	5,285m ²
事 業 名	経営体育成基盤整備事業更木新田地区	調査終了面積	5,285m ²
発掘調査期間	平成18年7月18日～9月19日	調査 担 当 者	金子昭彦・鳥居達人

遺跡の立地

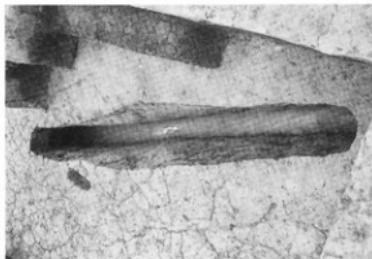
遺跡は、花巻市の南東端、花巻駅から南西約5kmに位置する。自然堤防周辺に立地するが、遺跡の立地、層序および遺物包含層は、北側に隣接する穂貫田遺跡と基本的に同じなので、参照されたい。

調査の概要

発掘調査面積676m²、確認（のみ）調査面積4,609m²、計5,285m²である。発掘調査範囲から溝状の陥し穴状造構2基、確認調査範囲から土坑2基、焼土1基が確認された。以上の造構は、出土遺物、検出層、類例から、いずれも縄文時代後～晩期と推測される。出土遺物は少なく、縄文後～晩期土器が小コンテナ1箱、須恵器の小片1点、石器製作時の剥片2点である。調査区中央を北東から南西に横切る幅約8mの排水路の両側から縄文時代後期前葉の土器が比較的多く出土しており、この水路が当時の河川と同じ場所に設置された可能性がある。また、今回の調査範囲では検出されなかったが、県教育委員会の試掘調査で、周囲に平安時代の堅穴状造構などが確認されている。



土層堆積状況



陥し穴状造構



確認された土坑

(44) 穂貫田遺跡

所 在 地	花巻市東十二丁目22地割60-4 ほか	遺跡コード・略号	ME36-2313・HND-06
委 託 者	県南広域振興局北上総合支局農政部農村整備室	調査対象面積	6,200m ²
事 業 名	経営体育成基盤整備事業更木新田地区	調査終了面積	6,200m ²
発掘調査期間	平成18年4月7日～7月14日	調査 担当者	金子昭彦・鳥居達人

遺跡の立地

遺跡は、花巻市の南東端、JR東北本線花巻駅から南西約5kmに位置する。穂貫田遺跡は、本来、今回の調査範囲より北側の一段高い場所に立地する古代の遺跡として周知されていたが、県教育委員会の試掘調査で同様の埋蔵文化財が確認されたため、南側に拡張されたものである。

今回の調査範囲は、現在の北上川堤防の東側に隣接する。南側に隣接する駒板遺跡と同様、北上川とその支流によって形成された自然堤防上およびその周間に立地するが、より起伏は緩やかである。

基本層序は、(43) 駒板遺跡の項の左側写真に見るように、基本的に洪水時にあふれ出た砂に起因する黄褐色土（一部砂の箇所あり）と黒褐色土との互層である。写真中央の厚い黒土が遺物包含層で、この層の上部が平安時代、中央付近が縄文時代晚期、下部が縄文時代後期の遺物包含層となるが、穂貫田遺跡の場合、これほど厚くない。また、穂貫田遺跡の地形は、包含層下の黒褐色砂～上層ではほぼ平らになっていたようだが、駒板遺跡は、包含層上の黄褐色土で平らになったようである。

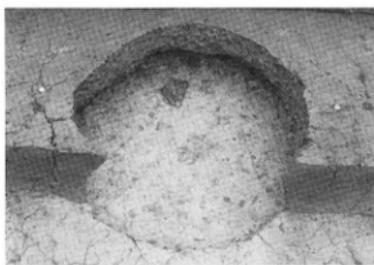
調査の概要

発掘調査面積1,550m²、確認（のみ）調査面積4,650m²、計6,200m²である。発掘調査範囲から、平安時代の竪穴住居跡2棟、縄文時代後期前葉？のフラスコ状土坑1基、確認調査範囲から、平安時代の竪穴住居跡5棟、縄文時代晚期の土坑（楕円形）3基、後期前葉の土坑（楕円形）1基、古代の土坑3基、焼土5基（1つは確実に縄文時代、他の多くは古代？）検出されている。なお、南北方向に続く溝跡が何条も確認されたが、覆土等から何れも近世末以降と判断された。

出土遺物は、土器が大コンテナ15箱、縄文時代晚期中～後葉の土偶片1点、焼粘土塊1点、石器製作時の剥片17点、鉄鏃等の鉄製品4点、近世末以降の陶器片数点である。土器は、縄文土器と土師器・須恵器が約半々である。縄文土器は後期前葉と晩期中～後葉がほとんどを占め、主として、前者は南側の駒板遺跡隣接地と堤防側、後者は東側に比較的多く出土した。



平安時代の竪穴住居跡



縄文時代のフラスコ状土坑

(45) 山口遺跡

所 在 地	花巻市東十二丁目23地割169-3 ほか	遺跡コード・路号	ME46-0315・YG-06
委 託 者	県南広域振興局北上総合支局農政部農村整備室	調査対象面積	491m ²
事 業 名	経営体育成基盤整備事業更木新田地区	調査終了面積	491m ²
発掘調査期間	平成18年9月1日～9月19日	調査担当者	金子昭彦・鳥居達人

遺跡の立地

遺跡は、花巻市の南東端にあり、北上市にまたがって存在する。JR東北本線花巻駅から南西に約5.5kmに位置し、北上川およびその支流によって形成された自然堤防上に立地する。

調査の概要

山口遺跡は、北上市内において周知されていた平安時代の遺跡であるが、県教育委員会の試掘調査で今回の事業予定地内に埋蔵文化財が確認されたため、遺跡範囲が北に拡張されたものである。事業予定地内には、幅2m深さ1mほどのコンクリート製の頑丈な排水路が敷設されており、その南側は狭い農道が沿っていて通行上問題があり、さらに農道の南側は電力関係の水路が地中深く埋設されていたため、試掘トレンチは事業地の北側隣接地に設定され、土坑1基が確認されている。

今回の調査では、排水路の撤去後掘り下げてみたが、電力関係の水路を埋設する際、その周囲も掘削したらしく、埋蔵文化財は既に残っていないことが確認されたため、掘削を中止した。



遺跡の位置



排水路使用状況



調査状況

(46) 境遺跡

所 在 地	北上市福瀬町地蔵堂	遺跡コード・略号	ME86-0069・SA-06
委 託 者	県南広域振興局北上総合支局土木部	調査対象面積	2,400m ²
事 業 名	緊急地方道路整備事業下門岡地区	調査終了面積	1,035m ²
発掘調査期間	平成18年9月19日～12月4日	調査 担 当 者	鳥居達人・木戸口俊子

遺跡の立地

本遺跡は北上市の南東部、JR東北本線北上駅から南4.5kmに位置する。北上川の左岸にひろがり、おむね平坦ではあるが、その中で若干の高低差がみられる。標高は50mである。

調査の概要

今回の調査では堅穴住居跡1棟、焼土1基、溝跡9条、堀跡3条、土坑2基、柱穴状土坑32個のほか、烟状造構2箇所、敷石造構1基、柱穴が規則的に並んだ造構1基が検出された。また縄文時代晩期末から弥生時代前期の遺物包含層が2箇所ある。

出土遺物は平安時代の土師器・須恵器類が中コンテナ1箱、縄文および弥生土器や土製品が大コンテナ3箱、石器・石製品は石礫11点や磨石・独鉛石の未製品など中コンテナ1箱、その他では陶磁器片、古錢3枚が出土している。

検出遺構や出土遺物から縄文時代晩期末から弥生時代、平安時代を中心とする古代、そして中世から近世にかけての少なくとも3期にわたっての複合的な集落跡であった可能性がある。



南側調査区堀跡



平安時代の堅穴住居跡



縄文土器・石器出土状況

(47) のだ
野田Ⅰ遺跡

所 在 地 北上市二子町才の羽々61-1ほか
 委 託 者 県南広域振興局北上総合支局土木部
 事 業 名 地域道路整備事業才の羽々地区
 発掘調査期間 平成18年10月16日～12月12日

遺跡コード・路号 ME56-2213・ND I -06
 調査対象面積 955m²
 調査終了面積 955m²
 調査担当者 北村忠昭・瀬 浩二郎・高橋聰子

遺跡の立地

本遺跡は北上市役所の北東約3.2kmに位置し、北上川支流の大堰川右岸に形成された沖積地上の微高地に立地する。調査区の標高は約62mである。

調査の概要

今回の調査では縄文時代の陥し穴状造構1基、平安時代以前の土坑2基、平安時代の竪穴住居跡5棟、土坑4基、溝跡1条、焼上遺構2基、不明遺構1基、平安時代以降近世以前の溝跡2条、近世の掘立柱建物跡1棟、柱穴状土坑15個、時期不明の土坑2基、溝跡11条、柱穴状土坑15個が検出された。

出土遺物は大コンテナ換算で約3箱、縄文土器、土師器、須恵器、石器、金属器、陶器、磁器などが出土した。遺物の中心は平安時代の土師器で、ほとんどが竪穴住居跡から出土したものである。



航空写真（北東から）

(48) 道上遺跡 第2次調査

所 在 地	奥州市前沢区白山字合野46-1 ほか	遺跡コード・路号	NE47-0045・DU-06
委 託 者	県南広域振興局農林部農村整備室	調査対象面積	2,460m ²
事 業 名	経営体育成基盤整備事業白山地区	調査終了面積	2,460m ²
発掘調査期間	平成18年8月1日～9月15日	調査担当者	丸山直美・高橋聰子

遺跡の立地

本遺跡は北上川右（北西）岸の河岸段丘上に立地する。標高は31m前後で、現況は畠地である。北側には昨年度調査区が道路を挟んで隣接する。今回の対象面積2,460m²のうち、460m²は確認調査で、当該区域に関しては遺構プランを検出した段階での記録に留めている。また、細長の調査区を折半する形で一方が確認調査範囲にかかる、あるいは本調査区中央に確認調査区が存在するなど区分が一様ではなく、双方が入り組んだ形である為、一部分が確認調査区にかかるものはすべて本調査分に含めて報告する。

調査の概要

今回の調査で検出された遺構は平安時代の堅穴住居跡2棟（うち、確認調査分1棟。以降、カッコ内は同義）、土坑1基、中世後半から近世初頭と思われる掘立柱建物跡4棟、時期不明の土坑20（5）基、カマド状遺構4（3）基、大溝跡1条、溝跡18（4）条、井戸跡5（1）基、水田状遺構1箇所、烟跡1箇所、柱穴列1列、柱穴状小土坑103（22）個である。

遺物は大コンテナで2箱分が出土している。内訳は縄文土器片、土師器片、須恵器片、陶磁器片（常滑産陶器・中国産磁器・瀬戸美濃系陶器・肥前産磁器）、金属製品（六器ほか）である。特筆されるのは土坑の埋土上位から出土した常滑広口壺片、青白磁小壺蓋片で、12世紀代に位置づけられる。また、遺構外からではあるが北側調査区Ⅱ層から銅製とみられる小ぶりの六器（口径4.8cm）が1点出土しており、特殊な遺物として注目される。



航空写真（北西から）

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第505集

平成18年度発掘調査報告書

印 刷 平成19年3月20日

発 行 平成19年3月26日

発 行 (財) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡11地割185番地

電話 (019) 638-9001

FAX (019) 638-8563

印 刷 有限会社 内 海 印 刷

盛岡営業所 〒020-0853 岩手県盛岡市清水町8-8-108

電話 (019) 622-0288

本 社 〒026-0041 岩手県釜石市上中島町4-2-4

電話 (0193) 23-5511

© (財) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 2007

